

高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

# 高松城跡(丸の内地区)

2003.3

香 川 県 教 育 委 員 会  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

# 序 文

財団法人香川県埋蔵文化財調査センターでは、四国横断自動車道・高松東道路の建設、高松空港跡地の整備など、大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査と出土文化財の整理研究・報告書刊行の業務を香川県教育委員会より委託を受けて実施しております。

このたび、「高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（丸の内地区）」として刊行いたしますのは、平成13年度に調査を実施しました高松市丸の内に所在する高松城跡（丸の内地区）についてであります。本調査区では、江戸時代の屋敷境を示すと思われる2本の平行する溝を検出し、その間には柵列も確認しました。江戸時代の絵図には、発掘調査で確認した屋敷境に合致すると思われる屋敷割の表現もあり、絵図と調査地点の対応関係が明らかになるという成果を挙げております。

本報告書が本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、最高裁判所、高松高等裁判所、高松家庭裁判所、弁護士会館並びに地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともよろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月

財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター  
所 長 小 原 克 己

## 例 言

1. 本報告書は、高松家庭裁判所移転に伴い実施した平成13年度埋蔵文化財発掘調査報告で、香川県高松市丸の内に所在する高松城跡（丸の内地区）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査は平成13年4月1日から9月30日まで実施した。発掘調査の担当は以下の通りである。  
（財）香川県埋蔵文化財調査センター 黒川和仁・乗松真也・中山尚子
4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい（順不同、敬称略）。  
地元関係諸機関、最高裁判所、高松高等裁判所、高松家庭裁判所、弁護士会館、高松市教育委員会
5. 本書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施し、執筆・編集は松本和彦が担当した。
6. 本書の作成にあたっては、下記の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい（順不同、敬称略）。  
厚 秀夫、小川賢、大嶋和則、大橋康二、片桐節子、川畑 聡、北野信彦、日下正剛、後藤広樹、長佐古真也、藤井雄三、北條芳隆、御厨義道
7. 本書で用いる方位の北は、国土座標系第Ⅳ系の北であり、「日本測地系」を用いている。  
標高はT. P. を基準としている。
8. 挿図の一部には国土地理院作成の1/25,000地形図「高松南部」・「高松北部」を用いた。
9. 本書で用いる遺構略号は以下の基準に拠っている。  
SA：柵列 SB：建物(礎石・掘立柱建物すべて含む) SD：溝状遺構 SE：井戸状遺構  
SK：土坑 SP：柱穴(礎石もこれに含む) SX：不明遺構
10. 挿図及び土器観察表の色調表現は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1994年度版』に準拠した。
11. 引用文献は文末に一括して掲載した。

# 本文目次

序文

例言

## 第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過…………… 1

第2節 発掘調査及び整理作業の体制…………… 1

## 第2章 遺跡の立地と環境

第1節 高松城の変遷…………… 2～5

第2節 絵図による調査地点の変遷…………… 6～9

## 第3章 調査の成果

第1節 調査区……………10

第2節 基本層序……………11～15

### 第3節 遺構・遺物

1. 近世以前……………16～22

2. 近世・近代……………23～98

## 第4章 自然科学的調査の結果

第1節 高松城跡の花粉分析…………… 99～104

## 第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷……………105～109

第2節 絵図との比較……………109～116

引用文献・主要参考文献……………117～118

土器観察表

石製品観察表

木製品観察表

銅・鉄製品観察表

瓦観察表

付図



## 挿図目次

- 第1図 遺跡位置図 1  
第2図 遺跡位置図 2  
第3図 周辺遺跡分布図  
第4図 高松城縄張り復元図  
第5図 『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』  
第6図 『讃岐高松丸亀両城図 高松城下図』  
第7図 『高松城下図屏風』  
第8図 『高松城下図』  
第9図 『高松市街古図』  
第10図 『高松市街明細全図』  
第11図 グリット設定図  
第12図 基本層序図  
第13図 下層確認トレンチ及び出土遺物  
第14図 トレンチ 5 壁面図 1  
第15図 トレンチ 5 壁面図 2  
第16図 近世以前の遺構配置図  
第17図 近世基盤層出土遺物出土地点  
第18図 近世基盤層出土遺物 1  
第19図 近世基盤層出土遺物 2  
第20図 S E 01 平・断面図及び出土遺物  
第21図 S E 02 平・断面図及び出土遺物  
第22図 近世遺構配置図  
第23図 S A 01～03 平・断面図  
第24図 柱穴平・断面図  
第25図 柱穴出土遺物  
第26図 S D 01・02 断面図  
第27図 S D 01～04 ほか平面図  
第28図 S D 01 出土遺物 1  
第29図 S D 01 出土遺物 2  
第30図 S D 02 出土遺物 1  
第31図 S D 02 出土遺物 2  
第32図 S D 02 出土遺物 3  
第33図 S D 03・04 断面図  
第34図 S D 03 出土遺物 1  
第35図 S D 03 出土遺物 2  
第36図 S D 03 出土遺物 3  
第37図 S D 04 出土遺物  
第38図 S D 05 断面図及び出土遺物  
第39図 S D 06 平・断面図  
第40図 S E 03 平・断面図及び出土遺物  
第41図 S E 04 平・断面図  
第42図 S E 04 出土遺物  
第43図 S E 05 出土遺物  
第44図 S K 01 平・断面図及び出土遺物  
第45図 S K 02 平・断面図及び出土遺物  
第46図 S K 03 断面図及び出土遺物  
第47図 S K 04 平・断面図及び出土遺物  
第48図 S K 05 平・断面図  
第49図 S K 05 出土遺物  
第50図 S K 06 平面図  
第51図 S K 06 出土遺物  
第52図 S K 07 平・断面図及び出土遺物  
第53図 S K 07 出土遺物 1  
第54図 S K 07 出土遺物 2  
第55図 S K 08 平・断面図及び出土遺物  
第56図 S K 09 平・断面図  
第57図 S K 09 出土遺物 1  
第58図 S K 09 出土遺物 2  
第59図 S K 09 出土遺物 3  
第60図 S K 09 出土遺物 4  
第61図 S K 10 断面図  
第62図 S K 10 出土遺物 1  
第63図 S K 10 出土遺物 2  
第64図 S K 10 出土遺物 3  
第65図 S K 10 出土遺物 4  
第66図 S K 10 出土遺物 5  
第67図 S K 10 出土遺物 6  
第68図 S K 10 出土遺物 7  
第69図 S K 10 出土遺物 8  
第70図 S K 11 平・断面図  
第71図 S K 11 出土遺物  
第72図 S K 12 平・断面図及び出土状況  
第73図 S K 12 出土遺物  
第74図 S K 13 平・断面図及び出土遺物  
第75図 S K 14 断面図及び出土遺物  
第76図 S K 15 平・断面図及び出土遺物  
第77図 S K 16 平・断面図及び出土遺物  
第78図 S X 01 平・断面図  
第79図 S X 01 出土遺物  
第80図 S X 02 平・断面図  
第81図 S X 02 出土遺物 1  
第82図 S X 02 出土遺物 2  
第83図 攪乱ほか出土遺物  
第84図 資料採取地点付近の土層断面と試料採取層準  
第85図 高松城跡の主要花粉化石分布図  
第86図 高松城跡の花粉化石  
第87図 遺構変遷図  
第88図 『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』トレース図（森下1996より抜粋、一部加筆）  
第89図 『高松城下図屏風』平面起こし図（佐藤2003より抜粋、一部加筆）  
第90図 『高松城下図』トレース図  
第91図 『高松市街古図』トレース図  
第92図 主要遺構配置図

## 表目次

- 第1表 発掘調査及び整理作業の体制  
第2表 産出花粉化石一覧表

## 観察表目次

- 土器・陶磁器…………… 119～135  
石製品…………… 136  
木製品…………… 136  
鉄製品…………… 137  
瓦…………… 137～138

## 写真図版目次

### 巻頭図版

- 巻頭図版1 調査区遠景(西より)  
S K 07出土遺物  
巻頭図版2 S K 09出土遺物  
S K 10出土遺物

### 図版

- 図版1 全景(西より)  
全景(東より)  
図版2 トレンチ5 S D 02上層土層(北より)  
トレンチ5 S D 02・整地層Ⅲ土層(北より)  
トレンチ5 S D 05と整地層Ⅱ土層(北より)  
トレンチ5 S D 01土層(北より)  
図版3 近世基盤層出土P 4検出状況(北西より)  
近世基盤層出土P 4検出状況(西より)  
図版4 S E 01土層(東より)  
S E 01井戸枠(曲物)半裁状況(西より)  
S E 01井戸枠検出状況(東より)  
S E 01井戸枠(曲物)細部(西より)  
図版5 S E 02検出状況(東より)  
S E 02半裁状況(南より)  
図版6 S E 02石組構築状況(東より)  
S E 02半裁状況(南より)  
S E 02井戸枠(曲物)検出状況(南より)  
S E 02井戸枠(曲物)細部(南より)  
図版7 S E 04井戸枠検出状況(北より)  
S E 03土層堆積状況(西より)  
図版8 S E 03井戸枠(結物)細部(西より)  
S A 03完掘状況(南より、左が天)  
図版9 S D 01・02完掘状況(北東より、手前がS D 02)  
S D 01・02完掘状況(北西より、手前がS D 01)  
図版10 S D 02完掘状況(北東より)  
S D 02完掘状況(南西より)  
S D 01・02、S A 03完掘状況(南東より)  
S D 01・02、S A 01完掘状況(北より)  
図版11 S A 01・杭01半裁状況(南より)  
S A 02・S P 02半裁状況(北より)

- S A 01・杭02半裁状況(南より)  
S P 49半裁状況(北より)  
S A 03・S P 06半裁状況(南より)  
S P 65(礎石)検出状況(南より)  
S A 03・S P 10半裁状況(東より)  
S P 65(礎石)半裁状況(東より)

- 図版12 S D 03完掘状況(東より)  
S D 04完掘状況(東より)  
S D 05完掘状況(北東より)  
S D 04土層堆積状況(西より)  
S D 05土層堆積状況(西より)  
図版13 S D 06土層堆積状況(南より)  
S K 01完掘状況(北東より)  
S K 02完掘状況(北東より)  
S K 01土層堆積状況(西より)  
図版14 S K 05遺物出土状況(南東より)  
S K 09土層堆積状況(西より)  
S K 07遺物出土状況(南東より)  
S K 07遺物出土状況(北西より)  
図版15 S K 11完掘状況(北西より)  
S K 11土層堆積状況(北より)  
S K 11土層堆積状況(北より)  
S K 16完掘状況(北東より)  
S X 02・S K 07完掘状況(北東より)  
図版16 S K 12遺物出土状況(南より)  
S K 13遺物出土状況(北東より)

- 図版17～37 近世遺構ほか出土土器・陶磁器  
図版38・39 近世遺構ほか瓦

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯と経過

平成13年度高松家庭裁判所移転に伴う高松城跡（丸の内地区）の発掘調査は、香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で平成13年4月1日付けで締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき4月1日～9月30日の間で実施した。調査対象面積は1,164㎡である。調査対象地は、香川県丸の内分庁舎と高松北署の跡地であり、調査対象地は跡地北側の建物がなかった部分である。調査にあたっては、香川県により調査建物および基礎が撤去され周囲を囲むフェンスが設置された状態で調査に着手した。なお、平成13年7月20日には現地説明会を実施し、参加者は71名を数える。

整理作業は、平成14年8月1日に開始し、11月30日に終了した。

## 第2節 発掘調査及び整理作業の体制

発掘調査及び整理作業の体制は、第1表のとおりである。

香川県教育委員会 文化行政課				
	平成13年度		平成14年度	
総括 芸術文化グループ	課長	北原和利	課長	北原和利
	課長補佐	小国史郎	課長補佐	渡邊勇人
文化財グループ	副主幹	中村禎伸	主任	香川浩章
	主事	亀田幸一	主事	亀田幸一
	副主幹	大山眞充	副主幹	大山眞充
	主任	西岡達哉	主任	片桐孝浩
	文化財専門員	古野徳久	文化財専門員	古野徳久
	文化財専門員	宮崎哲治	文化財専門員	佐藤竜馬
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター				
総括	所長	小原克己	所長	小原克己
	次長	川原裕章	次長	渡部明夫
総務	副主幹	大西誠治	副主幹	野保昌弘
	係長	多田敏弘	係長	多田敏弘
調査	参事	梅木正信	主任文化財専門員	藤好史郎
	参事	河野浩征	主任文化財専門員	真鍋昌宏
	主任文化財専門員	廣瀬常雄	主任技師	松本和彦
	主任文化財専門員	藤好史郎		
	文化財専門員	黒川和仁		
	主任技師	乗松真也		
	調査技術員	中山尚子		

第1表 発掘調査及び整理作業の体制

発掘調査（平成13年度）に携わった方々は以下のとおりである。

現場整理作業員 小笠原千恵子

整理調査（平成14年度）に携わった方々は以下のとおりである。

整理補助員 合田和子、小林里美

整理作業員 久保真由美、北濱敦子、塩崎宏美、陶山仁美、辻悦子、高橋牧子

## 第2章 遺跡の立地と環境

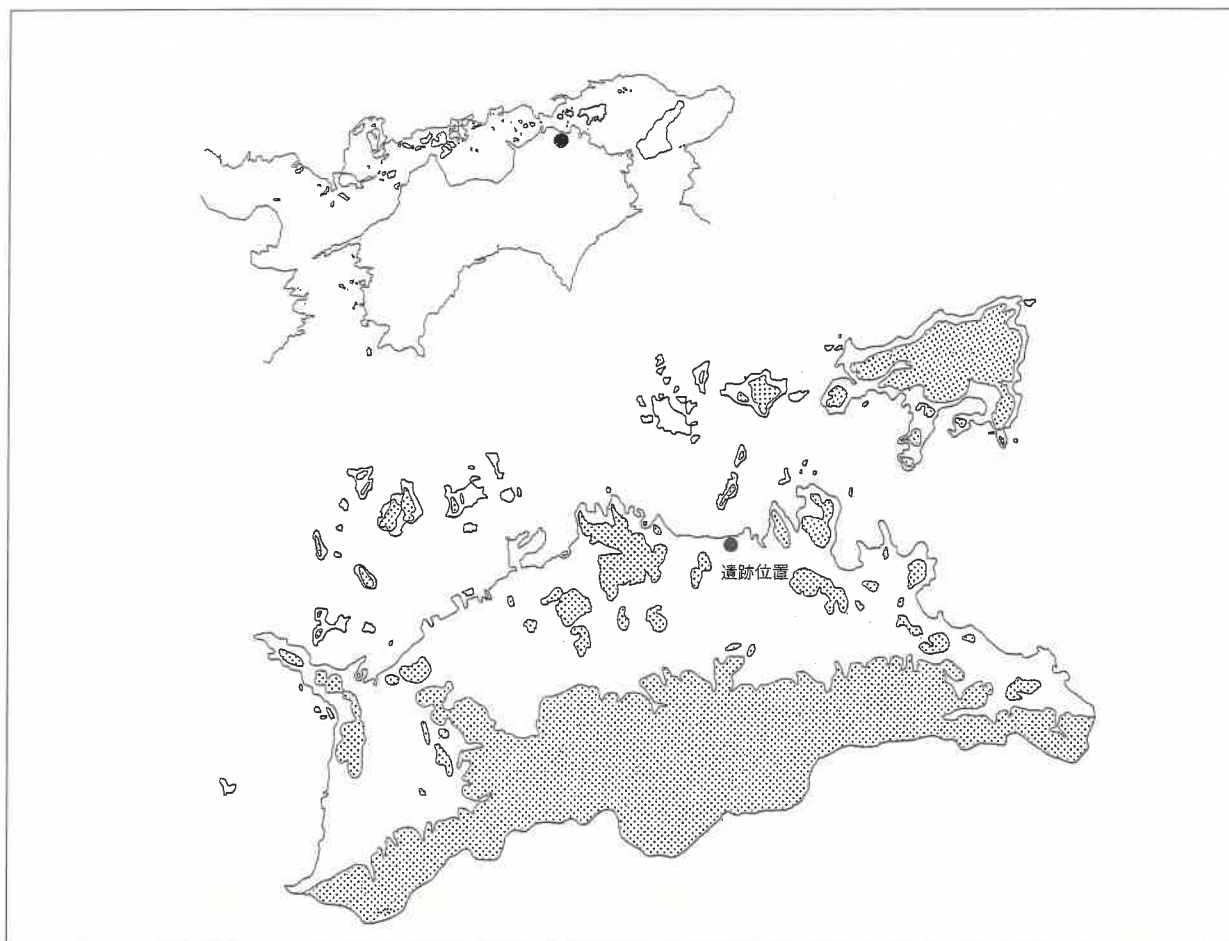
### 第1節 高松城の変遷

高松城跡は四国北東部、香川県中央部に位置する（第1図）。前面に海を望み、背後に城下町が展開する水城として著名である（第2図）。その築城は、天正15（1588）年に入部した豊臣系大名である生駒親正によって行われる。高松城跡（西の丸町C地区）では、生駒氏が入城した直後に築いた石垣を検出しており、その後江戸時代を通じて3度にも及ぶ海域への城下の拡張を確認している（松本2003）。なお、関ヶ原の戦いにおいて、藩主親正は豊臣軍（西軍）に与したが、その子一正が徳川軍（東軍）に属して戦功を挙げ、継続して讃岐を治めることになったが、寛永17（1640）年に家臣間の対立が原因とされる生駒騒動が勃発し、生駒氏は出羽国矢島に改易される。当時の讃岐の石高は15万石程度であったとされるが、出羽国矢島は1万石である。

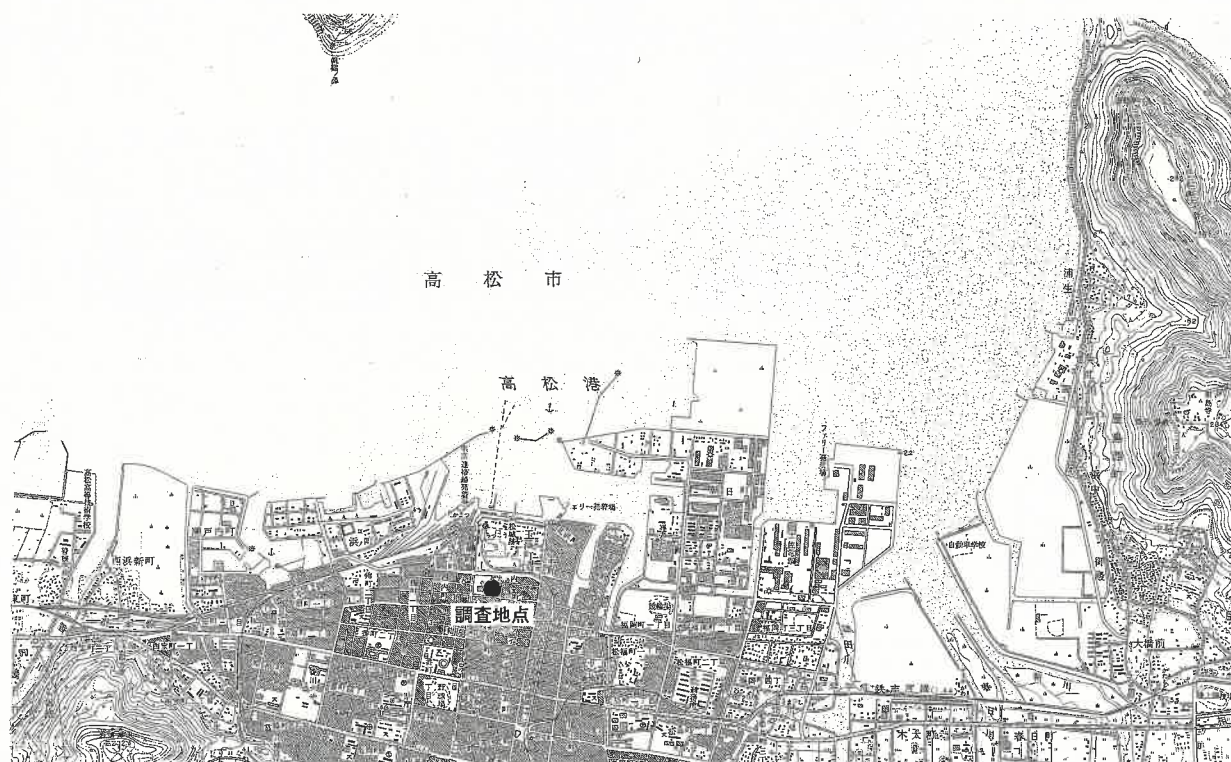
その後、寛永19（1642）年に水戸藩主水戸頼房の長子松平頼重が高松城に入部する。頼重は入部後、上水道の設置、二ノ丸・三ノ丸・本丸等の石垣の修築、天守閣の改築、東ノ丸・北ノ丸の増築、侍屋敷の新設といった城下の整備に着手する。西の丸町C地区では、頼重入城直後築いた石垣を確認しており、『高松城下図屏風』に描かれた西外曲輪北辺に合致する石垣となる。さらに東ノ丸（香川県歴史博物館地点）では、東ノ丸を造築する際に中堀と外堀（東浜舟入）の間に開削した堀の西側の石垣が確認されている（北山1999）。その後、享保3（1718）年に江戸最大級の火災である高松大火が発生し、侍屋敷83軒、町屋1402軒を焼失した。この火災を契機として、城下の大規模な再整備が実施され、高松城跡（西の丸町B地区）では、これを契機とした整地面が確認されている（佐藤2003）。B地区第6面は生駒氏入城時～松平頼重入城直後までの整地面であるが、『高松城下図屏風』（第7図）に記載された西外曲輪を縦断する屈曲する街路（鍵形道路）の両脇に複数の屋敷地が展開する。その上位で検出した第5面構成土には焼土や炭化物を含有し、火災後の整地層と理解でき、出土遺物より高松大火後の整地層と評価されている。第5面では鍵形道路は消失し、西外曲輪を直線的に縦断する石組溝による新たな地割が出現することが確認されている（佐藤2003）。

高松大火以降、高松城跡には大きな変化はなく、幕末まで松平氏の治世が継続する。しかし、江戸幕府崩壊に伴って廃藩置県を経て高松城は廃止され、明治30年以降外堀・中堀、西浜舟入が埋め立てられる。その景観は失われつつある。





第1図 遺跡位置図1



第2図 遺跡位置図2



第3図 周辺遺跡分布図





第4図 高松城縄張り復元図



## 第2節 絵図による調査地点の変遷

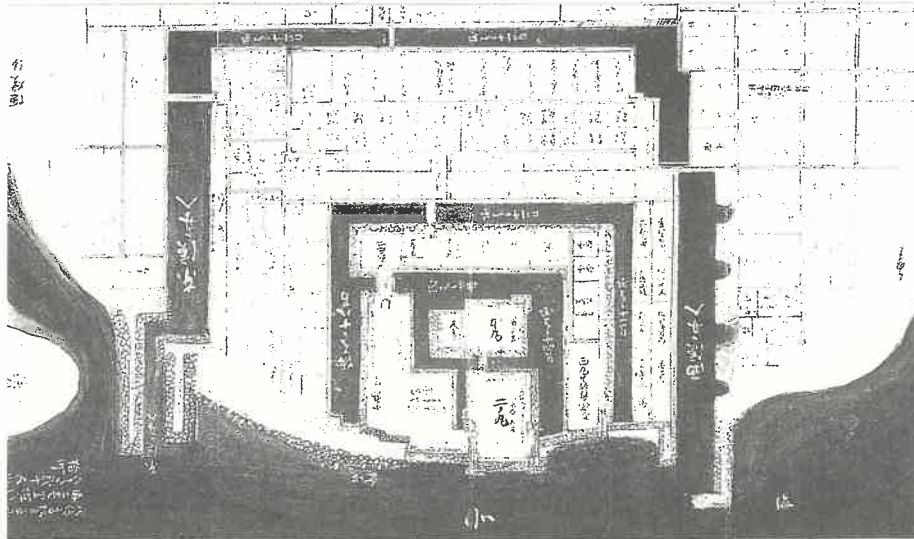
絵図を参考にして、調査地点の変遷を整理する（絵図の年代観に関しては森下1996に依拠し、その出典も断りが無い限り同論文から抜粋したものである）。また、絵図では『高松城下図屏風』との関連から、いずれも北を下に配置している。さらに絵図の下側と右側に△印を貼付したが、下側の△を真上に、右側の△を左に延長した箇所がおおむね調査地点に該当する。厳密な絵図との対応関係については、検出した遺構内容や周辺調査との関連を考慮しなければならないため、ここでは絵図の年代観に基づき、調査対象地周辺の状況を整理することを目的とする。

まず、現在の地図を第4図に示した。調査地点は中堀の外側、外堀の内側に位置する。調査前には高松北警察署の敷地内の北辺部となり、高松家庭裁判所に南接する。以下、各絵図における調査地点を示しながらその変遷を考えるが、絵図と調査地点の対応関係を考える指標として鍵形道路と常磐橋がある。外堀の位置や城内との位置関係から、両者はおおむね近世を通じて同一地点に位置しており、大多数の絵図に記載されている。さらに、調査地点の北には、高松市教育委員会による発掘調査地点があり（松平大膳家上屋敷地点）、東西と南北の道路が確認されている。未公表資料ではあるが、念頭において検討する（現在、高松市教育委員会により報告書作成業務が行われており、2004年刊行予定となる）。また、地点を表現する記述の煩雑化を避けるため、第4図に示したような表現で仮称したい。鍵形道路1は、前記した指標となる道路であり、松平氏入城直後に設置された可能性が高く、現在まで継続する。鍵形道路2は高松市教育委員会による松平大膳家上屋敷の発掘調査地点で確認されたもので、検出状況や絵図から、南北方向に走る道路で、後述する東西道路1と2の間で鍵形に屈曲し、東西道路3と接する箇所では三叉路を形成する道路となる。さらに、外堀のほぼ中央に架けられた常磐橋から北へ延びる道路を常磐橋前南北道路とした。中堀と外堀を東西に区画する道路は一部、明治期段階の改変により確認できない箇所もあるが、おおむね築城直後から現在まで継続的に確認できる。それぞれ北より東西道路1・2・3とした。以下、これに基づき絵図の変遷を確認する。

生駒期における絵図として、『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』がある（第5図、絵図1）。寛永15～16（1638～1639）年に描かれた絵図で、屋敷割とその拝領者が明記されている。記載された屋敷割は均等割りされる部分が大多数を占めるが、高松城跡（西の丸町地区）の所在する西外曲輪では絵図の区画と検出した遺構内容が合致しない状況を確認しており（佐藤2003、松本2003a）、屋敷の拝領者名を記すことを目的とした均等割りの区画表現と理解することができる。調査地点は鍵形道路2の東、東西道路2・3間に位置し、その区画内を南北に細分した北側に位置する。絵図に記載された拝領者名では「大塚采女」と「大塚八右衛門」の屋敷地に該当する可能性が高い（検出したS D01・02を区画施設と判断しての結果であるが、その内容に関しては後述する）。「大塚采女」は高松城を築城した生駒親正の娘婿大塚又一の子供に該当する人物である。

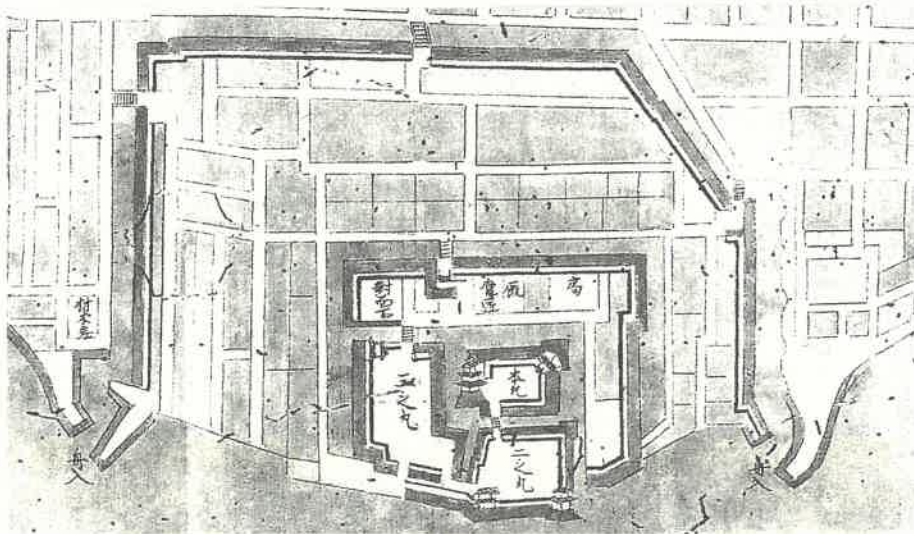
『讃岐高松丸亀両城図 高松城下図』は松平頼重入城直後で、1650年代以前に描かれたと考えられるものである（第6図、絵図2）。ここで注意すべきは、鍵形道路1が出現する点である。『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』では「三野四郎左右衛門」と「入谷助（道）」、「三野〇〇」と「四宮殿馬」の屋敷境が絵図2で出現する鍵形道路1に該当し、ここに鍵形道路1が設置されていない状況を確認できる。絵図の製作年代から、（寛永15～16）～1650年代前半以前に付け足されたことが看取できる。ここでは、松平頼重入城直後に生駒氏による地割の一部を改変し、簡易な整備が行われたと理解しておきたい。一





寛永15~16(1638~1639)年  
鍵形道路1はなく、やや異なる  
地点で逆方向に屈曲する  
道路が存在する。  
鍵形道路2は屈曲して表現  
される。

第5図『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』(森下1996より抜粋)



1650年代前半以前  
鍵形道路1の出現。  
鍵形道路2は簡略化され、  
直線的な表現となる。

第6図『讃岐高松丸亀両城図 高松城下図』(森下1996より抜粋)



1650年代前半  
鍵形道路1・2が屈曲  
して表現される。

第7図『高松城下図屏風』(胡1997より抜粋)

部にはこうした変化を認めるが、『讃岐高松丸亀両城図 高松城下図』は『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』（第5図）や後述する『高松城下図屏風』（第7図）に近似した区画割を認め、西外曲輪における発掘調査成果からもそうした状況は確認できる（佐藤2003）。しかし、調査地点に該当する箇所には東西道路2・3による大区画を認めるのみで、屋敷割は確認できない。

その直後に描かれた『高松城下図屏風』（第7図、1650年代前半）では、鍵形道路2の東側で、東西道路2・3間に該当し、その大区画を柵列により南北に2分し、さらに東西に細かく区割した屋敷地が展開する。そのほぼ中央部には南北細分に仕切られない屋敷地を認め、調査地点はこの屋敷地とその西に位置する屋敷地にまたがる可能性が高いと考える（S D01・02を区画施設と評価したもので、その内容に関しては後述する）。

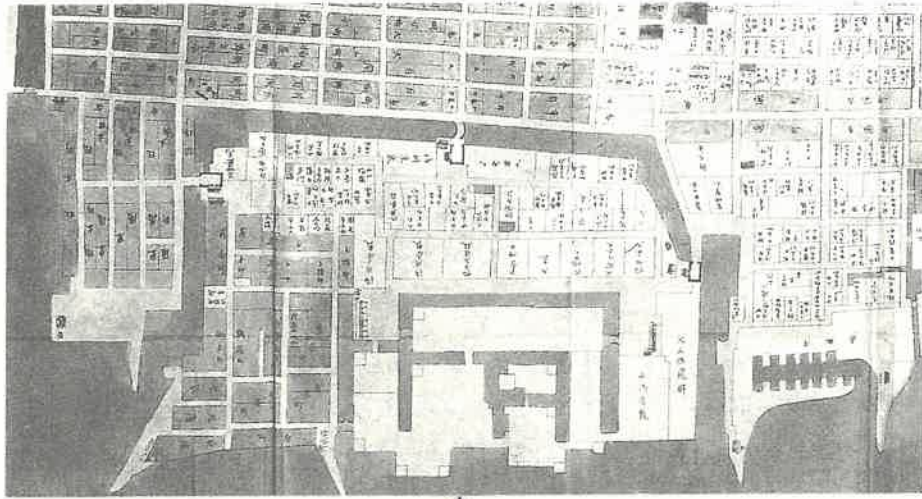
享保年間（1716～1736）に描かれた絵図として『高松城下図』がある（第8図、絵図4）。西の丸町地区の発掘調査では、享保3（1718）年の高松大火後の整地層を確認しており、この段階で地割に大きな変化が生じたことを確認している（佐藤2003）。当調査区周辺では、鍵形道路1・2が継続し、東西道路1～3もほぼ同地点で踏襲され、大きな地割の変化は確認できない。しかし、絵図3では、東西道路1・2間の屋敷地が南北に細分される箇所が大多数を占めていたが、『高松城下図』ではその南北仕切が消失している状況が窺え、屋敷地の統合と評価できる。調査地点は、鍵形道路2より東側、東西道路2・3間に位置する。屋敷の拝領者名では、「左近殿中屋敷」に該当する。左近殿とは松平大膳頼熙をさす。大膳家は藩主松平氏の分家にあたり、初代藩主頼重の子頼芳から連綿と続く家柄である。頼頼熙は芳の子にあたり、2千石の石高をもって家督を継ぐ。さらに、鍵形道路2の東、東西道路1・2間には「左近殿上屋敷」と記載された広大な屋敷地が記載されており、その地位の高さを示す。なお、当調査区東において、高松市教育委員会によって松平大膳家中屋敷跡の発掘調査が実施され、18世紀第4四半期前半に埋没したS K123から、大膳家の家紋入りの碗や道具瓦が出土している（「丸に中陰四つ葵」文、大嶋2002）。こうした内容を考慮すると、当調査地点は「左近殿中屋敷」に該当する可能性が高い。なお、大嶋2002において松平大膳家の系譜が丁寧に整理されている。

文化年間（1804～1818）に描かれた『高松市街古図』にも（第9図、絵図5）、調査地点は絵図4と同じく、鍵形道路2の東、道路2・3間に位置し、その地割内を南北に2分した北側に位置する。絵図に記載された内容では空白地とその東に位置する「松平大膳殿」と記載された箇所に該当し、継続して大膳家の屋敷地であったことが窺える。『東讃高松絵図』（弘化年間（1844～1848））では「志摩殿中屋敷」とある（森下1996）。志摩殿とは松平大膳頼格に該当し（大嶋2002）、やはり大膳家中屋敷がほぼ同一地点で継続していることが窺える。

明治期には香川県庁が当調査区の北に設置され、調査地点はその南の区画ないし県庁とその区画間の道路に該当することになる（『高松市街明細全図』、明治28年、第10図、絵図6）。第4図に示した現在の地図では、鍵形道路1から連続する東西道路2が高松家庭裁判所や高松高等裁判所付近では確認できず、こうした明治期における地割の変遷に呼応した内容を示す。

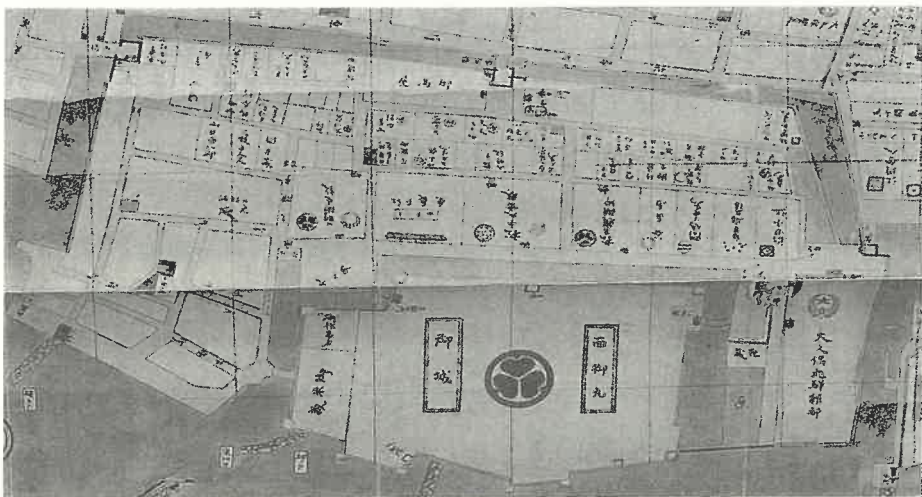
以上、絵図から想定できる当調査区は、生駒氏入城直後から幕末まで継続して、鍵形道路2の東、東西道路2・3間の大区画に位置し、それを南北に細分した北側に位置する。さらにそれを東西に細分する複数の屋敷割があり、その一角に所在する。詳細な同定については後述するが、生駒期末期には「大塚采女」と「大塚八右衛門」の屋敷地、享保年間以降幕末までは松平大膳家中屋敷となる。明治期には、香川県庁の南の区画ないし道路部分となる。こうした変遷を念頭に置きつつ、以下遺構・遺物について報告する。





第8図「高松城下図」(森下1996より抜粋)

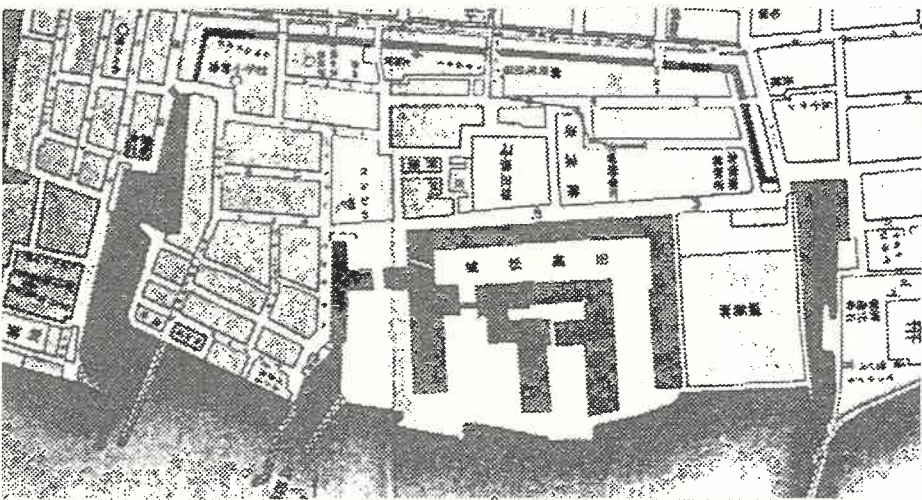
享保年間 (1716~1736年)(高松大火(享保3(1718)年)以降)  
 鍵形道路2は簡略化ないし付け替えにより直線的に表現される。  
 調査地点は「左近殿中屋敷」に該当。  
 左近殿とは松平大膳頼熙を示す。



第9図「高松市街古図」(高松市歴史資料館蔵)

文化年間 (1804~1814年)  
 鍵形道路2は簡略化ないし付け替えにより直線的に表現される。  
 調査地点は、「松平大膳殿」とその西にある空地に位置する。

大膳家中屋敷が継続(幕末まで)



第10図「高松市街明細全図」(森下1996より抜粋)

明治28(1895)年  
 区画の大規模な統合  
 調査地点は「香川県庁」の南隣の区画ないしその間に位置する道路。





## 第2節 基本層序

第12図に基本層序図を示した。各層位に関しては第14図に詳細に提示しており、合わせて参照して頂きたい。調査区のほぼ中央に設定した東西方向セクションである。調査では攪乱が激しく、整地層の面的な広がりを確認することはできず、大多数の遺構は同一検出面で確認した。しかし、第14図に示した層位別に出土遺物の取り上げを行い、各層の形成年代を明確にすることに努めた。以下、これに基づき、基本層序について報告する。

**第1層 整地層0** 明治期以降の造成土を含む層位を一括した。調査地点は明治期には香川県庁南端部ないしその南にある区画に該当し（『高松市街明細全図』明治28年）、それに伴う埋土も一部含む。

**第2層 整地層I** 第14図7～20層を一括した。灰オリーブ色ないし褐灰色系の混砂粘質シルトを基調とし、検出最頂部は標高1.3mを測る。出土遺物はないが、後述する整地層IIを切り込むSD02上層埋土を被覆し、さらに、当層位に後出するSE04の構築年代は19世紀末前後となる。こうした重複関係から、整地層I（第2層）の形成年代を幕末前後と考えることが可能である。

**第3層 整地層II** 第14図90・94・95層を一括した。灰色シルトを基調とし、灰オリーブ色シルトブロックを一定量含有する。検出最頂部は標高1.3mを測る。SX02上位に位置するため、SX02最上層として報告した報文番号530～532が当層位出土遺物となる。出土遺物が示す年代観は18世紀第4四半期～19世紀前半となり、整地層IIの形成年代を示す。さらに、530・531は調査区西部で壁面を中心に確認したSK10出土遺物と接合関係を有する。埋没時の共時性と捉えられ、廃絶状況や屋敷割を考える材料となる貴重な成果といえよう。なお、調査区中央では、高松大火に関連する整地層IIIの直上埋土となる。

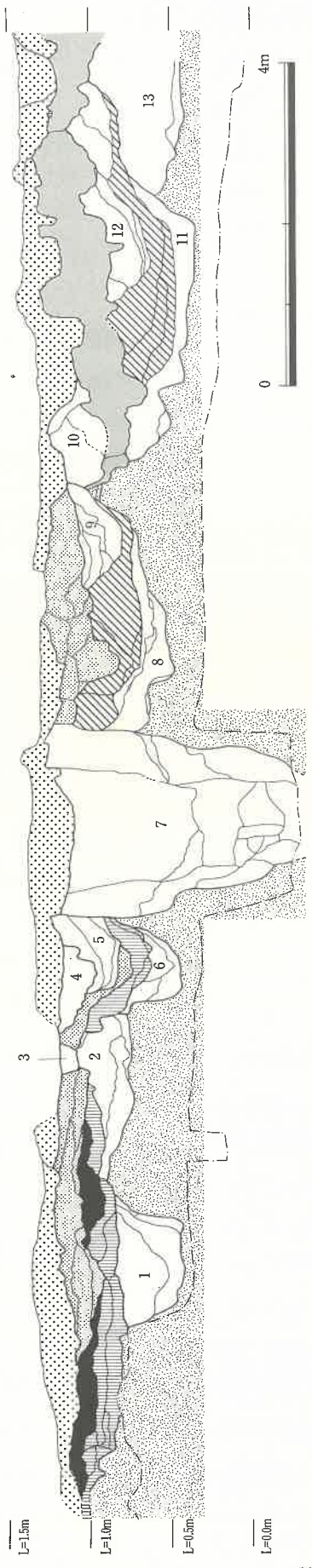
**第4層 整地層III** SD02中層埋土（第14図83～86層）、SX02中層埋土（第14図102～104層）を一括した。前者は灰色シルト質粘土を基調とし、後者は灰色粘質シルトとなり、最下層（104層）には木質遺存層を認める。整地層とする根拠に乏しいが、出土遺物が示す年代観はおおむね18世紀前半となり、一括した。

**第5層 整地層IV** 第14図21～25層を一括した。褐灰色砂質シルトを基調とし、いずれの埋土にも0.5～1cmを測る焼土片や炭化物を多量に包含する。出土遺物による年代決定はできないが、享保3（1718）年の高松大火の痕跡ないしその後の後片付けと理解したい。検出した最頂部は標高1.1mを測る。

**第6層 整地層V** 第14図26～34層を一括した。層序的には整地層IIIの直下に位置し、16世紀末～17世紀初頭に埋没したSK01を被覆する。一部はSD01内にも堆積する（54～56層）。SD01出土遺物とした42～70の年代観や1620～30年代に埋没したSX03を被覆することから、17世紀中葉前後に形成された可能性が高い。区画溝として機能したSD01・02が機能を停止する段階を示す。

**第7層 基盤層** 第14図35～37層を一括した。黄灰色砂質シルトを基調とし、報文番号1～4、14、557～559として図化した弥生土器・古墳時代～古代の須恵器を包含する。その直上に土器出土地点とした5～13の須恵器・土師器を検出しており、9～10世紀以前に堆積した包含層であることが窺える。中世・近世段階における基盤層と理解できよう。

また、第13図に基盤層の堆積状況を示した。標高0m付近までの断割調査を行い、各層位の土壤サンプルを採取し、花粉分析を依頼した（第4章第1節）。1層上面は遺構検出面となる。一部にはラミナ状に粗砂を含み、河川の堆積作用に起因した形成過程が想定できる。2層は黄灰色シルト層であり、安定した土質となる。3層は一部細砂を含む灰色シルト質粘土、4層はラミナーを呈する灰色シルト質粘土であり、軟弱な土質を示す。さらに標高0m以下の5層は砂層となる。5層は比較的大規模な流水を



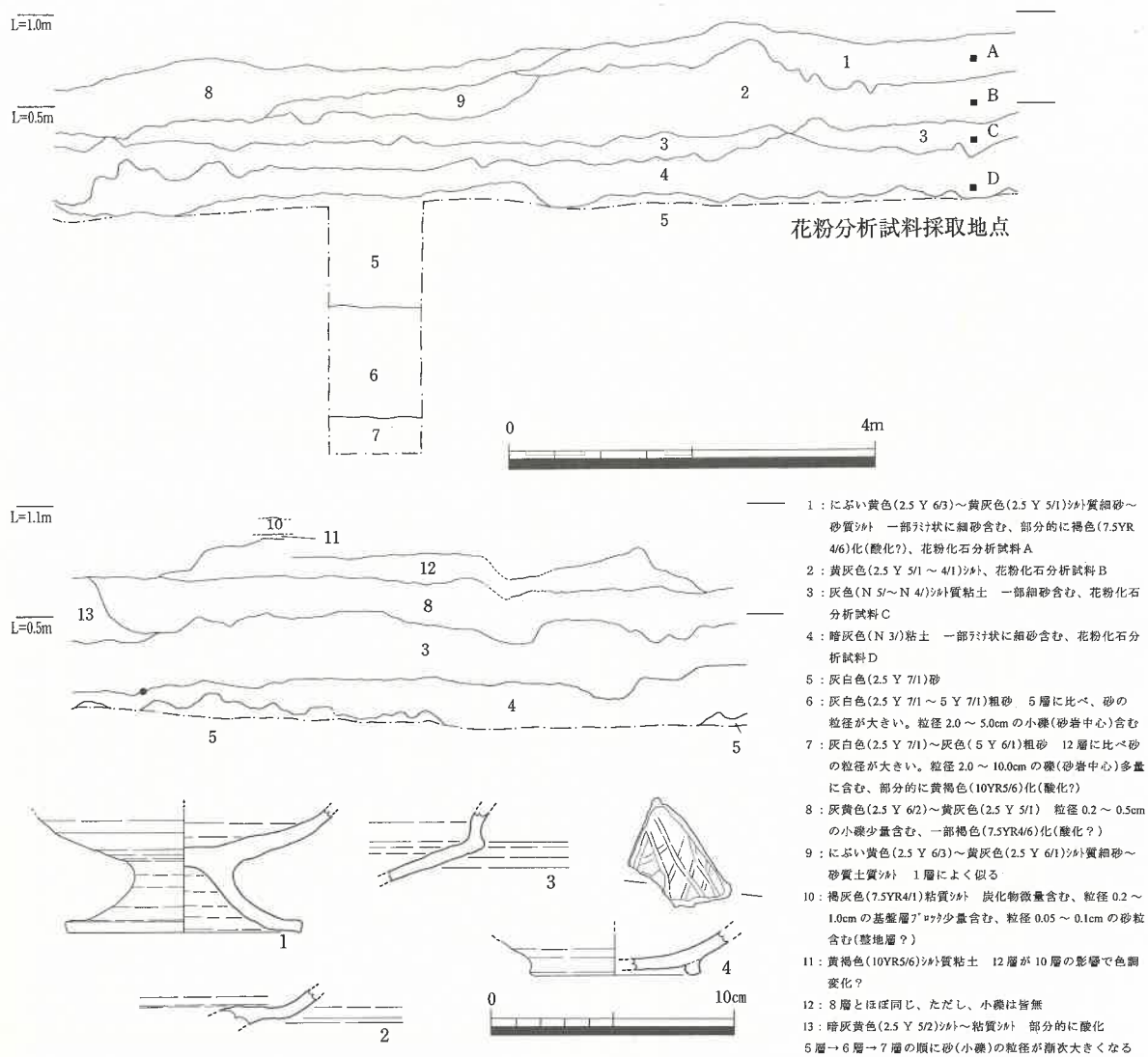
番号	遺構名	第15図番号	形成年代
1	SK01	40~43層	16c末~17世紀初頭
2	SX01	44~46層	1620~30年代
3	SK14	60層	幕末前後
4	SD01上層	48層	幕末以降
5	SD01下層	49~51層	幕末以降
6	SE04	57~59層	17c中葉
7	SD02上層	61~77層	19c末
8	SD02下層	87~89層	17c中葉
9	SK15	78~82層	19c第1四半期~幕末
10	SX02上層	91~93層	19c第1四半期~幕末
11	SX02下層	105・106層	17c中葉
12	SX02上層	96~101層	18c中葉~18c第4四半期
13	SK03	107・108層	16c末~17世紀初頭

トーン	基本層序	築地層	第15図番号	形成年代	備考
●	第1層	築地層0	1~6層	近代以降	
■	第2層	築地層I	7~20層	幕末前後?	
■	第3層	築地層II	94層	18c第4四半期~19c第1四半期	
■	第4層	築地層III	83~86層 (SD02中層) 102~104層 (SX02中層)	18世紀前半	
■	第5層	築地層IV	21~25層	享保3 (1718)年?	焼土・炭化物を含む層
■	第6層	築地層V	26~34層	17世紀中葉	層松大火(1718年)に關連?
■	第7層	築地層	35~37層	弥生~古代末	

第12図 基本層序図

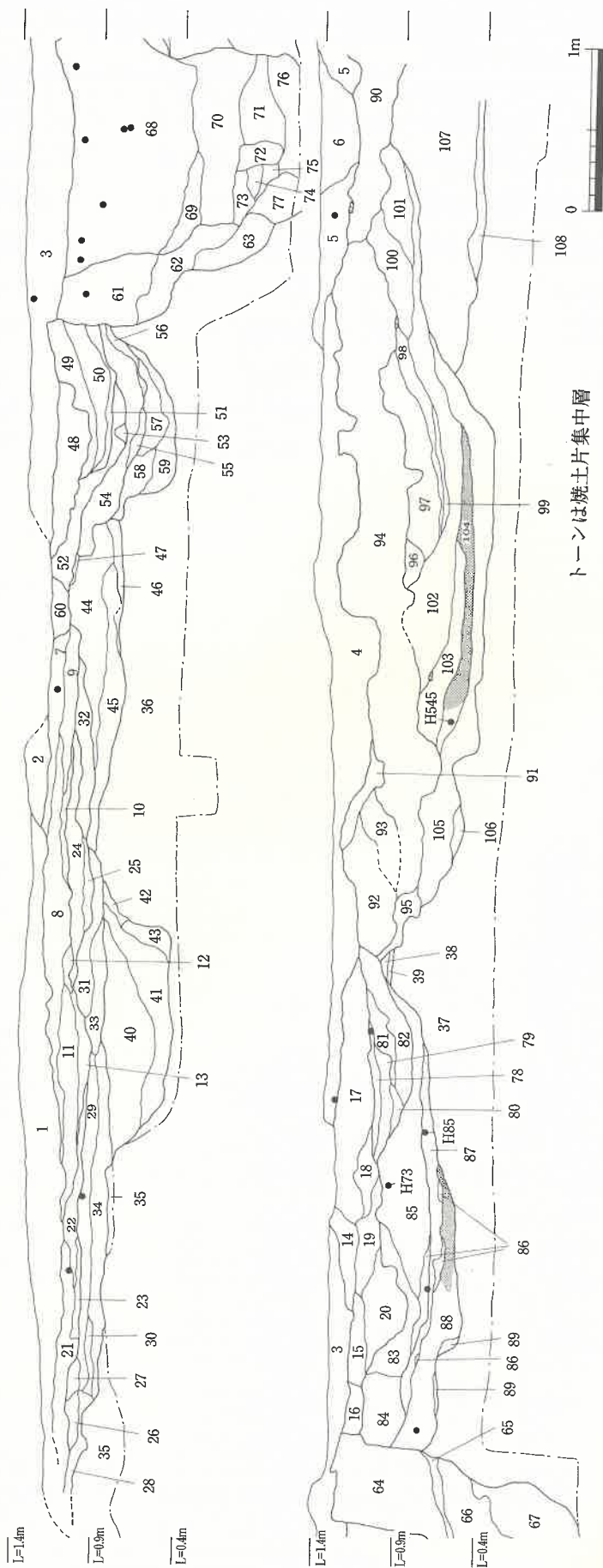
伴う堆積作用であり、4層ではその流水規模を縮小し、3層から2層にかけて緩やかに埋積し、さらに1層段階に再度河川堆積がなされるという形成過程の復元が可能である。また、その下位の6層は粗砂層、7層は小礫を多量に含む粗砂層となり、復元した形成過程を首肯する。2～4層にはコナラ亜属とアカガシ亜属が高い出現率を示し、シイ類やクリ属も10%前後を占め、2層にはシダ植物の極めて高い出現頻度を認める。こうした内容は2～4層の形成過程において、少なくともその周辺において照葉樹林が成立し、一部には落葉広葉樹林も広がっていたと推測される。また、2層と1層には断絶を認めることができ、シダ植物の多寡から地盤は安定しつつあったが、まだ形成途上であり、河川の埋積作用は緩やかに進行したものと理解できる。その形成時期は明らかではないが、3・4層境において弥生土器を検出しており、2層の安定化はそれ以降と考えられる。遺構検出面=1層において9～10世紀の土器を確認しており、おおむね古代末の河床低下の前段階の埋積作用と理解することができる。

第13図1～4は下層確認トレンチ出土遺物である。1・2は須恵器高坏である。口縁部は遺存しないが、有蓋高坏の可能性が高く、7世紀の所産と考える。3は弥生土器高坏である。口縁部が大きく外反する形態となり、弥生時代後期末前後に位置付けられる。下川津B類土器。4は黒色土器(A類)碗である。高台は外方へ踏ん張り、見込みには斜格子状にヘラミガキを施す。12世紀。



第13図 下層確認トレンチ及び出土遺物 (天地S=1/40・左右S=1/80, S=1/3)





第14図 トレンチ5壁面図1 S=1/40

トーンは焼土片集中層

- 1: 赤褐色(2.5Y4/3)粘土質砂 粒径0.1~0.5cmの砂粒多量に含む、粒径5.0~20.0cmの礫含む
- 2: 灰色(10Y5/1)粘土質砂 粒径0.1~1.0cmの細かい黄色(2.5Y6/4)の小礫含む
- 3: 灰色(10Y5/1)粘土質砂 粒径0.1~1.0cmの砂粒含む、5.0~20.0cmの小礫含む、5片含む
- 4: 灰色(10Y5/1)粘土質砂 炭化物若干含む、粒径0.1~0.3cmの砂粒少量含む、5.0~10.0cmの小礫含む、炭化物若干含む
- 5: 黄灰色(2.5Y4/1)粘土質砂 炭化物若干含む、粒径0.1~0.3cmの砂粒若干含む、粒径0.1~0.3cmの黄褐色(2.5Y5/3)粘土質砂H15層に含む
- 6: 黒褐色(2.5Y3/2)粘土質砂 炭化物またらに多量に含む、粒径0.1~0.5cmの砂粒を多量に含む、粒径3.0~5.0cmの小礫含む、黄褐色(10Y5/3)の小礫を含む
- 7: 黄灰色(5B5/1)粘質砂 粒径3.0~8.0cmの腐敗小礫多く含む、粒径0.1~0.5cmの砂粒含む、炭化物若干含む、粒径0.2~0.5cmの赤褐色(5Y6/4)粘土質砂を多量に含む
- 8: 灰赤褐色(5Y6/2)粘質砂 炭化物少量含む、粒径1.0cmの焼土片少量含む、粒径0.5~1.0cmの灰色(10Y5/1)粘土質砂を多量に含む
- 9: 褐色(10Y4/1)粘質砂 炭化物多量に含む、粒径0.5~1.0cmの焼土片少量含む、粒径0.05~0.2cmの砂粒多量に含む、粒径0.2~0.5cmの小礫10層7片含む
- 10: 灰赤褐色(10Y5/3)粘質砂 炭化物若干含む、粒径0.5~1.0cmの灰色(10Y5/1)粘質砂を多量に含む、粒径0.1~0.5cmの焼土片少量含む
- 11: 黄灰色(10Y5/1)粘土質砂 炭化物若干含む、またらにFe(酸化)を含む
- 12: 灰色(10Y5/1)粘質砂 粒径0.5~1.0cmの焼土片若干含む、粒径0.5~2.0cmの細かい黄色(2.5Y6/4)粘土質砂を多量に含む
- 13: 灰色(10Y5/1)粘質砂 炭化物若干含む、粒径0.5~1.0cmの焼土片若干含む、粒径0.5~1.0cmの砂粒を多量に含む、粒径0.2~0.5cmの砂粒を多量に含む、粒径0.2~0.5cmの砂粒を多量に含む、粒径0.2~0.5cmの砂粒を多量に含む、粒径0.2~0.5cmの砂粒を多量に含む
- 14: 灰色(N4/Y)粘土質砂 粒径0.5~1.0cmの赤褐色(5Y5/4)粘土質砂を多量に含む、炭化物を含む、粒径0.5~1.0cmの砂粒少量含む
- 15: 基本的には14層、ただし、炭化物、砂粒を殆ど含まない
- 16: 基本的には14層、ただし、砂粒多量に含む、炭化物が多い
- 17: 灰色(N4/Y)粘質砂 粒径0.5~3.0cmの赤褐色(5Y5/3)粘土質砂を多量に含む、粒径1.0~5.0cmの小礫少量含む、粒径0.5~1.0cmの砂粒を少量含む、炭化物を含む
- 18: 基本的には17層、赤褐色(5Y5/4)粘土質砂を多量に含む、粒径1.0~10.0cmの小礫を含む
- 19: 14層、ただし、炭化物を殆ど含まない
- 20: 基本的には14層、ただし、77の粒径0.5~3.0cm、炭化物をあまり含まない
- 21: 黄褐色(10Y5/3)粘質砂 粒径0.5~2.0cmの黄褐色(10Y5/3)粘質砂を多量に含む、粒径1.0~2.0cmの砂粒少量含む
- 22: 黄褐色(10Y5/3)粘質砂 粒径0.5~2.0cmの黄褐色(10Y5/3)粘質砂を多量に含む、粒径0.2~0.5cmの砂粒少量含む
- 23: 黄褐色(10Y5/3)粘質砂 粒径0.5~2.0cmの黄褐色(10Y5/3)粘質砂を多量に含む、粒径0.2~0.5cmの砂粒少量含む
- 24: 黄褐色(10Y5/3)粘質砂 炭化物少量含む、粒径0.5~1.0cmの砂粒若干含む、粒径0.2~0.5cmの砂粒を含む
- 25: 灰赤褐色(5Y5/1)粘土質砂 粒径0.5cmの焼土片若干含む、炭化物若干含む

< 21~25層: 基本層序第5層  
= 豊地層IV、享保3(1718)年の高松大火燬遺 >

< 7~20、52、53層: 基本層序第2層= 豊地層I、幕末前後 >



- 26: 灰色(5 Y 5/1)砂質沙 粒径0.5~2.0cmの小礫少量含む、粒径1.0~3.0cmの35層?を含む
- 27: 黒褐色(10YR3/1)粘質沙 炭化物含む、粒径0.5~2.0cmの小礫含む、粒径0.5~1.0cmの焼土片少量
- 28: 灰色(7.5 Y 5/1)沙 粒径0.02~0.1cmの焼土片微量含む
- 29: 褐色(10YR5/1)砂質沙 粒径8.0cmの灰色(10 Y 4/1)粘質沙?を一部に含む、粒径0.5~2.0cmの褐色(7.5 Y 6/8)砂質沙?を一部に含む、粒径0.5~2.0cmの砂粒、小礫含む
- 30: 1)ぶい灰色(2.5 Y 6/3)粘質沙 粒径0.5~2.0cmの小礫含む、粒径0.5~2.0cmの砂粒、粒径0.5~2.0cmの34層?が多くなる、粒径0.2~0.5cmの黄褐色(10YR5/8)沙?を含む(酸化?)
- 31: 褐色(10YR5/1)沙 粒径0.2~1.0cmの砂粒少量含む、粒径0.5~1.0cmの粘?黄色(5 Y 6/4)粘(基盤層?)?を主に含む
- 32: 灰色(5 Y 6/4)粘質沙 炭化物若干含む、粒径0.2~0.5cmの粘?黄色(5 Y 6/4)粘(基盤層?)?を主に含む
- 33: 褐色(10YR5/1)沙 粒径0.5~1.0cmの砂粒含む
- 34: 黄灰色(2.5 Y 5/1)粘 粒径0.2~0.5cmの焼土若干含む、粒径0.5~2.0cmの35層(基盤層?)?を含む
- <28~34、54~56層: 基本層序第6層=整地層Ⅱ、17世紀中葉>
- 35: 黄灰色(2.5 Y 6/1)粘? 主に黄褐色(10YR5/8)を呈する(酸化?)
- 36: 黄灰色(2.5 Y 6/2)砂質沙? 主に灰白色(N5/7)粘?を含む
- 37: 灰粘?色(5 Y 6/2)粘質沙? 主に灰粘(N5/7)、黄褐色(2.5 Y 5/4)を呈する
- 38: 灰色(7.5 Y 5/1)粘質沙?
- 39: 黄褐色(2.5 Y 5/4)粘質沙? (37層が変化)
- 40: 灰色(5 Y 5/1)粘? 粒径0.5~1.0cmの36層(基盤層?)?を含む、粒径0.5~2.0cmの小礫少量含む、焼土片微量含む
- 41: 灰色(10Y 5/1)粘? 粒径0.5~2.0cmの36層(基盤層?)?を含む
- 42: 灰色(10Y 5/1)粘? 粒径0.5~1.0cmの36層(基盤層?)?が多くなる
- 43: 暗灰色(N3/7)粘質沙? 粒径0.5~2.0cmの小礫含む
- <40~43層: S K01埋土、16世紀末~17世紀中葉>
- 44: 灰色(7.5 Y 5/1)砂質沙? 炭化物少量含む、粒径0.5~1.0cmの粘?黄色(7.5 Y 6/3)粘?を一部に含む、一箇帯末に含む、粒径0.5~1.0cmの粘?黄色(7.5 Y 6/3)粘?を主に含む
- 45: 灰色(N4/7)粘? 炭化物含む、一箇帯末に含む、粒径0.5~1.0cmの粘?黄色(7.5 Y 6/3)粘?を主に含む
- 46: 灰色(N4/7)粘質沙? 粒径0.5~1.0cmの粘?黄色(7.5 Y 6/3)粘?を主に含む、粒径0.5~1.0cmの粘?黄色(7.5 Y 6/3)粘?を主に含む、粒径0.2cmの灰白色(10YR7/1)粘?若干含む
- <44~46層: S X01埋土、1620~30年代>
- 47: 灰色(10Y 5/1)粘質沙? 粒径0.5~2.0cmの灰白色(7.5 Y 7/2)、灰粘?黄色(7.5 Y 6/2)粘質沙?を主に含む
- 48: 灰色(5 Y 5/1)粘質粘土 焼土片?をばらばらに若干含む、炭化物若干含む、粒径0.5cmの粘?黄色(5 Y 6/4)粘土?を少量含む、粒径0.1~0.5cm砂粒含む
- <48層: S D01露上層埋土、帯末以降>
- 49: 黄灰色(2.5 Y 6/1)粘質粘土 粒径0.5~2.0cm粘?黄色(5 Y 6/4)粘土?を主に含む、焼土片?若干含む、粒径0.1cmの砂粒若干含む
- 50: 灰色(7.5 Y 5/1)粘質沙? 粒径0.5~2.0cmの灰色(N4/7)粘質粘土?を主に含む、粘?黄色(5 Y 6/4)粘?粘土?を少量含む、炭化物少量含む
- 51: 灰色(7.5 Y 4/1)粘質粘土 炭化物多量を含む、焼土片?若干含む、粒径0.5~1.0cmの粘?黄色(5 Y 6/4)粘質粘土?を含む、粒径1.0~3.0cmの小礫少量含む
- 52: 灰色(10Y 6/1)粘質粘土 粒径0.5~1.0cmの粘?黄色(5 Y 6/4)粘質粘土?を少量含む、粒径0.5~2.0cmの小礫少量含む
- 53: 灰白色(7.5 Y 7/1)粘土 部分的に褐色(7.5 Y 6/4)化(酸化?)、粒径0.2~2.0cmの小礫少量含む
- 54: 灰色(10Y 6/1)粘土 粒径0.5~1.0cmの粘?黄色(5 Y 6/4)粘質粘土?を少量含む、焼土片?若干含む、炭化物若干含む
- 55: 56: 粘?黄色(5 Y 6/3)粘砂 粒径1.0~5.0cmの灰色(N4/7)(VR1)粘?粘?少量含む
- 57: 灰色(N4/7)(VR1)粘質粘土 炭化物若干含む、粒径2.0~5.0cmの小礫若干含む、粒径1.0~0.5cmの褐色(10YR4/6)砂質粘(基盤層?)が酸化した。ものか?を主に含む
- 58: 灰色(N4/7)粘 炭化物若干含む、粒径0.1~0.5cmの灰黄色(2.5 Y 6/2)粘土?粘質粘土?を主に含む
- 59: 黒色(N2/7)粘? (炭化物層)
- 60: 黄灰色(2.5 Y 6/1)粘土 粒径0.2~0.5cmの灰色(5 Y 5/1)粘質粘?を含む
- <60層: S K14埋土、帯末以降>
- 61: 黄灰色(2.5 Y 4/1)粘? 粒径0.5~2.0cmの黄褐色(2.5 Y 5/4)~灰黄色(2.5 Y 6/2)粘質粘?を少量含む、炭化物含む、小礫(板状)多量を含む、炭化物含む、瓦片含む
- 62: 灰色(5 Y 4/1)粘? 粒径0.5~8.0cmの黄褐色(2.5 Y 6/4)~灰黄色(2.5 Y 6/2)粘土?が多量を含む
- 63: (62と同じ)ただし、含有の?は少量
- 64: 褐色(10YR5/1)粘質粘土 粒径1.0~8.0cmの褐色(10YR6/1)~灰色(N5/7)粘土?が多量を含む、粒径0.1~1.0cmの砂粒含む
- 65: 灰色(N4/7)(VR1)粘質粘土 部分的に褐色(7.5 Y 6/4)化(酸化?)粘土?を少量含む
- 66: 灰色(N4/7)(VR1)粘質粘土 粒径1.0~5.0cmの小礫若干含む
- 67: 暗灰色(5 B 4/1)粘質粘砂 粒径2.0~5.0cmの青灰色(10YR6/1)粘質粘土?を少量含む
- 68: 褐色(10YR4/1)粘? 粒径1.0~8.0cmの灰黄褐色(10YR5/2)~灰色(5 Y 5/1)粘土?を主に含む、黄褐色(10YR7/8)砂質粘土?を少量含む、粒径0.1~1.0cmの砂粒、小礫(板状)多量を含む、瓦片、土器片を含む
- 69: 青灰色(5 B 5/1)粘? 粒径0.5~3.0cmの黄褐色(2.5 Y 5/4)粘土?を少量含む、粒径2.0~5.0cmの小礫少量
- 70: 暗青灰色(10YR6/1)粘質粘砂 粒径2.0~8.0cmの青灰色(10YR6/1)粘質粘土?を少量含む
- 71: 黄褐色(2.5 Y 5/4)砂
- 72: 明黄褐色(2.5 Y 7/6)砂? 塵土?の塊
- 73: 暗青灰色(5 B 4/1)粘質粘土
- 74: 1)ぶい灰色(2.5 Y 6/4)粘質粘土
- 75: 暗青灰色(5 B 4/1)粘質粘土
- 76: 灰粘?色(5 Y 5/2)砂 部分的に暗青灰色(10YR4/1)粘質粘土?を含む
- 77: 暗青灰色(5 B 3/1)粘質粘土 粒径0.5~3.0cmの小礫少量含む
- <61~77層: S E04埋土、19世紀末>
- 78: 灰色(N4/7)粘質粘土 炭化物若干含む
- 79: 灰色(N4/7)粘土 粒径0.5~1.0cm粘?黄色(5 Y 5/4)粘質粘土?を少量含む
- 80: 灰色(N4/7)(VR1)粘質粘土 粒径0.1~0.5cmの粘?黄色(5 Y 6/4)粘質粘土?を少量含む
- 81: 灰色(N4/7)(VR1)粘質粘土 粒径0.1~0.5cmの粘?黄色(5 Y 6/4)粘質粘土?を少量含む
- 82: 84層によく似ている。ただし、粒径3.0~10.0cmの小礫多量を含む
- <81~82層: S D02上層埋土、19世紀第1四半期以降帯末まで>
- 83: 灰色(N4/7)(VR1)粘質粘土 粒径0.1の砂粒粘土若干含む、粒径0.5~1.0cmの明褐色(7.5 Y 6/6)粘?粘土?を主に含む
- 84: 83層と同じ、ただし、焼土片?を含まず、砂粒もほとんど含まない
- 85: 84層によく似ている。ただし、粒径3.0~10.0cmの小礫若干含む
- 86: 暗灰色(N3/7)粘質粘土 粒径0.5~1.0cmの88層?を少量含む、炭化物無量
- <83~86層: 基本層序第4層=整地層Ⅲ、18世紀前半>
- 87: 褐色(10Y 4/1)粘土 粒径0.1~0.5cmの砂粒多量を含む、木片?を含む
- 88: 灰色(10Y 4/1)粘質粘土 粒径0.5cmの灰色(10 Y 6/1)粘?を少量含む、黄褐色(2.5 Y 6/3)砂を帯状に含む、部分的に木片集中、茶色化
- 89: 灰色(N6/7)粘土
- <87~89層: S D05下層埋土、17世紀中葉>
- 90: 灰色(N4/7)(VR1)粘土 炭化物若干含む、粒径0.5~3.0cmの砂粒含む、粒径0.5~1.0cmの粘?黄色(7.5 Y 6/3)粘?を少量含む
- <90、94、95層: 基本層序第3層
- =整地層Ⅱ、16世紀第4四半期~19世紀第1四半期>
- 91: 灰色(N4/7)(VR1)粘土質粘土 炭化物多量を含む、粒径3.0cmの粘?黄色(7.5 Y 6/2)粘?粘土?を少量含む、粒径0.5~1.0cmの明黄褐色(10YR6/6)粘質粘土?粘土?若干含む、粒径0.5~2.0cmの小礫少量
- 92: 灰色(N4/7)(VR1)粘土 粒径0.5~1.0cmの粘?黄色(7.5 Y 5/2)粘土?を少量含む、粒径0.1~0.5cmの砂粒含む
- 93: 灰色(N4/7)(VR1)粘土 粒径0.5~2.0cmの小礫含む、瓦片少量
- 94: 灰色(10Y 5/1)粘土 粒径0.5~1.0cmの粘?黄色(7.5 Y 5/2)粘土?を少量含む、瓦片少量を含む
- 95: 灰色(10Y 4/1)粘土 粒径5.0~10.0cmの小礫若干含む
- 96: 基本層序第1四半期以降帯末まで
- 97: 黄灰色(2.5 Y 5/1)粘質粘土 主に暗灰黄色(2.5 Y 4/2)を呈する、粒径3.0~5.0cmの小礫少量
- 98: 灰色(N5/7)粘土 粒径0.5~1.0cmの粘?黄色(5 Y 5/4)粘?を主に含む
- 99: 灰色(N4/7)(VR1)粘土質粘土 炭化物少量含む
- 100: 灰色(N4/7)粘土 粒径0.5~2.0cmの粘?黄色(7.5 Y 5/3)粘土?を少量含む、粒径0.1~0.5cmの砂粒含む
- 101: 灰色(10 Y 6/1)粘質粘土 粒径0.5~3.0cmの粘?黄色(5 Y 5/4)粘土?を少量含む、粒径1.0~5.0cmの黄褐色(2.5 Y 5/3)~暗褐色(5 Y 4/1)粘土?を少量含む
- 102: 灰色(N4/7)粘土 粒径1.0~5.0cmの黄褐色(2.5 Y 5/3)~暗褐色(5 Y 4/1)粘土?を少量含む、炭化物若干含む
- 103: 灰色(N4/7)粘質粘土 粒径1.0~3.0cmの粘?黄色(7.5 Y 6/3)粘土?を少量含む、粒径3.0~5.0cmの小礫少量含む
- 104: 灰色(N5/7)粘質粘土 大部分を木質遺存層黒褐色(2.5 Y 3/1)が占める、粒径1.0cmの砂粒含む
- <102~104層: 基本層序第4層=整地層Ⅳ、18世紀前半>
- 105: 黄褐色(2.5 Y 7/4)粘質粘土 粒径1.0~5.0cmの灰色(N4/7)粘土?を少量含む
- 106: 灰色(5 Y 5/1)砂
- <105、106層: S X02下層埋土、17世紀中葉>
- 107: 灰色(5 Y 4/1)粘土 粒径1.0cmの粘?黄色(2.5 Y 5/4)~粘?黄色(5 Y 5/3)粘質粘土?を少量含む、粒径0.1~0.2cmの砂粒多量を含む、粒径3.0~10.0cmの小礫、比較的下層に近い部分に含む、炭化物若干含む
- 108: 粘?黒色(5 Y 3/1)粘質粘土 木片多量を含む
- <107、108層: S K03埋土、16世紀末~17世紀初頭>

## 第15図 トレンチ5壁面図2

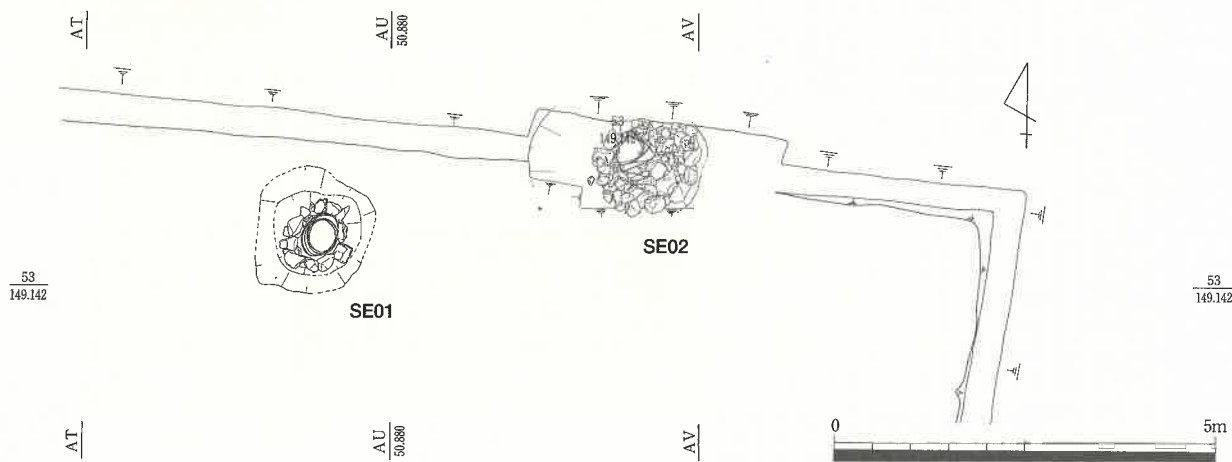
### 第3節 遺構・遺物

第16・22図に遺構配置図を示し、付図に完掘平面図を示した。調査では9～10世紀、近世、近代の遺構・遺物を確認した。攪乱が激しく、近世遺構面はおおむね1面で検出し、その検出面において9～10世紀の遺構も確認している。以下、近世以前と近世・近代について個々に報告する。

#### 1. 近世以前

近世以前に属する遺構として、13世紀後半前後に位置付けられる2基の井戸状遺構を確認している(第16図)。加えて、出土遺物は確認できなかったが、柱穴の一部も中世段階まで下る可能性が高い。また、近世基盤層出土遺物として報告するが、9～10世紀の所産と考えられる土師質土器甕や甑が出土している。当初、包含層出土遺物と考えていたが、1箇所に集中する地点もあり、削平により掘方を失った遺構の底面付近のみの検出ないし旧地形のわずかな起伏に埋積した土器群と評価できる。つまり、9～10世紀にも集落が存在していた可能性が指摘できる。こうした内容は、集落の新たな確認に留まらず、多くの示唆的な内容を提供する。その意義に関しては、調査概報でも述べられており(乗松編2002)、中世段階の状況のみならず、高松城の築城に際する選地とも関連する。

以下、近世以前に位置付けられる遺構・遺物について報告する。

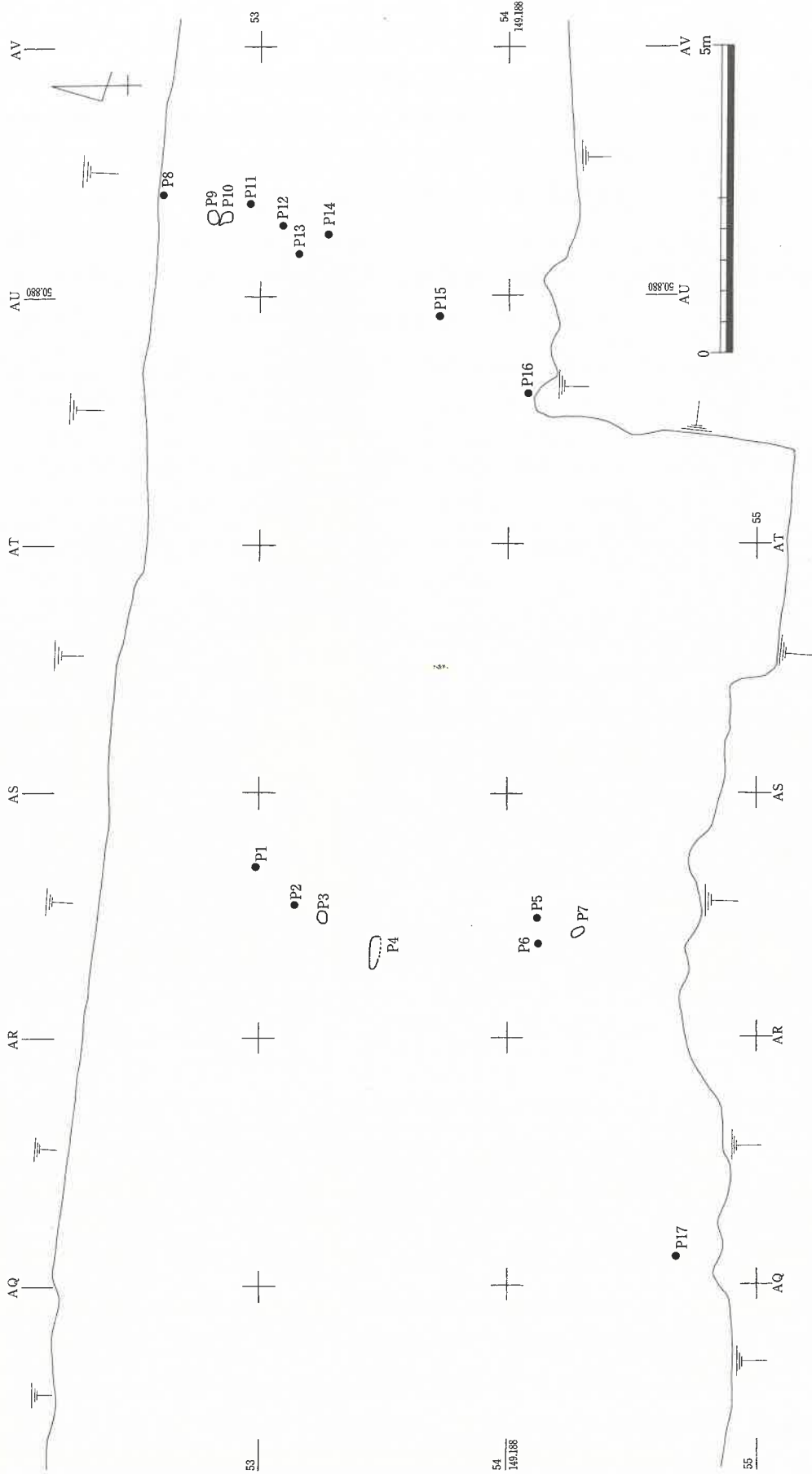


第16図 近世以前の遺構配置図 (S=1/1,000)

#### 近世基盤層出土遺物

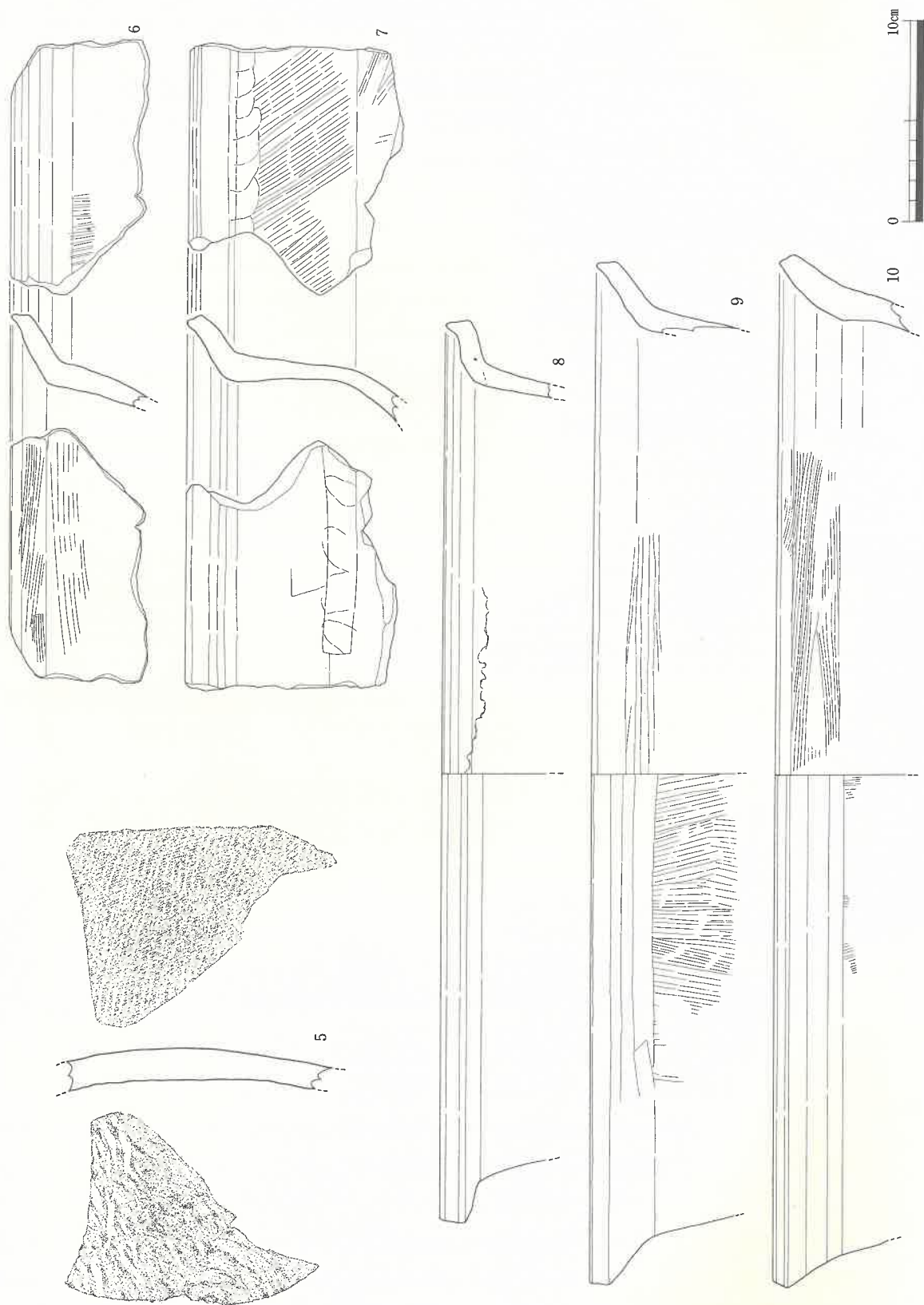
第17図に近世遺構検出面上で検出した出土遺物の配置図を示した。明瞭な掘方を有するものは確認できないが、P4では底面を揃えた一定範囲から数個体の土器が出土する(図版3)。こうした出土状況から基盤層形成過程に流入したという解釈は困難であり、検出レベルは0.7～0.8m前後を測り、均質な内容を示す点もそれを補強する。しかし、明瞭な掘方は確認できないといった状況は否定できるものではない。掘方を有する土坑状の遺構が顕著な削平を受け、底面付近のみ遺存し、そこに埋積した遺物を検出した可能性が高いと考える。また、旧地形の起伏に流入した遺物との解釈も可能であるが、P4の出土状況から否定的な見解を取りたい。

第18・19図5～14は近世基盤層出土遺物である。一括して取り扱ったため、出土地点とレイアウトは対応しない。出土地点を記すと、5・8はP4、6・9はP10、7はP16、9はP9、11はP7、12は



検出標高 (m)	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17
	0.827	0.746	0.735	0.825	0.55/0.512	0.578/0.519	0.529/0.561/0.555	0.833	—	0.633/0.577/0.572	0.662	0.617	0.663	0.589	0.178	0.178	—

第17図 近世基盤層出土遺物 出土地点 (S=1/1,000)

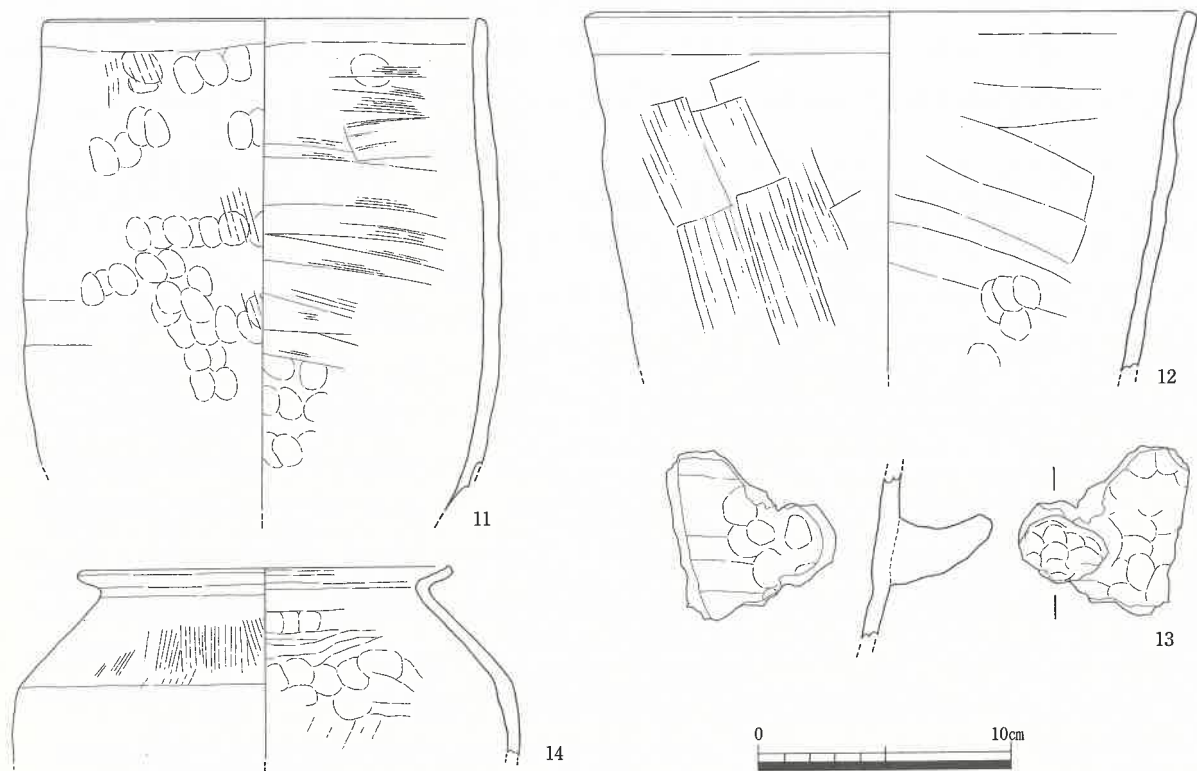


第18図 近世基盤層出土遺物1 (S=1/3)



P 5、13はP 6、14はP 17となる。5は須恵器甕である。内面には顕著な当て具痕、外面には平行叩き→板ナデ調整を認める。6～10は土師質土器鍋である。6～9は口縁部が「く」字形に屈曲し、端部を上方へ摘み上げる。内外面には入念な板ナデ調整を認める。10は「く」字形に屈曲する口縁部は短く大きく外反する。11～13は把手付きの深鉢である。甑か。11は体部がわずかに膨らみ、口縁部は直立する。12・13は同一個体となり、直線的に外傾する外面には牛角突起を認める。14は弥生土器甕である。痕跡的な頸部を認め、口縁部は「く」字形に短く屈曲する。後期末。下川津B類土器。

以上、近世基盤層出土遺物は、14を除くと、同時期の所産と考えられる。詳細な位置付けは不明であるが、おおむね9～10世紀代の所産としておきたい。



第19図 近世基盤層出土遺物2 (S=1/3)

#### 井戸状遺構

**SE01** A T52～53グリットで検出した井戸状遺構である(第20図)。一辺1.6m前後の隅丸方形の平面形となり中位に直立する箇所を認める「V」字形の断面形状を呈する。直立部位下端前後はわずかにオーバーハング気味に抉り込まれ、その部位を設置面として石組を認める。石組は最も遺存する箇所でも3段分の検出に留まるが、元来上位まで構築されていた可能性が高い。石組の下位には、曲物が2段構築され、下段の曲物より上段の曲物が一回り径が大きい(上段曲物は報文番号21として図化)。側板を2重半程度巻き付け、本綴じと小綴じを認める。さらに下端には帯を巡らし、内側には鋭利な工具による細い平行線がほぼ1cm間隔で施される(内面ケビキ)。下段は内側のみ1枚の側板で綴じ合わせ、その周囲を幅8～10cmの側板を上中下に幾周も巻き付ける。綴じ合わせ痕跡は確認できないが、その端部は隅角を切り落とす処置がなされている。また、下端には木ビスの孔を認める。検出面からの深度は約1.5mを測り(標高-0.6m)、下段曲物は基盤層下位の灰白色粗砂に到達する(16層、湧水層)。10層は曲物を固定する埋め土、9層は石組の裏込め埋土となる。1層は基本層序の何層に対応するか不明であ

るが、整地層と考えられる。2～7層は井戸としての機能を停止した後に堆積した埋土となる。曲物内に堆積した10層には、石組の崩落石を認め、同じく機能停止後の堆積土と考えられる。

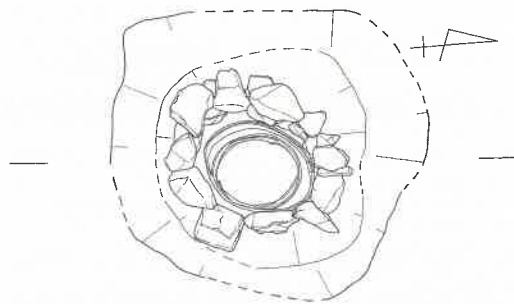
15～21はS E 01出土遺物である。15・16は土師質土器小皿である。いずれも口縁部は短く外反し、端部は先細り、底面には回転ヘラ切り痕を認める。17は土師質土器坏である。口径9.8cmを測り、口縁部は内湾気味に開く。底面には回転ヘラ切り痕を認め、底部外縁にはヘラ切り調整の起点となる切り込みを認める。18は須恵器椀である。内外面にはヘラミガキは確認できない。胎土から西村産須恵器椀の可能性と考えたいが確証はない。19は土師質土器足鍋である。ほぼ円形の断面形状を呈する。20は土師質土器甕である。肩部に張りを認めない体部から「く」字形に屈曲し、口縁部は短く開く。内面には鋭い稜を有し、端部は先細る。内外面調整は板ナデ調整が卓越する。21は曲物である。

以上、S E 01出土遺物は19の足鍋の存在から、13世紀以降の所産であることは疑いない。小皿の形態や小型化した坏から13世紀後半の所産と考えておきたい。

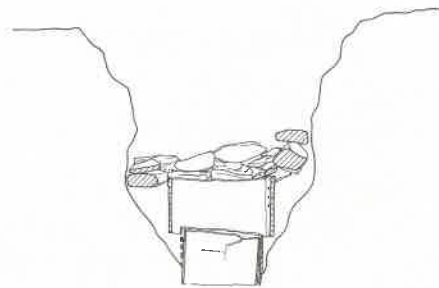
**S E 02** A U 52で検出した井戸状遺構である（第21図）。北半部は調査区外へ延長する。掘方は径2.2m前後の円形ないし長楕円形を呈し、検出面からの深度は1.5mを測る。掘方断面形状は緩やかなU字形を呈し、曲物設置箇所のみ小さく突出する。掘方内には標高-0.2m前後を設置面として石組が構築される。石組は西側ではほぼ垂直に、東側では掘方断面形状に沿って上開き気味に構築し、その横目地も右上がりの通りを認める（現状で6段確認）。通常であれば、水平を意識しながらの構築が行われるが、螺旋状に積まれた可能性が高い。石材種別は、安山岩が8割を越え、花崗岩、砂岩、結晶片石が残り占める。その下位に位置する曲物は上中下3段積みされ、その中段の曲物を報文番号32として図化した。二重構造を呈し、内側側板は1枚を綴じ合わせたもので、内面には本綴じを認める。その周囲には幅13cm前後の2枚の側板をはす違いにそれぞれ本綴じする。上段は側板を2重に重ねそれぞれ綴じ合わせる。下段は一枚の側板で構成され、下端部には帯を巡らす。埋土は1層が石組裏込め埋土となり、西側石組の裏込めは1層の単一層となる。石組内埋土は2～8層となり、一部には崩落した石組の上位に堆積することから、機能停止後の堆積土と理解できる。9層は曲物内埋土となる。砂層で構成され、使用期間中の堆積土か機能停止後の堆積土かの判断は困難であるが、後者の可能性を想定したい。10～13は基盤層である。下段曲物下位は10層に突き刺すように設置しており、10層の湧水層としての性格を反映する。

22～32はS E 02出土遺物である。22は土師質土器小皿である。口径6.6cmを測り、口縁部は短く開く。23～25は土師質土器坏である。23は口径12.2cmを測り、底部からにぶく屈曲し、口縁部は直線的に外傾する。口縁部内面及び外面には煤が面的に広がる。25の内底部にも煤が付着する。底部にはいずれも回転ヘラ切り痕を認める。26は土師質土器椀である。断面三角形の高台を有し、精良な胎土が選択される。吉備系土師器椀の可能性も残る。27は瓦器皿である。28は土師質土器鍋とした。口縁部は直線的に外傾し、端部を上方へ強く、下方へ小さく引き出す。29は土師質土器甕である。口縁部は斜め上方へ開き、端部上端を上方へ摘み上げ、下端には丸味を認める。30は土師質土器足鍋である。正円形に近い断面形状を呈する。31は須恵器甕底部片である。外面上半には左上がりの格子叩き、下半には強いナデ調整を認める。十瓶窯産。32は曲物である。

以上、S E 02出土遺物は、法量の大きい土師質土器坏（23～25）、瓦器皿（27）や吉備系土師器椀（26）などを認め、S E 01に先行する可能性が高い。ここでは13世紀第2・3半期の所産と位置付けておきたい。

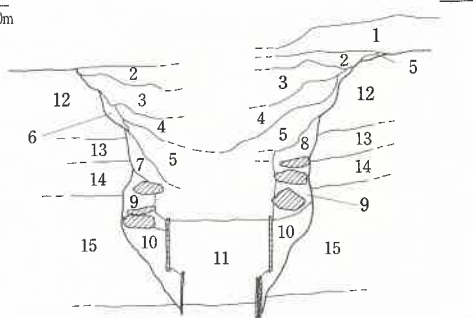


L=1.0m



L=1.0m

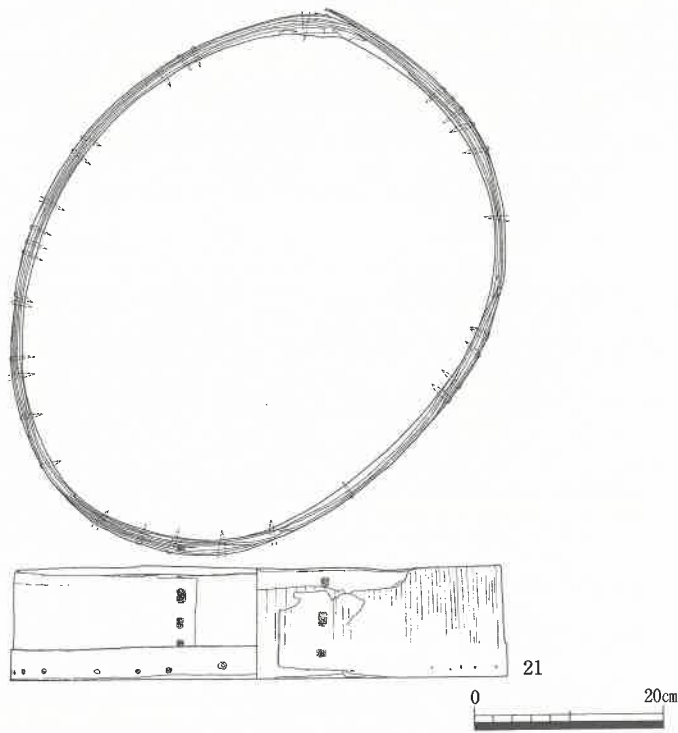
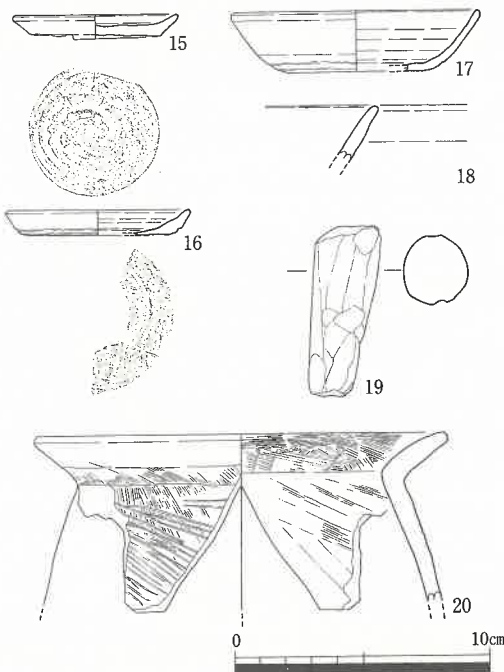
L=1.0m



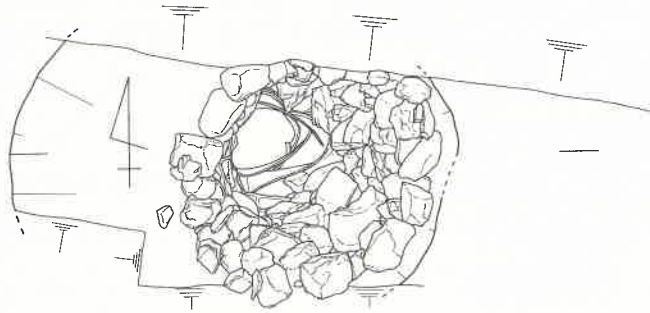
16

- 1: 黄灰色(2.5 Y 6/1)粘土 粒径0.5~5.0cmの(N 4/(Y))・粘り黄色(5 Y 6/3)粘質シルトが多少量に含む、炭化物若干含む<整地層>  
 2: 褐灰色(10YR5/1)シルト質砂 炭化物若干含む  
 3: 灰色(N 5/)砂質シルト 部分的に酸化  
 4: 灰色(N 4/)シルト 粒径0.5~2.0cmの5層が多少量含む  
 5: 青灰色(5 B 6/1)シルト 粒径0.5~2.0cmの8層が多少量含む、粒径0.5~1.0cmの粘り黄色(7.5 Y 6/2)シルトが多少量含む  
 6: 青灰色(5 B 6/1)シルト質砂 粒径0.5~2.0cmの灰色(N 4/)シルトが多少量に含む  
 7: 明青灰色(10BG7/1)シルト質砂 粒径0.5~1.0cmの粘り黄色(7.5 Y 6/2)シルトが多少量含む  
 8: 青灰色(5 B 5/1)シルト  
 <2~8層; 井戸枠内埋土>

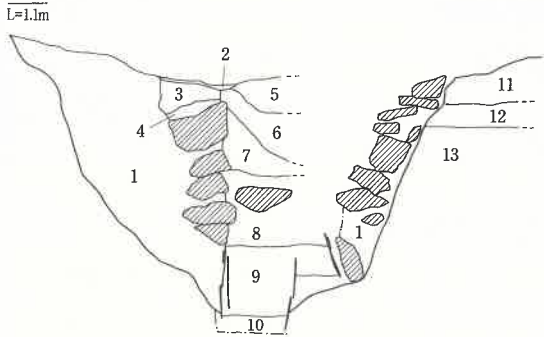
- 9: 青灰色(10BG6/1)砂質シルト  
 10: 明粘り灰色(2.5GY7/1)砂  
 <9・10層; 石組みないし曲物裏込土>  
 11: 灰粘り黄色(5 Y 6/2)砂 粒径0.5~2.0cmの14層が多少量含む<曲物内埋土>  
 12: にぶい黄色(2.5 Y 6/3)~黄灰色(2.5 Y 5/1)シルト質細砂~砂質シルト・黄灰色(2.5 Y 5/1~4/1)シルト 一部がけ状(自然流路堆積によることを示すものか?)に細砂含む、部分的に褐色(7.5YR4/6)化(酸化?)  
 13: 灰色(N 5/~4/)シルト質粘土 一部細砂含む  
 14: 暗灰色(N 3/)粘土 一部がけ状に細砂含む  
 15: 灰白色(2.5 Y 7/1)砂 弥生土器(後期)出土 15・16層と下へ行くほど粒径大きくなる  
 16: 灰白色(5 Y 7/2)粗砂 粒径2.0~5.0cmの小礫含む、一部青灰色(5 B 5/1~6/1)化(ケラ化)  
 <12~16層; 基盤層><16層; 湧水層>



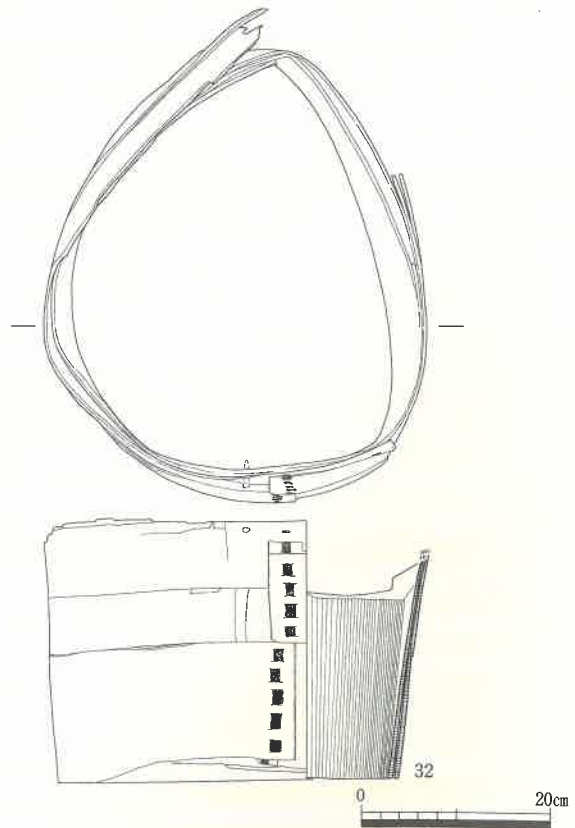
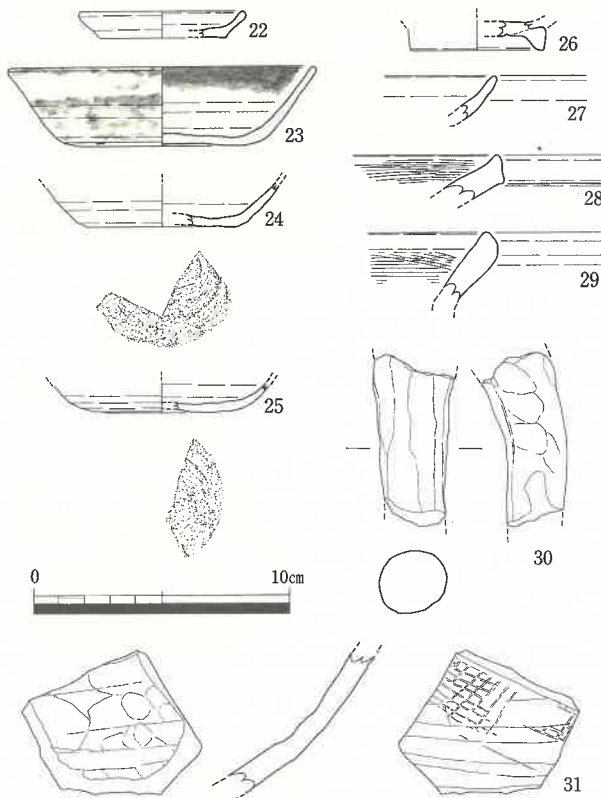
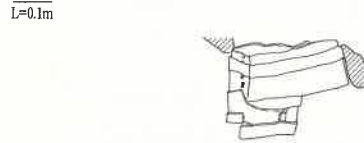
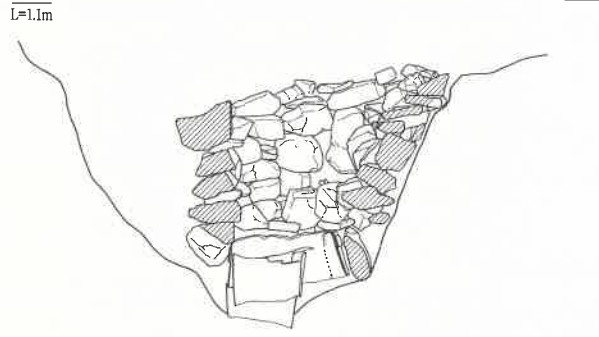
第20図 SE01平・断面図及び出土遺物 (S=1/40、1/3、1/8)



- 1: 灰初-ブ色(5 Y 6/2)~褐灰色(10YR5/1)砂質シルト 粒径0.2~0.5cmの灰色(N 5/~N 4)粘質シルトが少量含む、下位では青灰色(5 B 5/1)化(クワ化) <石組み裏込土>
  - 2: 灰色(2.5 Y 4/1)シルト 粒径0.1~0.5cmの明黄褐色(10YR6/8)シルトが(酸化?)含む
  - 3: 灰色(10 Y 5/1)シルト 粒径0.1~0.5cmの明黄褐色(10YR6/8)シルトが(酸化?)若干含む、粒径0.1~1.0cmの灰初-ブ色(7.5 Y 5/3)シルトが少量を含む
  - 4: 灰色(N 4/(YR))シルト 粒径0.1~0.5cmの明黄褐色(10YR6/8)シルトが(酸化?)少量含む
  - 5: 灰色(10 Y 4/1)シルト 灰初-ブ色(7.5 Y 5/3)シルトを帯状に(互層状)に含む
  - 6: 灰色(N 4/(Y))砂質シルト 粒径0.5~1.0cmの灰初-ブ色(7.5 Y 5/3)シルトが若干含む、粒径0.5~1.0cmの灰初-ブ色(7.5 Y 6/2)シルトが少量含む
  - 7: 灰色(N 4/)シルト
  - 8: 暗灰色(N 3/)シルト
- <2~8層; 石組み内埋土>



- 9: 灰色(7.5 Y 6/1~N 6/)砂 粒径0.5~2.0cmの小礫若干含む
  - 10: 灰白色(2.5 Y 7/1)~灰黄色(2.5 Y 6/2)粗砂 粒径2.0~5.0cmの小礫を若干含む
- <9~10層; 曲物内埋土>
- 11: 褐灰色(10YR5/1)~にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト~砂質シルト 褐灰色(10YR5/1)砂を分け状に含む
  - 12: 黄灰色(2.5 Y 5/1)~暗黄褐色(2.5 Y 5/2)シルト~砂質シルト 黄灰色(2.5 Y 5/1)細砂を分け状に含む
  - 13: 灰色(5 Y 5/1)砂
- <11~13層; 基盤層>



第21図 SE02平・断面図及び出土遺物 (S=1/40、1/3、1/8)

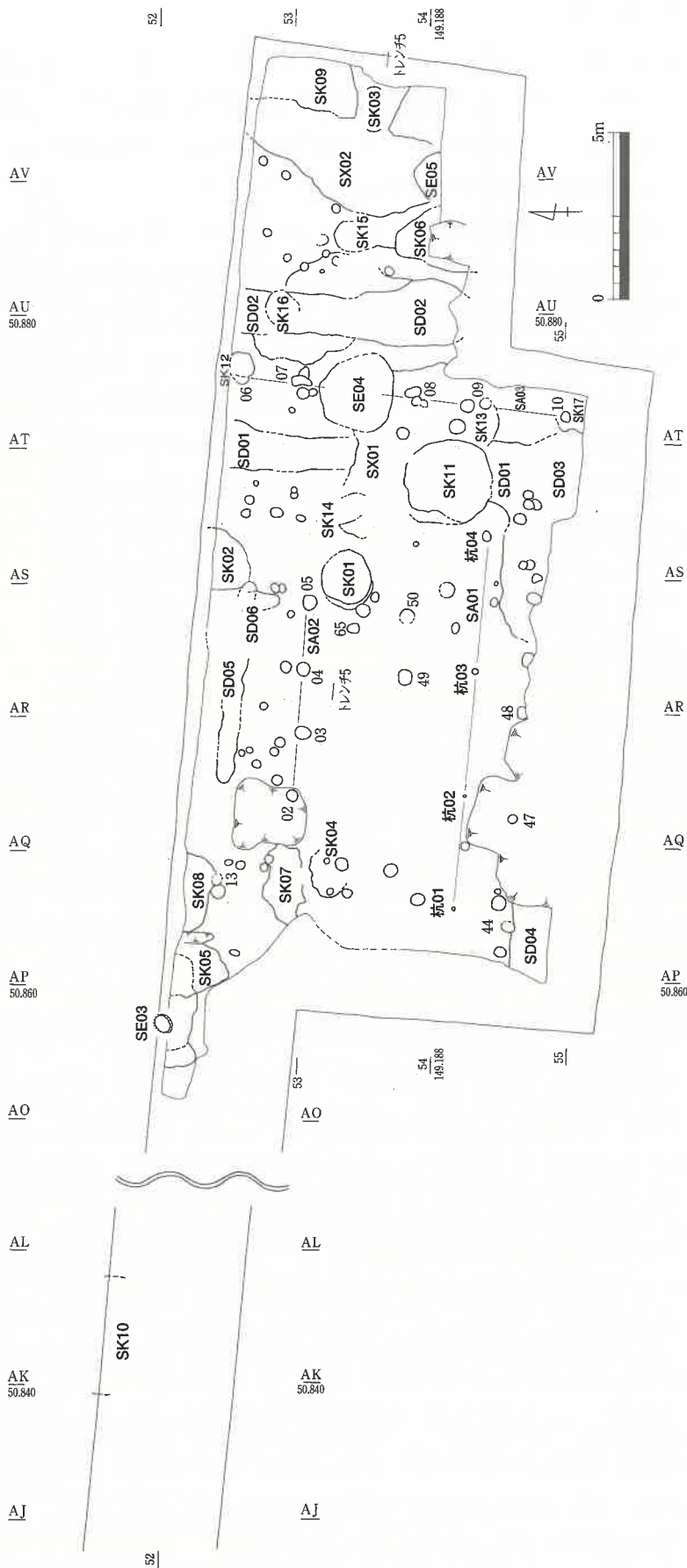


## 2. 近世・近代

近世遺構は攪乱が著しく複数の整地面が面的に広がる状況は確認できなかった。調査では1面ないし2面相当の検出面を捉えたが、最終的にはいずれも同一検出面での確認となる。検出遺構は、柵列柱穴(建物は未確認)、井戸状遺構、廃棄土坑、溝状遺構(区画溝)等認め、16世紀末～幕末・19世紀末まで連綿と遺構が確認できる。なかでも16世紀末～17世紀中葉の2条併行する溝状遺構は屋敷割を復元する上で極めて注目でき、その間には柵列が、その南にも溝状遺構が直交する方向で走り、絵図との対応関係を考える材料となる。

また、SK09からは18世紀第3四半期ないし18世紀第4四半期前半、SK10からは18世紀第4四半期～19世紀第1四半期の良好な一括遺物が出土する。

以下、近世・一部近代まで含む遺構・遺物について報告する。



第22図 近世遺構配置図 (S=1/200)

### 柵列 (第23図)

**S A 01** 調査区南部、グリット54ラインで検出した柵列である。杭1～4で構成され、主軸方位はN 84° Wを示す。杭に伴う明瞭な掘方は確認できず、杭が腐朽した可能性が高い杭5は掘方ではなく、柱痕跡を完掘した可能性が高い。それを示すように、杭間隔は3.6～4 m間隔で等しい。出土遺物が確認できないため所属時期は明らかではない。

**S A 02** 調査区北部、グリット52・53境で検出した柵列である。S P 02～05で構成され、主軸方位はN 85° Wを示す。前記したS A 01とほぼ併行した位置関係になる。柱穴間隔は2 m間隔と等しく、高い規則性を認める。調査範囲が狭いため、復元はできないが、掘立柱建物を構成する可能性が高い。S P 03を除く各柱穴には、柱痕跡を認め、いずれも灰色シルトを埋土とする。裏込めには基盤層ブロックを含有し、掘方掘削後、すぐに柱を建て、その土量を用いて埋め立てられたと考えられる。柱穴からの出土遺物は確認できず、正確な所属時期は不明であるが、S A 02を西へ延伸した箇所にS K 07が位置し、2 m間隔で柱穴があると仮定すれば、S K 07の東部に位置する。18世紀前半の埋没を想定しており、重複関係からS A 02はそれ以前の所産と理解することができる。

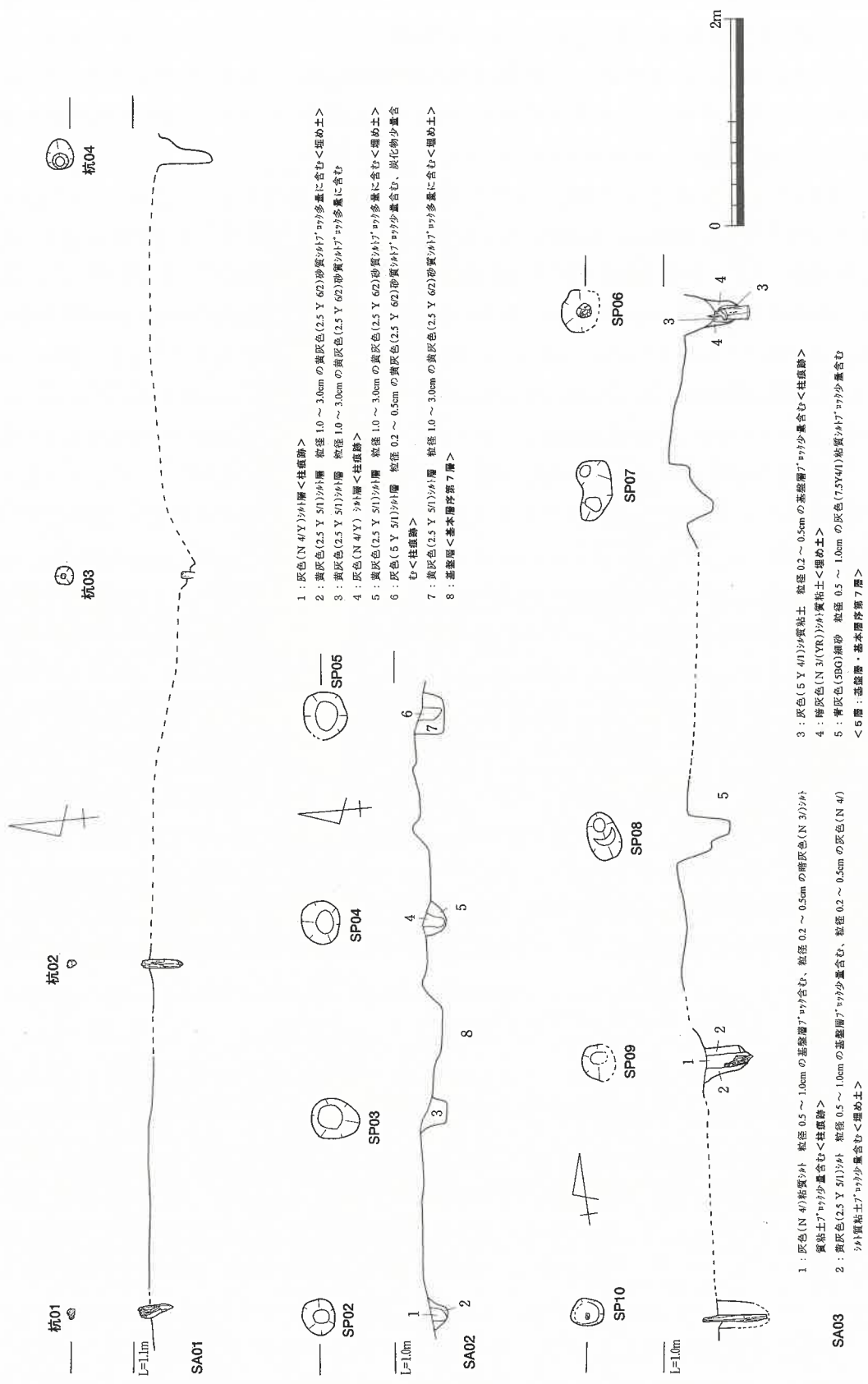
**S A 03** A Tグリットで検出した柵列である。併行して走るS D 01・02のほぼ中間に位置し、主軸方位はN 6° Eを示す。柱穴はS P 6～10をS A 03に割り当てた。柱穴間隔は2.5 m前後を測る。S P 06・09・10には柱材が遺存し、その腐朽埋土と裏込め埋土が確認できる。柱穴からの出土遺物はなく、正確な所属時期の決定には問題を残すが、その位置関係からS D 01と02と同時期の所産である可能性が高い。ここでは、17世紀中葉前後の所産と理解しておきたい。

### 柱穴 (第24・25図)

**S P 13** A P 52グリットで検出した柱穴である。18世紀前半に埋没したS K 08に後出する重複関係を有する。37～41はS P 13出土遺物である。37は肥前系磁器端反碗である。外面には柳文、内面縁文様には搔取による七宝繋ぎ文を認める。38は肥前系磁器紅皿である。型押成形。39は瀬戸・美濃系磁器碗である。外面及び、見込みには上絵付けを認める。40は京・信楽系陶器皿である。高台は蛇の目高台状を呈し、口縁部は短く直立する。見込み縁部には銹絵により草花文を描く。西の丸町地区では、様相7以降に認める器種である(佐藤2003、松本2003 a)。41は土師質土器七厘である。型成形により、外面には草花文を陽刻し、内面には入念な板ナデ調整を施す。胎土中には角閃石を一定量含有し、御厩周辺において製作されたことが窺える。空港跡地遺跡VIでは、19世紀末には確認できる(S K g 795、松本2003 b)。以上、S P 13出土遺物は、陶磁器に関しては幕末前後の所産となるが、在地産土器の年代観に従い、幕末～19世紀末に位置付けておきたい。

**S P 44** A P 54で検出した柱穴である。径0.4 m弱を測り、U字形の断面形状を呈する。埋土中には柱材が遺存する。裏込めは比較的入念に行われ(2～5層)、基盤層ブロックを一定量認める。

**S P 47** A Q 54グリットで検出した柱穴である。34～36はS P 47出土遺物である。34・35は肥前系陶器皿である。34は底部から短く直立し、口縁部は内湾気味に開く。口縁部内面には暗緑灰色の釉薬による簡略化した草花文を認める。36は土師質土器小皿である。口径10 cm前後を測り、底口縁部境が不明瞭な形態となる。底部には回転糸切り痕を認める。胎土は比較的精良で、灰白色の色調を呈する。肥前系陶器は大橋編年I～2期の所産となるが(大橋2000、以下肥前系陶磁器の年代観は同文献に依拠する。なお、陶器碗・皿は盛2000、磁器碗・皿類は野上2000、波佐見窯産製品は中野2000も参考とした)、土



第23図 SA01~03平・断面図 (S=1/60)

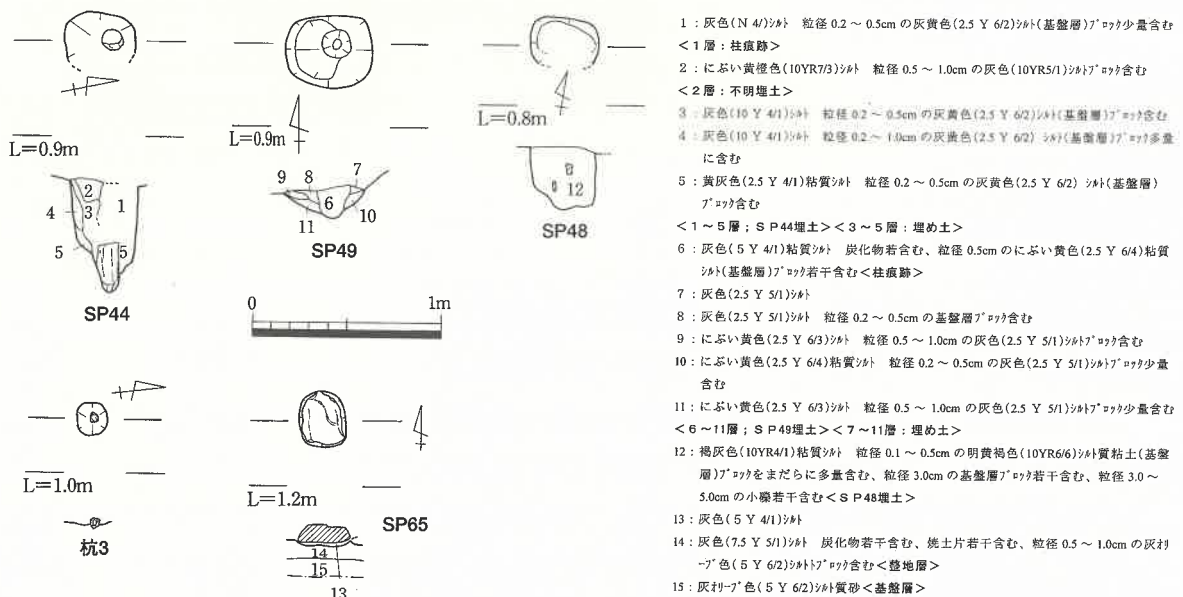
師質土器小皿は高松城様相把握における様相3まで下るかもしれない(松本・佐藤2001、松本2002a、2003a、以下高松城様相把握に関しては同文献に依拠する)。

**SP48** AR54で検出した柱穴である。箱形の掘方断面形状を呈し、底面中央のみ小さく突出する。埋土は基盤層ブロックを多量に含む褐灰色粘質シルトの単層となり、柱痕ないし柱材の抜き取り痕は確認できない。出土遺物はなく、所属時期は不明である。

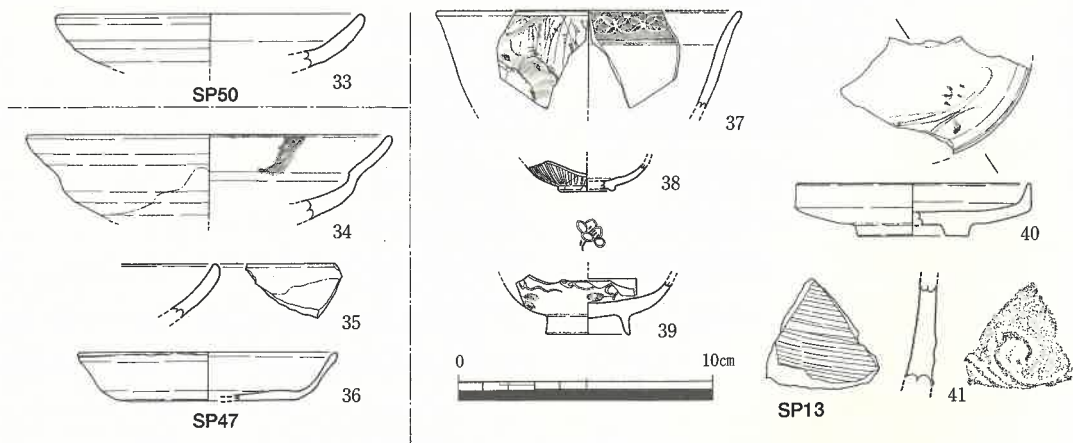
**SP49** AR53で検出した柱穴である。平面形は径0.4m前後の円形を呈し、浅いU字形の掘方断面形状となる。U字形の柱痕を認め(6層)、その両脇には灰色シルトブロックを含有する裏込め埋土を認める(7~10層)。出土遺物は確認できず、所属時期は明らかではない。

**SP50** AR53グリットで検出した柱穴である。33は瀬戸・美濃系陶器皿である。内外面に長石釉を施釉する志野皿である。出土遺物の年代観より16世紀末~17世紀初頭に位置付けられる(藤澤1993、以下瀬戸・美濃系陶器大窯製品に関しては、同文献に依拠する)。

**SP65 (礎石)** AR53で検出した礎石である。14層は整地層となり、礎石の下位には灰色シルト層を認める。礎石は一辺0.3m以下の扁平な石材が用いられる。



第24図 柱穴平・断面図 (S=1/40)



第25図 柱穴出土遺物 (S=1/3)



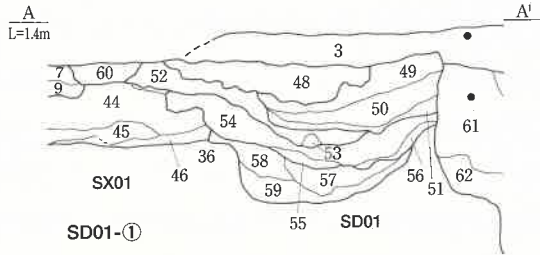
## 溝状遺構

平行した位置関係を呈するS D01・02、その南端部に位置し、直交する主軸方位を示すS D03・04、さらにS D01・02間に構築されるS A03は屋敷割を復元する極めて興味深い材料である。その出土遺物も17世紀中葉前後に位置付けられ、ほぼ同時期の所産と理解できる。

**S D01** ASグリットとATグリット境を南北に縦断する溝状遺構である(第26・27図)。主軸方位はN5°Eを示し、東側4mに位置するS D02に併行する。19世紀第2四半期に埋没したSK11と重複関係を有し、それに先行する。北端部は調査区外へ延長し、南端部はS D03に合流する。南北検出幅約8.5m、溝幅1~1.4mを測る。断面形状はU字形ないし逆台形状となる。埋土はトレンチ5を援用する。3層は基本層序第1層=整地層0となり、近代以降の所産であり、その下位にS D01出土遺物として報告した層位が堆積する。しかし、出土遺物の年代観や層序の連続性から、必ずしもS D01出土遺物ではないことが判明した。整地層として52・53層がある(炭化物・焼土片を含む灰色砂質シルト)。7・9層から連続する整地層となり、基本層序第2層=整地層I層とした。幕末前後に設置された可能性が高く、S D01に流入するような堆積状況を示す。その上位に堆積する48層及び49~51層は明瞭な掘方を有し、遺構の可能性が高い。前者をS D01最上層、後者をS D01上層としたが、S D01埋土とは考えられない。また、54~56層を基本層序第6層=整地層Vと考えた。54層は灰色粘土を基調とし、基盤層ブロック・炭化物・焼土片を包含する。出土遺物ではS D01中層としたが、やはりS D01の埋土とは考えられない。しかし、整地層Iと同様に溝内へ流れ込むような堆積状況を呈する。最も下位に堆積する57~59層がS D01の掘方内に堆積した埋土である(S D01下層)。下位に堆積する59層は黒色シルト層であり、炭化物を多量に含有し、57・58層は基盤層ブロックを含む灰色シルトとなる。上記した堆積状況をまとめると、S D01の本来の埋土である57~58層の上位に整地層V・Iが堆積する。いずれもS D01に流れ込むような堆積状況を呈し、S D01は埋没後も窪地状を呈していたと考えられる。さらに上位にS D01上層・最上層とした埋土を認める。整地層V・Iの堆積状況を考慮すると、S D01に沿って再掘削された溝の可能性も残る。なお、溝底はトレンチ5ラインを境として、約0.2~0.4mの高低差があり、それより以北は低くなる。南端部はS D03に連結する可能性が高い。S D03は水溜状施設の可能性もあるが、S D04に連続する可能性も捨てきれない。

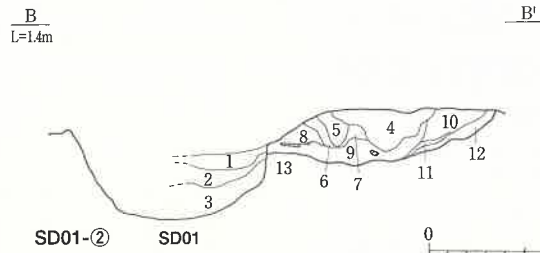
42~70はS D01出土遺物であるが、上層に設置する整地層I・V出土遺物も含む。以下、第26図の層位番号に基づき報告する。42・43は第26図48~50層出土遺物である。層序の理解では、幕末前後に形成された整地層Iを掘剖面とする遺構の可能性の高い埋土となる。42は中国産(景德鎮窯系)青花小碗である。高台内には「大明成化年製」の款銘を認める。43は瓦質土器鉢である。底部から直立し、口縁部は長く直線的に延びる。上端部は水平に収め、内方へ小さく引き出す。外面には入念なヘラミガキ調整を施し、剥離材に用いるキラコを塗布する。以上、48~50層出土遺物は、おおむね17世紀前葉前後に位置付けられるが、層序理解からは明らかに幕末以降の所産と考えられる。

44~51は第26図52~58層出土遺物である。層位の理解では、整地層I・II・S D01下層埋土からの出土遺物となる。44~46は肥前系陶器である。44は碗である。高台内には兜巾を認める。45・46は皿である。45は底部から短く直立し、口縁部が内湾気味に開く形態を呈する。高松城様相把握の様相2に認め、大橋編年I-2期の所産となる。46は見込みに砂目を認め、畳付にも砂目痕跡を認める。高台の削り込みが浅く、底部は厚みを有する。47は瀬戸・美濃系陶器碗とした。内外面には藁灰釉を施し、外面には鉄絵により意匠不明の文様を描く。口鏤。48は備前摺鉢である。口縁端部内面には段を有し、顎下端は



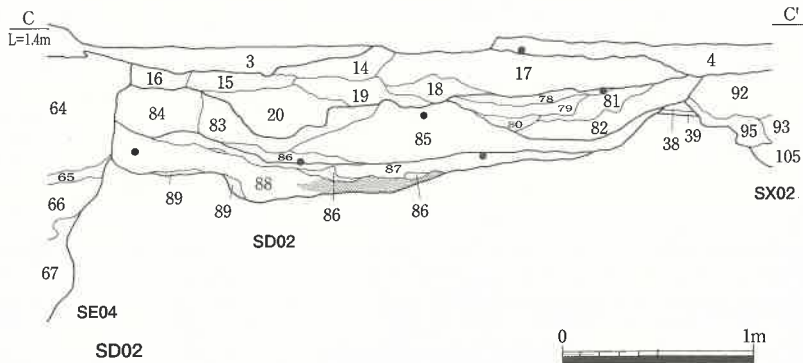
- 3: 灰色(N5/Y)粘質シルト <3層; 基本層序第7層=整地層0、近代以降>  
 7: 青灰色(5B5/1)粘質シルト  
 9: 褐灰色(10YR4/1)砂質シルト  
 <7・9層; 基本層序第2層=整地層1、幕末前後>  
 36: 灰黄色(2.5Y6/2)砂質シルト <36層; 基本層序第7層=基盤層、弥生時代~古代末>  
 44: 灰色(7.5Y5/1)砂質シルト  
 45: 灰色(N4/Y)シルト  
 46: 灰色(N4/Y)粘質細砂  
 <44~46層; SX01埋土、1620~30年代>  
 48: 灰色(5Y5/1)粘質粘土<SD01最上層埋土、幕末以降>  
 49: 黄灰色(2.5Y6/1)粘質粘土 粒徑0.5~2.0cmの灰黄色(5Y6/4)粘土が、粒徑1.0~2.0cmの灰色(N4/Y)粘質粘土がまだらに含む、焼土片若干含む、粒徑0.1cmの砂粒若干含む

- 50: 灰色(7.5Y5/1)粘質シルト 粒徑0.5~2.0cmの灰色(N4/Y)粘質粘土がまだらに含む、粘土片黄色(5Y6/4)が焼土片がまだらに少量含む、粒徑0.5~3.0cmの小礫若干含む、炭化物少量含む  
 51: 灰色(7.5Y4/1)粘質シルト 炭化物多量に含む、焼土片若干含む、粒徑0.5~1.0cmの粘土片黄色(5Y6/4)粘質粘土がまだらに含む、粒徑1.0~3.0cmの小礫若干含む  
 <49~51層; SD01上層埋土、幕末以降>  
 52: 灰色(10Y6/1)砂質シルト 粒徑0.5~1.0cmの粘土片黄色(5Y6/4)粘質粘土がまだらに含む、炭化物少量含む、焼土片若干含む、粒徑0.2~2.0cmの小礫を少量含む  
 53: 灰白色(7.5Y7/1)粘土 部分的に褐色(7.5YR4/4)化(酸化?)、52層混じる(52層中の粘土塊)<52・53層; 整地層1、幕末前後>  
 54: 灰色(10Y6/1)粘土 粒徑0.5~1.0cmの粘土片黄色(5Y6/4)粘質粘土がまだらに含む、粒徑0.1~0.5cmの灰色(10Y6/1)砂若干含む、焼土片若干含む、炭化物若干含む  
 55: 56: 粘土片黄色(5Y6/3)細砂 粒徑1.0~5.0cmの灰色(N4/Y)粘質粘土がまだらに少量含む  
 <54~56層; 整地層V、17世紀中葉>  
 57: 灰色(N4/Y)砂質シルト 炭化物若干含む、粒徑2.0~5.0cmの小礫若干含む、粒徑0.1~0.5cmの褐色(10YR4/6)砂質シルト(基盤層が酸化したものか?)がまだらに多量含む  
 58: 灰色(N4/Y)粘質シルト 炭化物若干含む、粒徑0.1~0.5cmの灰黄色(2.5Y6/2)粘質シルト(基盤層)がまだらに多量含む  
 59: 黒色(N2/Y)シルト (炭化物層)  
 <57~59層; SD01下層埋土、17世紀中葉>  
 60: 黄灰色(2.5Y6/1)粘土<SK14埋土、幕末前後>  
 61: 黄灰色(2.5Y4/1)シルト 62: 灰色(5Y4/1)シルト  
 <61~77層; SE04埋土、19世紀末>



- 1: 粘土片5-57に対応  
 2: 粘土片5-59に対応  
 3: 粘土片5-59に対応  
 <1~3層; SD01埋土>  
 4: 黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト 粒徑0.5~2.0cmのぶい黄色(2.5Y6/3)~黄褐色(10YR5/6)粘質シルトが粘質粘土がまだらに多量に含む、炭化物少量含む  
 5: 明黄褐色(2.5Y6/6)砂質シルト 粒徑0.2~0.5cmの6層 or 9層が粘土片を含む  
 6: 黄灰色(2.5Y5/1)シルト 粒徑0.2~0.5cmの5層 or 8層が粘土片多量に含む  
 7: 黄灰色(2.5Y6/1)シルト 粒徑0.2~0.5cmの5層 or 基盤層が粘土片を含む  
 8: 灰粘土片黄色(5Y6/2)シルト 粒徑0.5~1.0cmの9層が粘土片少量含む  
 9: 灰色(N4/Y)粘土 炭化物少量含む、粒徑1.0~2.0cmの13層(基盤層)が粘土片少量含む  
 10: 灰色(N5/Y)粘質シルト 粒徑0.5~2.0cmのぶい黄褐色(2.5Y6/3)~黄褐色(10YR5/6)粘質シルトが粘質粘土がまだらに多量に含む  
 11: 灰色(N5/Y)砂質シルト Feを含む  
 12: 灰色(5Y6/1)粘質シルト 粒徑0.05~0.2cmのFeを含む、粒徑0.5~1.0cmの粘土片黄色(5Y6/4)粘質シルトを含む  
 <4~12層; 整地層D埋土、当初は土坑と考えていたが、整地層へ変更>  
 13: 黄灰色(2.5Y6/1)にぶい黄色(2.5Y6/3)砂<基盤層>

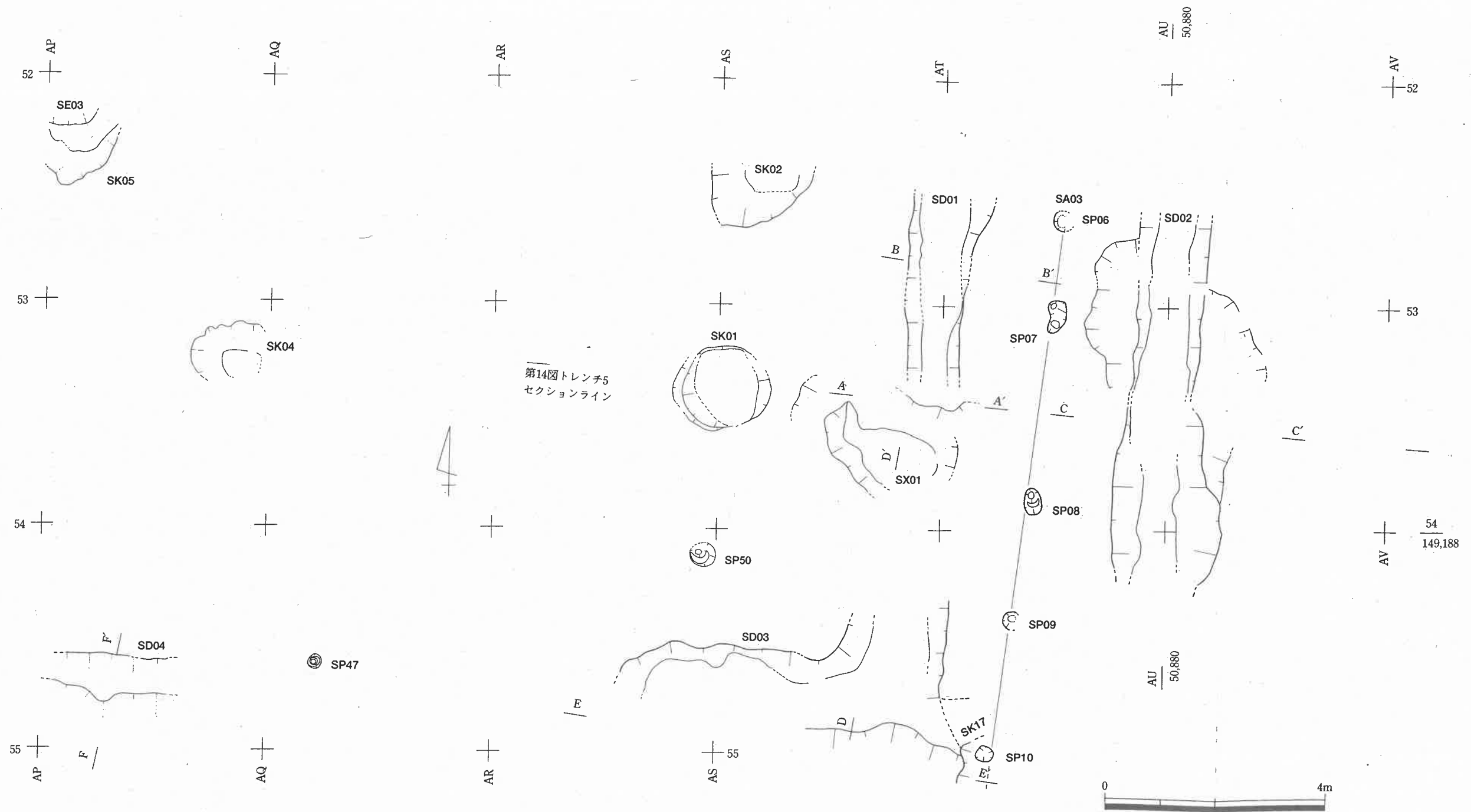
- 1: 粘土片5-57に対応  
 2: 粘土片5-59に対応  
 3: 粘土片5-59に対応  
 <1~3層; SD01埋土>  
 4: 黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト 粒徑0.5~2.0cmのぶい黄色(2.5Y6/3)~黄褐色(10YR5/6)粘質シルトが粘質粘土がまだらに多量に含む、炭化物少量含む  
 5: 明黄褐色(2.5Y6/6)砂質シルト 粒徑0.2~0.5cmの6層 or 9層が粘土片を含む  
 6: 黄灰色(2.5Y5/1)シルト 粒徑0.2~0.5cmの5層 or 8層が粘土片多量に含む  
 7: 黄灰色(2.5Y6/1)シルト 粒徑0.2~0.5cmの5層 or 基盤層が粘土片を含む  
 8: 灰粘土片黄色(5Y6/2)シルト 粒徑0.5~1.0cmの9層が粘土片少量含む  
 9: 灰色(N4/Y)粘土 炭化物少量含む、粒徑1.0~2.0cmの13層(基盤層)が粘土片少量含む  
 10: 灰色(N5/Y)粘質シルト 粒徑0.5~2.0cmのぶい黄褐色(2.5Y6/3)~黄褐色(10YR5/6)粘質シルトが粘質粘土がまだらに多量に含む  
 11: 灰色(N5/Y)砂質シルト Feを含む  
 12: 灰色(5Y6/1)粘質シルト 粒徑0.05~0.2cmのFeを含む、粒徑0.5~1.0cmの粘土片黄色(5Y6/4)粘質シルトを含む  
 <4~12層; 整地層D埋土、当初は土坑と考えていたが、整地層へ変更>  
 13: 黄灰色(2.5Y6/1)にぶい黄色(2.5Y6/3)砂<基盤層>



- 3: 灰色(N5/Y)粘質粘土  
 4: 灰色(N4/Y)粘土質シルト  
 <3・4層; 基本層序第7層=整地層0、近代以降>  
 14: 灰色(N4/Y)粘質粘土  
 15: 基本的に14層、ただし、炭化物、砂粒を殆ど含まない  
 16: 基本的に14層、ただし、砂粒を殆ど含まず、炭化物が多い  
 17: 灰色(N4/Y)粘質粘土  
 18: 基本的に17層、粘土片黄色(5Y5/4)粘質シルトをあまり含まない  
 19: 14層、ただし、炭化物を殆ど含まない  
 20: 基本的に14層、ただし、粘土片の粒徑0.5~3.0cm、炭化物をあまり含まない  
 <14~20層; 基本層序第2層=整地層1、幕末前後>  
 38: 灰色(7.5Y5/1)粘質シルト  
 39: 黄褐色(2.5Y5/4)粘質シルト  
 <38・39層; 基盤層・基本層序第7層>  
 64: 褐灰色(10YR5/1)粘質シルト  
 65: 灰色(N4/Y)粘質シルト  
 66: 灰色(N4/Y)粘質シルト  
 67: 暗青灰色(5B4/1)粘質細砂  
 <64~67層; SE04埋土>  
 78: 灰色(N4/Y)粘質シルト 炭化物若干含む  
 79: 灰色(N4/Y)粘質シルト 粒徑0.5~1.0cmの粘土片黄色(5Y5/4)粘質シルトがまだらに、また下層との間に帯状に含む、粒徑0.1cmの砂粒多量に含む

- 80: 灰色(N4/Y)砂質シルト 粒徑0.1~0.5cmの粘土片黄色(5Y5/2)粘質シルトがまだらに多量に含む  
 81: 灰色(N4/Y)粘質シルト 粒徑0.1~0.5cmの粘土片黄色(5Y5/2)粘質シルトがまだらに多量に含む  
 82: 84層によく似ている、ただし、粒徑3.0~10.0cmの小礫を多量に含む  
 <78~82層; SD02上層埋土、19世紀第1四半期以降幕末まで>  
 83: 灰色(N4/Y)粘質粘土 粒徑0.1の砂粒を若干含む、粒徑0.5~1.0cmの明褐色(7.5YR5/6)砂が粘土片がまだらに若干含む、炭化物若干含む  
 84: 83層と同じ、ただし、焼土片を含まず、砂粒も殆ど含まない  
 85: 84層によく似ている、ただし、粒徑3.0~10.0cmの小礫を若干含む  
 86: 暗灰色(N3/Y)粘質粘土 粒徑0.5~1.0cmの88層が粘土片少量含む、炭化物中層  
 <83~86層; 基本層序第4層=整地層III、18世紀前半>  
 87: 褐灰色(10Y4/1)粘土片 粒徑0.1~0.5cmの砂粒多量に含む、木片を含む  
 88: 灰色(10Y4/1)粘質粘土 粒徑0.5cmの灰色(10Y6/1)粘質シルトがまだらに少量含む、黄褐色(2.5Y5/3)砂を帯状に含む、部分的に木片集中、茶色化  
 89: 灰色(N6/Y)粘土  
 <87~89層; SD02下層埋土、17世紀中葉>  
 92: 灰色(N4/Y)粘土片 粒徑0.5~1.0cmの粘土片黄色(7.5Y5/2)粘質シルトがまだらに含む、粒徑3.0~10.0cmの小礫を含む、瓦片少量含む、粒徑0.1~0.5cmの砂粒を含む  
 93: 灰色(N4/Y)粘土片 粒徑0.5~1.0cmの粘土片黄色(7.5Y5/2)粘質シルトがまだらに含む、瓦片多量に含む  
 <91~93層; SK15埋土、19世紀第1四半期以降幕末まで>  
 95: 灰色(10Y4/1)粘土片 粒徑0.1~0.5cmの粘土片黄色(7.5Y5/2)粘質シルト(基盤層)少量含む  
 105: 黄褐色(2.5Y7/4)粘質シルト 粒徑1.0~5.0cmの灰色(N4/Y)粘質シルトがまだらに含む  
 <105・108層; SX02下層埋土、17世紀中葉>

第26図 SD01・02断面図 (S=1/40)



第27図 SD01~04ほか平面図 (S=1/80)

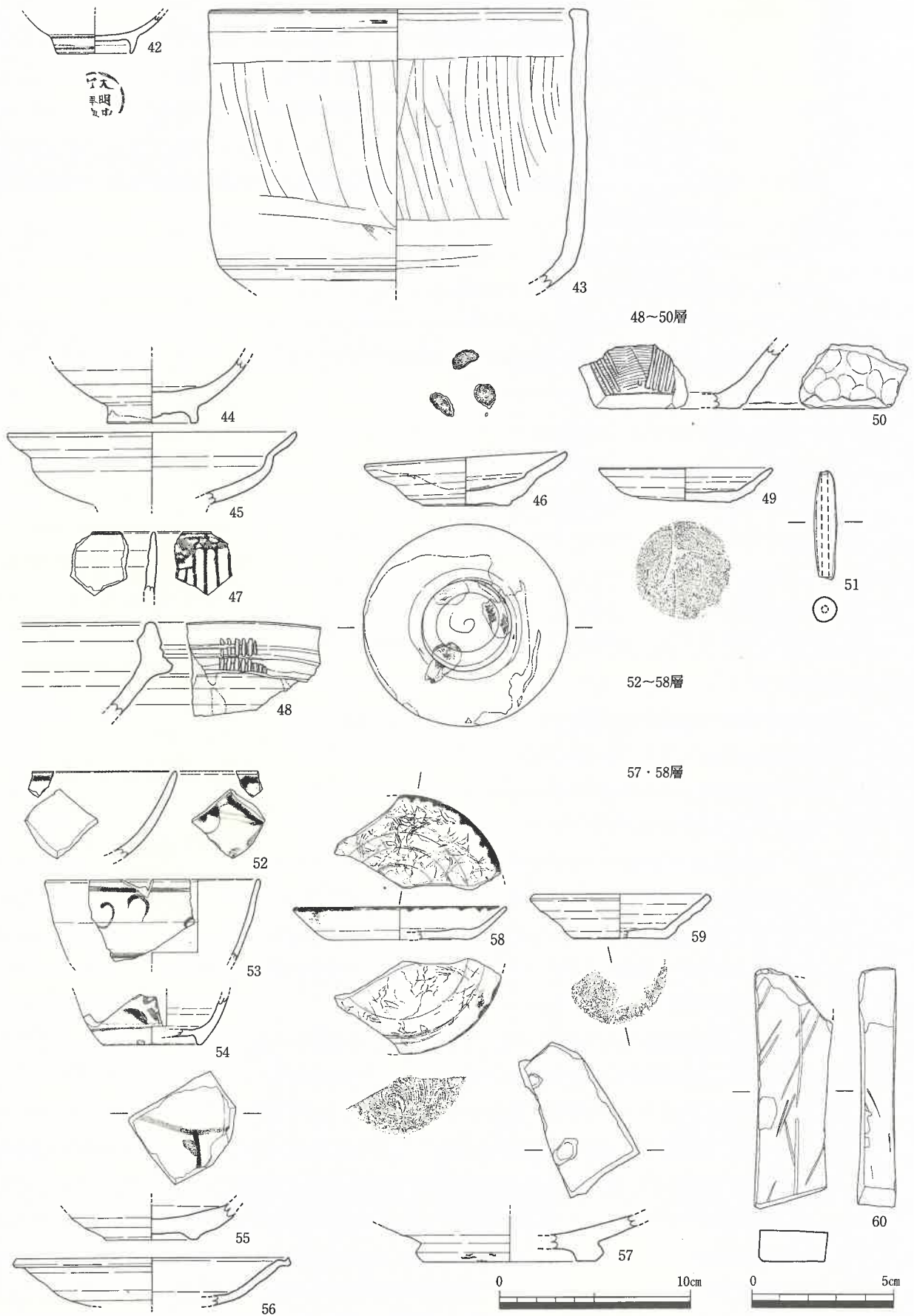
斜め下方へ肥厚する。口縁帯には2条凹線を認め、それに後出するスリメを有する。乗岡編年近世1c～2a期(乗岡2000・2001、以下備前摺鉢に関しては同文献に依拠する)。49は土師質土器小皿である。口縁部は直線的に開き、端部は先細る。底部は小さく突出し、底面には回転糸切り→板状圧痕を認める。高松城様相把握における様相1～3に認める形態となる。50は土師質土器摺鉢である。51は環状土錘である。以上、48～58層出土遺物は17世紀前葉の製作年代を示すものが主体を占める。

52～60は第26図57・58層出土遺物である。層位の理解ではS D01下層遺物となり、掘方内に堆積した埋土である。52・53は中国産(漳州窯系)青花碗である。54は肥前系磁器瓶である。碁笥底を呈し、外面には草花文を認める。55～57は肥前系陶器皿ないし鉢である。55は見込みに胎土目を認め、鉄絵による意匠不明の文様を描く絵唐津である。豊付の摩耗は著しい。56は溝縁皿である。57は瀬戸・美濃系陶器水甕のような形態を呈するが、胎土より肥前系陶器と判断した。見込みには胎土目を認める。58・59は土師質土器小皿である。58は口径11.4cmを測り、境が不明瞭な底部から口縁部は直線的に開く。端部には顕著な煤の付着を認め、さらに内外面全面にも氷裂状に付着する。灰白色の色調を呈し、胎土中に雲母粒・赤色粒の含有は確認できない。59は底径の小さい底部から口縁部は大きく開き、端部に面を有する。胎土中には赤色粒を含み、にぶい橙色の色調を呈する。前者は高松城様相把握の様相4、後者は様相1～3に認める。60は砥石である。以上、57・58層出土遺物は、16世紀末～17世紀中葉までの製作年代の土器・陶磁器を認める。最終埋没時期を示す遺物として、54・56・58が挙げられる。高松城様相把握を援用すると、様相3に対応する。よって、1640～50年代の埋没年代を付与することができる。溝内埋土であり、これらの一群はS D01の存続期間を示す内容となり、17世紀中葉まで機能していた可能性が高いことになる。さらに出土遺物には17世紀初頭前後に製作された陶磁器を含み、S D01が機能した期間は比較的長期間に及ぶと考えられるが、その上限は明らかではない。

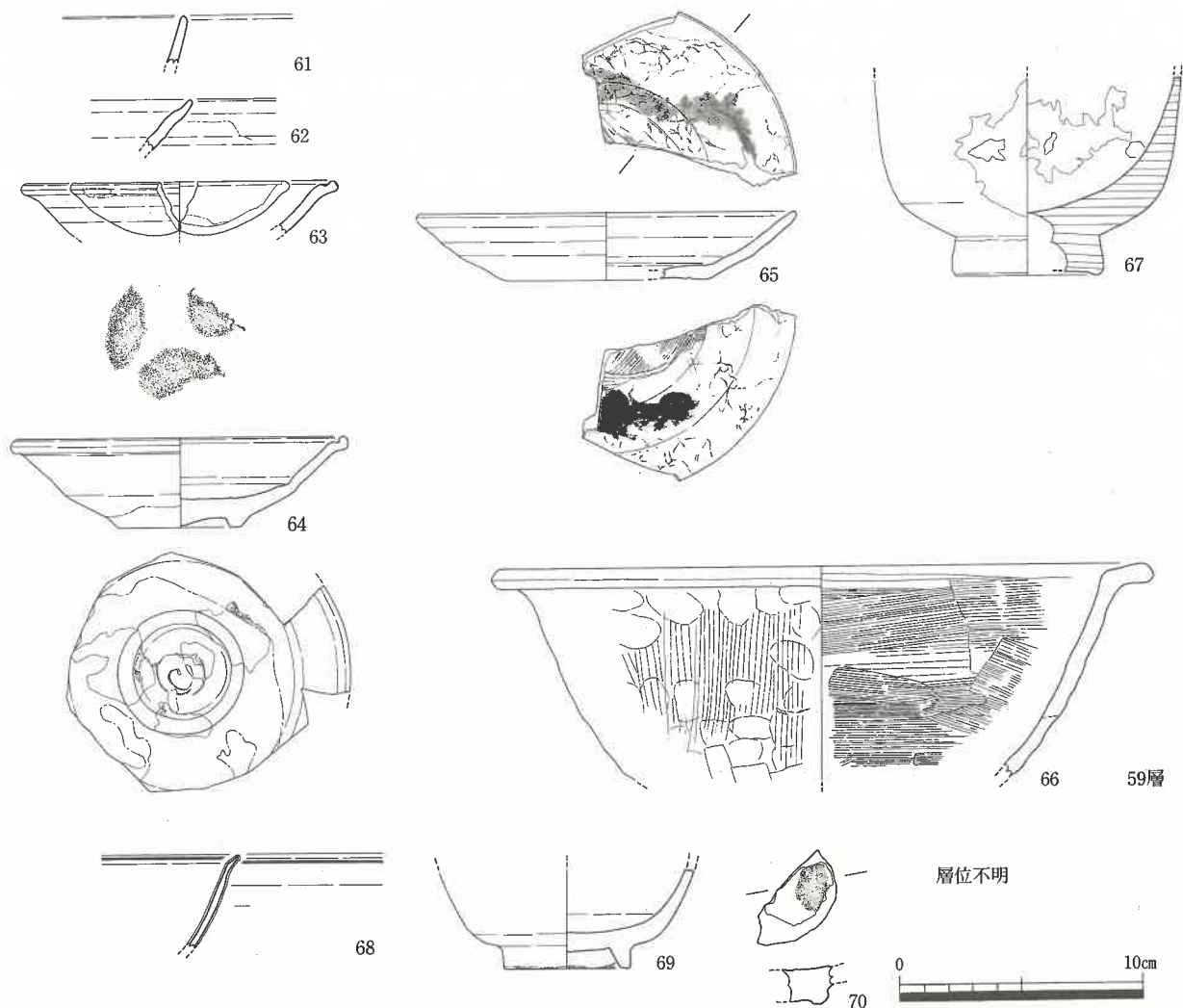
61～67は第26図59層出土遺物である。層位の理解では、S D01の最下層となる。61は軟質系施釉陶器碗である。灰白色の色調を呈する締まりを欠く素地に、灰白色の釉を施釉する。楽焼系の初期京焼と考えられる。県下における類例として、高松城跡(西の丸町地区)ⅢのⅧ区S Z c 01前面堆積土出土の1225・1266、S K c 40出土の1550(松本2003a)及び東ノ丸(香川県歴史博物館建設地点)の第4遺構面上層出土遺物の未報告資料から出土するに留まる(北山1999)。大多数が16世紀末～17世紀初頭に位置付けられるが、S K c 40の最終埋没年代は17世紀中葉となる。62～64は肥前系陶器皿である。63・64は溝縁皿となる。64は見込みに3箇所砂目、豊付に3箇所砂目痕跡を認める。65は土師質土器坏である。底部は小さく突出し、口縁部はわずかに内湾気味に外傾し、口径15.6cmを測る。底部には回転糸切り痕を認める。内外面全面に帯状ないし氷裂状に煤が付着する。高松城様相把握では、様相2～4に認める形態となる。66は亀山系の瓦質土器鍋である。口径は27cmを測り、ボール状の体部から、口縁部は大きく開く。外面には指押さえ→板ナデ調整、内面には入念な板ナデ調整を施す。内耳を有する形態であるが、遺存しない。67は漆器碗である。高台内の削り込みは極めて浅く、平高台となる。内面には赤漆、外面には黒漆を塗布する。以上、59層は63・64及び65の年代観により17世紀中葉に堆積したことになる。

68～70はS D01出土遺物であるが、出土層位が不明な遺物である。68は中国産(漳州窯系)青花碗である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部のみ小さく外反する。端部内外面には1条圈線を認める。69は肥前系磁器白磁碗である。高台は頑丈な作りとなり、高台内にも施釉を認める。1650年代以前に製作されたものであろう。70は肥前系陶器皿である。見込みには砂目を認め、豊付の摩耗は激しい。





第28図 SD01出土遺物1 (S=1/3、1/2)



第29図 SD01出土遺物2 (S=1/3)

以上、SD01の埋没状況を層位や出土遺物の年代観から想定すると、57～59層出土遺物には、16世紀末～17世紀中葉に位置付けられる土器・陶磁器を認め、SD01下層埋土の最終埋没時期は17世紀中葉となる。一方、その上限については明らかではないが、16世紀末ないし17世紀中葉まで上がる可能性も否定できない。なお、SD01中層とした整地層VやIIは想定している形成年代を示す出土遺物がなく、その同定に問題を残すが、遺物の遺存状況や取り上げ方法に要因を求めておきたい。

**SD02** AT・AUグリット境で検出した溝状遺構である。主軸方位はN5°Eを示し、前記したSD01に併行する。幕末～19世紀末前後に埋没したSK16・SE04と重複関係を有し、それに先行する。南北延長部は調査区外へ延びる。検出南北長6.5m、東西最大幅3mを測るが、北部と南部にはそれぞれ別遺構が重複する可能性が高く、元来の形状を留めない。北端部において幅1.4m前後を測る箇所を認め、旧状を窺うことができる。溝の断面形状はU字形を呈すると考えられるが、セクション図では溝底幅の広い形状を呈する。埋土は第26図下段に配したトレンチ5セクション図に基づき、層序について説明する。64～67は19世紀末前後に廃絶したSE04埋土となり、それを被覆する3・4層は近現代の整地層で

ある（基本層序第1層＝整地層0）。14～20は基本層序第2層＝整地層Ⅰとなり、幕末前後に位置付けられる。今回S D02出土遺物として抽出し報告した埋土は、78～89層となるが、出土遺物の年代観や層序理解から、83～86層は基本層序第4層＝整地層Ⅲとし（18世紀前半の形成時期を想定）、それを切り込む78～82層埋土が確認できる。こうした層序理解から便宜上、78～82層はS D02上層、83～86層はS D02中層埋土とした（整地層Ⅲ）。上層埋土は明瞭な掘方を有し、埋土は灰色シルトを基調とする。遺構と考えられるが、平面の検出状況は明らかではない。中層埋土は灰色シルト質粘土を主体とした埋土であるが、一部には焼土も確認できる（83層）。87～89層は下層埋土である。上位に褐灰色シルトが堆積し（87層）、下位には部分的に木片が集中する灰色シルト粘土を認める（88層）。また、一部ではあるが、底面に沿って灰色粘土が堆積する（89層）。なお、溝底の標高はトレンチ5ラインを境として0.35～0.45mの高低差を認め、トレンチ5以南が一段低くなっている。こうした溝底構造は、S D01とは逆の構造を呈し、注意しなければならない。最も層序の遺存状況が良好な箇所にとレンチ5を設定したが、この箇所が何らかの地割ラインとなる可能性を示唆するかもしれない。

71～106はS D02として抽出した出土遺物であるが、層位理解が困難な状況もあり、その上位に設置された整地層も合わせて提示している。第26図層位番号に基づき報告する。

71～81は第26図82・85層出土遺物である。層位の理解では82層がS D02上層、85層が中層（整地層Ⅲ）となる。71・72は肥前系磁器碗である。71は外面に梅樹文を描く。72は草花文をコンニャク印判により表現する。いずれも大橋編年Ⅳ期前半の所産である（1690～1740年代）。74は肥前系磁器蓋物である。口縁部は直線的に外傾し、高台は断面三角形となる。端部は無釉で、外面には紅葉文を描く。73・75～77は肥前系陶器碗である。73は京焼風陶器碗で、高台断面は四角形を呈する。刻印は未確認。75は呉器手碗である。高台横断面形状は逆台形を呈する。76は刷毛目碗である。口縁部中位に屈曲点を認め、口縁部は2段階に開く。内外面には白泥による直線的な刷毛目を認め、胎土はにぶい黄橙色の色調を呈する。77は高台脇以下及び高台内に鉄しょうを施す碗である。端部には鉄しょうによる口銹を認める。78は肥前系陶器刷毛目鉢である。内外面には直線的な刷毛目、畳付には溶着痕を認める。79は施釉陶器鉢である。胎土は灰白色の色調を呈し、瀬戸・美濃系陶器のような“ぼそぼそ”とした質感を呈する。内面及び外面上半には鉄釉を施釉し、見込みには4個の胎土目を認める。底部中央には焼成後の穿孔を認め、植木鉢への転用が窺える。80は瓦質土器羽釜である。口縁部は内湾し、端部を丸く収める。縦方向の外耳を有し、穿孔を認めるが、使用痕は確認できない。81は軒平瓦である。中心飾りは、逆ハート文となり、唐草は2転する。以上、82・85層出土遺物は、18世紀前半に属する一群（71～77）と18世紀後半に属する一群（78～80）が混在した状況となる。

82～84は第26図85・86層出土遺物である。層位の理解ではS D02中層（整地層Ⅲ）となる。82は中国産（漳州窯系）青花碗である。口縁部は高台脇からにぶく屈曲し、直線的に外傾する。外面には抽象的な文様、内面には縁文様、見込み周縁には一重圏線をそれぞれ認める。83・84は肥前系陶器皿である。83は見込みに砂目（3箇所）、幅の広い畳付には回転糸切り痕を認める。84は砂目溝縁皿である。釉色の異なる灰釉による掛け分けを認める。以上、85・86層出土遺物は、82が16世紀末～17世紀初頭、83・84が17世紀中葉に位置付けられる。

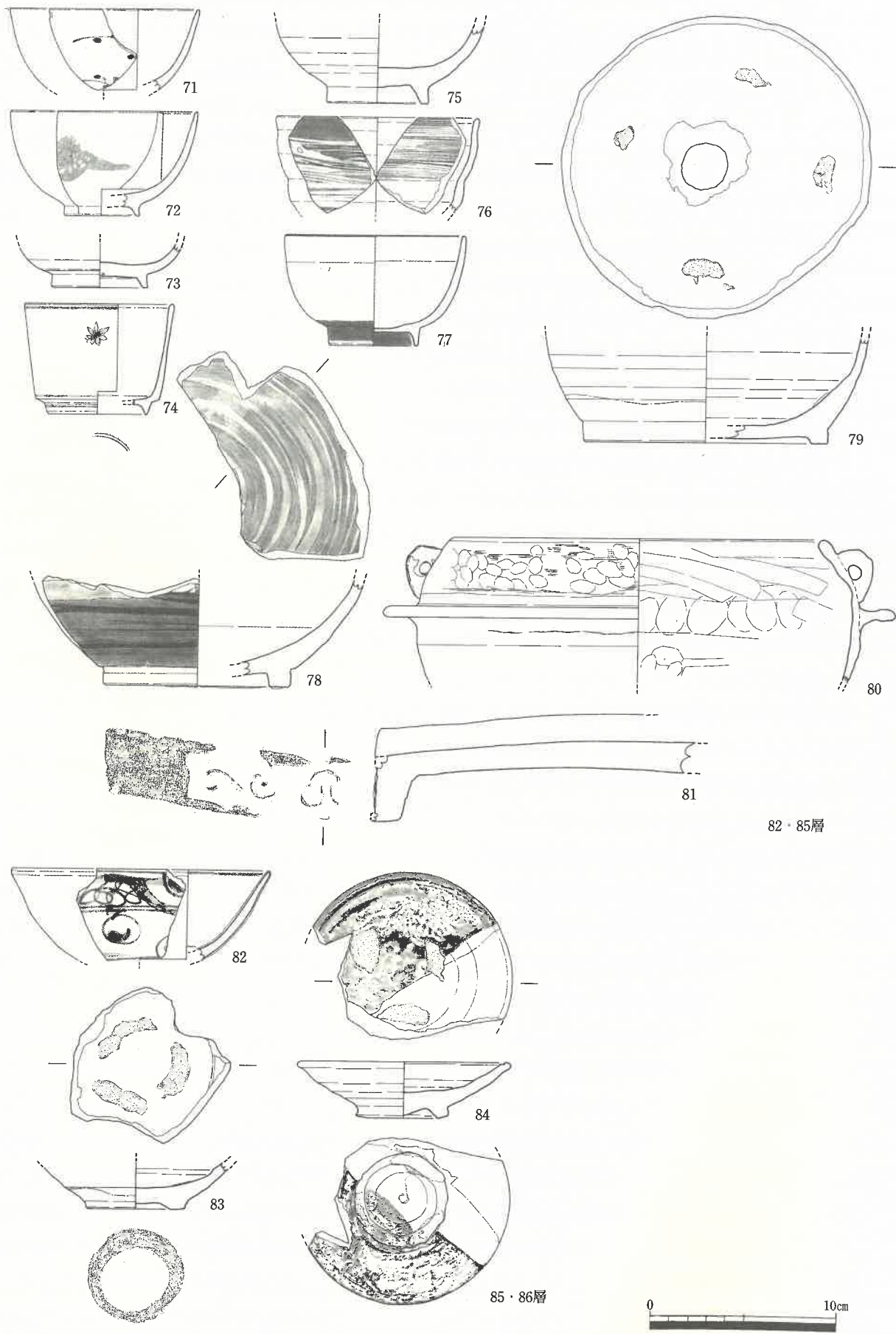
85・86は第26図87層出土遺物である。層位の理解ではS D02下層上位埋土となる。85は肥前系陶器甕とした。口縁部は「T」字状を呈し、断面形状は平行四辺形を呈する。口縁部上面には波状刷毛目、外端面には直線的な刷毛目を施す。褐色と緑灰色の釉を認め、二彩手となる。86は備前摺鉢である。口径



24cmを測り、端部内面にはかすかな段を有する。口縁帯には2条凹線、見込みには斜め方向のスリメを認める。乗岡編年近世1bないし1c期の所産となる。なお、内面のスリメは顕著に摩耗しており、その使用頻度の多寡が窺える。以上、87層出土遺物の年代観は、86は16世紀末～17世紀初頭に位置付けられるが、85は18世紀前半まで下るかもしれない。

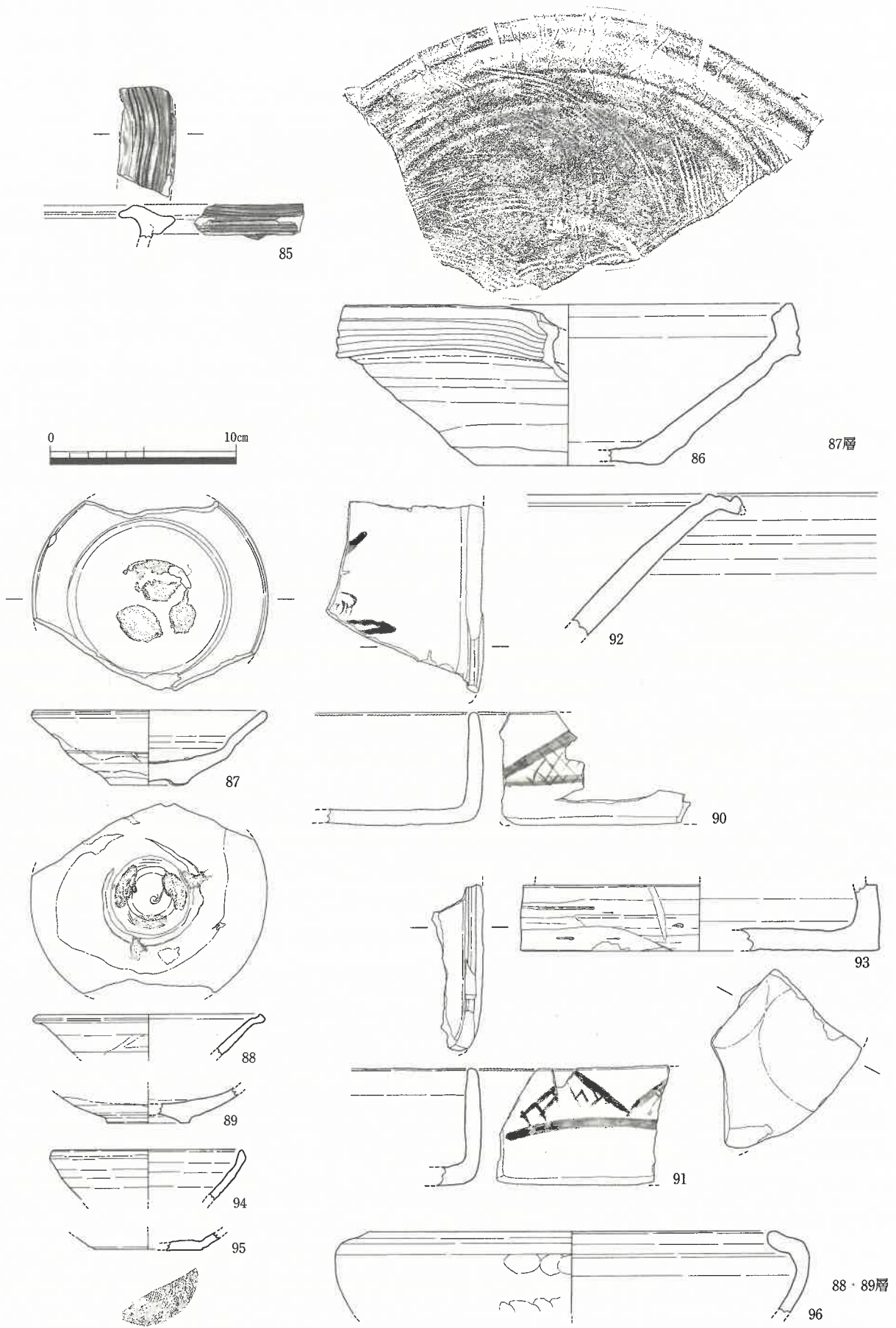
87～96は第26図88・89層出土遺物である。層位の理解ではS D02下層下位埋土となる。87～89は肥前系陶器皿である。87は砂目皿である。底部から短く直立した後、口縁部は直線的に大きく開く。見込み及び畳付には砂目を認める(3箇所)。88は溝縁皿である。89には砂目ないし胎土目は確認できない。90・91は瀬戸・美濃系陶器(志野)向付である。同一個体と考えられるが、接合関係はない。いずれも屈曲部への移行部分までは遺存するが、その全容は不明である。見込みには草花文?、外面には三叉文(山形文)を淡い赤褐色の色調を呈する銕絵で描く。底面に刳り込みは確認できない。92は施釉陶器鉢とした。口縁部は直線的に開き、端部を「く」字形に屈曲させ、端部を上方へ強く引き出す。胎土は灰色の色調を呈し、緻密な素地が選択される。残存部位全面に灰釉の施釉を認め、その色調はにぶい黄橙色となる。93は備前甕とした。残存部位上端部に段を有するが、窓ではなく、わずかに上部へ移行する状況が窺える。外面には入念なヘラケズリ調整を施し、底面には窯道具痕跡を認める。94は備前系陶器坏である。口縁部を斜め上方へ引き出し、外端面を有する。内外面には回転ナデ調整を認める。外端面にのみ黄ゴマの降灰を認め、重ね積みによる焼成が看取できる。95は土師質土器小皿である。底面には回転糸切り痕を認める。灰白色の色調を呈し、底部がわずかに突出する形態となる。96はスリメは確認できないが、土師質土器摺鉢とした。体部は内湾気味に立ち上がり、端部手前で内側に強く屈曲し、端部を丸く収める。外面口体部境には突出部はない。以上、88・89層出土遺物は、16世紀末～17世紀初頭に位置付けられる瀬戸・美濃系陶器志野向付(90・91)、備前系陶器坏(94)と17世紀中葉前後に位置付けられる肥前系陶器砂目皿(87)・溝縁皿(88)が混在した状況となる。在地産土師質土器では、小皿が高松城様相把握の様相3～4、摺鉢が様相1～3に確認できる。よって、最終的な埋没年代は17世紀中葉、西の丸町地区の調査成果を参考にすると、1640～50年代という実年代を付与することができる。

97～106はS D02出土遺物であるが、帰属する層位が不明な出土遺物である。97～99は肥前系磁器である。97は小杯である。口縁部は緩やかに外反し、端部は先細る。外面には縦方向の鐫を数条認める。遺存しないが、鐫間に「寿」文を染め付けるもので、1630～40年代の所産となる。98は青磁碗である。底部及び高台は肉厚な作りとなり、高台内にも施釉を認める。99は皿である。口縁部は大きく開き、上端部を水平に収め、横方向へ強く引き出す。内外面ともに透明釉と鉄釉による掛け分けを認める。1640年代頃の所産か。100～102は肥前系陶器である。100は刷毛目碗である。内外面ともに直線的な刷毛目を認め、にぶい黄橙色の胎土が選択される。18世紀前半。101は皿である。口縁部は端部手前で鈍く屈曲し、端部を上方へかすかに摘み上げる。102は刷毛目鉢である。口縁部は端部手前で短く直立し、端部は再度直線的に開く。内面には直線的な刷毛目を認め、内外面に黒褐色の灰釉を施釉する。胎土は灰赤色を呈する。103は瀬戸・美濃系陶器瓶とした。外面にはカキメ→ナデ調整を行い、対方向に幅広の強いケズリ(鐫)を施し、器形にアクセントを加える。外面には灰釉を施釉するが、それに後出する鉄絵による直線文を認める。104・105は土師質土器小皿である。104は短く開く口縁端部に外端面を有し、見込み周縁には強いナデ調整による凹みを認める。胎土中には赤色粒が含有し、にぶい橙色の色調を呈する。105は底部がわずかに突出し、見込み周縁に凹みを認める形態となる。底面には回転糸切り痕を認める。胎土中に赤色粒の含有はなく、灰白色の色調を呈する。前者は高松城様相把握の様相3～4、

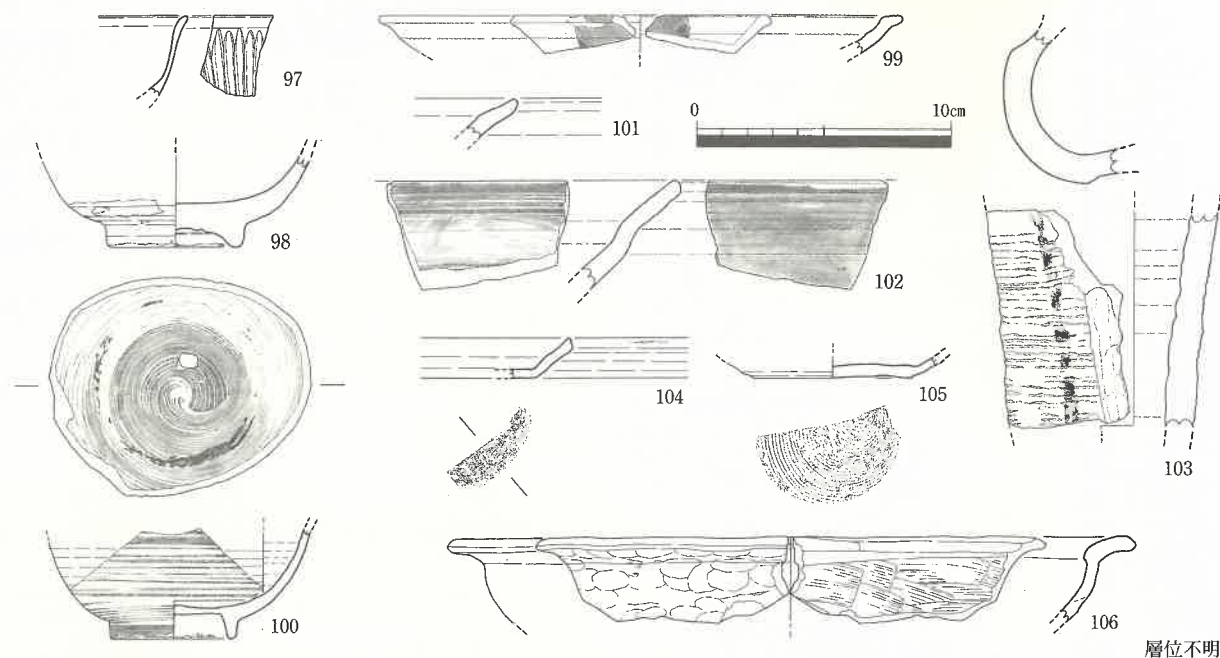


第30図 SD02出土遺物1 (S=1/3)





第31图 SD02出土遺物2 (S=1/3)



第32図 SD02出土遺物3 (S=1/3)

後者は様相1～4に認める形態である。106は瓦質焙烙とした。

以上、出土層位が不明瞭な一群を示した。98・100・106は第26図14～20、78～85層出土遺物となり、層位の理解では整地層ⅠとSD02上層、整地層Ⅲとなる。出土遺物の年代観は98が17世紀中葉前後、100が18世紀前半の所産となろう。106は年代的な位置付けが困難であるが、敢えて年代を示すならば18世紀代となる。

以下、上記した各層位出土遺物の年代観を考慮し、再度SD02で設定した層位に年代を付与したい。整地層Ⅲはおおむね18世紀前半の年代が付与でき、82層(SD02上層)と85層(整地層Ⅲ)が混在した層位からの出土遺物には18世紀前半に属する一群と18世紀後半まで下る時期の一群があり、前者を82層出土遺物に同定することができ、後者を重複関係から整地層Ⅲに後出するSD02上層埋土と判断することができる。しかし、層序理解では後述する整地層Ⅱを切り込む状況が確認でき、整地層Ⅱ形成以降整地層Ⅰ形成までの年代観となる。よって、(18世紀第4四半期～19世紀第1四半期)～(幕末前後)の所産と理解できよう。また、下層出土遺物は16世紀末～17世紀中葉(1640～50年代)の所産となり、最終埋没時期は17世紀中葉となる。但し、その上限は一定量の組成を占める16世紀末～17世紀初頭まで上がる可能性も否定できない。

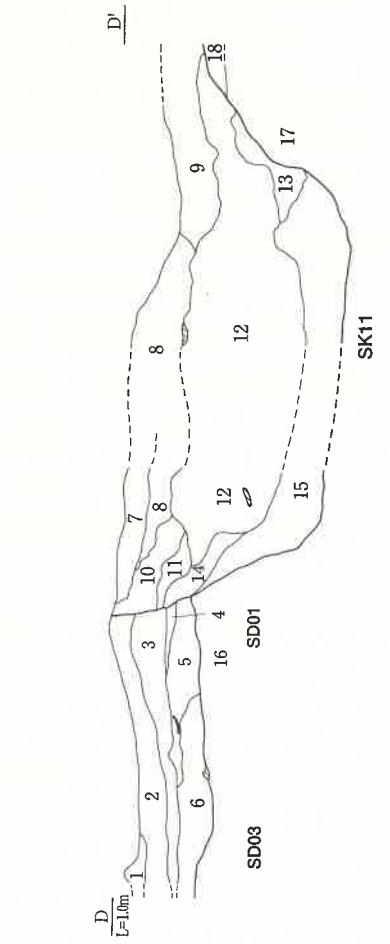
**SD03** AR・AS54グリットで検出した溝状遺構である。調査段階には土坑として捉えられているが、SD04との連続性を重視し、溝状遺構と判断した。主軸方位は明らかではないが、おおむね東西主軸となる。北側の掘方肩部は確認したが、南側は調査区外となり、建物基礎により失われる。東西両端については極めて不明瞭で屋敷割を復元する際にも多くの問題を提起する。西端部はわずかに円形を指向する傾向も認めるが、攪乱により明らかではない。東端部は攪乱及びSK17(時期不詳)により消失するが、SK17に重複する位置で検出したSP10の検出面は、基盤層となり、東へは連続しない可能性が高い(溝状遺構としたが、不明遺構と呼称した方が妥当であろう)。東西検出長5.8m前後、南北検出長2.5m前後を測る。断面形状を第33図上段に示したが、ここでSD03とした箇所はSD02との連結部分に該

当し、両者が埋土を共有する状況を看取できる。1～6層がS D03埋土となり（S D02と埋土共有）、下層に灰色シルト（4～6層）、中層に基盤層ブロックを包含する灰色シルト（3層）、上層に灰オリーブ色シルト（2層）がそれぞれ堆積し、上層には焼土・基盤層ブロックを認める。トレンチ5との関係では下層埋土がトレンチ5の63・64層に対応する可能性が高い。また、S D03の断面形状は、第33図上段セクションで示した南端部までは緩やかに傾斜するが、そこから再度南へ2段掘方状に落ち込む状況を確認した。詳細については調査段階に当該箇所が崩落したため明らかではないが、後述するS D04に呼応した傾斜角度で落ち込むものと理解できる。第33図中段セクションはS D03の東西方向の土層堆積状況となる。上段セクションとの関係では、2層が上段6層、1層が上段2・3層に対応する。5層は基盤層となり、前記した落ち込みはこのセクションでは確認できない。

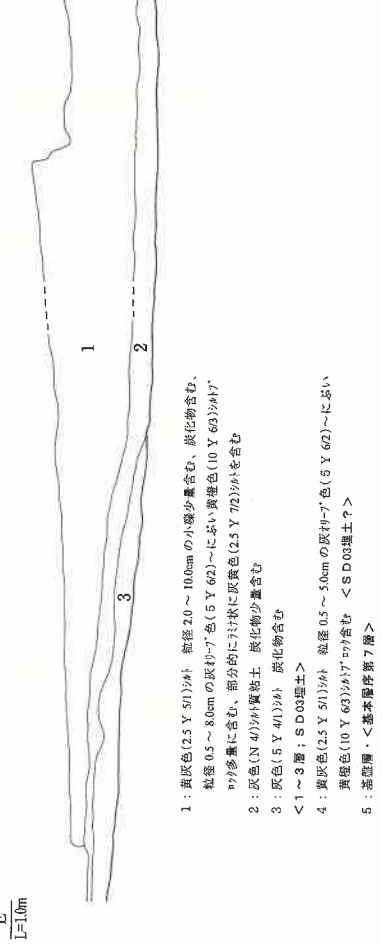
107～141はS D03出土遺物である。107～110は中国産青花である。107は碗である。口縁部はわずかに外反気味に外傾し、端部は先細る。外面には花奔文を認める。景德鎮窯系。108・109は漳州窯系青花皿である。109は口縁部が強く外反し、端部でさらに大きく開く。かろうじて高台への移行箇所を認める。110は漳州窯系青花小杯である。口径6 cmを測り、口縁部は大きく外反する。111～115は肥前系磁器碗ないし碗蓋である。111は枡形の形態を呈し、高台内は無釉となる。外面下端部には一重圏線を認める。1640～50年代。112は初期伊万里の範疇に収まる碗である。全体に器壁は厚く、外面には楼閣山水文を描く。113は天目形の碗である。外面及び口縁部内面には鉄釉、体部内面には透明釉を施釉する。底部は遺存しないが、高台内無釉となろう。1630～50年代。114は碗蓋である。口縁部は強く内湾し、撥高台碗の蓋の可能性が高い。115は小広東碗である。外面には梵字繋ぎ文を描く。1770～1810年代。116～125は肥前系陶器である。116は碗である。高台内の削り込みは浅く、内面及び外面上半に認める灰釉の釉調は極めて濃い色調となる。117～123は皿である。117は見込みに草花文を描き（鉄絵）、内面底体部境に鏡状の段を認める。118は口縁部を内湾気味に収め、端部に濃い釉調の灰釉による口鏽を施す。遺存部位に目跡は確認できない。119はなぶり口縁となる。120は口縁部中位に段を認め、端部をわずかに上方へ摘み上げる。見込みには砂目を認める。121・122は砂目皿である。121は見込み及び畳付に砂目を3箇所認める。123も口縁部は遺存しないが、器形より溝縁皿である可能性が高く、見込みには砂目、畳付には砂目痕跡を認める。124・125は鉢である。124は底部から直線的に開き、端部手前で「く」字形に屈曲する形態である。見込みには鉄絵による草花文を描く。さらに見込みには胎土目の可能性が高い目跡を認める。125は見込みに砂目を認める。126～128は瀬戸・美濃系陶器である。126は天目碗である。口縁部は短く直立した後、小さく外反する。外面下半の露胎部分には鏽絵の塗布を認め、藤澤編年大窯3期の所産となる（藤澤1987、以下瀬戸・美濃系陶器大窯製品に関しては同文献に依拠する）。127は志野向付である。接合関係はないが、図上での復元を行った。外面には鉄絵による絵付けを認め、側面がなす隅角には1条の凹線を施す。底部は碁笥底となる（円形）。128は内禿皿である。藤澤編年3期。129は備前摺鉢である。口縁帯がわずかに肥厚し、内面に明瞭な段を有する。内面には斜め方向に走るスリメを認め、遺存箇所全面に黄ゴマが降灰する。乗岡編年近世1c期の所産となろう。130は堺・明石系摺鉢である。口縁部下端がわずかに肥厚し、内面には段を認める。白神編年Ⅱ型式1段階の所産となる（白神1992、以下堺・明石系摺鉢の年代観に関しては同文献に依拠する）。131は施釉陶器香炉である。灰白色の緻密な胎土が選択され、外面及び口縁部内面には黄褐色の色調を呈する釉を施釉する。外面には型成形により、格子内に円窓を創出し、そのなかに草花文を陽刻表現する。産地・時期不詳。132～134は土師質土器小皿ないし坏である。132は底径に比して口縁部が大きく、底部から



- 1: 黒褐色(10YR5/1)外質砂 炭化物若干含む、花崗土若干含む<基盤層土>
- 2: 灰赤(7.5 Y 6/2)外 粒徑0.5~2.0mmの灰色(5 Y 5/1)外に多量に含む、炭化物少量含む、粒徑0.2~0.5mmの黄褐色(10YR5/6)外に焼土片?若干含む
- 3: 灰色(5 Y 4/1)外 粒徑0.5~2.0mmの赤(7.5 Y 6/4)外に多量に含む、炭化物多量含む、0.2~0.5mmの黄褐色(10YR5/6)外に焼土片?若干含む
- 4: 灰色(10Y4/1)外 粒徑0.5~3.0mmの赤(7.5 Y 6/4)外に多量に含む、炭化物若干含む
- 5: 灰色(7.5 Y 4/1)外 粒徑0.5~3.0mmの赤(7.5 Y 6/4)外に多量に含む、炭化物若干含む
- 6: 灰色(10Y4/1)外 粒徑0.5~3.0mmの赤(7.5 Y 6/4)外に多量に含む、炭化物若干含む
- 7: 灰色(10Y4/1)外
- 8: 灰色(5 Y 5/1)外
- 9: 灰色(5 Y 5/1)外
- 10: 灰色(7.5 Y 5/1)外
- 11: 灰色(5 Y 5/1)外
- 12: 灰色(5 Y 5/1)外
- 13: 灰色(10Y4/1)外
- 14: 灰色(7.5 Y 5/1)外
- 15: 黄褐色(2.5 Y 5/1)砂質外
- 16: 灰赤(7.5 Y 6/2)外質砂 一部まだらに灰色(N4/1)外
- 17: 灰色(N4/1)外質粘土 部分的に細砂含む
- 18: S D01粗土下層

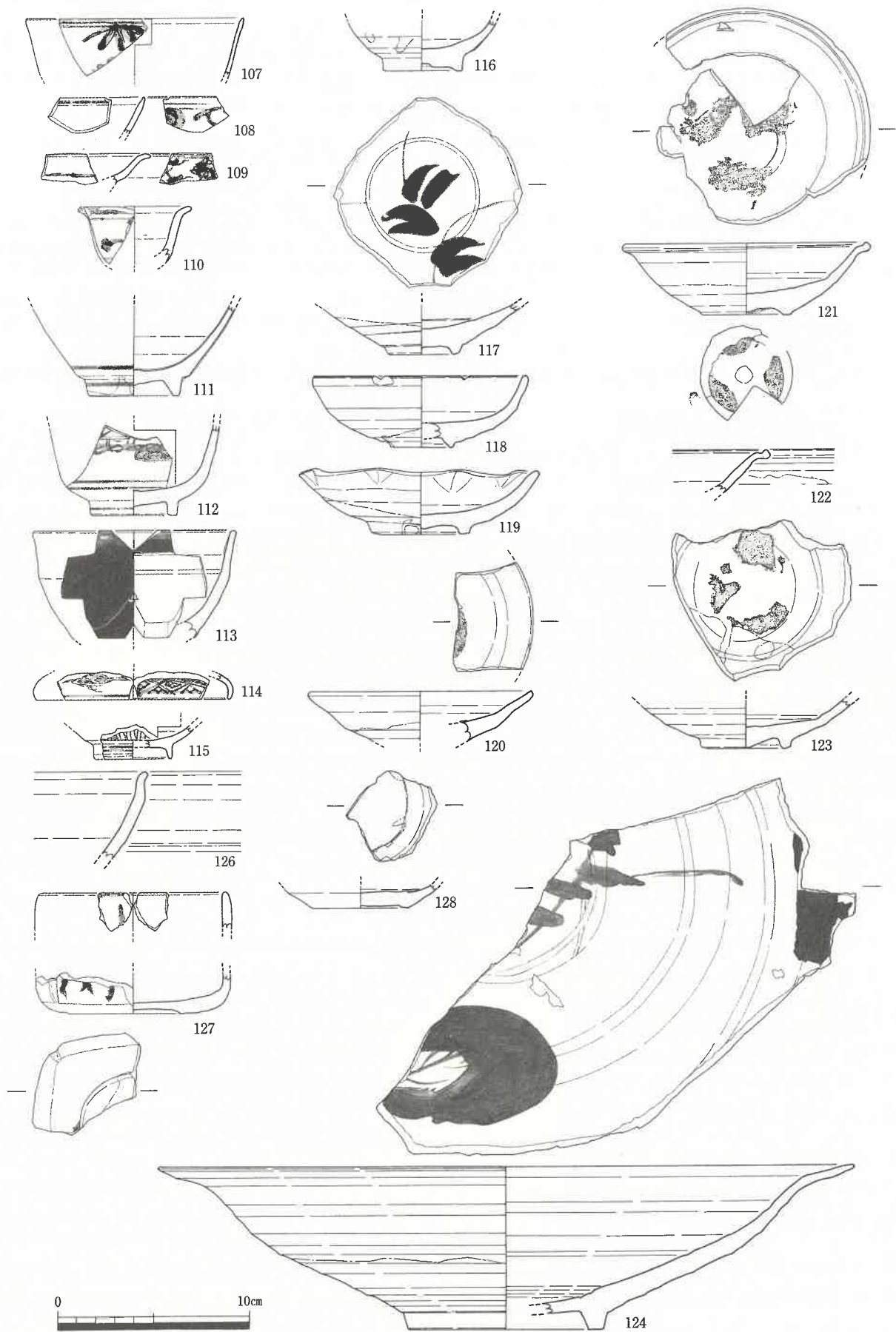


- 1: 黄灰色(2.5 Y 5/1)外 粒徑2.0~10.0mmの小礫少量含む、炭化物含む、粒徑0.5~8.0mmの灰赤(7.5 Y 6/2)~に多い黄褐色(10 Y 6/3)外に少量を含む、部分的に針状に灰黄色(2.5 Y 7/2)外を含む
- 2: 灰色(N 4/1)外質粘土 炭化物少量含む
- 3: 灰色(5 Y 4/1)外 炭化物含む
- 4: 黄灰色(2.5 Y 5/1)外 粒徑0.5~3.0mmの灰赤(7.5 Y 6/2)~に多い黄褐色(10 Y 6/3)外に少量含む <SD03粗土下層>
- 5: 基盤層・<基本層序第7層>
- 6: 暗灰色(N 3(YR))外質粘土
- 7: 黄褐色(2.5 Y 6/2)外に焼土片?若干含む
- 8: 黄褐色(2.5 Y 6/2)外
- 9: 黄褐色(2.5 Y 6/2)外
- 10: 黄褐色(2.5 Y 6/2)外
- 11: 黄褐色(2.5 Y 6/2)外
- 12: 黄褐色(2.5 Y 6/2)外
- 13: 黄褐色(2.5 Y 6/2)外
- 14: 黄褐色(2.5 Y 6/2)外
- 15: 黄褐色(2.5 Y 6/2)外
- 16: 黄褐色(2.5 Y 6/2)外
- 17: 黄褐色(2.5 Y 6/2)外
- 18: 黄褐色(2.5 Y 6/2)外

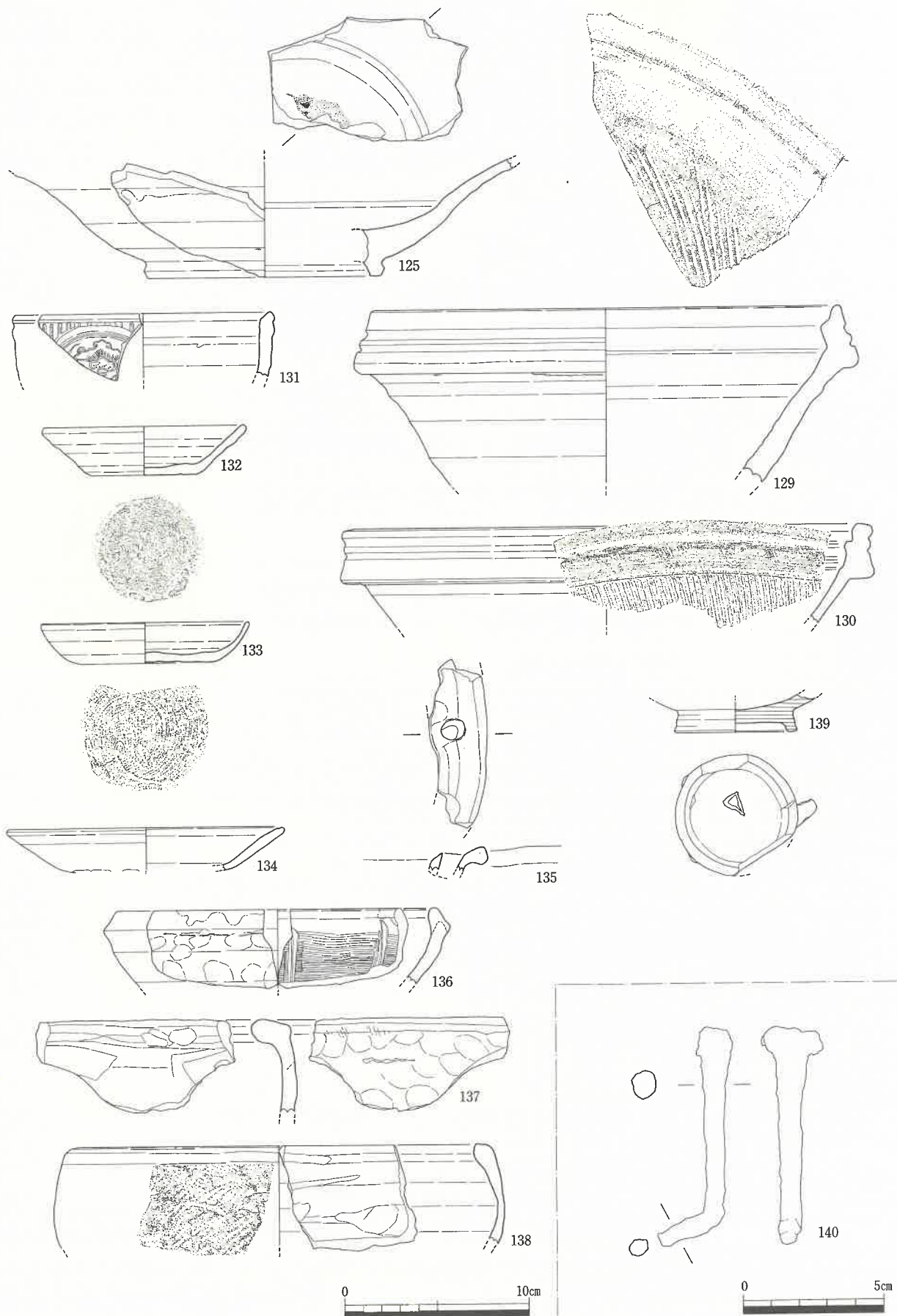


第33図 SD03・04断面図 (S=1/40)

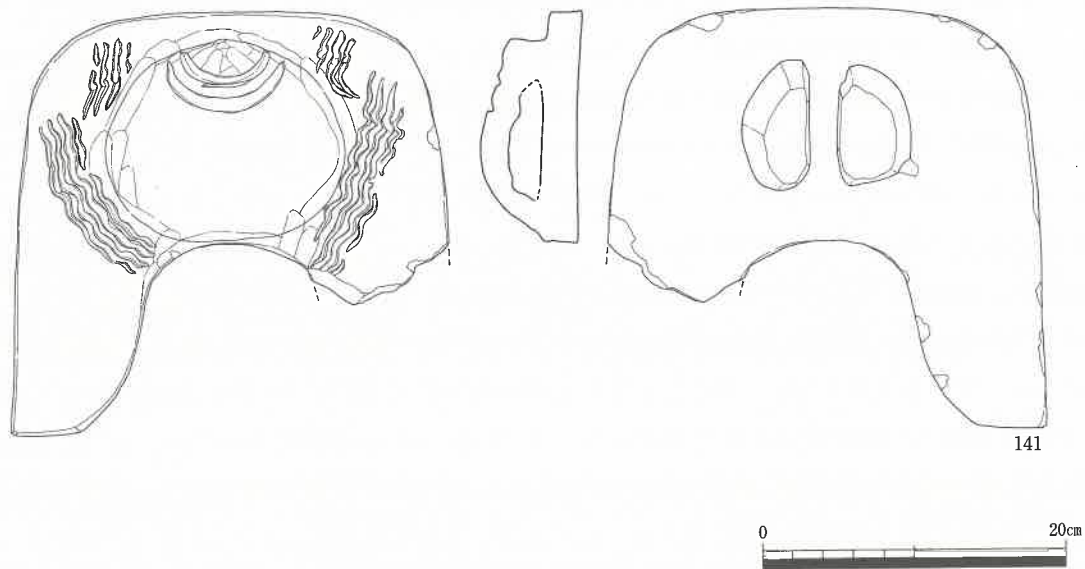




第34図 SD03出土遺物1 (S=1/3)



第35図 SD03出土遺物2 (S=1/3、1/2)



第36図 SD03出土遺物3 (S=1/5)

直線的に強く開く形態となる。胎土中には石英・長石、雲母、赤色粒を含有する。133は底部から内湾気味に短く立ち上がる口縁部形態を呈する。灰白色の色調となり、胎土中に雲母・赤色粒は含まない。いずれも底面には回転糸切り痕を認める。134はいわゆる京都系土師器である。口縁部中位が最も肥厚し、端部内面にはかすかな段を認め、「て」字状口縁となる。底部は遺存しないが、残存部位最下部には連続する指押さえの痕跡を認める。胎土は精良で、前記した在地産土師質土器とは明瞭に識別できる。135は土師質土器内耳付き鍋である。比較的頑丈な内耳には、径1 cm前後の穿孔を認める。136は土師質土器摺鉢である。口縁部は体部から「く」字形に屈曲し、端部を丸く収める。その製作方法は体部の最上位に粘土帯を貼付し、内側に屈曲させている。内面には入念な板ナデ調整→スリメを施し、外面には顕著な指押さえを認める。137は土師質土器外耳付き鍋である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は内側へ強く屈曲する。136を参考にすると、粘土帯を貼付した可能性が高い。端部と口縁部境外面には、痕跡的な鏝部を認める。138は関西系焙烙である。口縁部は緩やかに内湾し、端部は肥大する。外面には右上がりの平行叩きを認め、二次焼成により赤化し、煤も付着する。難波分類のA類に該当し、AZ87-5次調査S K205出土資料 (Fig170-2) に口縁部形状が酷似する (難波1992)。139は漆器碗である。明瞭な高台をなし、高台内には「△」の彫り込みを認める。内面には赤漆、外面には黒漆を塗布する。140は鉄製釘である。釘頭は円形に肥厚し、先端部は「く」字形に屈曲する。141は鬼瓦である。表面には中空の宝珠文を貼付し、その周囲には火焰を表現した可能性が高い櫛描波状文を認める。裏面は中空の宝珠文に縦方向の粘土帯を貼付し、吊り手とする。

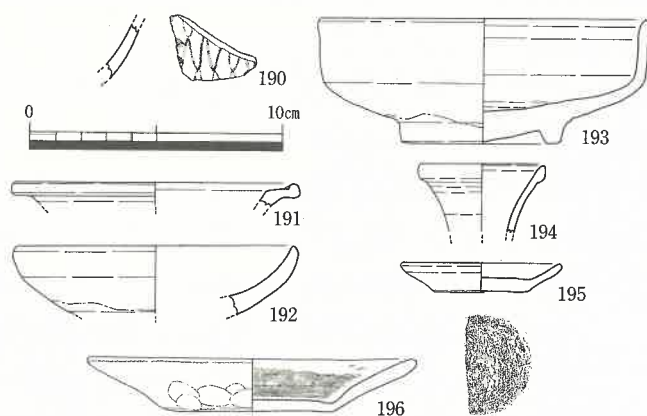
以上、SD03出土遺物は16世紀末～17世紀中葉に属する一群と18世紀第4四半期～19世紀第1四半期の一群に大別できる。さらに前者は16世紀末～17世紀初頭の一群と17世紀中葉の一群に細別できる。16世紀末～17世紀初頭の一群として、中国産磁器 (107～110)、肥前系陶器碗 (116)、絵唐津皿 (117)、なぶり口縁皿 (119)、胎土目+絵唐津の鉢 (124)、瀬戸・美濃系陶器 (126～128)、備前摺鉢 (129) があり、17世紀中葉の一群として肥前系磁器では初期伊万里 (112) ないし高台内無釉碗 (111・113、1640～50年代)、肥前系陶器では溝縁皿 (121～123)、砂目皿 (120)、砂目鉢 (125)、関西系焙烙 (138) が挙げられる。18世紀第4四半期～19世紀第1四半期の一群は、肥前系磁器小広東碗 (115)、撥高台碗



蓋(114)、堺・明石系摺鉢(130)があり、産地不明の軟質施釉陶器(131)も当該期に属する可能性が高い。こうした土器・陶磁器組成は2つの問題点を提起する。第1として、16世紀末～17世紀中葉に位置付けられる一群の解釈である。製作年代の上では細分が可能であるが、17世紀中葉段階における一括廃棄という解釈と16世紀末～17世紀中葉にかけて緩やかに埋没が進行したという解釈が成り立つ。前者であれば、製作年代が古い一群は伝世ないし長期使用後の廃棄となる。西の丸町地区では、17世紀中葉は様相3に該当する。輸入磁器、初期伊万里、絵唐津、瀬戸・美濃系陶器(大窯製品)の出土は認めるが、その出土量は極めて低く、SD03の陶磁器構成とは異なる。ここでは、区画施設としての溝状遺構という遺構の性格上、後者の解釈を想定しておきたい。一方、18世紀第4四半期～19世紀第1四半期の一群については、混入遺物という解釈と遺構の最終埋没時期を示すという解釈が成立する。なお、SD03とSD04は同一の溝状遺構の可能性が高く、SD04出土の肥前系磁器碗が最も新しい様相を示し(190)、1650年代後半～60年代に位置付けられよう。

**SD04** AP54で検出した溝状遺構である。調査時には土坑とされていたが、SD03との連続性を考慮して溝状遺構とした。調査区南西隅で検出しており、全容は明らかではない。主軸方位はおおむね東西方向を示し、その掘方はSD03と同一線上に位置する。東西検出長約2m、南北検出長1mを測る。第33図下段にSD04セクション図を提示した。緩やかに傾斜し、検出面からの深度は0.5mを測る。埋土の大半は攪乱により失われるが、確認した限りでは、3層に大別できる。掘方に沿って確認した灰黄色シルトないし暗灰色シルト質粘土を下層とし(5・6層)、それを切り込む2～4層を中層、前後関係は明らかではないが、最上位に堆積した2層を上層とした。上層は第33図上段の5・6層ないしトレンチ5の57・58層に酷似した埋土となる。

190～196はSD04出土遺物である。190は肥前系磁器碗である。外面にはやや角張る一重網目文を描き、魚の可能性のある文様も認める。1650年代後半～60年代。191は瀬戸・美濃系陶器折縁皿である。ソギは確認できない。藤澤編年4期の所産か。192・193は肥前系陶器皿である。192は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部を上方へ小さく摘み出す。193は横方向に延びる底部から口縁部は短く直立し、箱形の断面形状を呈する。194は備前系陶器瓶である。口縁部は緩やかに外反し、端部は玉縁状に肥厚する。195は土師質土器小皿である。口径6.4cmを測る小形品で、小さく突出する底部から口縁部は内湾気味に短く開く。底面には回転糸切り痕を認める。196は土師質土器坏である。口径13cmを測り、口縁部は大きく外反する。見込み周縁は強いナデ調整により明瞭に屈曲し、口縁部形状に影響を与える。外面調整は口縁部上半が回転ナデ調整、口縁部下半及び底部は入念な指押さえを施す。内面には煤が面的に付着する。京都系土師器の可能性が高く、小森・上村編年Ⅸ期の所産となる(1580・90頃～1660頃、小森・上村1996)。



第37図 SD04出土遺物 (S=1/3)

以上、SD04出土遺物は16世紀末～17世紀初頭の一群(191・192・193)と17世紀中葉まで下る一群に大別できる(190)。SD04は前述したSD03と同一の溝状遺構で、主要な区画施設となる。土器・陶

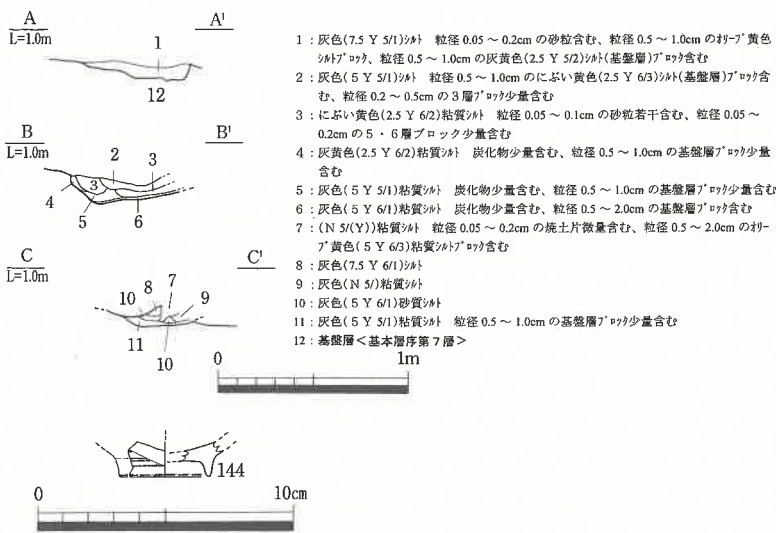
器・陶



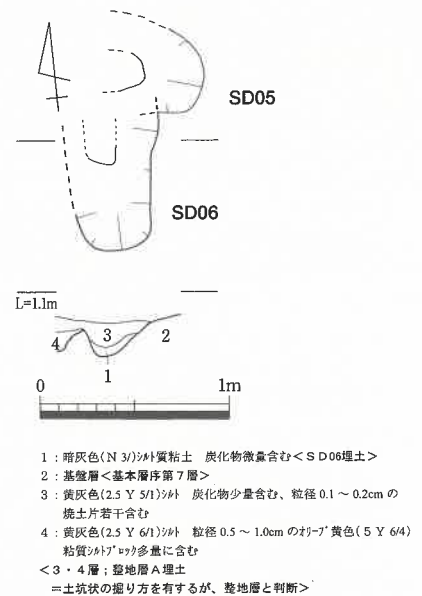
磁器構成も18世紀第4四半期～19世紀第1四半期の一群は確認できないが、SD03に酷似する。SD03は2段掘方を呈し、SD04とはやや構造が異なる。しかし、SD04は標高0.6m前後で確認し、SD03の上段の掘方は標高0.9～1m、2段目掘方の肩部は0.6m前後を測り、下段掘方はSD04検出レベルに合致する。さらに、埋土の共通性を考慮すると、元来同一の遺構であった可能性が高い。SD03は重複関係や遺存状況から、ATラインより東には延びない可能性が高く、その東に位置するSA03～SP10の存在を重視すると、東西方向に走るSD03・04にSD01が取り付く状況が確認でき、「L」字形の平面プランを呈すると想定することができる。またその東側にあるSD01に平行するSA03は、SD03・04を超過してさらに南へ延びるものと考えられる。一方、SD02はSA03に沿って南に延伸するか、否かは判断できない。

**SD05** A Q52～AR52で検出した溝状遺構である。主軸方位はN84°Wを測り、後述するSA01・02と等しい主軸方位を示す。なお、東端部では16世紀末～17世紀初頭に埋没したSK02と重複関係を有し、それに後出する。検出長6m、最大幅0.6mを測る。浅い皿状の断面形状を呈し、埋土は基盤層ブロックを少量含む灰色シルトを基調とする。144はSD05出土遺物である。細片であるが、肥前系磁器小広東碗と考える。1770～1810年代。

以上、SD05は1点のみの出土遺物に留まり、正確な時期決定を行うことは困難であるが、おおむね18世紀第4四半期以降の所産と理解しておきたい。



第38図 SD05断面図及び出土遺物 (S=1/40、1/3)



第39図 SD06平・断面図 (S=1/40)

**SD06** AR52で検出した溝状遺構である。SD05と重複関係を有し、それに後出する。検出長1m、溝幅0.4mを測り、U字形の断面形状を呈する。埋土は底面に沿って、炭化物を微量に含む暗灰色シルト質粘土のみ確認でき、それより上位の堆積状況は明らかではない。

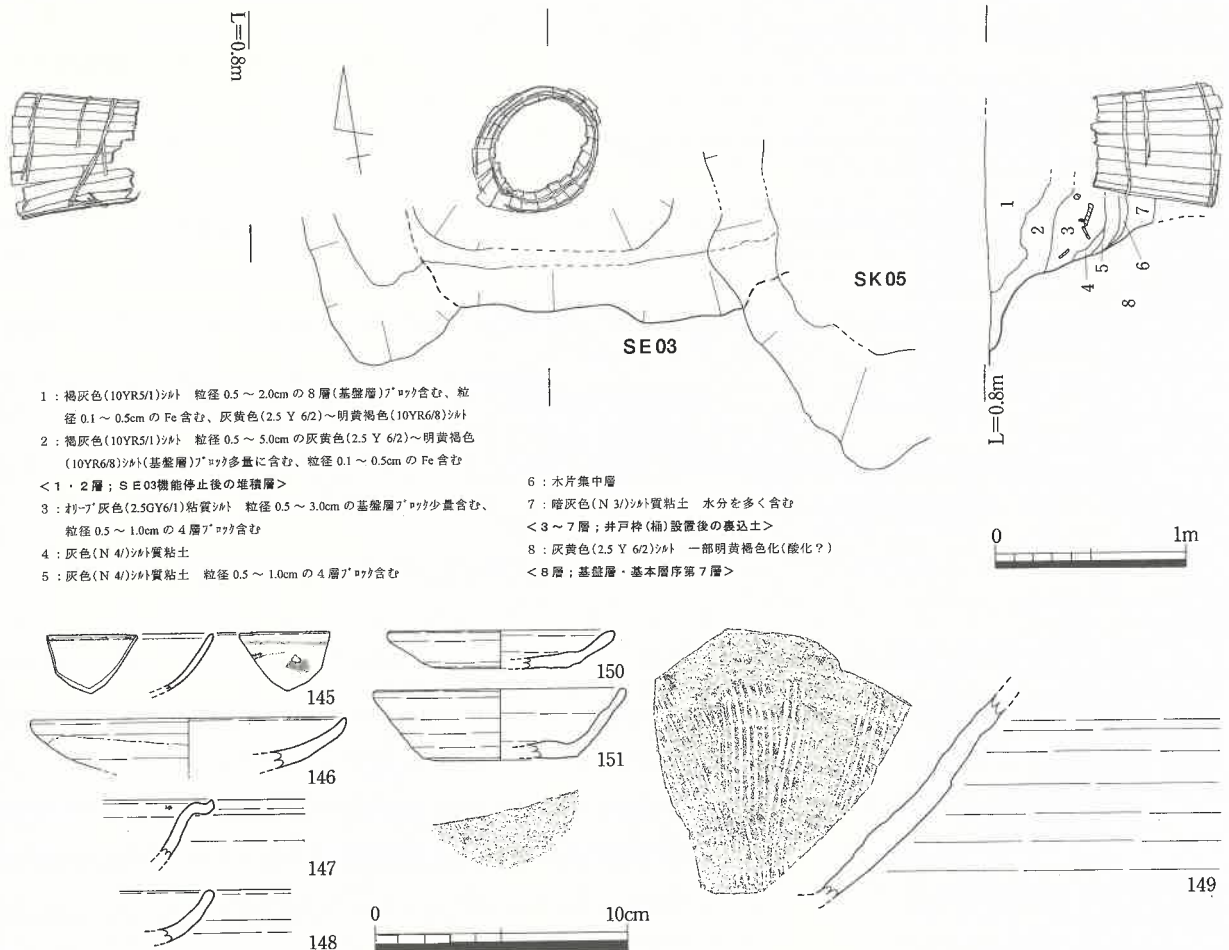
出土遺物は確認できないため、正確な所属時期は不明である。SD05に後出する重複関係を有し、それに後出した時期の所産と理解できる。

## 井戸状遺構

SE03 A052で検出した井戸状遺構である。1640～50年代に埋没したSK05に先行する重複関係を有する。調査区北端部で検出したため、その全容は明らかではないが、可能な限り拡張して調査を実施した。平面形は隅丸方形を呈し、上部の削平を考慮すると、2段掘方であった可能性が高い。掘方内には井戸枠となる桶を認め、標高-0.5m付近に埋置されている。桶は板材を連結したもので、外面には撚り合わせたツタによる上中下3段に及ぶ固定がなされる。土層番号5～7は井戸枠を設置後、その周囲を埋め立てた埋め土となり、3・4層もその可能性が高い。1・2層には基盤層ブロックを多量に包含しており、井戸としての機能を停止した後に比較的短期間に埋め戻された埋土と考えられる。

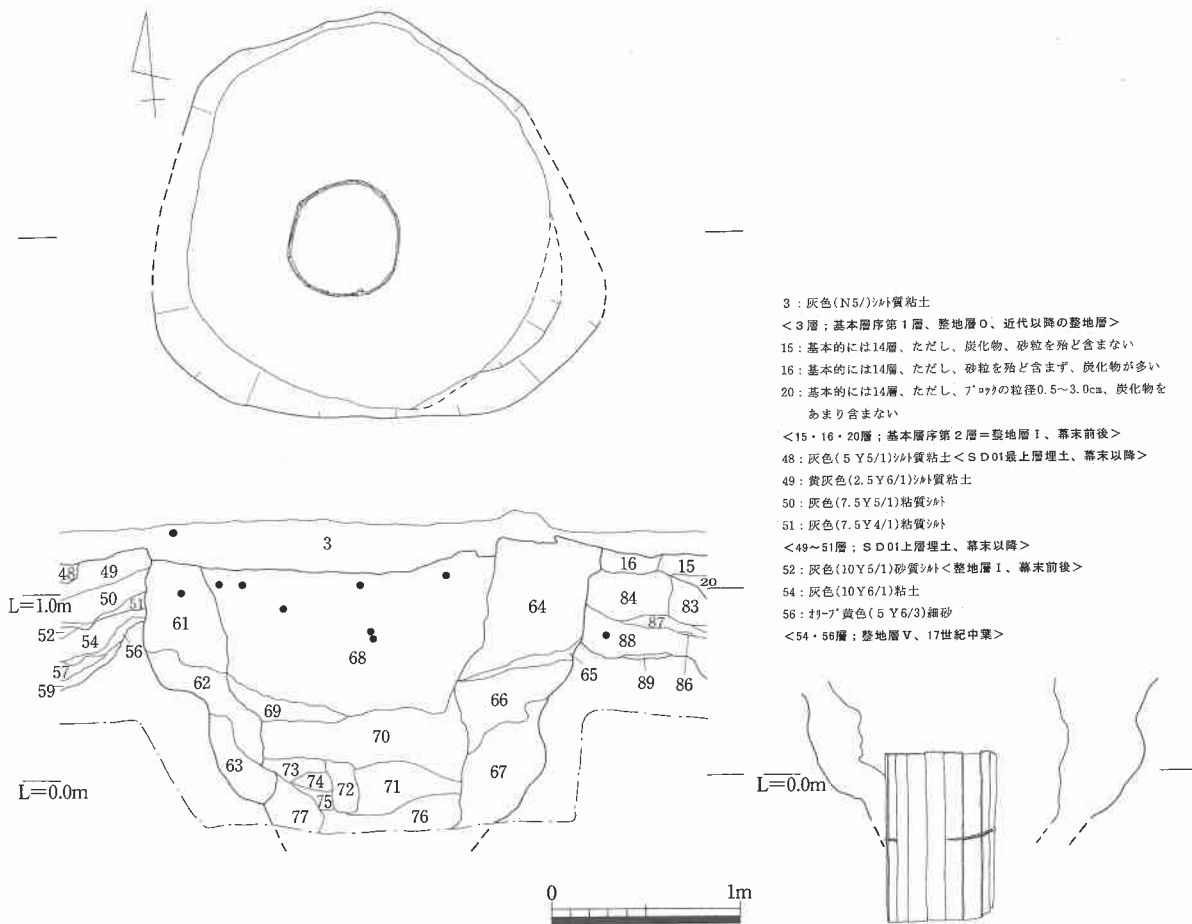
145～149はSE03出土遺物である。145は中国産（景德鎮窯系）青花皿である。口縁部は内湾気味に開き、端部は先細る。146・147は肥前系陶器皿である。146は口縁部が大きく開き、端部のみ小さく外上方へ引き出す。147は溝縁皿である。148は瀬戸・美濃系陶器灰釉丸皿である。149は備前摺鉢である。内面には放射状にスリメを認め、スリメ間隔は上端部で2.5cm前後を測る。乗岡編年近世2a期。150・151は土師質土器小皿ないし坏である。150は底部から直線的に外傾し、口縁部中位が最も肥厚する。底面には回転ヘラ切り痕を認め、混入品と判断した。151は口径10cmを測り、口縁部は底部から直線的に長く延びる。端部にはかすかな外端面、底面には回転糸切り痕をそれぞれ認める。胎土中に赤色粒を含有し、橙色の色調となる。高松城様相把握の様相1～2を中心に認める（16世紀末～1630年代）。

以上、SE03出土遺物は肥前系陶器溝縁皿（147）や備前摺鉢（149）から、17世紀中葉の埋没年代となる。



第40図 SE03平・断面図及び出土遺物 (S=1/40、1/3)

SE04 AT53グリットで検出した井戸状遺構である。SD01とSD02に挟まれた箇所位置し、SD02に後出する重複関係となる。径2.2m前後の不整円形の平面形を呈し、掘方断面形状は中位に小さなテラス面を有する2段掘方となる。標高0.1m付近で井戸枠（桶）を検出した。井戸枠は板材を重ね合わせたもので、外面中位には固定を意図したツタを撚り合わせた紐材を認める。その下端は標高-0.8mに及び、土層の確認は行えていないが、下層確認トレンチ（第13図）やSE01断面図（第20図）を参考にす



- 3 : 灰色(N5/1)粘質粘土  
<3層; 基本層序第1層、整地層0、近代以降の整地層>
- 15 : 基本的には14層、ただし、炭化物、砂粒を殆ど含まない
- 16 : 基本的には14層、ただし、砂粒を殆ど含まず、炭化物が多い
- 20 : 基本的には14層、ただし、ブツの粒径0.5~3.0cm、炭化物をあまり含まない
- <15・16・20層; 基本層序第2層=整地層I、幕末前後>
- 48 : 灰色(5Y5/1)粘質粘土<SD01最上層埋土、幕末以降>
- 49 : 黄灰色(2.5Y6/1)粘質粘土
- 50 : 灰色(7.5Y5/1)粘質シルト
- 51 : 灰色(7.5Y4/1)粘質シルト
- <49~51層; SD01上層埋土、幕末以降>
- 52 : 灰色(10Y5/1)砂質シルト<整地層I、幕末前後>
- 54 : 灰色(10Y6/1)粘土
- 56 : 灰-黄(5Y6/3)細砂
- <54・56層; 整地層V、17世紀中葉>

- 57 : 灰色(N4/(YR))砂質シルト 炭化物若干含む、粒径2.0~5.0cmの小礫若干含む、粒径0.1~0.5cmの褐色(10YR4/6)砂質シルト(基盤層が酸化したものか?)ブツまだらに多量含む
- 59 : 黒色(N2/)シルト (炭化物層)  
<57・59層; SD01下層埋土、17世紀中葉>
- 61 : 黄灰色(2.5Y4/1)シルト 粒径0.5~2.0cmの黄褐色(2.5Y5/4)~灰黄色(2.5Y6/2)粘質シルトブツ多量に含む、粒径1.0~10.0cmの小礫(板状)多量に含む、炭化物含む、瓦片含む
- 62 : 灰色(5Y4/1)シルト 粒径0.5~8.0cmの黄褐色(2.5Y5/4)~灰黄色(2.5Y6/2)粘土ブツ多量に含む
- 63 : (67に同じ)ただし、含有のブツは少量
- 64 : 褐灰色(10YR5/1)粘質シルト 粒径1.0~8.0cmの褐灰色(10YR6/1)~灰色(N5/)粘土ブツ多量に含む、粒径0.1~1.0cmの砂粒含む
- 65 : 灰色(N4/(YR))粘質シルト 部分的に褐色(7.5YR4/4)化(酸化?)粒径1.0~5.0cmの小礫を多量に含む
- 66 : 灰色(N4/(YR))粘質シルト 粒径1.0~5.0cmの小礫若干含む
- 67 : 暗青灰色(5B4/1)粘質細砂 粒径2.0~5.0cmの青灰色(10BG6/1)粘質シルトブツ多量に含む  
<61~67層; SE04埋土、井戸築造時の埋土>
- 68 : 褐灰色(10YR4/1)シルト 粒径1.0~8.0cmの灰黄褐色(10YR5/2)~灰色(5Y5/1)粘土ブツまだらに多量に含む、黄褐色(10YR7/8)砂塊(礫土?土間?)まだらに含む、粒径0.1~10.0cmの砂粒、小礫(板状)多量に含む、瓦片、土器片含む

- 69 : 青灰色(5B5/1)シルト 粒径0.5~3.0cmの黄褐色(2.5Y5/4)シルトブツ含む、粒径2.0~5.0cmの小礫少量
- 70 : 暗青灰色(10BG4/1)粘質細砂 粒径2.0~8.0cmの青灰色(10BG6/1)粘質シルトブツ多く含む
- 71 : 黄褐色(2.5Y5/4)砂
- 72 : 黄褐色(2.5Y7/6)砂? 壁土?の塊
- 73 : 暗青灰色(5BG4/1)粘質シルト
- 74 : にぶい黄色(2.5Y6/4)粗砂
- 75 : 暗青灰色(5BG4/1)粘質シルト
- 76 : 灰-黄(5Y5/2)砂 部分的に暗青灰色(10BG4/1)粘質砂ブツ含む
- 77 : 暗青灰色(5B3/1)粘質砂 粒径0.5~3.0cmの小礫少量含む  
<68~77層; SE04埋土、井戸枠内埋土ないし井戸枠抜き取り痕>
- 83 : 灰色(N4/(Y))粘質粘土
- 84 : 83層に同じ
- 86 : 暗灰色(N3/)粘質粘土
- <83~86層; 基本層序第4層=整地層III、18世紀前半>
- 87 : 褐灰色(10Y4/1)シルト
- 88 : 灰色(10Y4/1)粘質粘土
- 89 : 灰色(N6/)粘土  
<87~89層; SD02下層埋土、17世紀中葉>

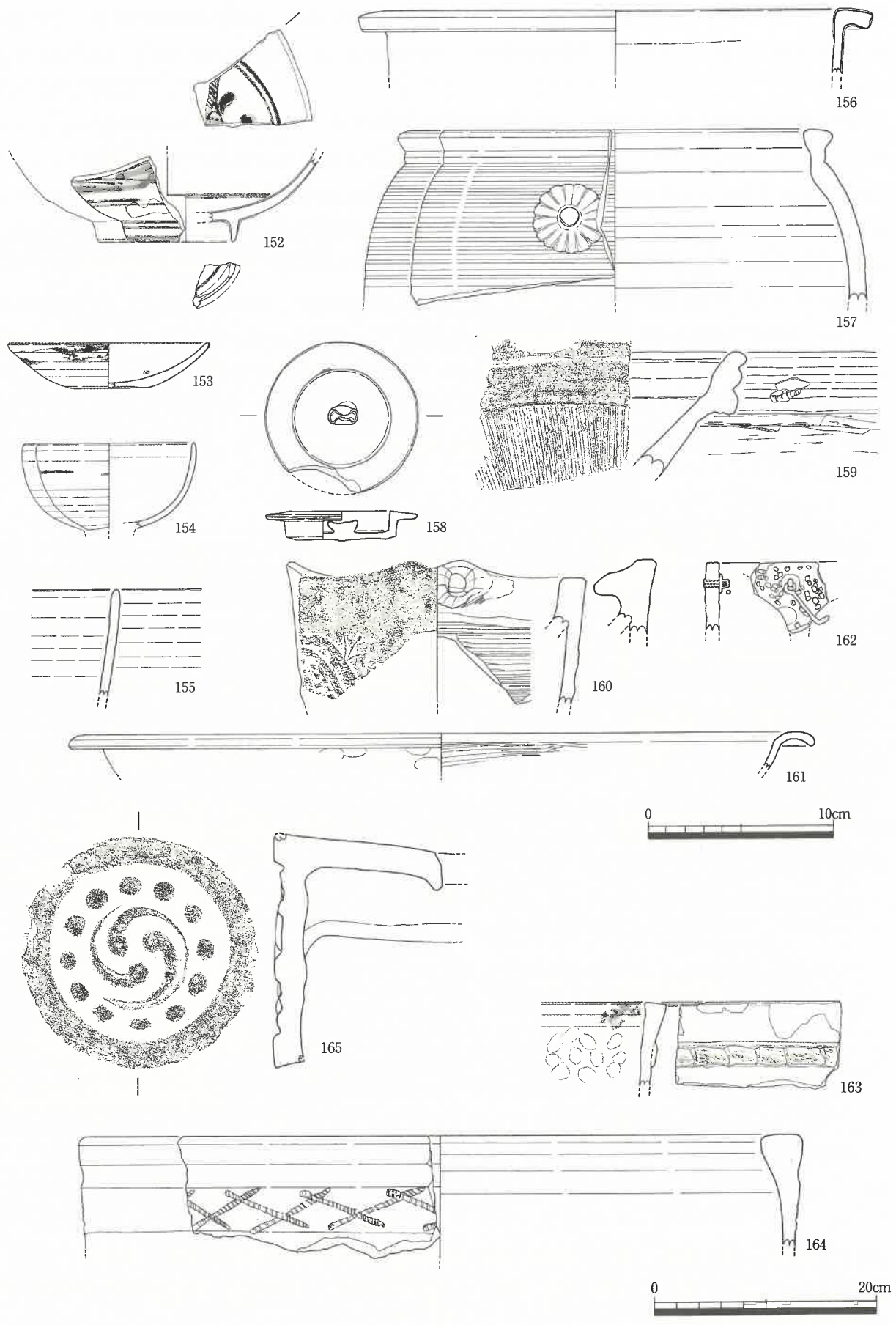
第41図 SE04平・断面図 (S=1/40)



ると、明らかに湧水層まで到達していたことが窺える。井戸枠上位の堆積状況は、トレンチ5を援用した。61～77層がS E04埋土となる。68～77層と61～67層の2層に大別でき、前者が井戸枠内埋土、後者がその埋め土とも理解できるが、前者を井戸枠抜き取り痕とも解釈できる。しかし、61～67層埋土の性格は判然とししない。注意すべきは、土層の対応関係である。61と64層、62と66層、63と67層はそれぞれ層位の境が連続し、それを68～77層埋土が掘り込む状況が確認できる。こうした土層堆積状況は、一度堆積した埋土を掘り直したものと理解できる。井戸枠の設置状況は明らかではないが、おそらくは井戸枠を抜き取るために再掘削したものと理解できる。なお、掘方掘削面は15・16層、基本層序第1層（整地層Ⅰ）となる。幕末前後の設置を想定しており、S E04の構築時期もそれ以降の所産と理解できる。

152～165はS E04出土遺物である。152は肥前系磁器鉢である。高台断面形状は三角形を呈し、細長く延びる。見込みには二重圏線内に草花文、外面には楼閣山水文を描く。153は京・信楽系陶器灯明皿である。見込みには目跡、外面端部付近には煤痕を認める。154は京・信楽系陶器碗である。外面には銹絵を認めるが、その意匠は不明である。155は京・信楽系陶器碗とした。口縁部は直線的に長く外傾し、端部は先細る。灰白色の胎土に灰白色の釉を厚く施釉する。156は京・信楽系陶器鉢とした。口縁部は「逆L」字形を呈し、内面端部以下は無釉となる。富田吉金窯産の可能性が高い（森下2000）。157・158は大谷焼である。157は甕である。わずかに張りを認める肩部から口縁部は短く直立し、「T」字形の断面形状を呈する。肩部外面には顕著なカキメを認め、菊花文を貼り付ける。158は落とし蓋である。円盤状の祖形を両サイドから押し潰したような把手を有する。159は堺・明石系摺鉢である。白神Ⅱ型式。160は土師質土器七厘である。口縁部は二重構造を呈し、さなが一体化する。口縁部内面には3方向に舌状突起を有し、受け部となる。外面には型成形により草花文を表現し、剥離材としてのキラコの塗布を認める。161は瓦質焙烙である。162は土師質土器不明品である。図化に際し、水平面を有する箇所を上とした。図上での上には水平面を認め、下側両側面は曲線状の抉りを有する。残存部位中央に円孔を認め、銅製の金具をピベット状に装着する。金具の構造は、基部とフックに分かれ、基部は円環を有する台座から、二股に分かれた金具が延び、先端部を折り曲げることにより固定を図る。別個体となるフックは先端を環状にして台座の円環に装着し、遺存する先端部は直角に折れ曲がる。163・164は土師質土器大甕である。口縁部は断面三角形に肥厚し、口縁部下外面には文様帯を認める。163は薄い粘土板を貼付し、その上位に断続的なナデ調整を加える。164は強い回転ナデ調整により文様帯を創出し、板材小口面を押し当てて斜格子文を施す。165は軒丸瓦である。珠文数は12を数え、巴文の尾は細長く円形を指向するように巻き込む。器表面にはキラコの塗布を認める。

以上、S E04出土遺物について報告したが、出土点数が稀薄なため、層位を考慮せずにレイアウトしている。ここでは、層位別に出土遺物が示す年代を検討したい。第41図セクションでは68～77が井戸枠内埋土（仮称A層）、61～67が井戸枠を固定した埋め土と理解できる（仮称B層）。さらにその下位に井戸枠を検出しており、その井戸枠内（第41図、仮称C層）と井戸枠を固定した埋土に大別できる（仮称D層）。井戸の構築時期を示す仮称D層出土遺物として160が挙げられる。正確な製作年代は明らかではないが、空港跡地遺跡Ⅵでは19世紀末前後に位置付けられる（松本2003b）。C層出土遺物は、152・159・161・163・165があり、おおむね幕末前後の所産となる。残りの出土遺物は、A・B層出土遺物として一括して取り上げられるが、156～158は上位井戸枠内最上層（68層）出土遺物となる。おおむね幕末前後に位置付けられる。S E04の構築時期を示す遺物が最も新しい様相を示すという稀有な状況であるが、19世紀末前後の構築時期を想定しておきたい。

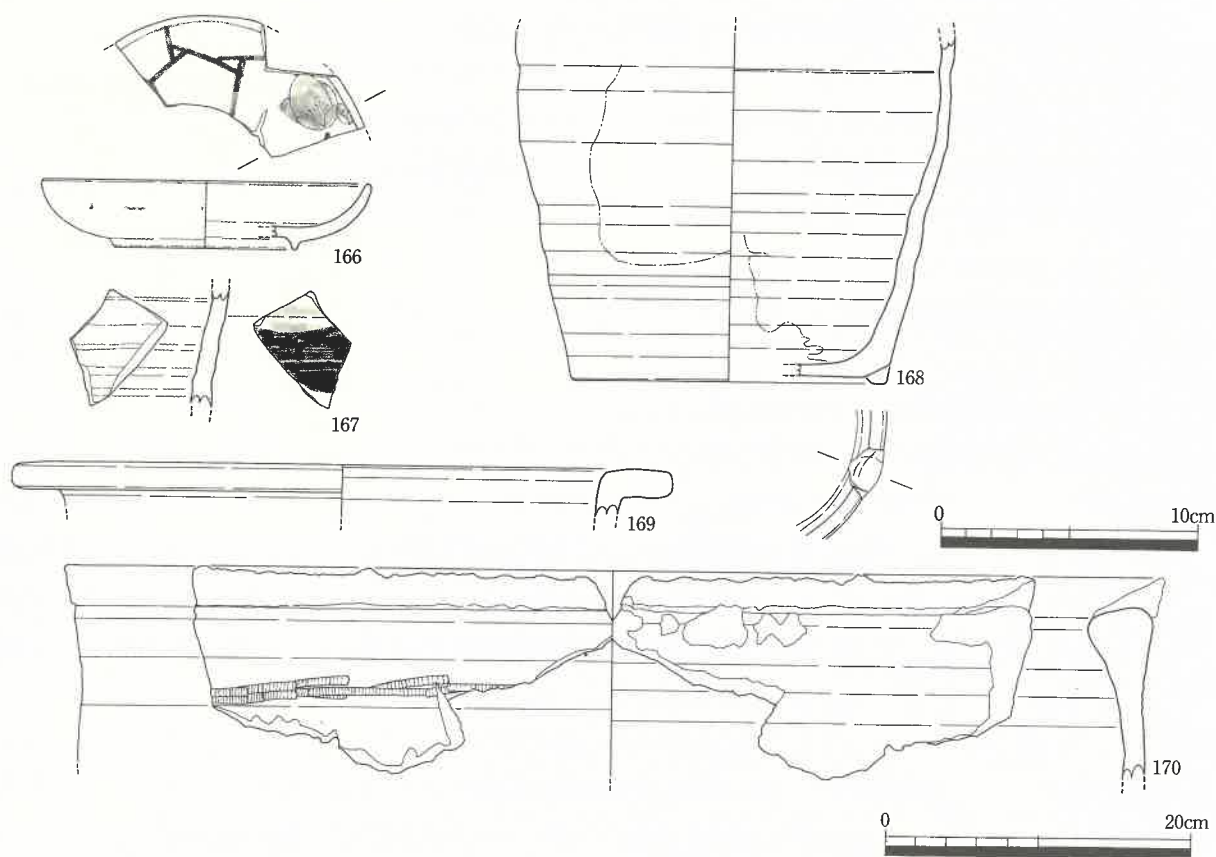


第42図 SE04出土遺物 (S=1/3、1/5)

**SE05** AU・AV、53・54グリット境で検出した井戸状遺構である。調査区南端部に位置し、南半は調査区外へ延長する。断面を中心に確認したため、内容は判然としない。ここでは出土遺物のみ報告しておきたい。

166～170はSE05出土遺物である。166は瀬戸・美濃系磁器皿である。見込みには銅板転写による氷裂文・梅花文を認める。明治・大正期。167は京・信楽系陶器瓶とした。灰白色の緻密な胎土となり、外面下半には鉄釉、上半には灰釉の施釉を認める。胎土の特徴から、富田丸山の陶土を使用して製作された可能性が想定できる（松本2002b、2003a）。168は京・信楽系陶器瓶とした。胎土は167に共通し、外面には褐灰色の色調を呈する灰釉の面的な流し掛けを認める。底部は側面から連続する高台を有し、一部には削り込みを施す。169は京・信楽系陶器鉢である。口縁部が「逆L」字形に屈曲する形態となる。170は土師質土器井筒である。口縁部は三角形に肥大し、外面には文様帯を認める。上端面には上位井筒との接合に用いたモルタルの付着を認め、モルタル上面には内傾する面を認める。

以上、SE05出土遺物は、167・168は年代的位置付けが困難であるが、166の存在より、明治・大正期の所産と理解したい。ここでは19世紀末～20世紀初頭の構築を想定しておきたい。



第43図 SE05出土遺物 (S=1/3、1/5)

#### 土坑

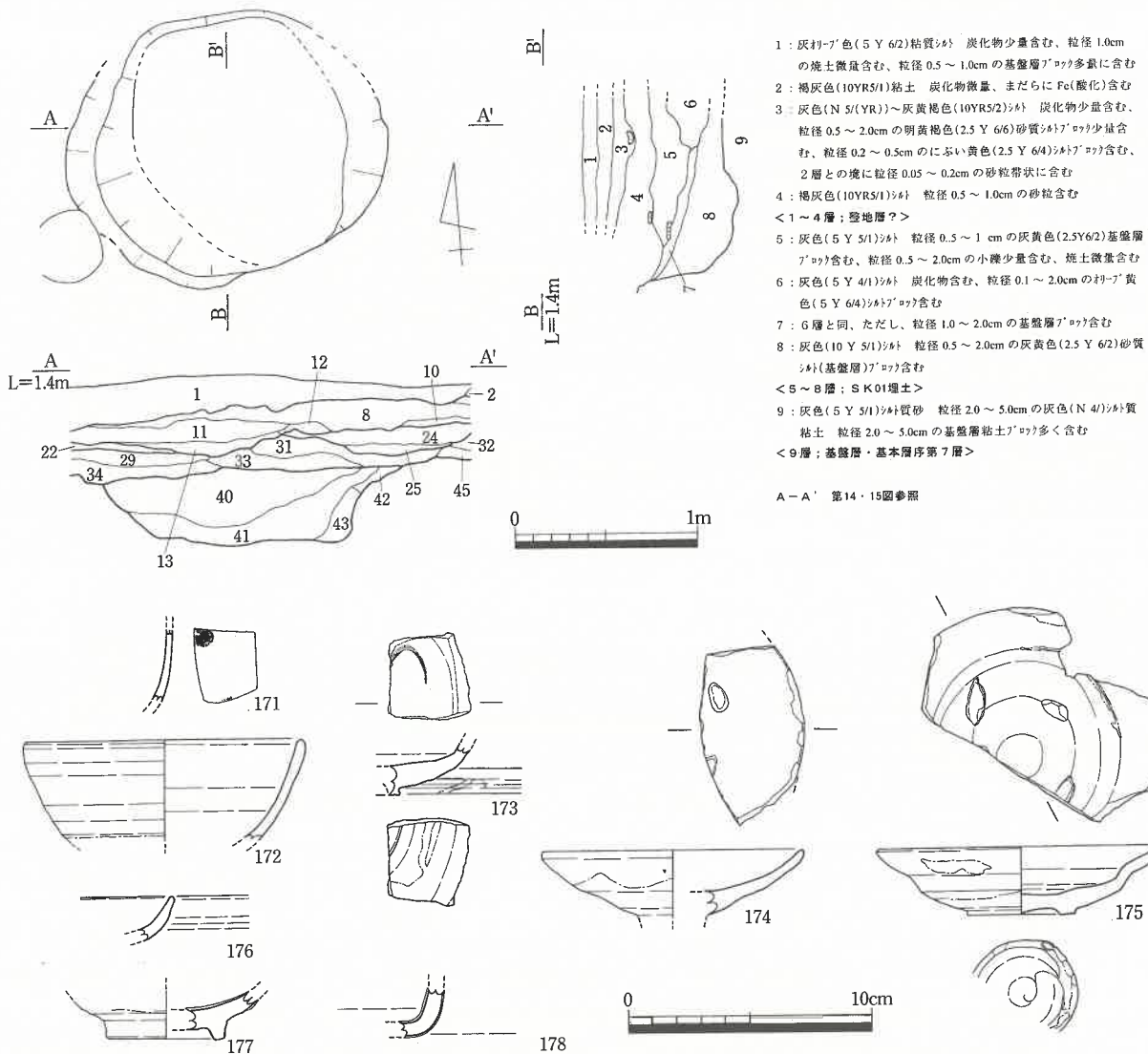
**SK01** AR・AS53グリットで検出した土坑である。径1.5～1.8mの長楕円形の平面形を呈する土坑である。逆台形の断面形状を呈し、検出面からの深度は0.45mを測る。底面には広い平坦面を有し、遺構の性格を反映する。埋土は下層に基盤層ブロックを含む灰色シルト、上層に基盤層ブロックないし微量の焼土を含む灰色シルトが堆積するが、両者に顕著な差異は認められない。注意すべきは、42・43層



の存在である。掘方上層から流入したような堆積状況を示し、42層には多量の基盤層ブロックを含有し、その上位に前記した埋土が堆積する。掘方掘削後に一定期間開放状態であったと評価できる。但し、遺構の性格は判然としない。

171~178はSK01出土遺物である。171は中国産（景德鎮窯系）青花碗とした。細片であるため、傾きが異なる可能性が高い。外面には花奔文を認め、破断面には漆が付着し、漆継が行われたと考えられる。172~175は肥前系陶器である。172は碗である。口縁部は内湾気味に開き、端部を丸く収める。173~175は皿である。見込みには鉄絵による草花文を認める。174・175は見込みに胎土目を認める皿である。174は口縁部が内湾気味に大きく開き、端部をかすかに摘み上げる。175は底部から横方向に開き、短く直立した後、さらに内湾気味に開く形態となる。176~178は瀬戸・美濃系陶器である。176は灰釉丸皿である。177は碗である。高台は肉厚で、高台脇以下無釉となる。178は志野向付である。

以上、SK01出土遺物は、輸入磁器+胎土目積み段階の肥前系陶器及び瀬戸・美濃系陶器大窯製品で構成され、16世紀末~17世紀初頭の年代を付与することができる。

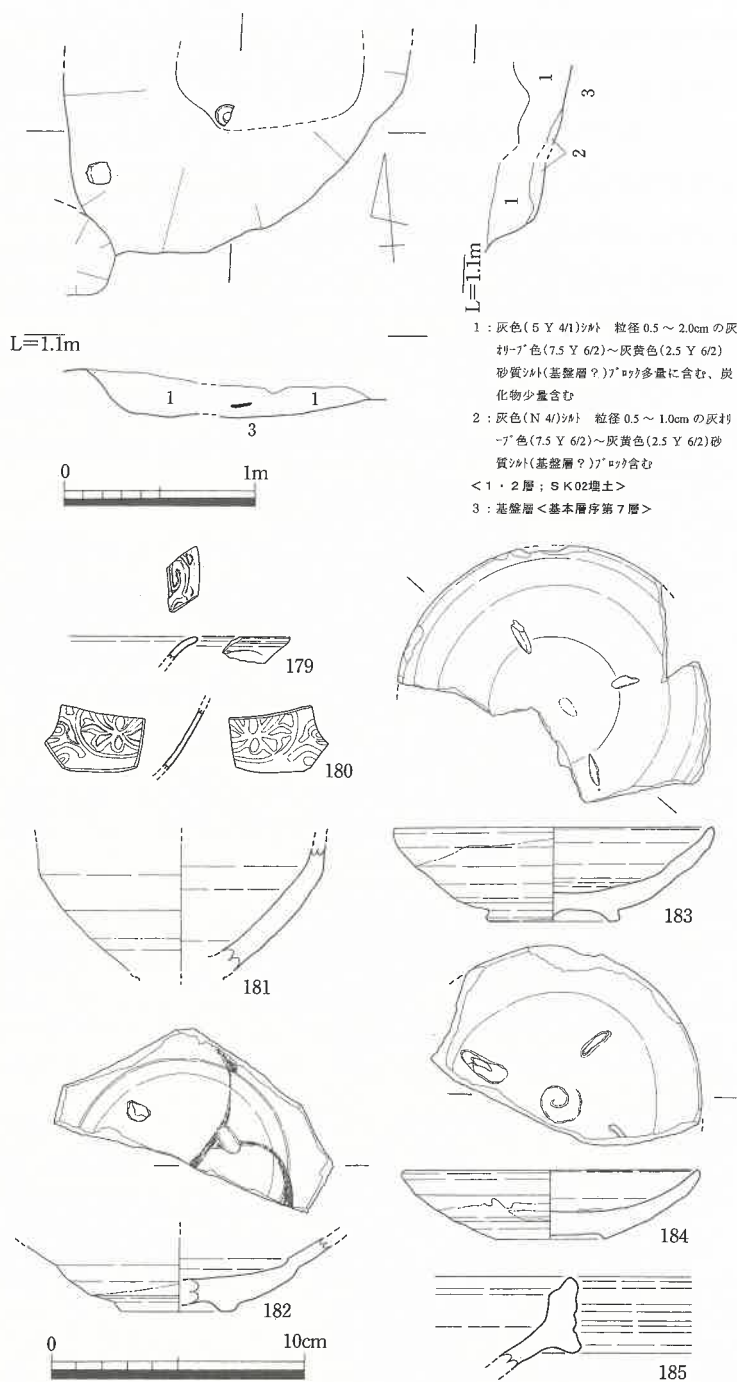


第44図 SK01平・断面図及び出土遺物 (S=1/40、1/3)

**S K 02** A S 52グリットで検出した土坑である。北半は調査区外へ延長する。検出した限りでは不整形を呈し、南北主軸がやや長い平面形が推測でき、東西幅1.8m、南北検出長1.2mを測る。検出面からの深度は0.3~0.4mを測り、逆台形状の断面形状を呈する。埋土はほぼ単一層となり、基盤層ブロックを多量に含む灰色シルトとなる。

179~185はS K 02出土遺物である。179は中国産（景德鎮窯系）青花皿である。口縁部は大きく外反し、内面には花唐草文、外面には花奔文を認める。180は中国産（景德鎮窯系）白磁皿である。型打成形により花奔文を陽刻表現する。器壁が薄いため、外面は陰刻気味となる。181は瀬戸・美濃系陶器天目碗である。外面下半の露胎部分には錆釉の塗布は確認できず、藤澤編年4期の所産と考える。182~184は肥前系陶器皿である。いずれも胎土目による窯詰めが行われ、182は団子状の胎土目、183・184は棒状の胎土目を4方に放射状に配置する。182は見込みに鉄絵による簡略化した草花文を描く唐津である。185は備前摺鉢である。乗岡編年近世1c期の所産であろう。

以上、S K 02出土遺物は、S K 01同様の器種構成となり、肥前系陶器砂目製品や肥前系磁器は確認できず、16世紀末~17世紀初頭の年代を付与することができる。



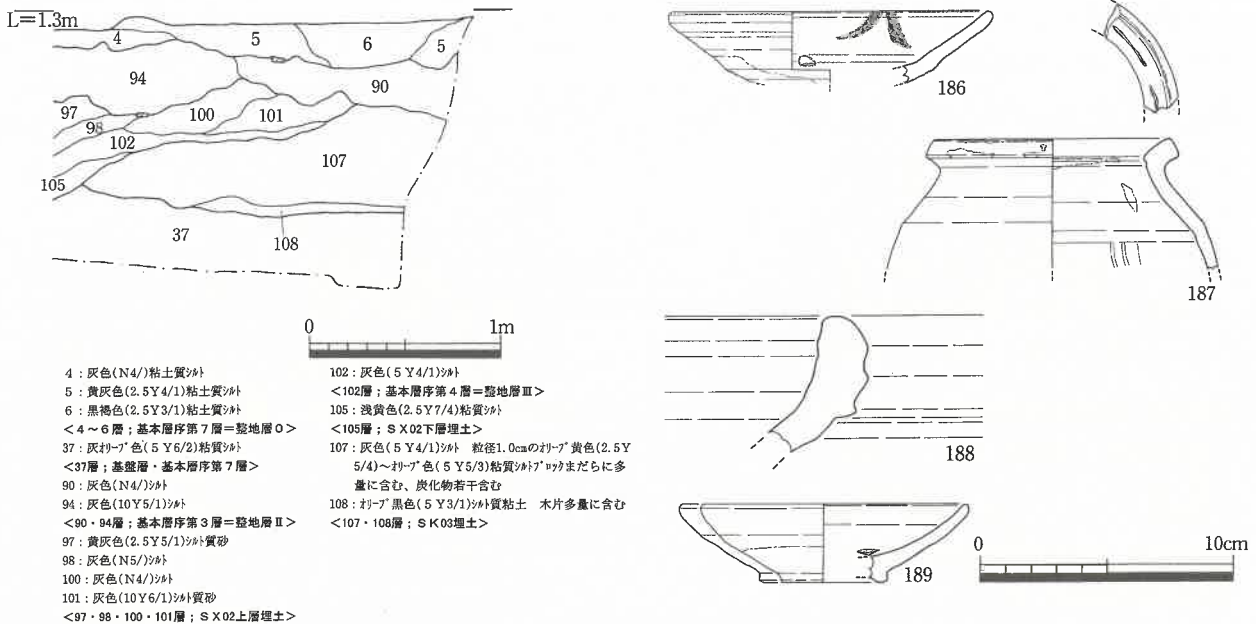
第45図 S K 02平・断面図及び出土遺物 (S=1/40、1/3)

**S K 03** 調査区東端部A V 53で検出した土坑である。平面では検出できず、断面観察の結果、確認した土坑である。107・108層がS K 03埋土となり、17世紀中葉前後に開削されたS X 02に後出する層位関係となる。底面に沿ってオリブ黒色シルト質粘土が薄く堆積し（108層）、木片を多量に含有する。その上位には107層が厚く堆積し、灰色シルト層となる。その性格は判然としない。

186~188はS K 03出土遺物である。189はS K 03ないしS X 02に対応する層位からの出土となる。186

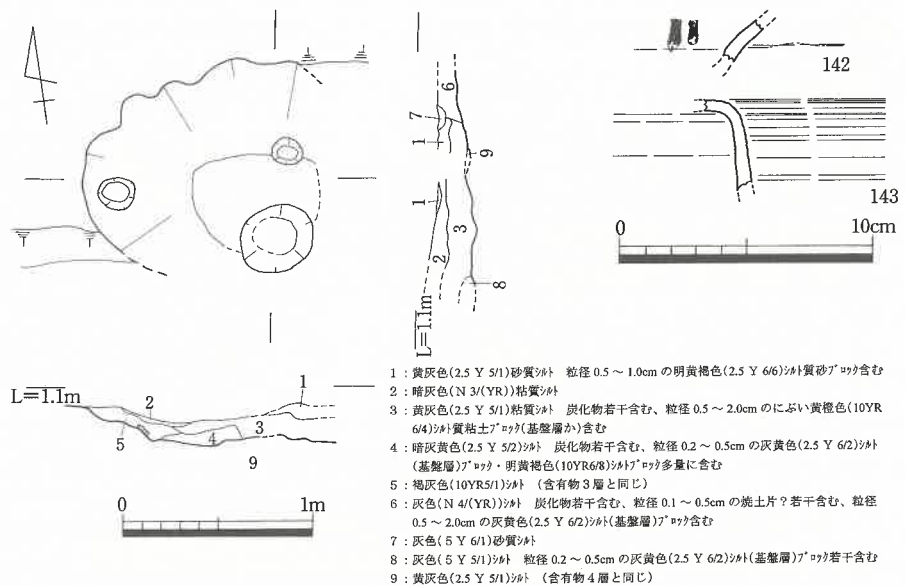
は肥前系陶器皿である。口縁部内面には鉄絵による簡略化した草花文を描き、見込みには胎土目を認める。187は施釉陶器甕とした。肩部にかすかな張りを認め、痕跡的な頸部を経て、口縁部は短く屈曲する。内面には同心円状の当て具痕を認め、口縁部内面には重ね積みの痕跡がある。肥前系陶器と考えたいが、確証はない。188は備前大甕である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁帯外面には2条の凹線を認める。乗岡編年近世1期の所産となる(乗岡2001)。189は肥前系陶器胎土目積みの皿である。

以上、S K03出土遺物は、出土点数は少ないが、胎土目積みによる肥前系陶器皿(186)や備前大甕の年代観より、16世紀末~17世紀初頭の年代を付与することができる。なお、189はS X03出土の可能性もあり、S X02にはS K03と同時期の土器・陶磁器を包含する層位を認めるため、いずれに帰属するかは判然としない。



第46図 S K03断面図及び出土遺物 (S=1/40、1/3)

S K04 A P53で検出した土坑である。攪乱により南半部が失われ、全容は明らかではない。平面形は長楕円形を呈し、東西検出長1.3m、南北検出長1.1mを測る。検出面からの深度は0.2m前後を測り、東西方向のセクションでは浅い逆台形状を呈する。埋土中には基盤層ブロックを多量



第47図 S K04平・断面図及び出土遺物 (S=1/40、1/3)



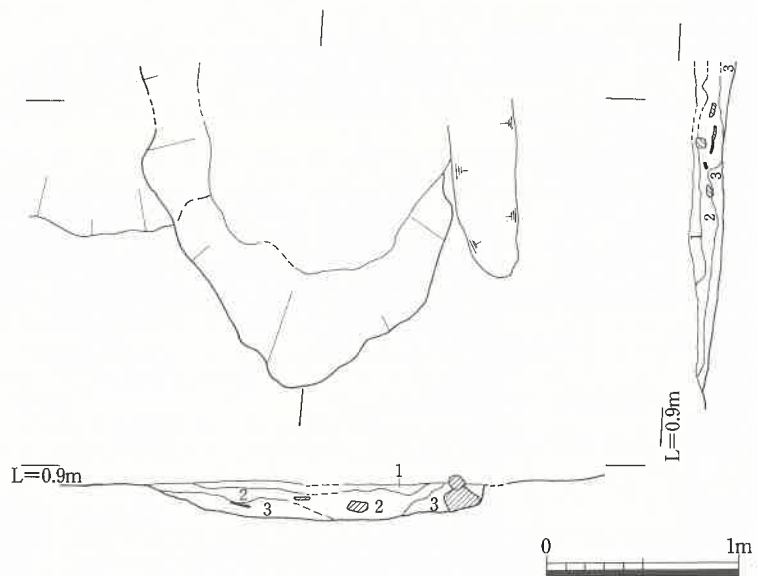
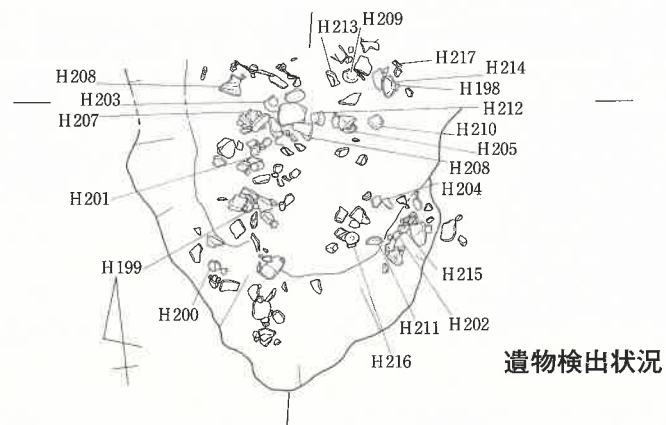
に含み、比較的短期間に埋没した可能性が高い。

142・143はS K04出土遺物である。142は肥前系陶器皿である。底部から横方向に延び、短く直立した後、口縁部は大きく開く。口縁部内面には縦方向の2条線を鉄絵で描く。西の丸町B地区S K b192に類例を認め（佐藤2003）、鉄絵は6区画となり、見込み中央に「×」を描き、さらに見込みには4個の胎土目を認める器種であることが窺える。143は焼締陶器瓶としたが、天地は不明である。図化した肩部には張りを認め、外面にはカキメを施す。産地不明。

以上、S K04出土遺物は稀薄な出土点数ではあるが、142の絵唐津の存在から、高松城様相把握の様相1に併行する年代を付与しておきたい（16世紀末～17世紀初頭）。

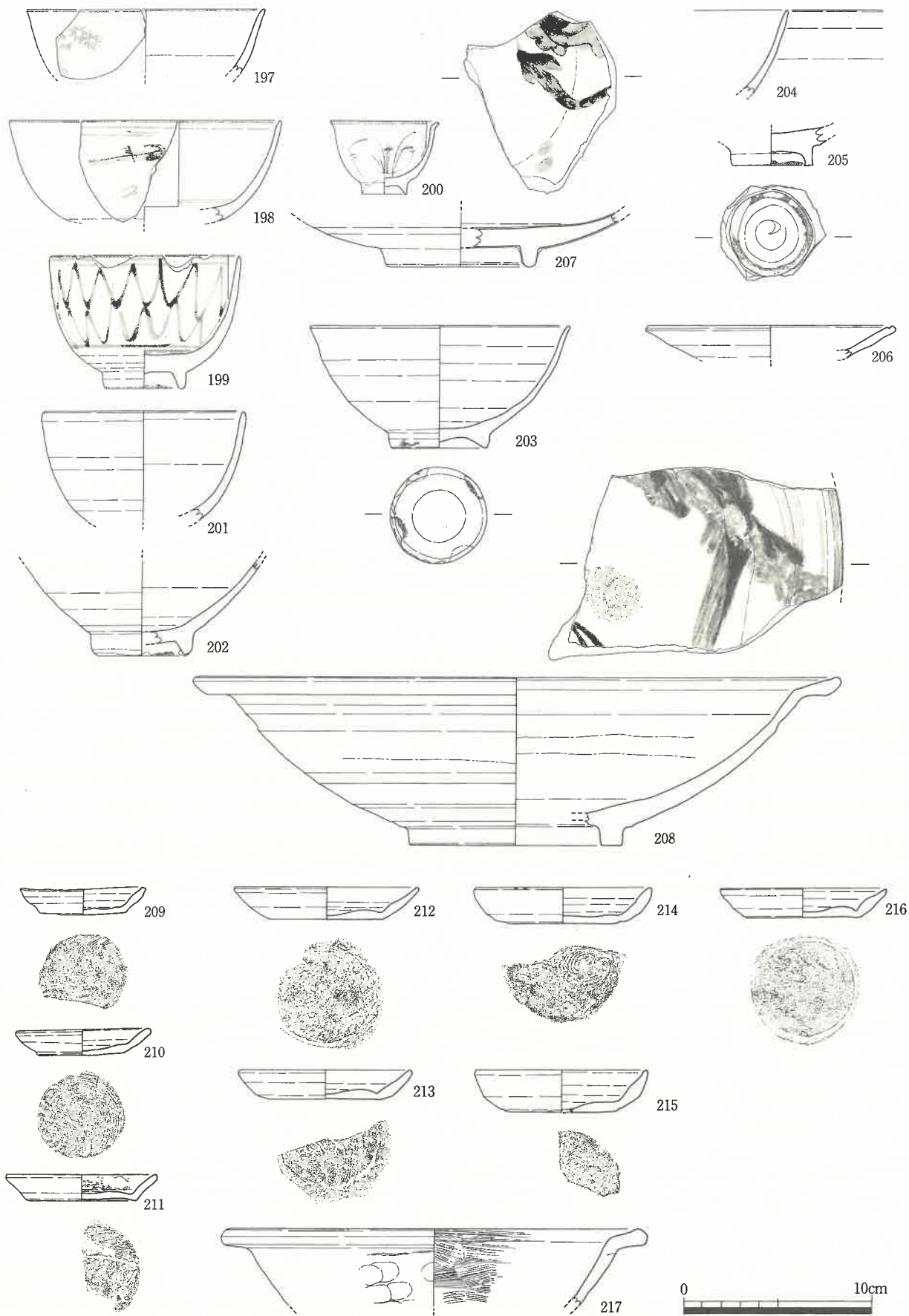
**S K05** AP52グリットで検出した土坑である。17世紀中葉に廃棄されたS E03と重複関係を有し、それに後出する。平面形は南部が三角形に突出する形状を呈し、南北検出長1.7m、東西幅1.6mを測る。検出面からの深度は0.2mを測り、浅い皿状の断面形状となる。埋土はレンズ状堆積となり、微細な細分が可能な基盤層ブロックを一定量包含する灰色粘質シルトがそれぞれ堆積する。出土遺物は2層を中心に確認でき、第48図に出土状況図を掲載した。

197～217はS K05出土遺物である。197は中国産（漳州窯系）五彩手碗と考えた。口縁部は内湾気味に外傾し、端部のみ小さく外反する。外面には赤・緑色絵葉による紅葉文の上絵付けを描き、口縁部下には呉須による1条圈線を認める。198～202・207は肥前系磁器である。198～202は碗となる。198は径復元に問題を残す。外面には草花文を認める。199は外面に丸味のある一重網目文を描き、高台内は無釉となる。1640～50年代。200は小杯である。外面には蘭を描き、高台内は無釉となる。



- 1: 灰色(N 5(Y))粘質粘土 炭含む、粒径0.2～1.0cmのチーフ灰色(10 Y 6/2)粘質シルト(基盤層が色調変化したものか)ノコ少量を含む、粒径1.0～5.0cmの小礫少量含む
- 2: 灰色(N 4/)粘質シルト 炭多量を含む、粒径0.5～1.0cmの明褐色(7.5YR5/6)粘質シルトノコ(焼土片?)少量含む、粒径0.2～1.0cmのチーフ灰色(10 Y 6/2)粘質シルト(基盤層の色調変化)ノコ少量含む
- 3: 灰色(N 4/)-(N 5(Y))粘質シルト 炭化物含む、粒径0.2～1.0cmのチーフ灰色(10 Y 6/2)粘質シルト(基盤層の色調変化)ノコ含む

第48図 S K05平・断面図 (S=1/40)



第49図 SK05出土遺物 (S=1/3)

1630～40年代。201は青磁碗である。口縁部は直立気味に立ち上がる。底部は遺存しないが、1630～50年代に位置付けられる波佐見窯産製品の可能性が高い（中野2000）。202は白磁碗である。高台は肉厚で、見込みは茶溜まり状に窪む。高台内にも施釉を認める。1640年代前後の所産か。207は皿である。見込みには草花文を描く。203～206・208は肥前系陶器である。203は内野山窯系の碗である。口縁部は大きく開き、端部のみ小さく外反する。高台内・畳付を含め、全面に淡黄色の灰釉を施釉し、畳付には4個の砂目を認める。灰白色の色調を呈するきめ細かい精良な胎土が選択される。204・205は同一個体の可能性が高い。高台内にも施釉を認め、畳付には砂が付着する。206は溝縁皿である。208は鉢である。口縁部は「く」字形に屈曲し、端部を上方へ小さく摘み上げ、外端面を認める。内面には白泥を塗布し、鉄釉と緑色釉により意匠不明の文様を描く（二彩手）。内面には帯状に施釉されない箇所がある。また、見込みには団子状の砂目を認める。209～216は土師質土器小皿である。胎土はいずれも石英・長石、雲母粒を含有し、209・212以外には赤色粒も含む。色調は灰黄白色系の色調（209～213）とにぶい橙色の一群がある（214～216）。器形は4群に大別できる。209・210は口径7cm前後を測り、口縁部は短く開く。211は上げ底気味となる底部から明瞭に屈曲し、口縁部は外反気味に短く開く。212・213・216は底部から鈍く屈曲する口縁部は中位が最も肥厚し、端部にかけて漸次先細る形態となる。見込み周縁に強いナデ調整を加えることにより、底口縁部境内面には明瞭な凹線を認める。212・213と216は胎土の色調が異なるため、一括することを避けたが、含有鉱物組成に大差はなく、焼成ないし埋没状況に起因した色調の変化である可能性も否めない。214・215はわずかに突出する底部から口縁部は内湾気味に開き、見込み周縁に弱い凹線を認める形態である。なお、底部にはいずれも回転糸切り痕を認め、211・214・216には煤が付着する。以上、土師質土器小皿は高松城様相把握では様相3を中心に認める形態が主体を占める（1640～50年代）。217は瓦質鍋である。口縁部は「く」字形に屈曲し、端部には丸味を有する。体部内面には顕著な板ナデ調整、口縁部内面にはナデ調整に先行する粗い板ナデ調整を認める。

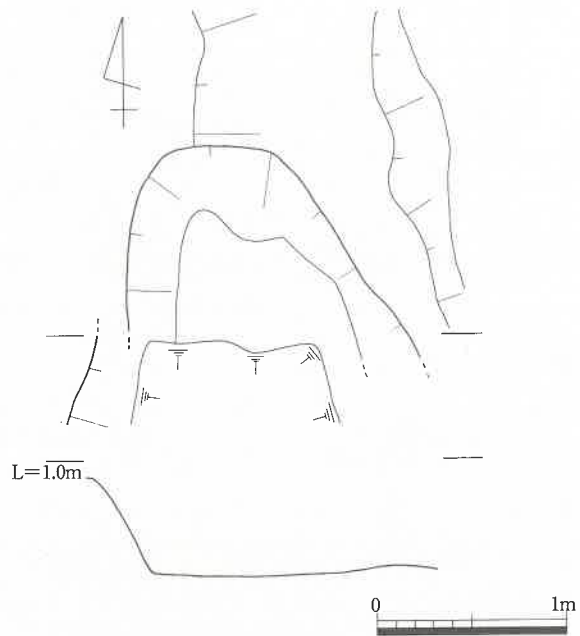
以上、SK05出土遺物は、肥前系磁器が高台内無釉碗（199）、波佐見窯産青磁碗（201）、小杯（200）が1640～50年代の所産となり、内野山窯系の碗（203）や溝縁皿は大橋編年Ⅱ期に位置付けられる（大橋2000、盛2000、1610～50年代）。よって陶磁器には1640～50年代の年代観を付与することができ、在地産土師質土器小皿も高松城様相把握の様相3を中心に認める形態となり、ここでは、1640～50年代の埋没を想定しておきたい。

**SK06** AU53～54グリットで検出した土坑である。南半部は調査区外へ延長し、さらに中央には攪乱が及ぶ。検出した限りでは、長楕円形の平面形を呈し、南北検出長1.5m、東西幅1.8m前後を測る。埋土は不明であり、断面形状もレベル図から復元したものである。

218～233はSK06出土遺物である。報文番号の貼付ミスから、229に関しては①と②が存在する。218～220は肥前系磁器である。218は白磁小杯である。口縁部は直線的に外傾し、端部のみ強く外反する。219は白磁碗である。内湾気味に立ち上がり、端部のみ小さく端反る。220は染付碗である。高台断面形状はU字形を呈し、外面には蝶・草花文を認める。221・222は肥前系陶器である。221は京焼風陶器碗である。高台内に刻印は確認できない。222は鉢である。高台内の削り込みが浅く、底部は極めて厚い。見込みには鉄絵により草花文？を描き、砂目を2箇所認める。畳付にも砂目痕があり、重ね積みの状況が窺える。223・224は瀬戸・美濃系陶器である。223は志野向付底部細片である。224は瓶と考えた。底部は碁笥底となり、外面には鉄釉を施釉する。225は京・信楽系陶器碗である。細片であるため、径復



元・傾きには問題を残す。外面には松文を青・緑・暗褐色の絵薬で描く。226・227は土師質土器小皿である。226は底部から短く内湾気味に立ち上がり、口縁端部が先細る形態となる。227は底部から幅広く屈曲し、口縁部は内湾気味に立ち上がる。いずれも底面には回転糸切り痕を認める。高松城様相把握の様相4を中心に確認できる(17世紀後半)。228は土師質土器火消壺である。やや張りを認める肩部から口縁部は短く直立し、端部を丸く収める。底部には丸味を有し、三足を認める。内面上半には煤痕の付着、外面上半は火櫓状の痕跡をそれぞれ認める。229①・②は瓦質の鍋ないし焙烙である。体部は緩やかにカーブを描き、口縁部は大きく開く。内耳を有し、明瞭に貫通する穿孔を2孔認める。高松城様相把握では、様相4ないし5に認める形態となる



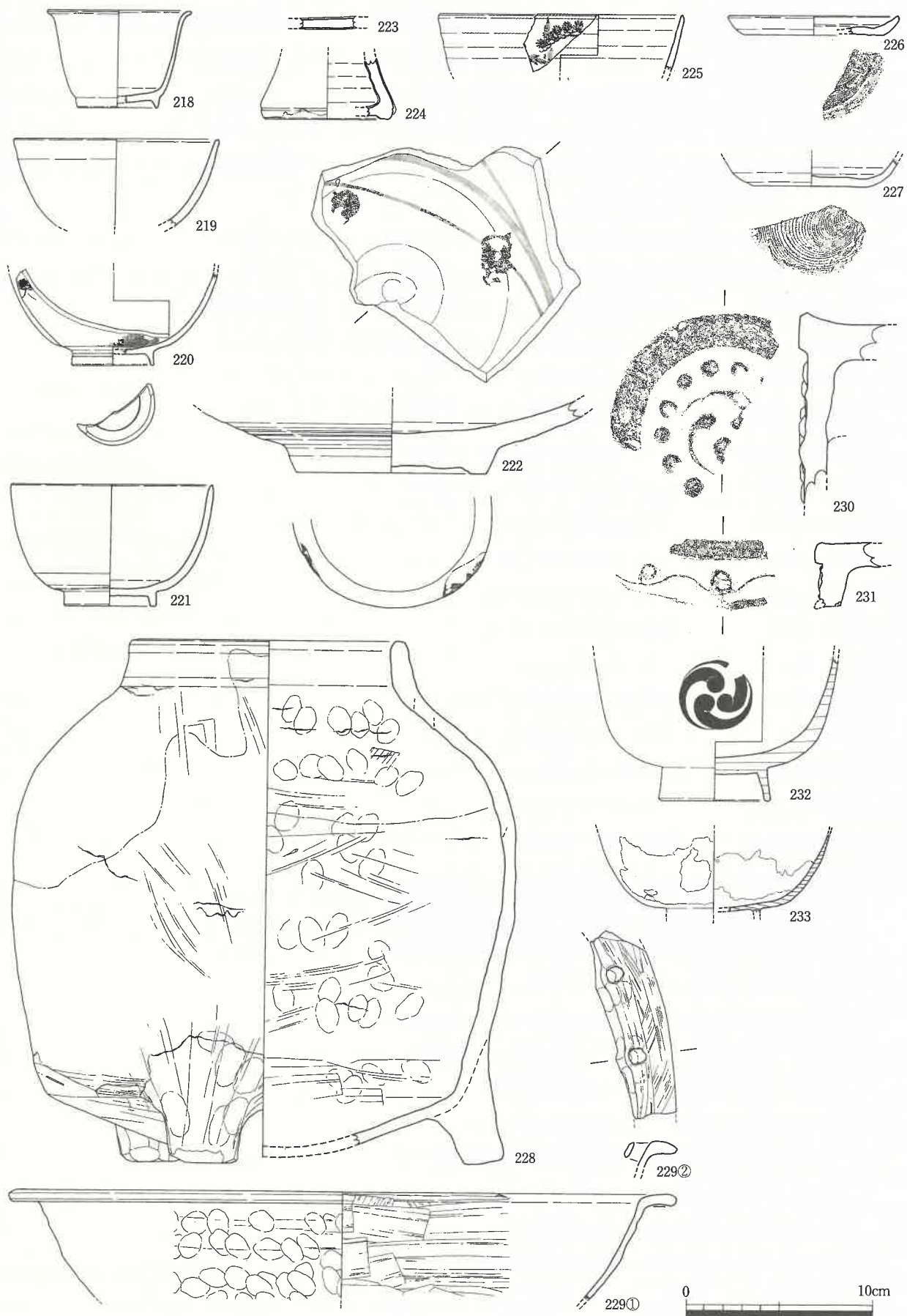
第50図 SK06平面図 (S=1/40)

(17世紀後半、1718～1747年)。230は軒丸瓦である。珠文の脇には特徴的な範傷を認める。231は軒平瓦である。宝珠文を中心飾りとし、唐草は細長く流線状に延びる。232・233は漆器碗である。232は高台が著しく高く、張りを認める腰部から口縁部は直線的に外傾する。内面には赤漆、外面には黒漆を塗布し、外面には巴文を赤漆で表現する。233は内面に赤漆、外面に赤と黒漆を認めるが、その剥落は激しい。

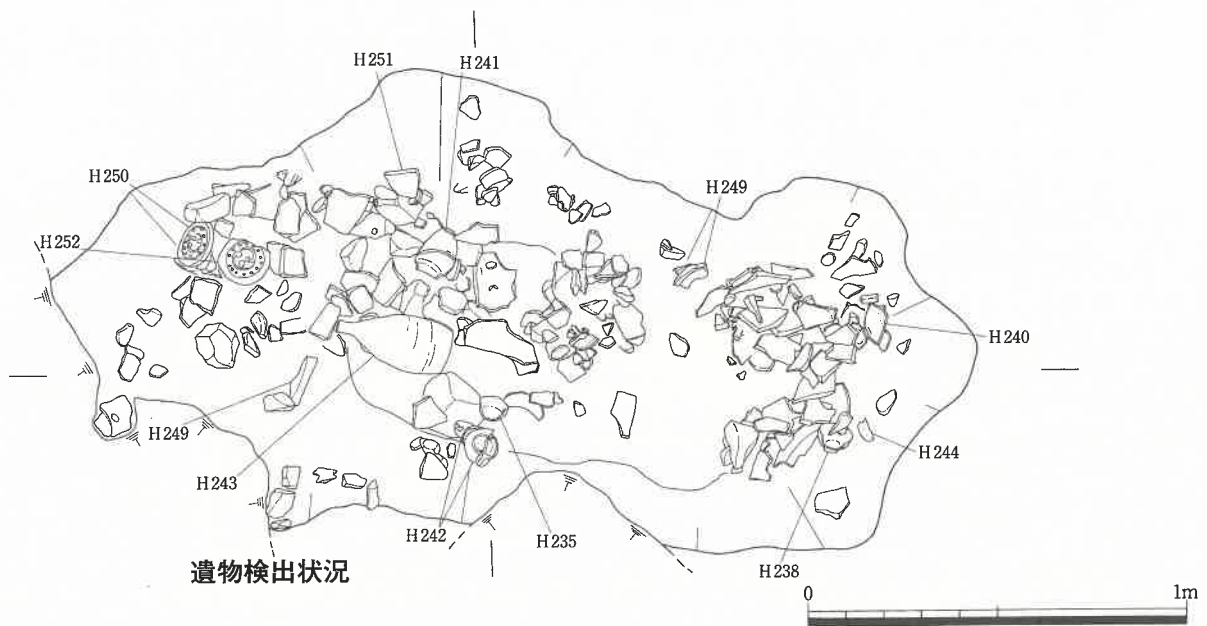
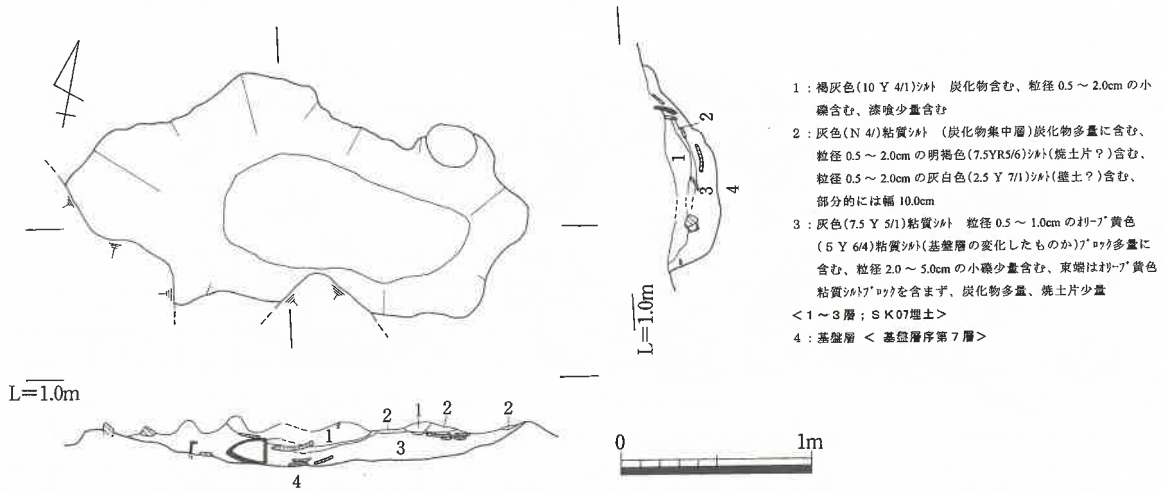
以上、SK06出土遺物は、肥前系磁器では大橋編年Ⅲ期が主体を占め(220、1650～90年代)、Ⅳ期前半に属するものは確認できない(1690～1740年代、例えばコンニャク印判を押印する製品や薄手の半球形碗など)。肥前系陶器も刷毛目碗や呉器手碗は確認できないが、一定量の組成を占め、西の丸町地区における消費状況を参考にすると、様相5まで下るものではないと考えたい(様相5=1718～1747年)。在地産土師質土器もおおむね様相4に併行する(17世紀後半)。よって、SK06には17世紀後半の年代を付与しておきたい。

**SK07** AP52で検出した土坑である。平面形は不整形を呈し、東西長2.5m、南北長1.2mを測る。検出面からの深度は0.35mを測り、舟底状の断面形状を呈する。埋土は下層に灰色粘質シルトが厚く堆積し(3層)、レンズ状に窪むその上面に沿って炭化物・焼土を多量に含む中層を介在し、褐灰色シルトを認める(上層)。SK07からは底面に沿って多量の土器が出土し、第52図に出土状況図を示した。いずれも下層埋土(3層)からの出土となる。完形に復元できる個体を多く認め、一括性が高い土器・陶磁器群と考える。

234～253はSK07出土遺物である(第53・54図)。234～242は肥前系磁器である。234～239は(小)碗となる。234は外面に雨降り文を認め、18世紀前半に位置付けられる。235は高台断面が三角形となり、外面3方向に野菜文様ないし松文をコンニャク印判で押印する。236は高台断面がU字形を呈し、外面にははず違いで桐葉文を3方に押印する。237は高台断面が三角形を呈する碗である。外面には草花文を描き、口縁部内面には不明溶着痕を認める。後述するSK08と接合関係を有し、埋没時の共時性を想



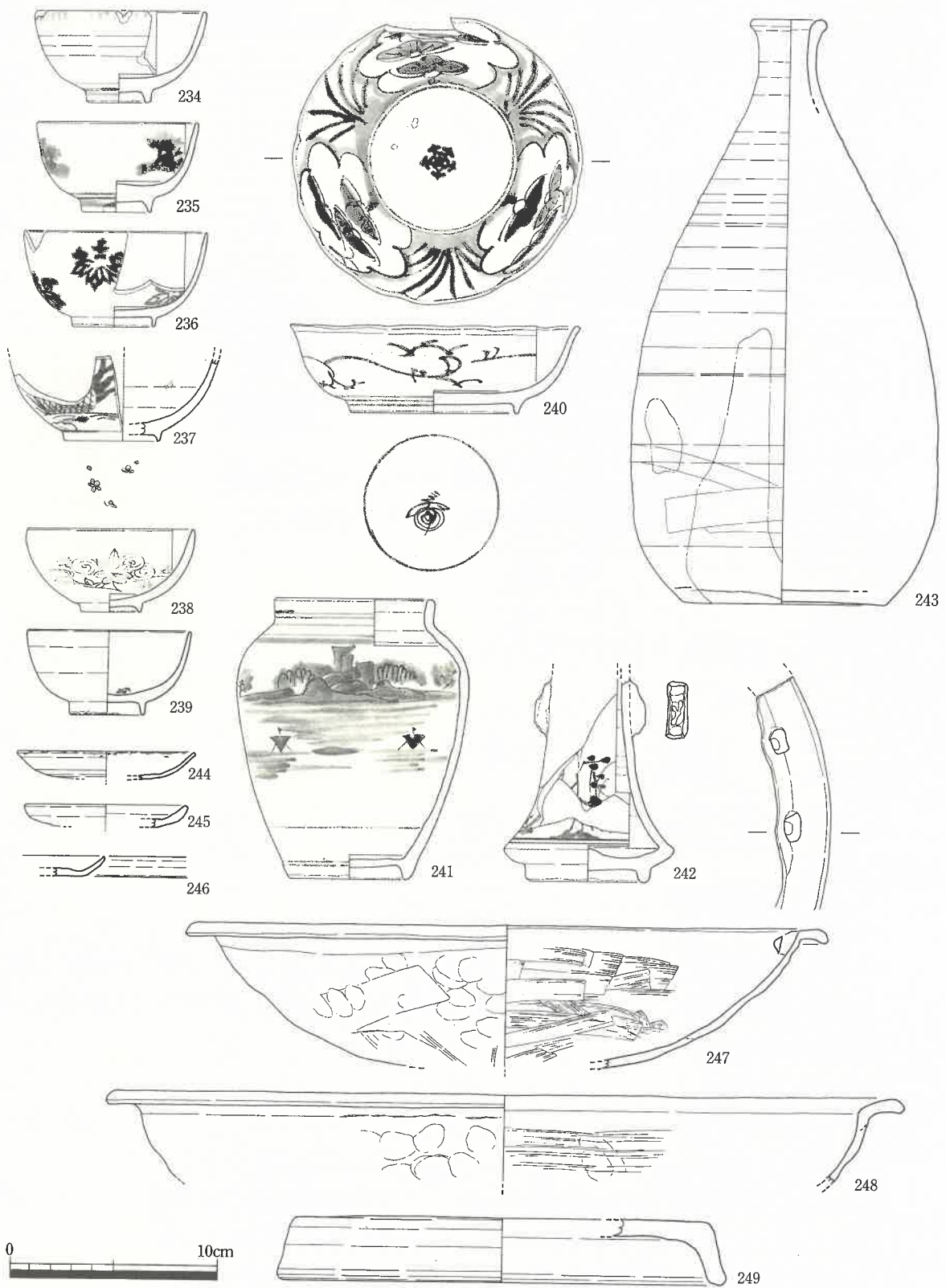
第51図 SK06出土遺物 (S=1/3)



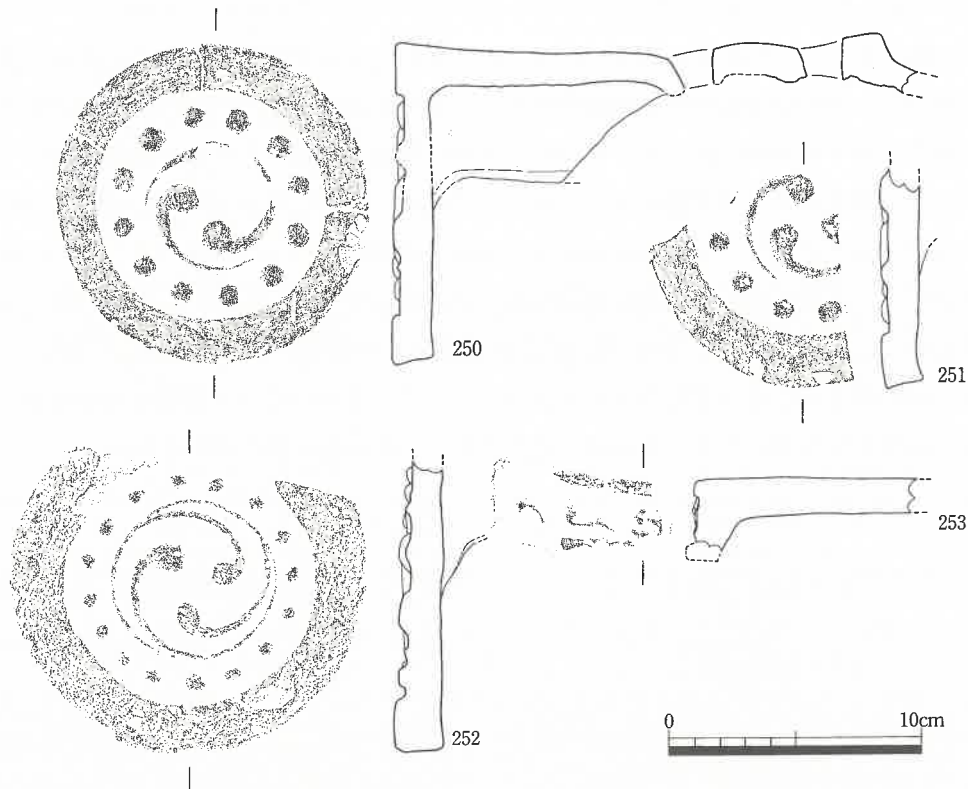
第52図 SK07平・断面図及び出土状況 (S=1/40、1/20)

定することができる。238は色絵碗である。高台断面は三角形を呈し、外面には赤色絵葉により紅葉文を描く。見込みにも同絵葉を用いた花びらを認め、傷隠しと考える。239は白磁碗である。高台は高く、U字形の断面形状となる。仔細に観察したが、色絵は確認できない。240は型打成形の輪花皿である。口縁部内面には松文を描いた雲窓を3方に認め、その間には草花文を描く。見込み中央には五弁花を押印する。外面には唐草文を丁寧に描き、高台内には粹無しの渦福を認める。18世紀前半~中葉。241は壺とした。肩部に張りを有し、口縁部は短く直立する。端部は無釉であり、蓋付きの製品であったことが窺える。外面には楼閣山水文を描く。242は瓶である。体部はスカート状に開き、強く屈曲して底部に連続する。棒状の把手を貼付し、外面には型押成形による簡略化した草花文を表現する。体部外面には草花文を描く。243は備前徳利である。下膨れ形態となる体部から頸部は細く締め、口縁部は小さく外反する。外面には火襷を認める。244は備前系陶器灯明皿である。端部には煤の付着を認める。245・246は土師質土器小皿である。245は底部からにぶく屈曲し、口縁部は短く内湾気味に開く。高松城様相把握では様相5ないし6に認める器形である(1718~1747年、18世紀第3四半期)。246は底部か





第53図 SK07出土遺物1 (S=1/3)



第54図 SK07出土遺物2 (S=1/3)

らにぶく屈曲し、口縁部は細く直線的に外傾する。端部を上方へ鋭く引き出すことにより外端面を形成する。様相4ないし5に認める形態である。247・248は瓦質焙烙である。底部から連続して直立傾向を認めない体部から口縁部は大きく開き、端部を斜め下方へ垂下させる。247には内耳を有し、明瞭に貫通する穿孔を認める。佐藤編年A I - 1型式の所産となる（佐藤2001b、以下焙烙に関しては同文献に依拠する）。249は土師質土器火消壺蓋である。250～252は軒丸瓦である。250は珠文数が12を数え、巴尾は細長く伸び、円形を指向するように巻き込む。252は珠文径が小さく、その数も16個と多い。尾は極めて長く伸び、径6.5cmの円を作り出す。253は軒平瓦である。中心飾りとして巴文を認め、唐草は短く2転以上する。

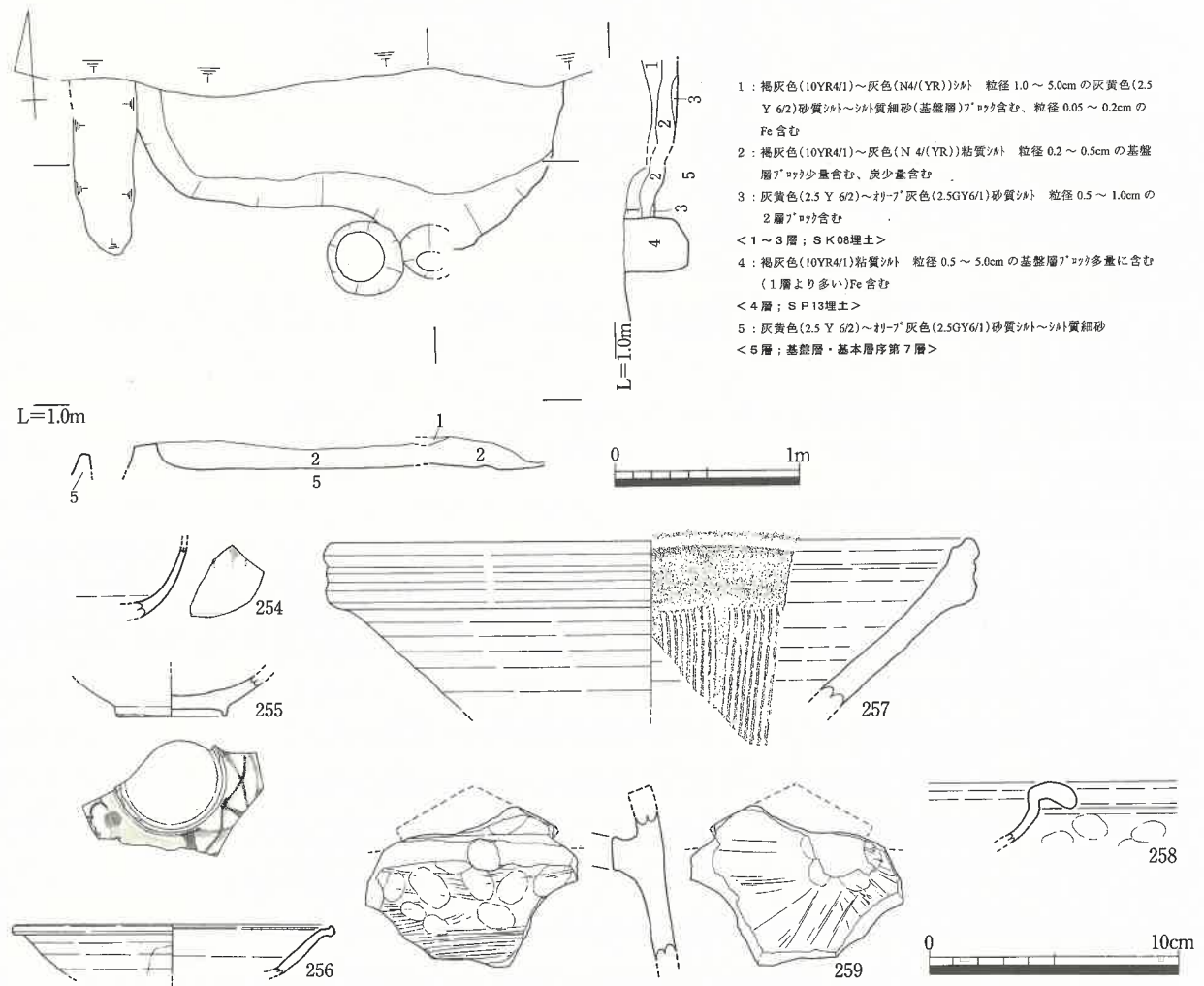
以上、SK07出土遺物は肥前系磁器では、大橋編年IV期前半に位置付けられる製品で構成され（1690～1740年代）、18世紀前半の年代を想定することができる。在地産土師質土器小皿も西の丸町地区における様相5に併行し（1718～1747年）、焙烙も年代的に矛盾はない。備前系陶器灯明皿の存在も首肯できる。よって、SK07出土遺物には、18世紀前半の年代を付与することができる。

**SK08** AP52グリットで検出した土坑である。北半は調査区外へ延長し、幕末～19世紀末に位置付けられるSP13に先行する重複関係を有する。検出した限りでは隅丸方形の平面プランを呈し、東西幅2.3m、南北検出長1mを測る。底面が水平な断面形状を呈し、埋土は褐灰色～灰色シルト層で構成される。いずれの埋土にも基盤層ブロックを含有し、比較的短期間に埋め戻されたと考えられる。

254～259はSK08出土遺物である。254・255は肥前系磁器である。254は雨降り文を認める。255は高台断面が三角形を呈する碗である。SK07出土の237と接合関係を認める。256は肥前系陶器溝縁皿であ

る。257は備前摺鉢である。口縁部は三角形に肥厚するが、内面の段は明瞭である。スリメは上端部で5mm以上の間隔を認める。乗岡編年近世2期の所産となる。258は瓦質焙烙である。体部上半は短く直立し、口縁部は「く」字形に屈曲する。佐藤編年における口縁部2に該当する。259は瓦質外耳付き羽釜である。外耳は上端を三角形に成形し、その内側にある口縁部には円孔を認める。

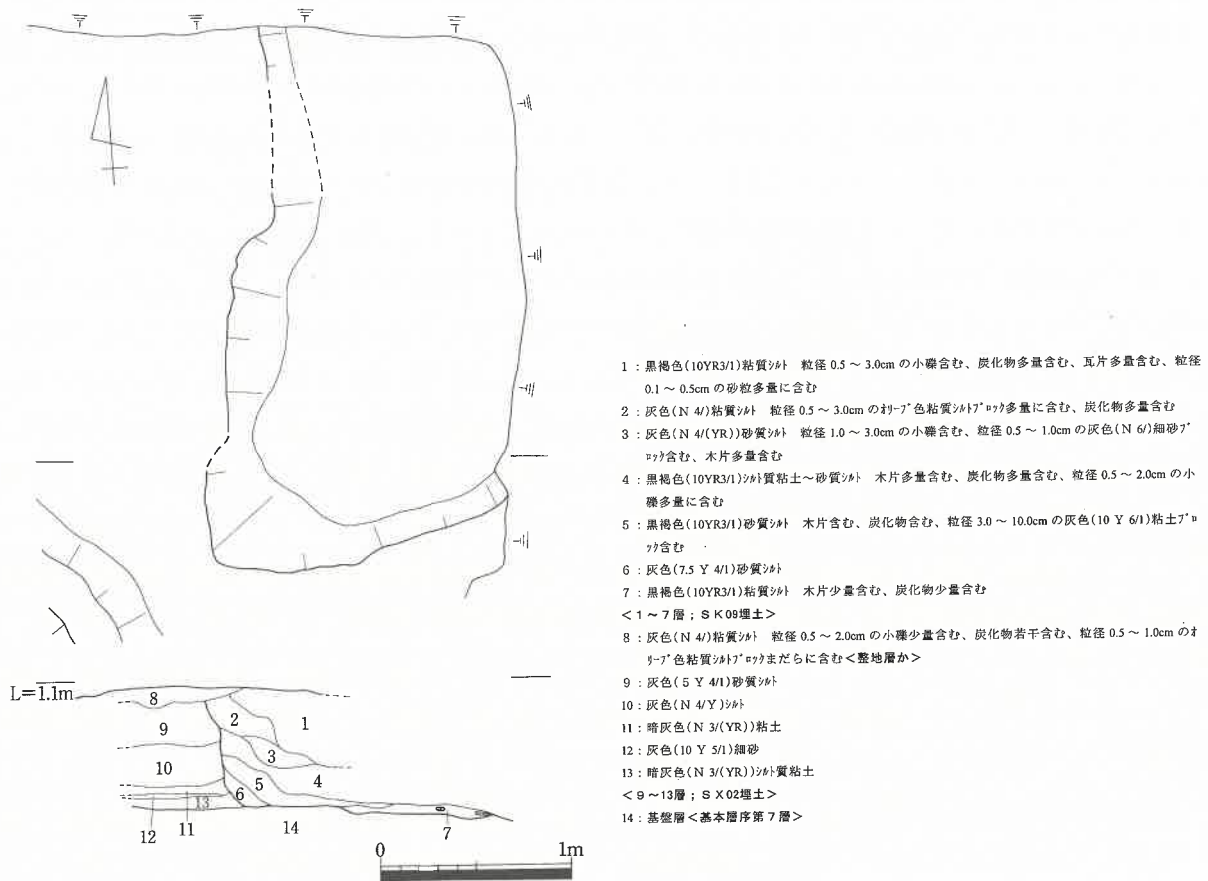
以上、S K 08出土遺物は、肥前系磁器が大橋編年Ⅳ期前半、備前摺鉢が乗岡編年近世2期に位置付けられ、18世紀前半の年代を付与することができる。肥前系陶器溝縁皿は、長期使用による廃棄か、混入品か判断できないが、後者である可能性を想定したい。さらに、前記したように18世紀前半の一括性の高い土器・陶磁器を含むS K 07出土遺物(237)と接合関係を確認した肥前系磁器碗(255)の存在が示すように、S K 08の埋没年代を18世紀前半に位置付けることに問題はない。焙烙は18世紀第4四半期～19世紀前半期の所産となるが、こうした状況を考慮すると、混入品と理解できよう。



第55図 S K 08平・断面図及び出土遺物 (S=1/40、1/3)



S K 09 調査区北東隅、A V 52~53グリットで検出した土坑である。検出した限りでは、南北と東西に直線的な掘方を認め、箱形の断面形状を呈する。埋土は細分可能であるが、いずれも炭化物を多量に含有し、灰色ないし黒褐色粘質シルトを基調とする。比較的短期間の埋没が想定でき、人為的な廃棄土坑の可能性が高い。隣接する地点を高松市教育委員会が調査を行い、S K 09に連続する遺構が確認されている（大嶋2002、S K 123）。これを含めた内容を記すと、平面形は隅丸方形を呈し、東西幅約4.5m、南北検出長3.5mを測ることになる。



第56図 S K 09平・断面図 (S=1/40)

260~332はS K 09出土遺物である（第57~60図）。260は土師質土器碗形土器である。突出する底部から口縁部は明瞭に屈曲し、内湾気味に立ち上がる。底面には回転ヘラ切り痕を認める。端部には煤が付着し、灯明具としての機能を想定できるが、日下氏は何らかの祭祀具であったと推測されている（日下1998）。261~273は肥前系磁器である。261~263は紅皿である。261は型押成形による。262・263は外面に笹葉文を認め、後者の簡略化は激しく、器形の差異にも対応する。264は小碗である。外面には笹葉文を描く。265・266は小杯である。265は口縁部がわずかに外反し、端部は先細る。外面には若松文と梅花文を描き、遺存しない箇所には竹文を描く可能性が高い。266は直線的に外傾する口縁部に連続する高台を有し、手描きによる草花文を認める。267は蓋物である。外面には蛸唐草文を描き、端部は無釉となる。268~272は碗である。268・269は薄手の半球形碗で、270もその可能性が高い。268は外面に若松文、269は内外面ともに氷裂文を地詰文とし、円窓内に薄を描く。270は色絵碗である。底部は遺存しないが、底部に向けて漸次肥厚する。外面には赤・赤黒色の絵葉を用いた草花文を認める。272は青

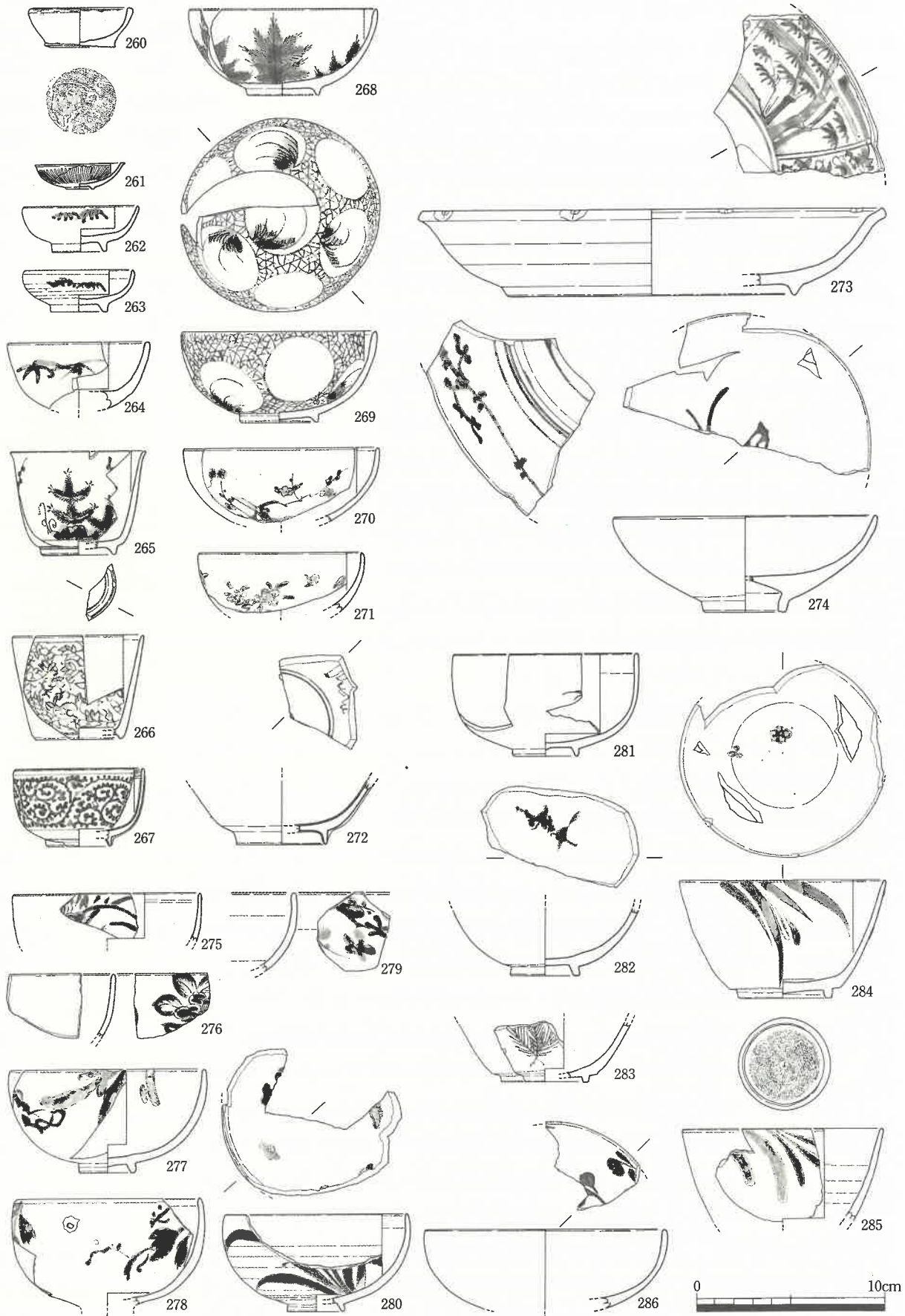
磁染付の朝顔形碗である。高台は細長く延び、口縁部は直線的に外傾する。外面は青磁釉、内面は染付により不明文を施した後、透明釉を施釉する。見込み中央にはコンニャク印判の可能性が高い五弁花を押印する。273は皿である。口径24.8cmを測り、口縁端部は小さく外反する。口縁部内面には区画文内に竹文・草花文を施す。274は肥前系陶器皿である。高台内の挟り込みは高台脇に比して深く、逆台形の横断面形状となる。275～285は京・信楽系陶器碗である。275・276は緑・暗緑灰・黒・金色の絵薬を用いて、外面に草花文を上絵付けする。277は高台径が小さく、口縁部は内湾気味に立ち上がる。外面には銹絵と上絵を認め、上絵には赤・緑色の絵薬を用いる。278は淡黄色の色調を呈する陶器質な胎土に濁黄灰色の色調の灰釉をやや厚く施釉する。外面には透き通る緑色の絵薬を用いた上絵付けにより草花文を描く。279は「金」色絵薬の使用は確認できないが、胎土・釉調は275・276に共通する。280は「八」字形に開く高台から口縁部は内湾気味に立ち上がる。外面には緑・赤・青色絵薬による菖蒲文を認める。見込みには上絵による花びら文により、焼成時に生じた傷をカバーしている。281は銹絵碗である。高台径はやや大きく、腰部に張りを認め、口縁部は直立する。外面には簡略化した草花文を認める。282は丸碗である。283～285は小杉碗（枅形碗）である。283は灰釉を施釉する前に白泥を塗布し、外面には銹絵による若松文を認める。284・285は同一個体の可能性が高い。口縁部は内湾気味に開き、高台内縁部には「京岩倉山」の刻印を認める。外面には菖蒲文を緑・赤・青色絵薬により上絵付けし、見込みにも花びらを上絵付けする。286は平碗である。口縁部内面には草花文を上絵付けする。287～291は瀬戸・美濃系陶器である。287は灰釉丸碗である。口縁部は内湾気味に開き、腰部に張りを認めない。288は腰鎗碗である。289は火入れである。口縁端部は内側に三角形に肥厚し、口縁部外面には灰釉、体部外面には鉄釉を施釉する。290・291は鬘水入れである。290は長側面に草花文を銹絵で描く。292～294は備前系陶器灯明皿である。口径8.4cmと10.7cmの法量を確認し、前者には仕切を有する個体もある。295は備前瓶である。肩部と口縁部境に三角形の段を認め、遺存する限り口縁部は内傾する。296は施釉陶器鉢である。ボール状の体部から口縁部は「く」字形に屈曲し、端部を上方へ折り返す。端部には把手を有する。外面上半及び内面には鉄釉を施釉する。297は焼塩壺である。板作り成形。口縁端部は印籠合わせとなるが、その突出は低い。外面には一重枠内に「泉州磨生」の刻印を認める。298は瓦質羽釜である。口縁部はわずかに内傾し、上端面は四角く収める。299～302は瓦質焙烙である。口縁部形状は体部から緩やかなカーブを描き、口縁部に至る形状（301、佐藤分類口縁部1）と体部上半が短く直立し、口縁部に繋がる形状があり（299・300・302、口縁部2）、時期差を反映する。内耳が遺存する299では明瞭に貫通する穿孔を認め、佐藤編年A I - 2ないし3型式の所産となろう。301はA I - 1ないし2型式に該当する。303は瓦質甕とした。口縁部は直線的に内傾し、端部は三角形に肥厚する。口縁部外面には六角形スタンプの連続する押印を認める。304は施釉陶器煙管吸口である。脂返しを赤色絵薬で表現し、外面には灰釉を施釉する。305は軟質施釉陶器ミニチュア摺鉢である。口縁部は直線的に外傾し、端部のみ小さく直立する。内面にはスリメを認める。外面は無釉であるが、内面には柿釉を施釉する。スリメの特徴から備前摺鉢を模倣したものと理解できる。306は軟質施釉陶器橋であろう。板材を表現した沈線を施し、欄干を棒状紐材を貼付することにより表現する。表面には緑色釉の点掛けを認め、灰釉を施釉する。307～312は土師質土器土製品である。いずれも前後型合わせによる成形がなされ、器表面にはキラコの塗布を認める。307は祠である。内部には天神を祭る。308は襟人形である。308は着流し立身像である。310は笠持ち人である。311は子連れ立身像である。312は飾り馬である。鞍・鐙・手綱等を丁寧に表現する。313は軟質施釉陶器猿である。手捏ね成形がなされ、緑釉の点掛け

→透明釉ないし灰釉の施釉を認める。あぐらを組み、手には笠を持つ。314は軟質施釉陶器不明製品である。型押成形により、表面は菊花状をなし、光沢のあるにぶい橙色の釉薬を施釉する。裏面には「三」を刻む。315～317は軒平瓦である。中心飾りは半裁花菱文となり、317にはキラコの塗布を認める。318は軒棧瓦である。平部の中心飾りは逆ハート文、丸部は巴文となる。319～321は漆器椀ないし蓋である。319は小さく直立する把手を有し、口縁部は撥高台碗蓋状の形状を呈する。外面には黒漆、内面には赤漆の塗布を認める。320も漆の塗布内容は319と等しく、外面には赤漆により鞠文ほかを描く。321も320に酷似し、赤漆により帆船を描く。322は櫛である。323～326は墨書木簡である。その形状は板状を呈し、326は上端部付近の両脇に三角形の切り込みを入れ、先端部となる323・325は隅角を切り落とす処置がなされる。327～330は銅銭である。いずれも寛永通宝となり、329・330の裏面には「大」ないし「丈」の陽刻も認める。331は銅製煙管雁首である。332は石製硯である。墨堂側となり、縁部には削り込みを施す。墨堂には擦痕ないし研磨痕を認める。

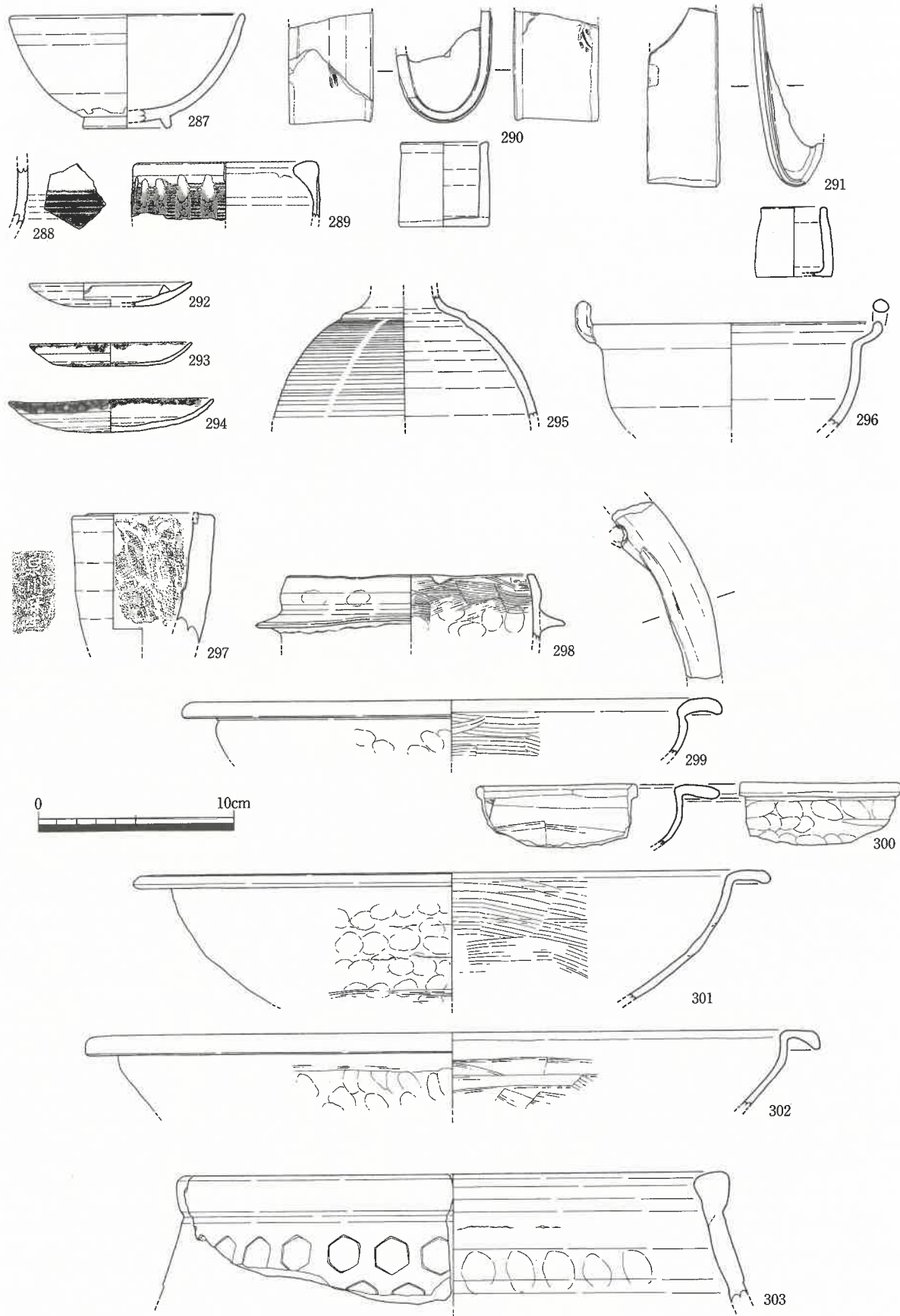
以上、S K 09出土遺物は比較的まとまった様相を示す。肥前系磁器では、薄手の半球形碗（268～270）、小杯（265・266）、皿（273）は18世紀前葉～中葉の所産となり、紅皿（261～263）、蓋物（267）、青磁染付碗（272）は18世紀後半の所産となる。京・信楽系陶器は年代的位置付けが困難であるが、肥前系磁器が示す18世紀第3四半期の年代に併行する西の丸町地区の状況と対比すると（高松城様相把握一様相6、松本2002b・c、2003）、277・280・281は様相6出土資料に近似した内容となるが、その他は、器形・胎土・「金」色絵薬の使用・刻印内容において、様相6に先行する状況を呈する。肥前系磁器にも一定量の18世紀前半期の所産を認め、呼応した現象とも理解できるが、搬入状況や廃棄パターンの差異を念頭に置くと問題は複雑化する。瀬戸・美濃系陶器では、287が器形より柳茶碗の可能性もあり、最も新しく位置付けられる（18世紀第4四半期）。備前系陶器では、底部に回転糸切り痕を認めない灯明皿で構成されており、西の丸町地区との比較では様相6に併行した内容となる。一方、在地産土器では、焙烙において示唆的な内容を示す。佐藤分類口縁部1と口縁部2の割合をみると、提示した内容では、後者が前者を圧倒的に上回る。様相6の基準資料とした西の丸町C地区S X c 13・14資料では、逆に、口縁部1が主体を占め、口縁部2は極めて少なく、高松城様相把握における様相6基準資料よりは後出的な要素となる。上記した内容を踏まえると、S K 09出土遺物は京・信楽系陶器において、やや古相の様相を示すが、おおむね18世紀後半に位置付けられ、高松城様相把握における様相6にわずかに後出する内容となる。ここでは、18世紀第3四半期～第4四半期前半に位置付けておきたい。

また、隣接して高松市教育委員会による発掘調査が実施されており、S K 09に連続する遺構が確認されている（S K 123、大嶋2002）。500点近い土器・陶磁器・木製品が掲載され、高松市教育委員会のご厚意により、その実見もさせて頂いた。大多数は18世紀第3四半期に位置付けられ、18世紀第4四半期の指標となる広東碗は確認できない。しかし、在地産土器である焙烙において、内耳に穿孔を認めるが、そのかろうじて貫通するものや貫通しないものも含み、18世紀第3四半期より後出的な要素となる。陶磁器でも小丸碗の可能性のある個体（大嶋2002・報文番号342）や器形の矮小化が著しく、若松文の簡略化が激しい京・信楽系陶器（大嶋2002・報文番号629）が新しい様相を示す焙烙に対応する可能性が高い。よって、連続する遺構の埋没年代としては、対応するものと理解できる。また、その性格については、S K 123より漆器椀、曲物、箸の多量出土を認め、饗宴後の片付けに伴う一群の可能性が指摘される（大嶋2002）。S K 09出土遺物にそれを否定する材料はなく、その見解に同調しておきたい。





第57图 SK09出土遺物1 (S=1/3)

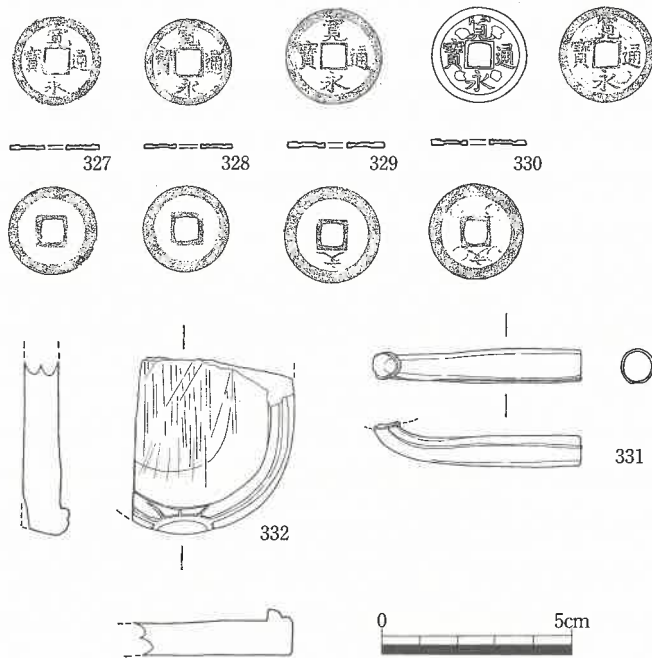


第58図 SK09出土遺物2 (S=1/3)



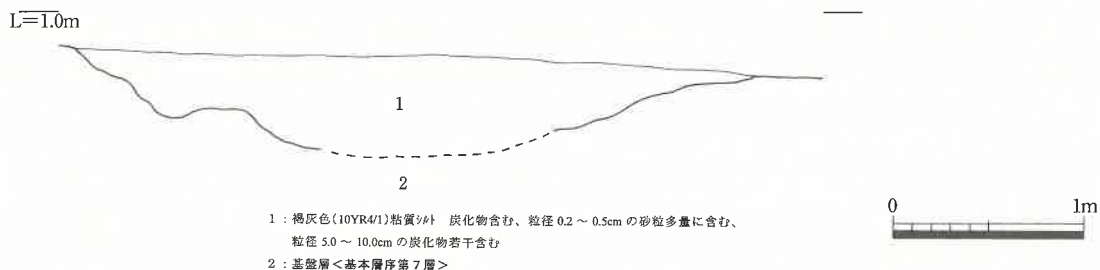
第59図 SK 09出土遺物3 (S=1/3)





第60図 SK 09出土遺物4 (S=1/2)

SK 10 AK51グリットで検出した土坑である。本遺構の南半部には攪乱が及び、北半は調査区外へ延長するため、全容は不明である。断面観察を中心とした検出となり、可能な限り遺物の回収に努めた。東西幅1.8mを測るが、どの部位におけるセクションかは明らかではないものの、舟底状の断面形状を呈する。埋土は主としてブロック土で構成され（褐灰色粘質シルト）、炭化物を多量に包含することから、短期間での人為的な埋め戻しが想定でき、廃棄土坑と考えられる。



第61図 SK 10断面図 (S=1/40)

333~447はSK 10出土遺物である。観察表遺構名において、「SK 10」と「SK 10周辺」という表記がある。前者は確実にSK 10の埋土から出土したものであるが、後者は一部攪乱を被る箇所から出土したものである。出土遺物に顕著な差異を見出せないため、ここでは一括して報告する。

333~359は肥前系磁器である。333~336は紅皿である。333は外面に笹葉文、334は花奔文を描く。335・336は型押成形による。337・338は小碗である。337は外面に笹葉文を描く。338は薄手の半球形碗である。18世紀前半~中葉。339・340は筒形碗である。339は内面縁文様に四方禪文、外面には竹文を描く。18世紀後半。340は平高台の中央部にケズリ込みを行ったような高台を有し、内外面には青磁釉を施釉する。341~347は小広東碗である。1770~1810年代。外面文様は、341・342が不賊文、343が四

方禪文（縁文様）、井桁文、344・345が竹文、346が区画文・草花文を染付で描く。347は「誰か色を見せん」という文字を外面に上絵付けし、見込みにも不明文字を上絵付けする。絵葉は橙色と暗赤褐色の色調を呈する。348は外面にコンニャク印判を認める碗である。三方向に四弁花を菱形文で囲った文様を押印する。18世紀中葉。349・350は梅樹文を描く粗製の碗である。18世紀中葉前後。350は高台内に形骸化した款銘を認める。351は丸碗である。外面には七宝繋ぎ文を描く。352～354は青磁染付碗である。352は丸碗、353・354は朝顔形碗となる。同遺構から蓋の出土は確認できないが、蓋付き碗となる。18世紀後半。355・356は撥高台碗（腰張+八字高台碗）である。355は外面に雲窓を認め、窓内に楼閣山水文を描き、間には草花文を認める。356は外面に梅に鶯文を描く。18世紀後半。357は粗製の碗である。器高が低く、口径が大きい形態となる。見込みには蛇の目釉剥ぎ→アルミナ砂の塗布を認める。358・359は広東碗である。1780～1820年代。358は外面に梵字文、359は瓢箪・野菜文を描く。360は碗であるが、形態的に違和感を抱く。高台はわずかに「八」字状に開き、底口縁部境は極めて厚い。見込みには二重圈線を認めるが、その中央部に五弁花等は確認できず、高台内には「卍」文を描く。肥前系磁器。361～366は瀬戸・美濃系陶器碗である。361は鍔手碗である。内面および口縁端部外面には鉄釉、口縁部下半には飛鉋を施した後、銹釉を施釉する。362は灰釉丸碗である。口縁部は内湾気味に直立し、下半に沈線を認める。363は拳骨碗であろう。蛇の目高台状を呈し、畳付には回転糸切り痕を認める。内面には灰釉、外面には鉄釉を施釉し、長石釉散らしも認める。364は刷毛目碗である。腰部に張りを認めず、大きく外傾した後、口縁端部のみ小さく直立する。浅黄色の色調の胎土が選択され、内面には直線的な刷毛目、外面には打ち刷毛を施す。365は柳茶碗である。内外面には暗灰色の灰釉を施釉し、外面には簡略化した柳を認める。366は腰鏝碗である。367～378は京・信楽系陶器碗である。367～373は半球形碗である。器形では腰部に張りがなく、口縁部を内湾気味に収めるもの（367～372）と腰部がやや張り、口縁部が小さく直立する形態を認めるが（373）、顕著な差異ではない。灰白色の色調を呈する緻密な胎土が選択され、淡緑灰色の灰釉を施釉する。上絵付けには赤色と緑色絵葉により笹葉文を描き、368には半裁花びら文も認める。374～378は小杉碗（枳形碗）である。小型化・矮小化が激しく、外面に銹絵で描く若松文の簡略化も進行する。378の高台内には「二十〇」の墨書を認める。379は肥前系陶胎染付碗である。畳付には砂の付着を認める。380・381は肥前系磁器蓋物である。380は腰部の張りが強く、口縁部は直立する。18世紀後半。381は体部から強く屈曲し、口縁部は直立する。高台断面形状は三角形を呈する。382は瀬戸・美濃系陶器火入れである。口縁部は直立し、端部は内側に肥厚する。外面下半には飛鉋を施した後銹釉を施釉し、口縁部には鉄釉を認める。383は軟質施釉陶器火入れである。口縁部は直立し、端部を内側へ折り曲げる。外面には下絵として、緑色と暗灰黄色の絵葉による草花文を描き、透明釉を薄く施釉する。口縁部上端面は顕著な敲打痕を認め、火入れないし灰吹としての性格を反映する。384～388は肥前系磁器碗蓋である。384・385は撥高台碗蓋となる。384は外面に雲窓を3方に配し、松竹梅文をそれぞれ窓内に描く。内面には丁寧な松竹梅繋ぎ文を認める。385は外面に葵文、天井部に抽象的な文様をそれぞれ描く（宝文か）。386は摘みから緩やかに口縁端部まで連続する形態を呈する。外面には線描きによる細かな楼閣山水文を認める。387は広東碗蓋である。外面には「寿」文を配する。388はかえりを有する蓋で、かえりにはアルミナ砂の塗布を認める。

389～393は肥前系磁器皿ないし鉢である。389は見込みにコンニャク印判による五弁花を押印し、口縁部内面には草花文を描く。高台内には形骸化した款銘を認める。390は口縁部が大きく開き、高台径の小さい形態を呈する。見込みには蛇の目釉剥ぎ→アルミナ砂の塗布を認め、口縁部内面には簡略化し

た草花文を描く。391は型打成形の輪花皿である。口縁端部は口鏽となり（鉄釉）、見込み全体を1枚のキャンパスとして楼閣山水文を描く。392は口縁部が中位で屈曲し、再度大きく開く形態を呈し、口縁部内面下半には縦方向の鎬状の抉りを認める。型打成形。口鏽。外面には山水文、口縁部内面には八卦、見込みには楼閣山水文を描く。393は口縁部から緩やかに外反し、端部のみ強く端反る。型打成形により、内面は多面体となり、外面には葉文、見込みには柘榴文の可能性が高い草花文を描く。破損面には漆継の痕跡を認める。394・395は瀬戸・美濃系陶器片口鉢である。口縁部は内湾し、端部外方を斜め上方へ摘み上げる。396は瀬戸・美濃系陶器鉢である。口縁部は直線的に外傾し、端部を「く」字形に折り曲げる。397は瀬戸・美濃系陶器水甕である。外面には列点文・片彫りを施し、緑色釉を流し掛けする。398は瀬戸・美濃系陶器甕とした。体部下半に該当し、内湾気味に立ち上がる。外面には燃糸状の突帯を貼付し、鉄しょうを塗布した後、緑色釉を流し掛けする。399は施釉陶器土瓶である。外面には鉄釉を施し、渦巻文を配した把手を有する。400は軟質施釉陶器蓋である。土瓶蓋か。落とし蓋となり、外面には浅黄色の灰釉を施釉する。胎土は灰白色の色調を呈する粉っぽい素地が選択される。401～404は施釉陶器鉢である。いずれも外面には鉄釉の施釉を認め、ボール形の形態を呈する。401・402には把手を有し、401には3方に配する三足を貼付するが、形骸化する。405・406は軟質施釉陶器鉢である。片口は存在しないが把手を認めることから、行平鍋状の形態であったと推測できる。（灰）白色の色調を呈する締まりを欠く素地が選択され、内面及び外面上半には浅黄色の灰釉を薄く施釉する。外面には入念なヘラケズリないしヘラナデ調整を加える。408～410は堺・明石系摺鉢である。409は見込みに「ウールマーク」状のスリメを施し、410には片口を認める。白神編年との対応では、408がⅡ型式、409がⅡ型式2段階、410がⅠ型式の所産となる。411は肥前系磁器瓶である。口縁部径は小さく、細長く延びる。外面には草花文を描く。412は肥前系磁器青磁仏花瓶である。口縁部は大きく開き、端部は短く直立する。413は施釉陶器瓶とした。体部は直線的に開き、高台はそれに連続する。灰色の緻密な胎土が選択され、外面にはやや光沢を認める灰色の灰釉を施釉する。414は不明施釉陶器瓶である。平高台をなし、底面には回転糸切り痕を認める。胎土の色調は橙色を呈し、外面には塗土を施した後、灰オーブ色の色調を呈する釉薬を施釉する。415～420は備前系陶器灯明皿である。口径8cm前後の一群と10cm前後の一群に大別でき、後者には仕切を認めない製品も存在する。底面には回転糸切り痕を認める（高松城様相把握では、18世紀第3四半期の様相6出土遺物には回転糸切り痕はなく、18世紀第4四半期～1821年の様相7において回転糸切り痕を留める個体が出現する）。421・422は軟質施釉陶器である。いずれも赤色と白色の素地を練り合わせた胎土が選択され、外面には極めて薄く透明釉を施釉する。421は碁笥底の底部片である。422はスカート状に開き、窓を認めるため、焜炉と考えた。体部から連続する高台は畳付幅が1.8cmを測り、等間隔で3箇所へ割り込みを有する。423は施釉陶器把手であろう。別個体から剥落した軸が3箇所あり、棒状の母胎に貼付する。その上面には菊花を貼付し、緑色釉を施釉する。424は軟質施釉陶器橋である。外面には緑色釉の点掛けを認める。306に共通する。

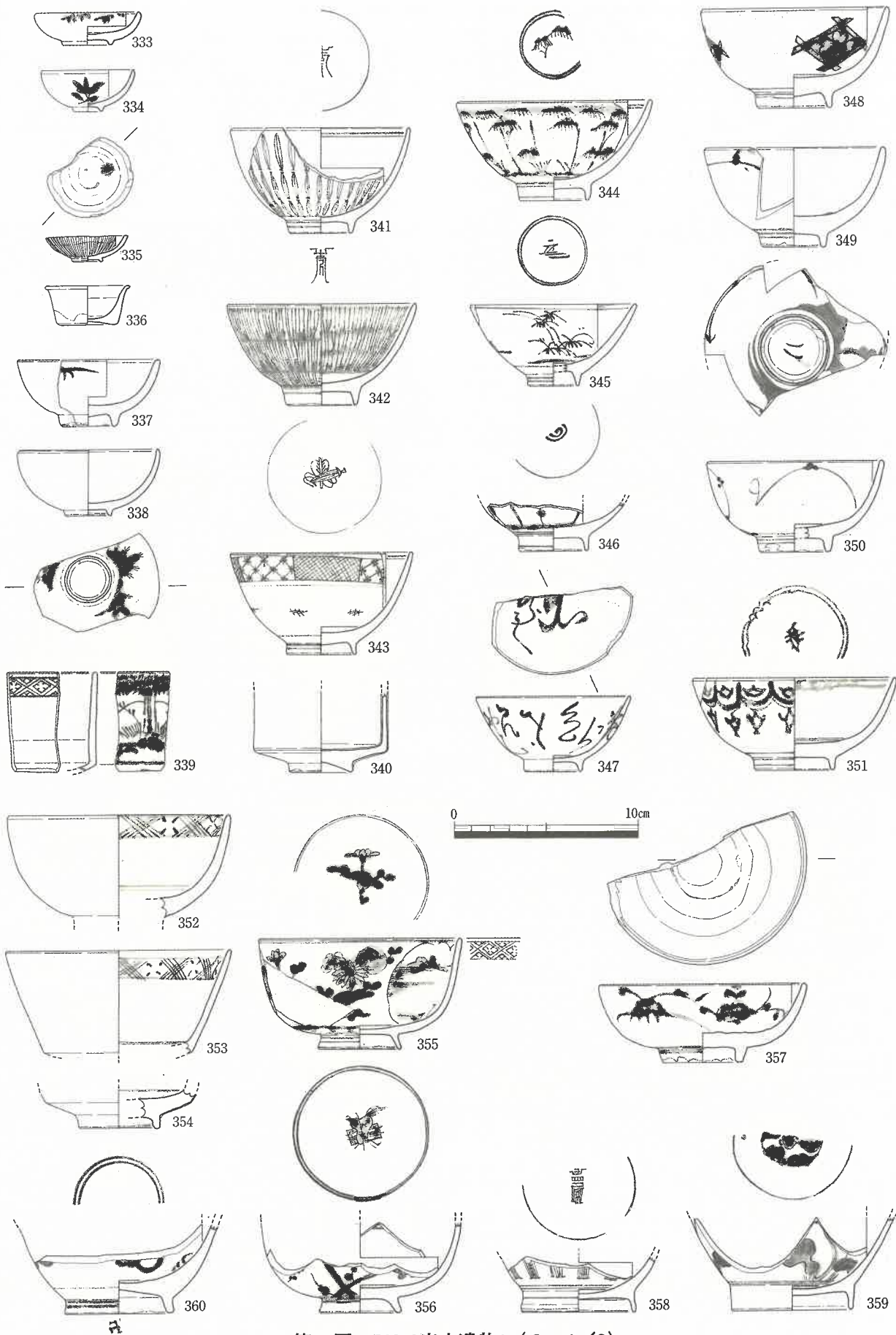
425～428は焙烙である。425～427は体部上半にわずかではあるが、直立する傾向を認め、穿孔に沿う形状に突出する内耳を有する。穿孔は425はかろうじて貫通し、426・427は貫通しない。おおむね佐藤編年AⅠ-3型式の所産となるが、425はAⅠ-2型式の所産かもしれない。428はわずかに直立傾向を認める体部から口縁部は鋭く屈曲し、垂下する。429～432は在地産土師質土器ないし瓦質羽釜である。429～431は口縁部が内湾し、端部を丸く収める。429には縦方向の外耳を有し、穿孔を認める。431は横方向の外耳を貼付し、穿孔する。432は茶釜形の形態を呈し、口縁部は内湾した後、直立する。外面器



表面の剥落は激しいが、ヘラミガキを認める。433は瓦質浅鉢である。三足を有し、口縁部はにぶく「く」字形に屈曲しながら立ち上がり、端部は小さく外反する。口縁部中位には獣面（亀？）の把手を認める。外面には列点文を3段配し、スタンプによる花菱文も認める。器表面にはキラコの塗布を認め、花菱文の存在を考慮すると、瓦製作との強い関連性が指摘できる。434～436は土師質土器甕である。434は直線的に外傾する口縁部となり、端部は四角く収める。外面中位には波状文を認める。435は口径21cm前後を測り、口縁部は直線的に外傾し、端部を内外へ拡張する。外面には波状文を認める。436は直立する体部から口縁部はにぶく屈曲し、端部を内外へ拡張する。口縁部上端面には2条の凹線を認め、体部外面には波状文を施す。いずれも胎土中には角閃石の含有は確認できず、雲母粒を多量に含む特徴的な胎土となる。437は土師質土器火鉢である。体部中位に最大径を有し、緩やかに内湾する口縁部を内側へ強く引き出す甕に「ハ」字形に開く脚部を貼付する。口縁部には六角形に6孔を穿孔し、その中心にも孔を穿つ。内面上半には煤痕を認める。日下分類火鉢・焔炉類ⅡC類に該当する（日下2002b）。438は土師質土器火鉢である。平面形は方形を呈し、口縁部は直立する。口縁部は二重構造となり、内側には円孔を認める。円孔内四隅には受け部となる突起を貼付する。外面には緩やかに円弧を描く突帯を認め、把手となる。押印は認めないが、いわゆる「七助」である。

439～443は軒丸瓦である。439・440は珠文数12を数え、尾は太く円形を指向して巻き込む。441は珠文数14に復元でき、尾は太く、円形を指向せず巻き込む。442は珠文数が14に復元でき、尾は細長く延びる。443は珠文径がやや小さく、巴頭は扁平な形状を呈する。441を除き、瓦当面にはキラコの塗布を認める。444～446は軒平瓦である。444は半裁花菱文、445・446は宝珠文を中心飾りとし、唐草は上下に2転する。いずれも瓦当面にはキラコの塗布を認める。447は石製硯である。

以上、S K 10出土遺物は比較的まとまった資料であり、概報段階にその一部について報告した（乗松編2002）。肥前系磁器では小広東碗（341～347、1770～1810年代）、青磁染付碗（352～354、18世紀後半）、撥高台碗（355・356・384・385）、広東碗（358・359・387、1780～1820年代）、筒形碗（339、18世紀後半）が主要器種構成となり、18世紀後半を中心とした製作年代が与えられ、広東碗の存在により1820年代までの年代を想定することができ、前述したS K 09に後続する時期の所産であることが窺える。瀬戸・美濃系陶器では、S K 09では確認できない刷毛目碗を認める（364）。柳茶碗（365）は藤澤編年本業焼第7小期の所産となる（藤澤1989、18世紀末）。京・信楽系陶器は半球形碗では腰部の張りが弱く、口縁部が内湾する形態が主体を占め、上絵も赤・緑色絵薬による笹葉文にほぼ統一される。こうした内容は高松城様相把握における様相7で確認できる（18世紀第4四半期～1821年、松本2002b）。枳形碗（小杉碗）もその矮小化・扁平化が著しい。摺鉢では備前摺鉢は確認できず、堺・明石系摺鉢白神編年Ⅱ型式の所産となる（408・409、18世紀後半～19世紀初頭）。備前灯明皿では、底部に回転糸切り痕を認めるものが主体を占め、西の丸町地区における状況を参考にすると、18世紀第4四半期～19世紀第1四半期の様相を示す。また、（灰）白色の色調を呈する締まりを欠く胎土に浅黄色の透明釉ないし灰釉を薄く施釉する軟質施釉陶器行平状鍋（405～407）、火入れ（383）を認める。高松城様相把握の様相7において出土量が大幅に増加するものである。一方、在地産焙烙では佐藤編年A I-3型式を中心に認める（425～427）。上記した内容を示す土器・陶磁器構成は西の丸町地区では様相7に対応する。西の丸町B地区における整地面の変遷から導き出された実年代では、文政4（1821）年の火災に伴う廃棄資料となり、下限を1821年と考えることができる。京・信楽系陶器端反碗・灯明皿、瀬戸・美濃系磁器の欠落という問題を残すが、ここでは18世紀第4四半期～19世紀初頭の年代を想定しておきたい。

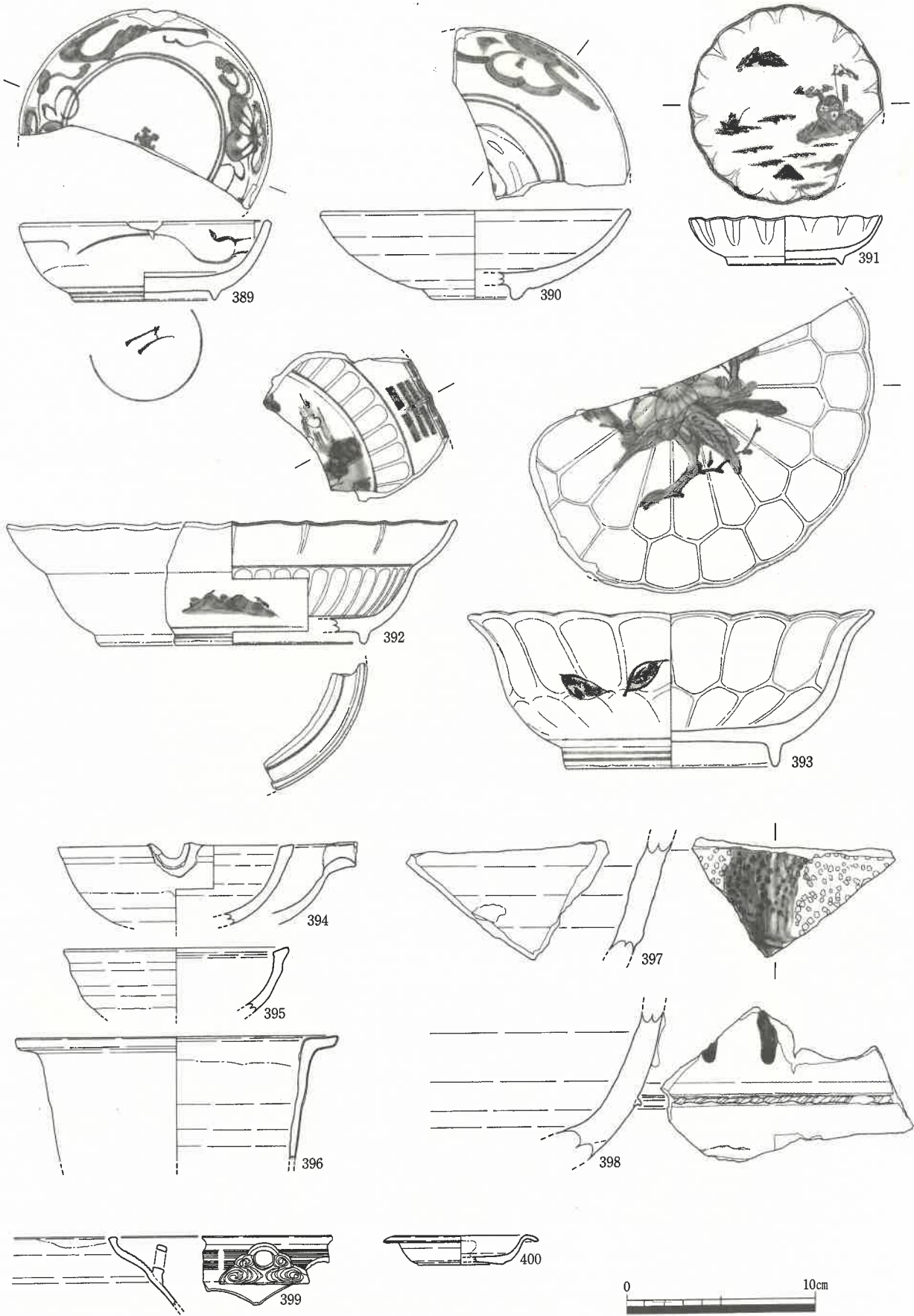


第62图 SK10出土遺物1 (S=1/3)

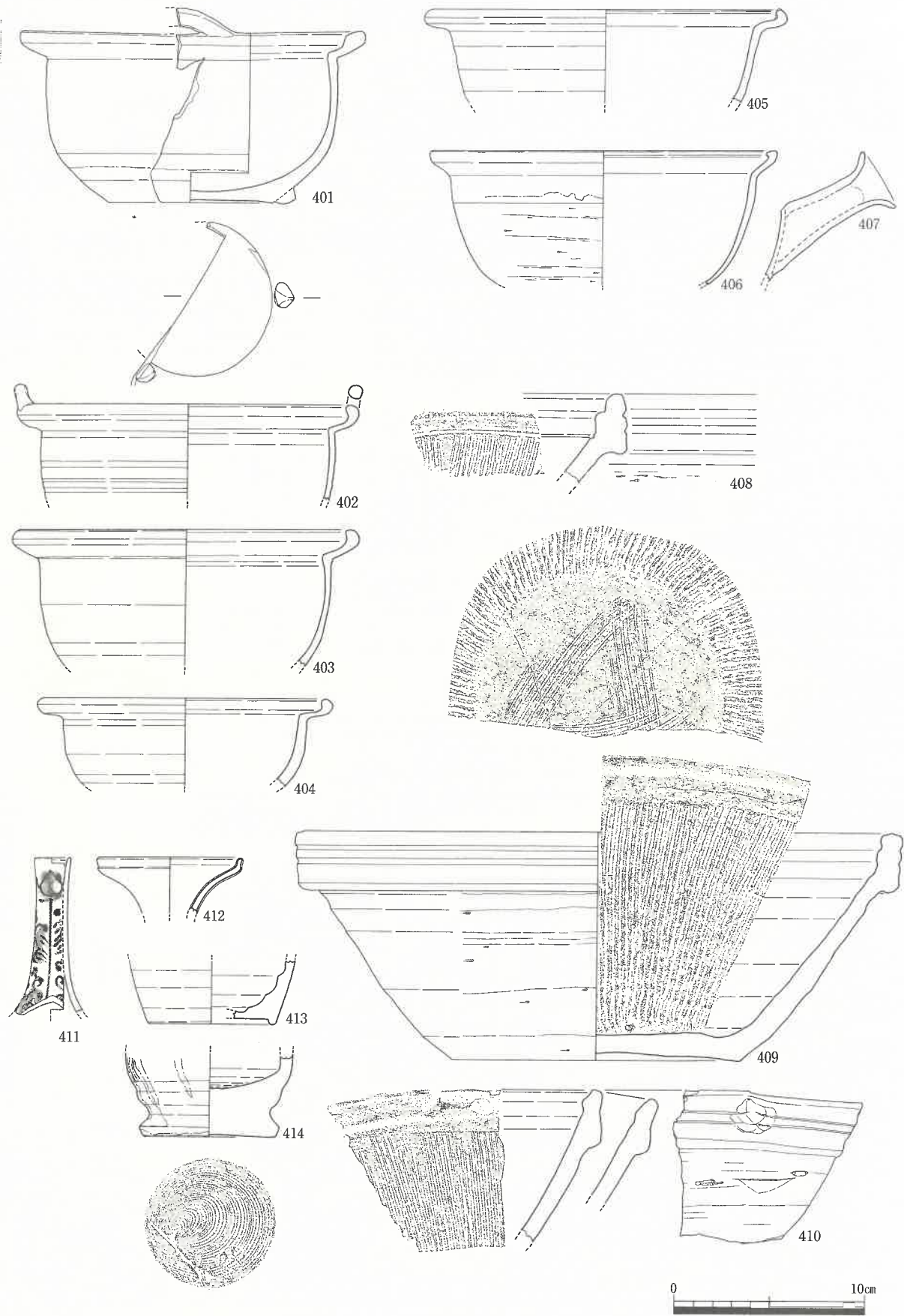


第63図 SK10出土遺物2 (S=1/3)

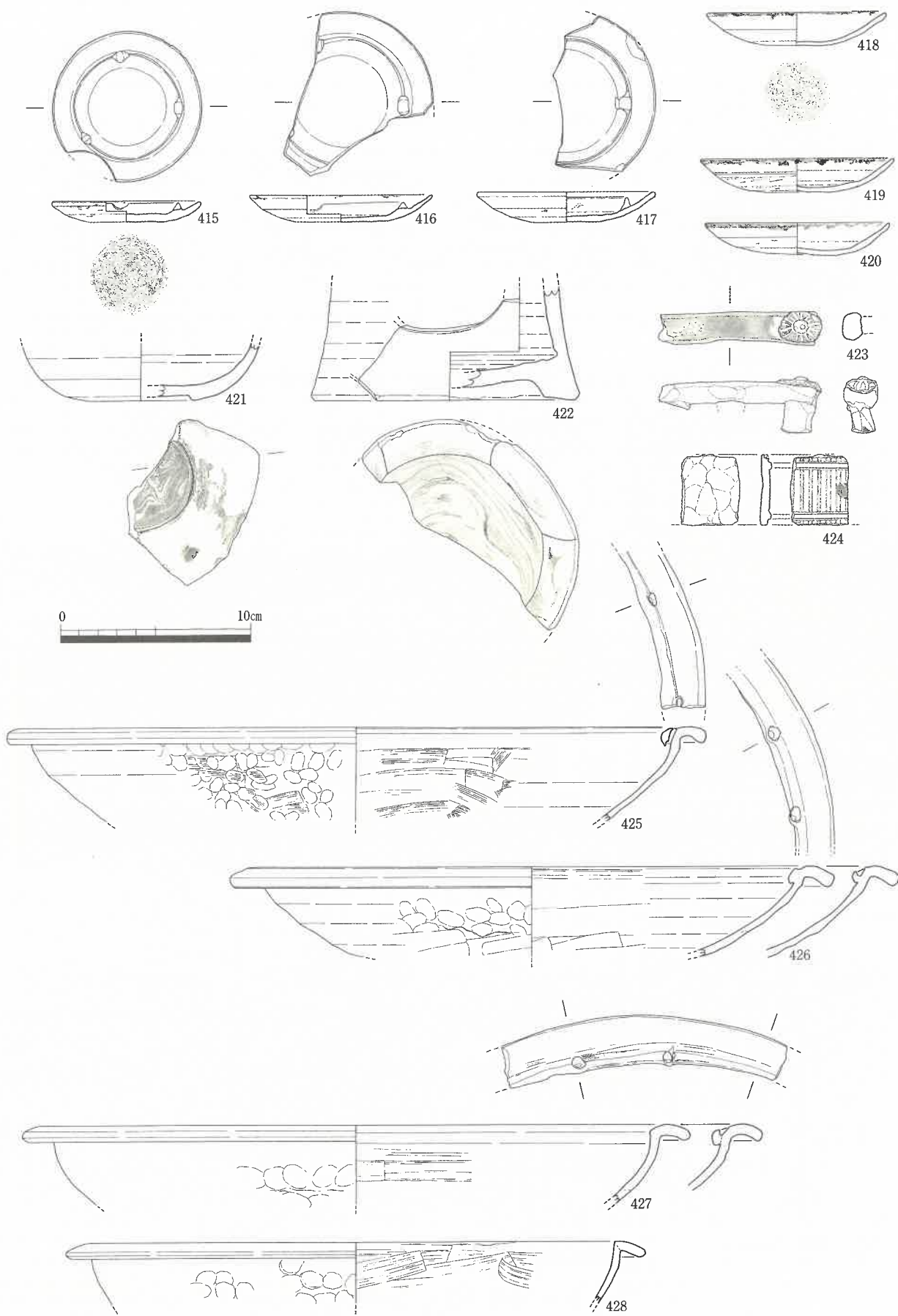




第64图 SK10出土遺物3 (S=1/3)

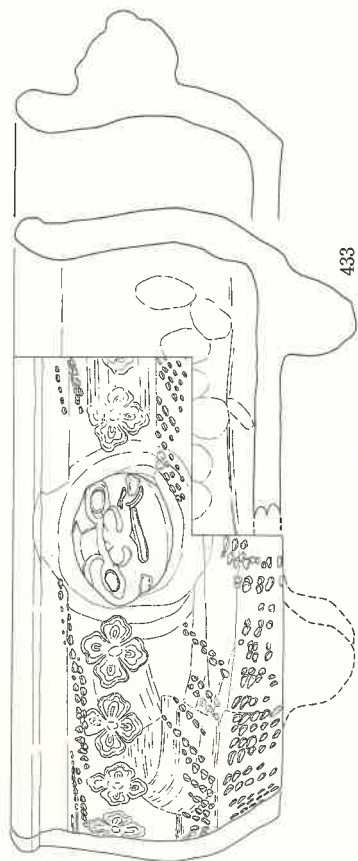


第65図 SK10出土遺物4 (S=1/3)

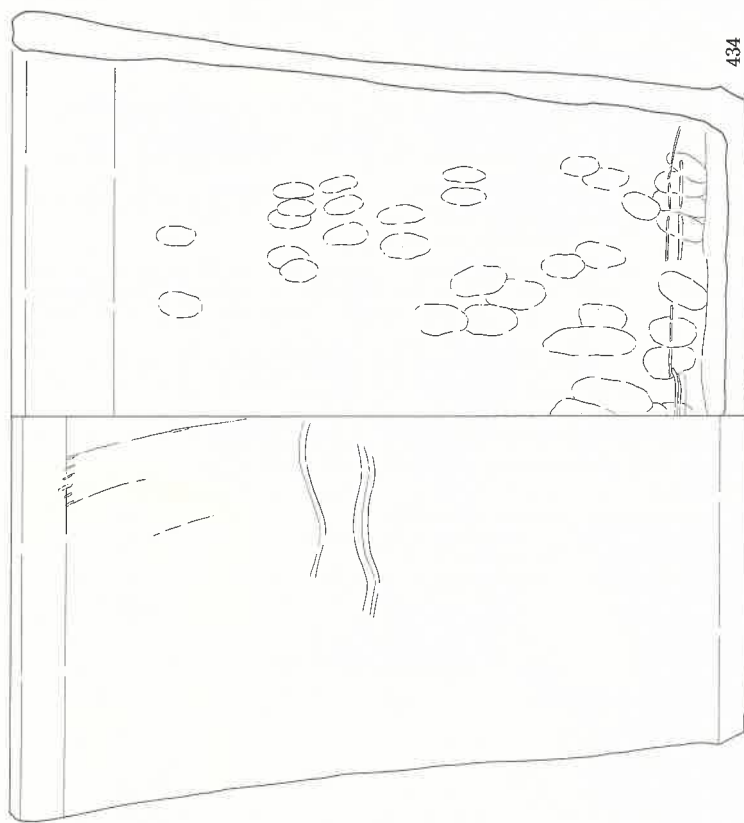


第66図 SK10出土遺物5 (S=1/3)

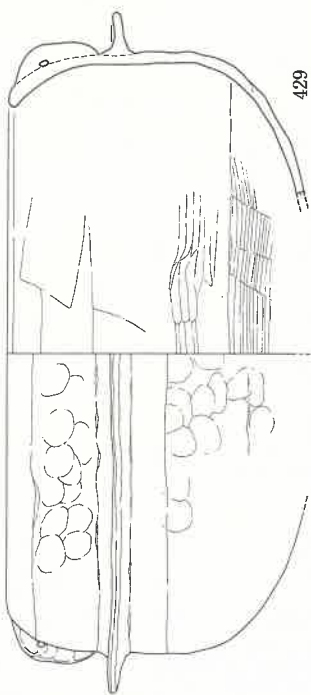




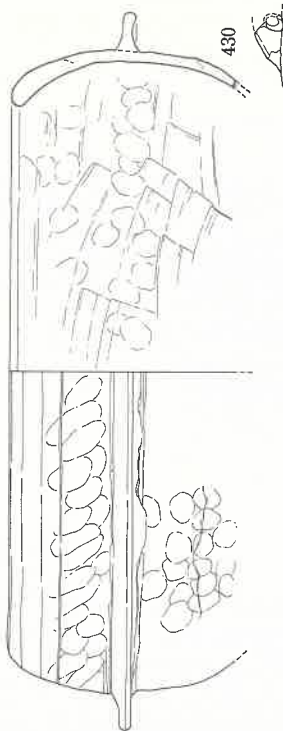
433



434



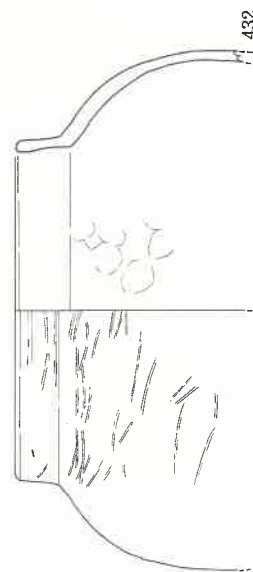
429



430



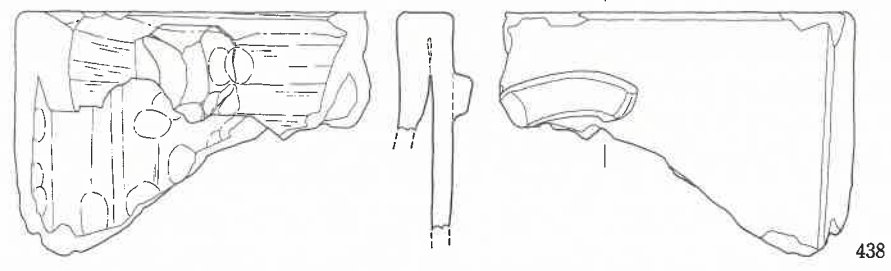
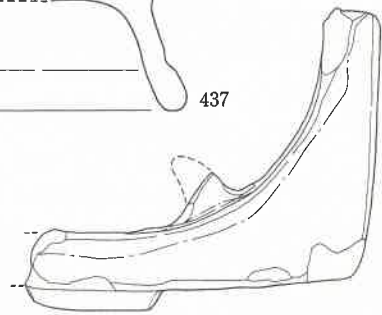
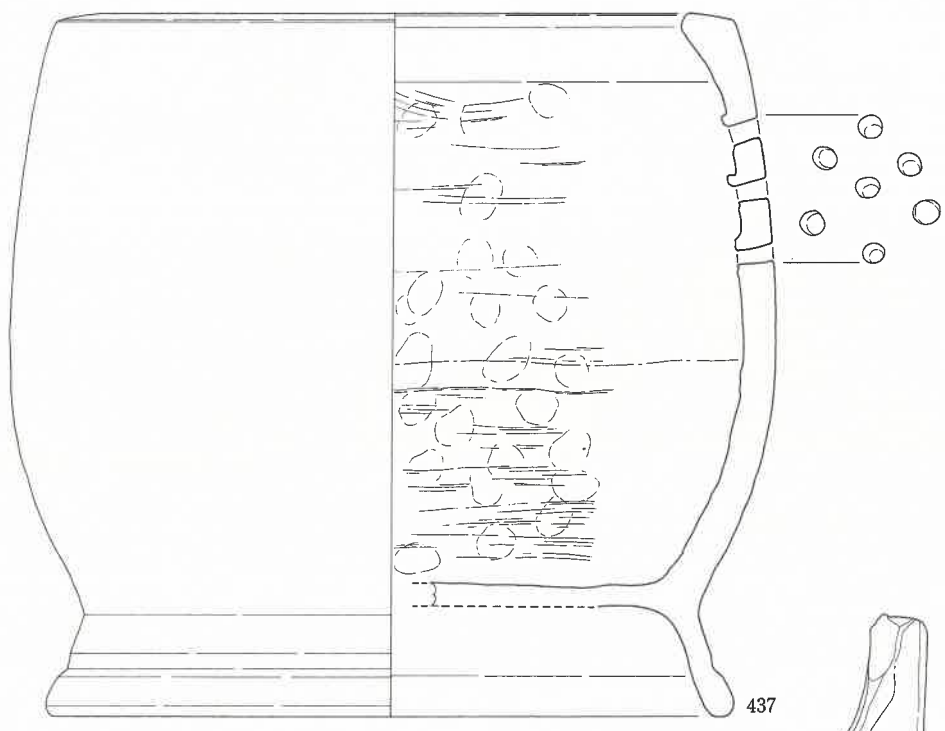
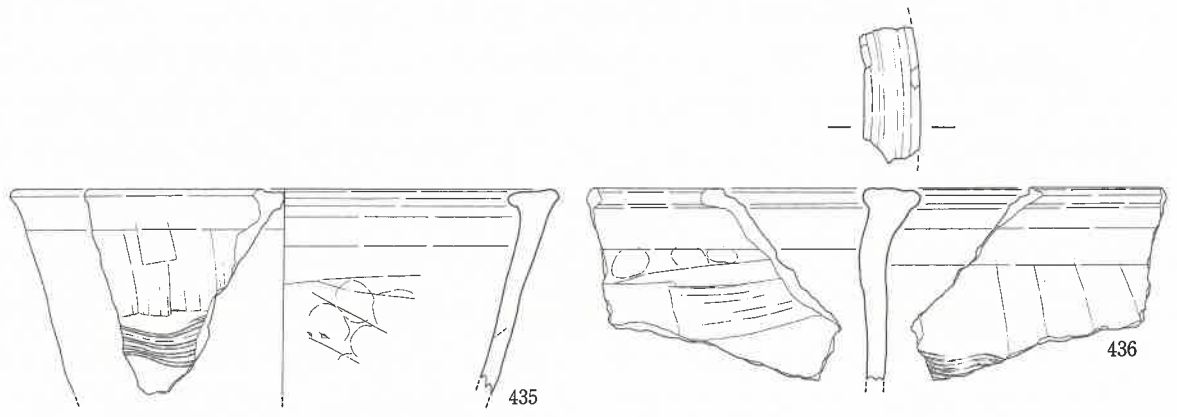
431



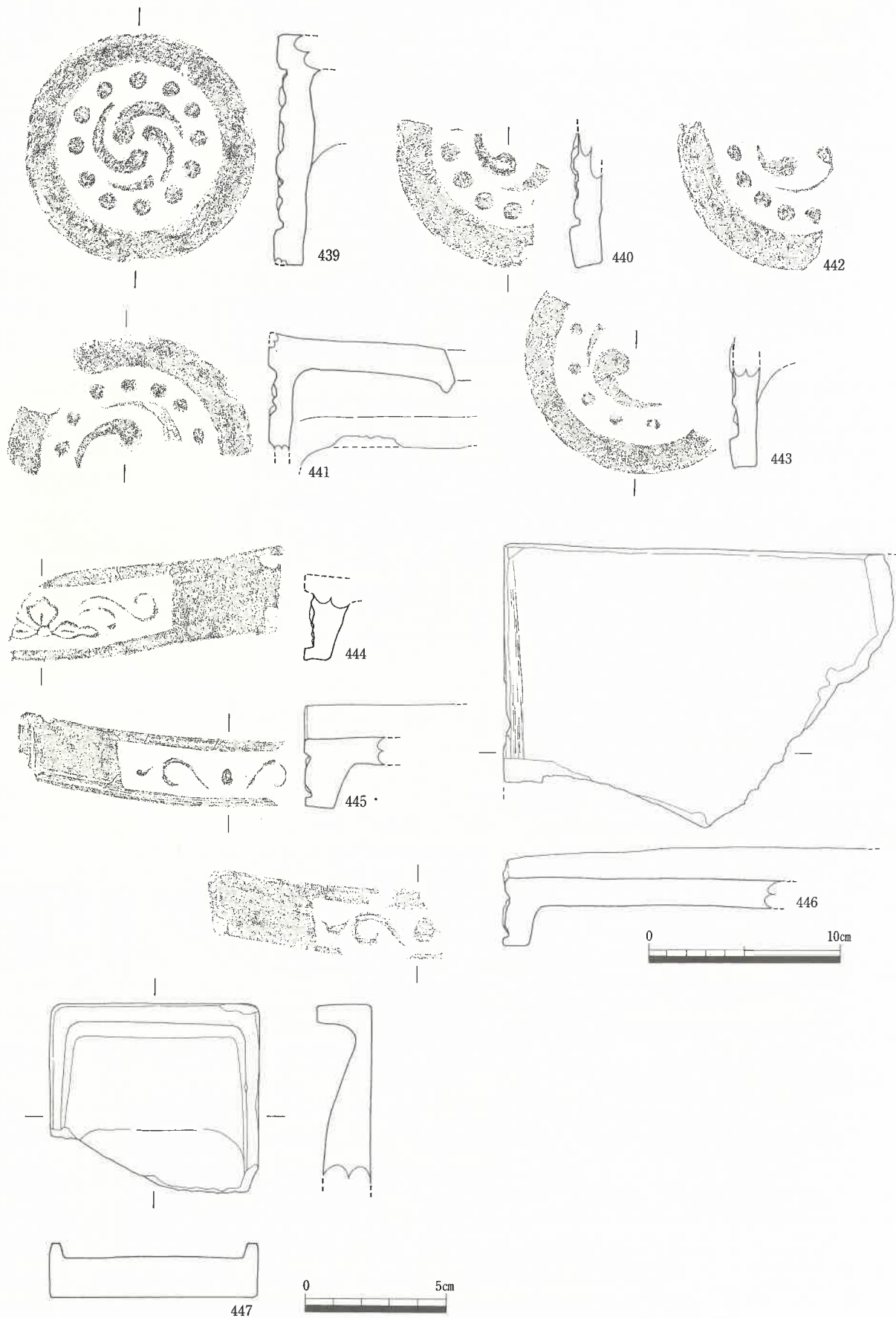
432



第67图 SK10出土遺物6 (S=1/3)



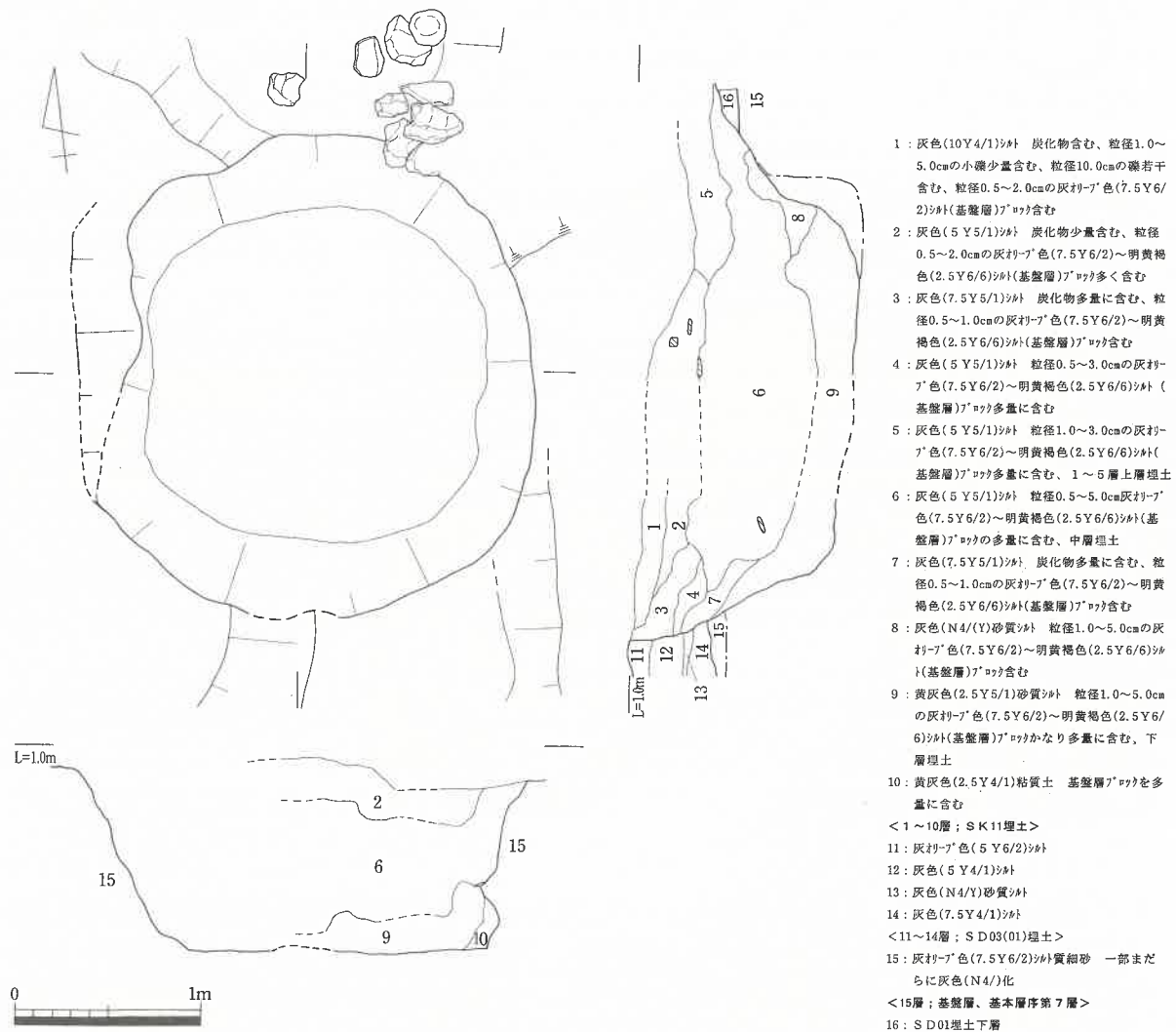
第68图 SK10出土遺物7 (S=1/3)



第69図 SK10出土遺物8 (S=1/3、1/2)

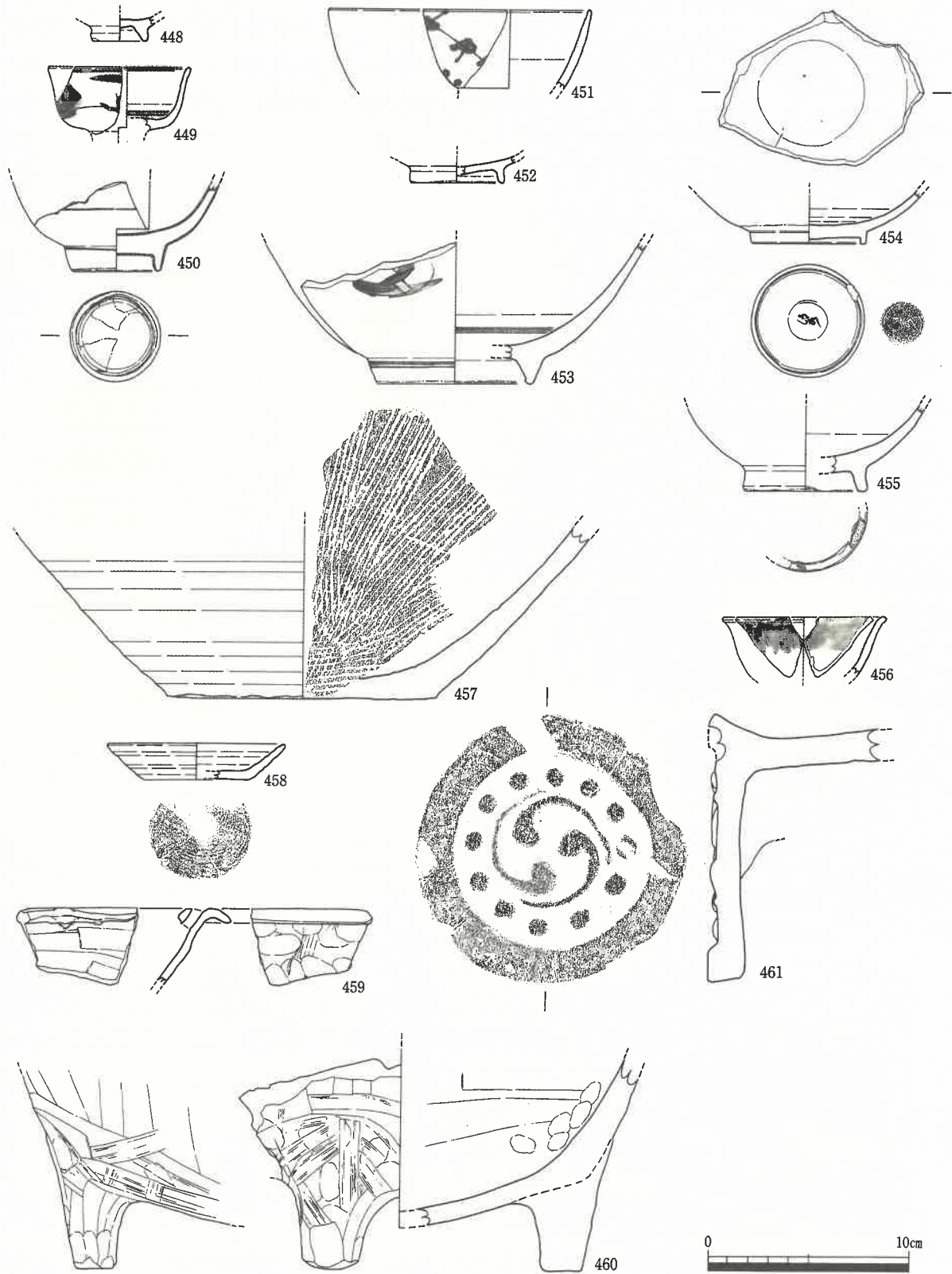


**SK11** AS53~54グリットで検出した土坑である。17世紀中葉前後に最終埋没したSD01・SX01に後出し、19世紀末に埋没したSK13に先行する重複関係を呈する。径2.5m前後の円形の平面プランを呈し、逆台形の断面形状となる。検出面からの深度は1.1m前後を測り、埋土は3層に大別できる。下層は黄灰色砂質シルト（9層）、中層は灰色シルト（6層）、上層はやはり灰色シルト（1~5層）がそれぞれ堆積し、いずれも一定量の基盤層ブロックを包含する。比較的短期間で埋没した可能性が高いが、その内容は明らかではない。底面は標高-0.1mを測り、湧水層の認定は行えていないが、湧水は確認できる。積極的に評価することは困難であるが、元来は井戸状遺構であり、井戸枠抜き取り後に短期間に埋め戻した遺構と理解しておきたい。



第70図 SK11平・断面図 (S=1/40)

448~460はSK11出土遺物である。448~453は肥前系磁器である。448は小杯である。高台内無釉。449は小碗ないし小杯である。腰部に張りを認める。450~452は碗である。450は高台内無釉碗で、外面には一重圈線を認める。1640~50年代。451は外面に梅花文を認める。18世紀前半の所産か。452は白磁碗である。見込みがわずかに凹む。時期不詳。453は鉢である。焼成不良品で、呉須は青色に発色せず、透明釉も淡緑灰色を呈する。外面には楼閣山水文を描く。454・455は肥前系陶器である。454は京焼風陶器碗である。淡黄色の色調を呈する精良な胎土が選択され、高台内中央部には「清水」の刻印を認め



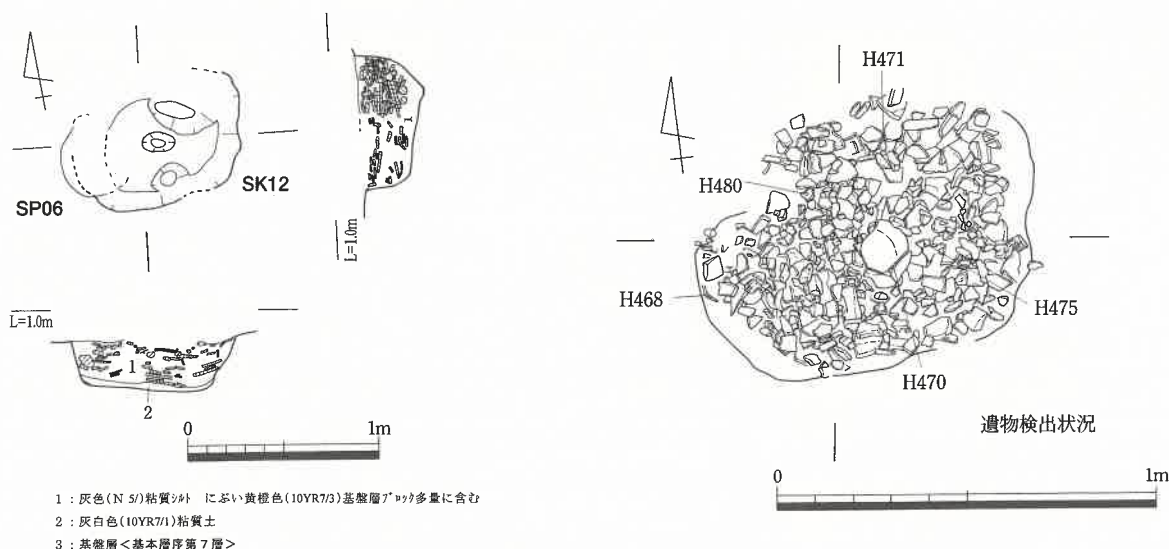
第71図 SK11出土遺物 (S=1/3)

る。見込みには鉄絵による線を認めるが、内容は不明である。18世紀前半。455は灰釉碗である。畳付を除く全面に灰釉を施釉し、畳付には砂目痕を認める。456は京・信楽系陶器端反碗である。口縁部内外面には緑色釉の流し掛けを認める。457は備前摺鉢である。乗岡編年近世2b期～3期。458は土師質

土器小皿である。口縁部は直線的に「逆八」字形に開き、端部は先細る。胎土中には雲母・赤色粒の含有を認め、にぶい橙色の色調となる。高松城様相把握では様相2～3にかけて確認できる(17世紀中葉)。459は瓦質鍋とした。直線的に外傾する体部から「く」字形に屈曲し、口縁部は斜め下方に垂下する。内耳を有し、径8mmを測る穿孔を認める。460は土師質土器有脚深鉢である。底部に丸味を有する甕に脚を貼り付けており、228に共通する。

以上、SK11出土遺物には複数時期の遺物が混在した状況を認める。最も新しい様相を示すものとして、京・信楽系陶器端反碗が挙げられ(456)、肥前系磁器小杯(449)・鉢(453)もおおむね19世紀代の所産となる。また、448や450は高台内無釉となり、1640～50年代の年代観となり、土師質土器小皿(458)もそれに併行する。肥前系磁器碗(451)、京焼風陶器碗(454)、瓦質鍋(459)はおおむね18世紀前半の所産である可能性が高い。複数時期の所産を含むが、遺構の重複関係を考慮すると、17世紀中葉に属する一群はSD01ないしSX01からの混入遺物である可能性が高い。しかし、18世紀前半期に属する土器・陶磁器の理解には問題を残す。遺構の性格として、井戸が想定でき、土層の堆積状況では確認できないが、廃絶時に井戸枠を抜き取った可能性が高い。つまり、18世紀前半期における構築の可能性を否定することはできない。なお、肥前系磁器端反碗や瀬戸・美濃系磁器が未確認であり、出土点数は少ないが、ここでは19世紀第2四半期における廃絶と考えたい。

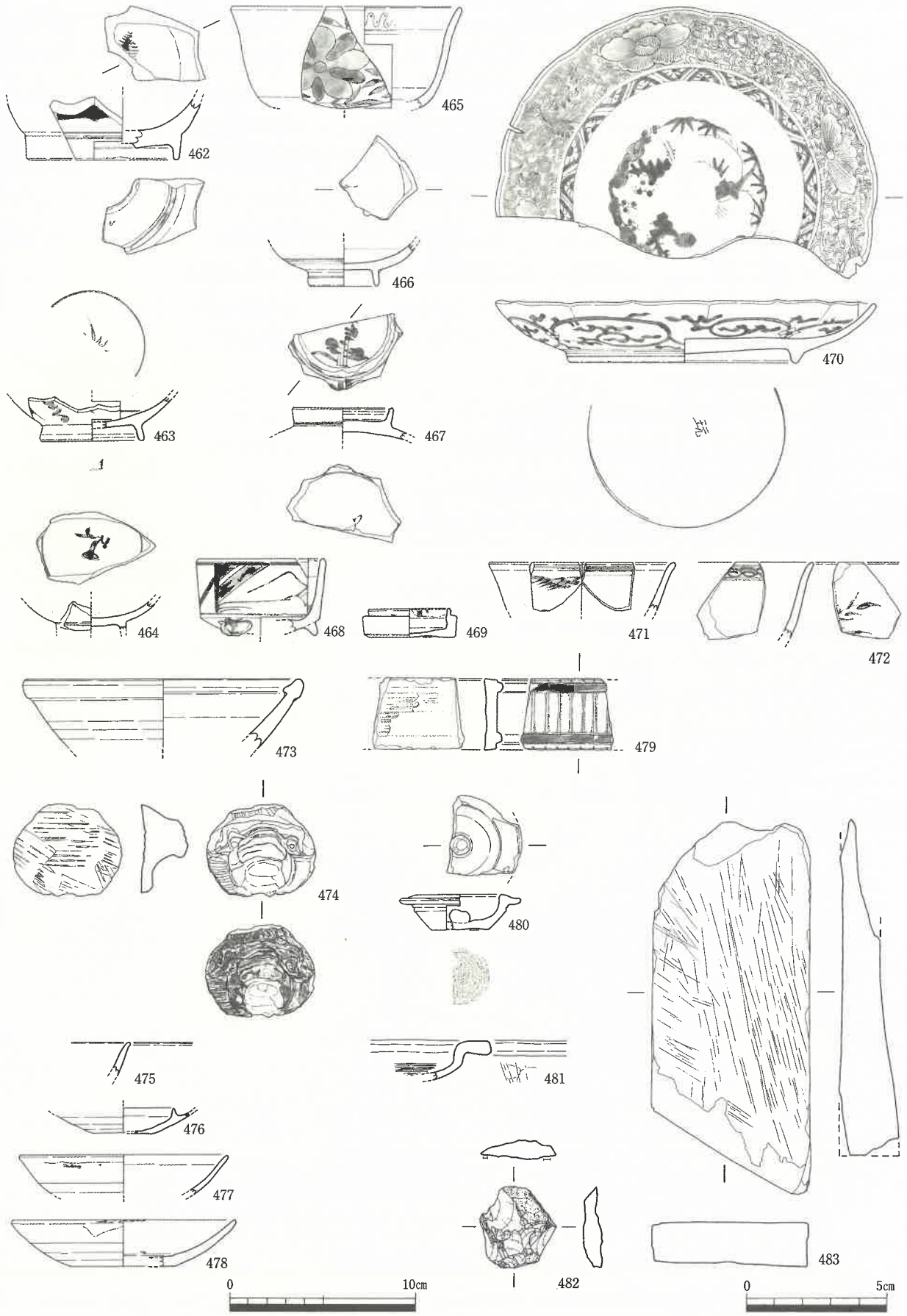
**SK12** AT52グリットで検出した土坑である。SA03を構成するSP06と重複関係を有し、それに後出する。平面形はやや東西軸が長い不整形を呈し、東西長0.9m、南北幅0.7mを測る。検出面からの深度は0.3m前後を測り、逆台形ないし箱形の断面形状となる。埋土は底面に沿って薄く2層が堆積し、その上位に多量の土器・陶磁器・瓦を包含する灰色粘質シルトが堆積する。基盤層ブロックも多量に含み比較的短期間に埋没した可能性が高い。1層上面の出土状況図を第72図に示した。ほぼ土坑掘方形状全域から出土し、セクションでは、北端部に遺物が集中する傾向を認める。



第72図 SK12平・断面図及び出土状況 (S=1/40、1/20)

462～483はSK12出土遺物である。462～470は肥前系磁器である。462は鉢である。蛇の目凹形高台(高)となり、19世紀前半の所産となろう。463～467は碗ないし碗蓋である。463・464は見込みがわず





第73図 SK12出土遺物 (S=1/3、1/2)

かに凹み、細長く延びる高台形状から小広東碗と考えられる。1770～1810年代。465は端反碗である。腰部に張りを認め、口縁部は明瞭に外反する。外面には草花文、内面縁文様には波状文を描き、列点を配する。1820～60年代。466は直立する高台形状や外面下半に描く多重圏線から端反碗である可能性が高い。467は広東碗蓋である。把手径は大きく、その内部には口縁部外面から連続する草花文を認める。1780～1820年代。468は香炉である。三足を有し、口縁部は直線的に外傾する。外面には染付による区画文内に赤色絵葉により山水文を上絵付けする。469は合子である。口縁部は印籠合わせとなり、端部及び底面を除き白磁釉を施す。端部内外面にはわずかではあるが、赤色顔料が付着する。470は型打成形輪花皿である。器高が浅く、扁平な形態となる。口縁部内面には繊細で細かな筆使いによる草花文、見込みには松竹梅繋ぎ文を描く。高台内中央部には「玩」の款銘を認める。471・472は瀬戸・美濃系磁器端反碗である。471は外面に抽象文、内面に縁文様として一重圏線を認める。472は外面に草花文、内面縁文様に渦繋ぎ文を描く。472にはガラス焼継痕を認める。473・474は瀬戸・美濃系陶器である。473は鉢である。内外には黄褐色の色調を呈する灰釉を施釉する。藤澤編年第9小期（藤澤1989、19世紀第2四半期）。474は把手である。剥落しており、裏面にはカキメ状の刻目を認める。表面には獣面を表現し、口部が窪む。口部には明赤褐色の褐釉、その周囲には緑色釉を施釉する。475～478は京・信楽系陶器である。475は端反碗である。476～478は灯明皿である。476には仕切を有し、478の見込みには目跡を認める。479は軟質施釉陶器橋である。表面には沈線を施し、橋部材である板材を表現し、棒状突帯により欄干を創出する。外面には緑釉を施し、裏面には板ナデ調整を認める。480は軟質施釉陶器土瓶蓋である。天井部には回転糸切り痕を認め、上面に柿釉を施釉する。落とし蓋。481は瓦質焙烙である。体部上半は明瞭に直立し、口縁部は横方向に屈曲する。482は火打ち石である。チャート製。不定方向に剥離面を認める。483は砥石である。方柱状の形状を呈し、表面には研磨痕及び線條痕を認める。

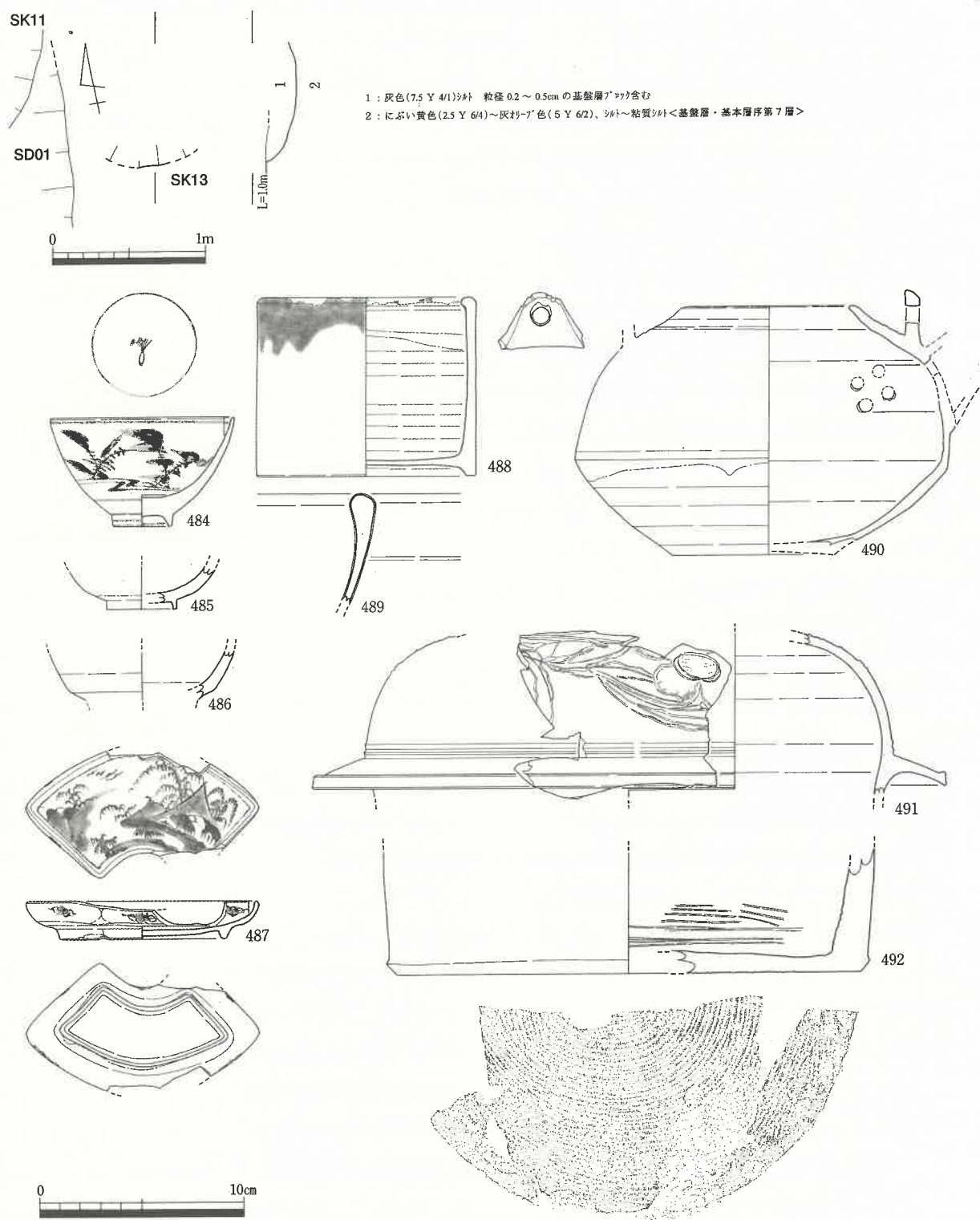
以上、S K 12出土遺物には、肥前系磁器端反碗（465・466、1820～60年代）、瀬戸・美濃系磁器端反碗（471・472）、京・信楽系陶器端反碗、灯明皿を認める。よって、1820～60年代の年代を想定することができる。また、在地産土器焙烙は型成形ではなく、型成形+さな一体化の七厘も確認できず、幕末以降の所産とは考えられない。ここでは19世紀第2四半期～幕末という年代を想定しておきたい。

**S K 13** A T 54グリットで検出した土坑である。攪乱が激しく全容は明らかではないが、S D 01・S K 11に後出する重複関係を有する。検出した限りでは平面形は円形を呈し、緩やかな円弧を描く断面形状を呈する。検出面からの深度は0.2mを測り、埋土は灰色シルトの単一層となる。

484～492はS K 13出土遺物である。484は肥前系磁器小広東碗である。1770～1810年代。485・486は京・信楽系陶器碗である。485は釉肌に激しい貫入を認め、端反碗の可能性が高い。486は枳形碗となる。外面施釉範囲は残存部位全面に認め、高台側面を含めた施釉となる。釉葉は灰白乳色の色調を呈し、厚く施釉する。487は肥前系磁器扇面皿である。糸切成形となり、高台平面形も扇面形となる。見込みには楼閣山水文（柳）を描き、口縁部外面には宝文の可能性が高い抽象文を描く。488は京・信楽系陶器火入れである。外面は白泥塗布→端部のみ緑釉流し掛け→透明釉の施釉を認める。口縁部上端面には顕著な敲打痕を認める。489は施釉陶器鉢である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部はにぶく肥厚する。内外面には鉄釉を施す。490は軟質施釉陶器土瓶である。灰白色の色調を呈するやや締まりを欠く胎土が選択され、灰白色ないし黄白色の釉を薄く施す。底面露胎部分には煤が付着する。491は瓦質羽釜である。茶釜形の形態。外面には型成形により草花文を陽刻表現する。19世紀末前後の所産となろう。

492は土師質土器甕である。底面には同心円状板ナデ調整を認め、胎土中には一定量の雲母を含有する。

以上、SK13出土遺物は、陶磁器が示す年代観では、京・信楽系陶器端反碗（485）より19世紀代の年代を付与することができる。さらに、在地産羽釜に型成形を認める（491）。空港跡地遺跡ⅥのSK g 795の年代観より（松本2003 b）、19世紀末の年代を想定したい。



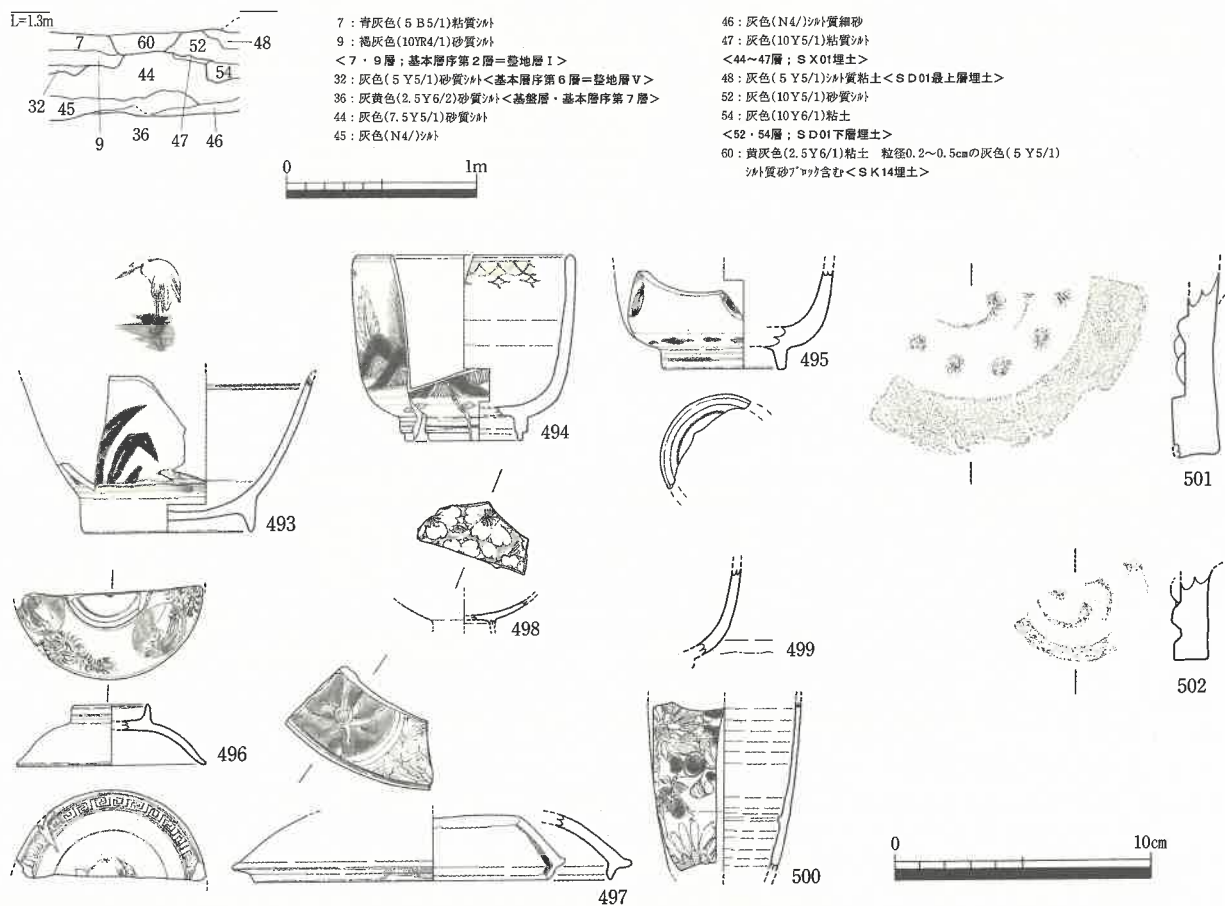
第74図 SK13平・断面図及び出土遺物 (S=1/40、1/3)



**SK14** AS53グリットで検出した土坑と考えられる遺構である。断面観察で確認しており、平面形等の詳細は明らかではない。土層番号60がSK14埋土となり、逆台形状の断面形状となる。埋土は黄灰色粘土の単一層で、灰色シルト質砂ブロックを一定量含む。その構築面は基本層序第2層（整地層I）となり、幕末前後の所産と考える。

493～502はSK14出土遺物である。493は肥前系磁器広東碗である。1780～1820年代。494・495は瀬戸・美濃系磁器湯呑碗である。494は高台先端部が段状に細くなる。ガラス焼継。1825年以降の所産となる（藤澤1998）。496・497は肥前系磁器蓋である。496は口径が小さく、器壁も薄いため、小碗の蓋となろう。外面には丸文を3方に配し、内部に草花文を描き、間隙には蔓草文を描く。見込みには簡略化した松竹梅繋ぎ文を認める。縁文様は雷文となる。497はかえりを有する蓋となり、アルミナ砂を塗布する。外面には染付による圏線を認めるが、主文様は赤・緑・黒・金色絵葉の上絵付けによる（丸文・四方禪文・宝文）。破断面には焼継痕跡を認め、緑色の絵葉を用いる。498は瀬戸・美濃系磁器である。薄手酒杯の可能性も高いが、紅皿とした。見込みには梅花文を赤色絵葉で描き、その間隙を金色絵葉で塗り潰す。499は京・信楽系陶器碗である。釉肌には激しい貫入を認め、端反碗である蓋然性は高い。500は京・信楽系陶器瓶とした。外面には緑色絵葉と白泥により草花文を上絵付けし、暗褐色絵葉により縁取りを行う。501は軒丸瓦である。502は軒棧瓦丸瓦部である。主文様は巴文となる。

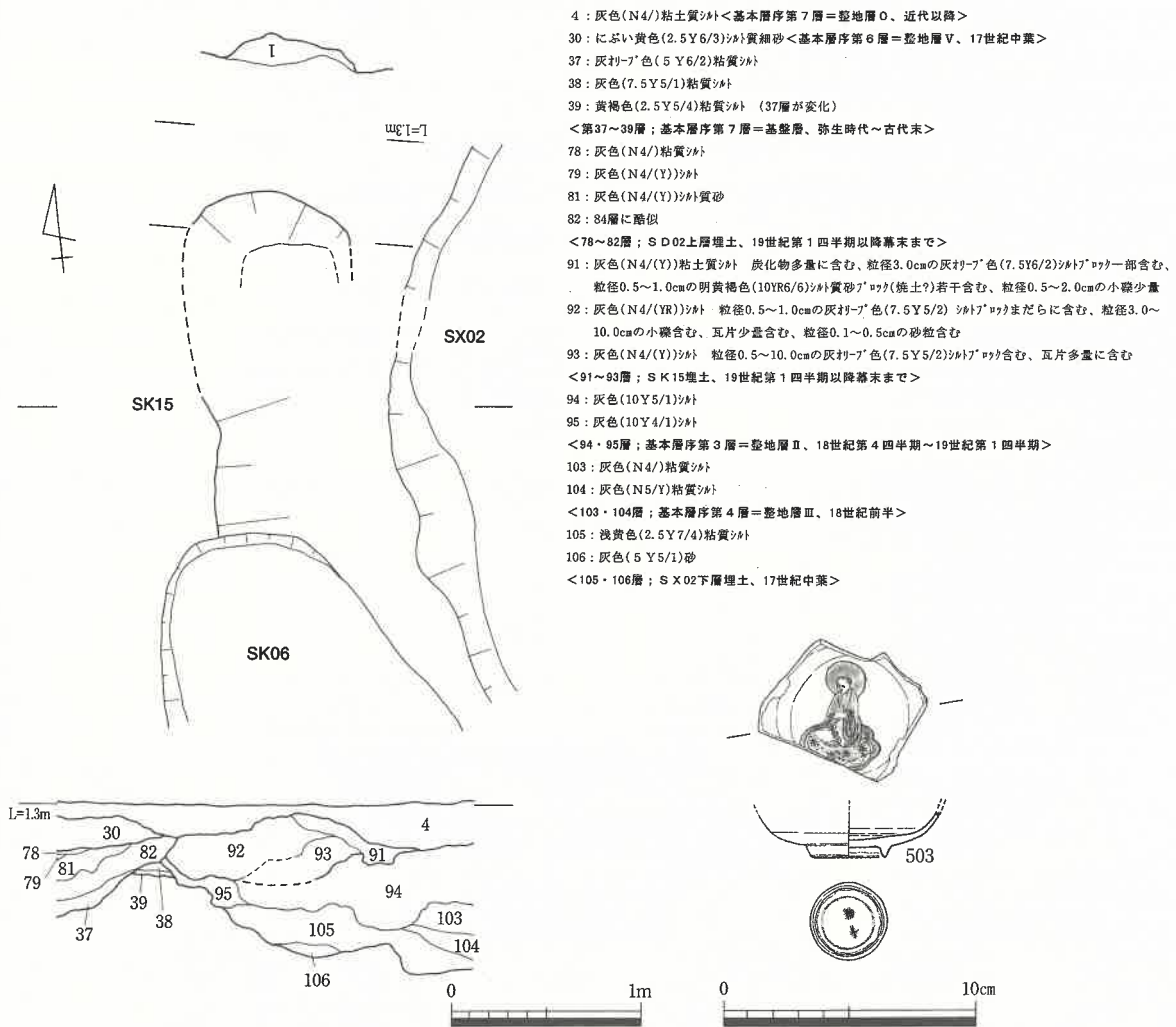
以上、SK14出土遺物は、肥前系磁器に等しい出土量を占める瀬戸・美濃系磁器を認め、年代を想定する材料となる。湯呑碗の正確な製作年代は不明であるが、幕末前後の所産と考えておきたい。



第75図 SK14断面図及び出土遺物 (S=1/40、1/3)

**SK15** AU53グリットで検出した土坑である。南北に細長く伸びる平面形を呈し、南北検出長1.8m、東西幅0.9mを測る。91～93がSK15埋土となり、これによる限り、舟底状の断面形状を呈する。埋土は炭化物を多量に含む灰色粘土質シルト（91層、上層埋土）とその包含を認めない灰色シルトに大別できる（下層、92・93層）。

503はSK15出土遺物である。中国産（景德鎮窯系）青花碗である。見込みには人物像を描き、高台内には「青〇」の款銘を認める。出土遺物の年代観では16世紀後半～17世紀初頭前後となるが、遺構の掘り込み面は94層（基本層序第3層＝整地層Ⅱ）となり、18世紀第4四半期～19世紀初頭に形成されたものである。よって、これ以降の所産と理解しておきたい。周辺遺構の状況から、幕末～19世紀末前後の所産となろう。



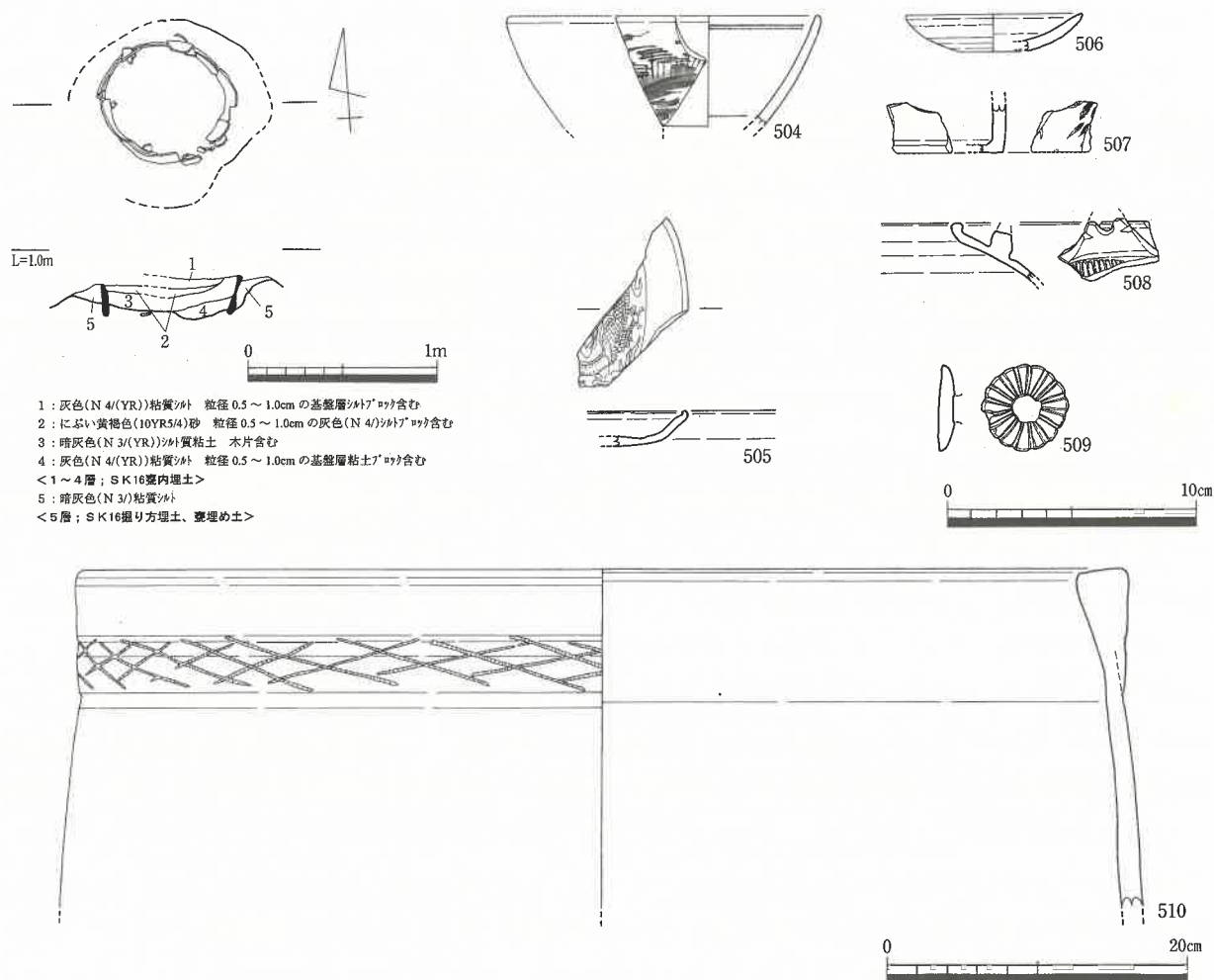
第76図 SK15平・断面図及び出土遺物 (S=1/40、1/3)

**SK16** AT52グリットで検出した土師質土器甕を埋設した土坑である。S D02に後出して構築される。平面形は歪な円形を呈し、その径はおおむね1.1m前後を測る。その中央には径0.7m前後を測る大甕を認める。中空構造となり、0.65mを設置面として水平に据えられる。その設置後、掘方を暗灰色粘質シルトで埋め、甕を固定する（5層）。甕内部にも土層の堆積を認めるが、内容物を特定できる層序は皆

無である。わずかに3層には木片を認める。

504~510はSK16出土遺物である。504は肥前系磁器碗である。外面には楼閣山水文を認め、口縁部の傾き等から小広東碗である可能性が高い。505は磁器皿である。全面に黄色釉を施釉し、見込みには龍を陰刻表現する。底面にはピン跡を認める。淡路珉平焼小判皿である(北條2000)。506・507は京・信楽系陶器である。506は灯明皿である。507は鬢水入れである。外面には笹葉文の上絵付けを認める。508は軟質施釉陶器土瓶である。外面には飛鉤を認め、柿釉を施釉する。509は軟質施釉陶器不明品である。菊花を表現し、外面には柿釉を施釉する。510は土師質土器大甕である。口縁部はかすかに内湾し、口縁端部は三角形に肥厚する。外面には文様帯となる突帯を貼付し、板材小口面を押し当てた斜格子文を認める。

以上、SK16出土遺物は珉平焼の存在から(505)、幕末以降の所産となる。ここでは、幕末~19世紀末の年代観を想定しておきたい。



第77図 SK16平・断面図及び出土遺物 (S=1/40、1/3、1/5)

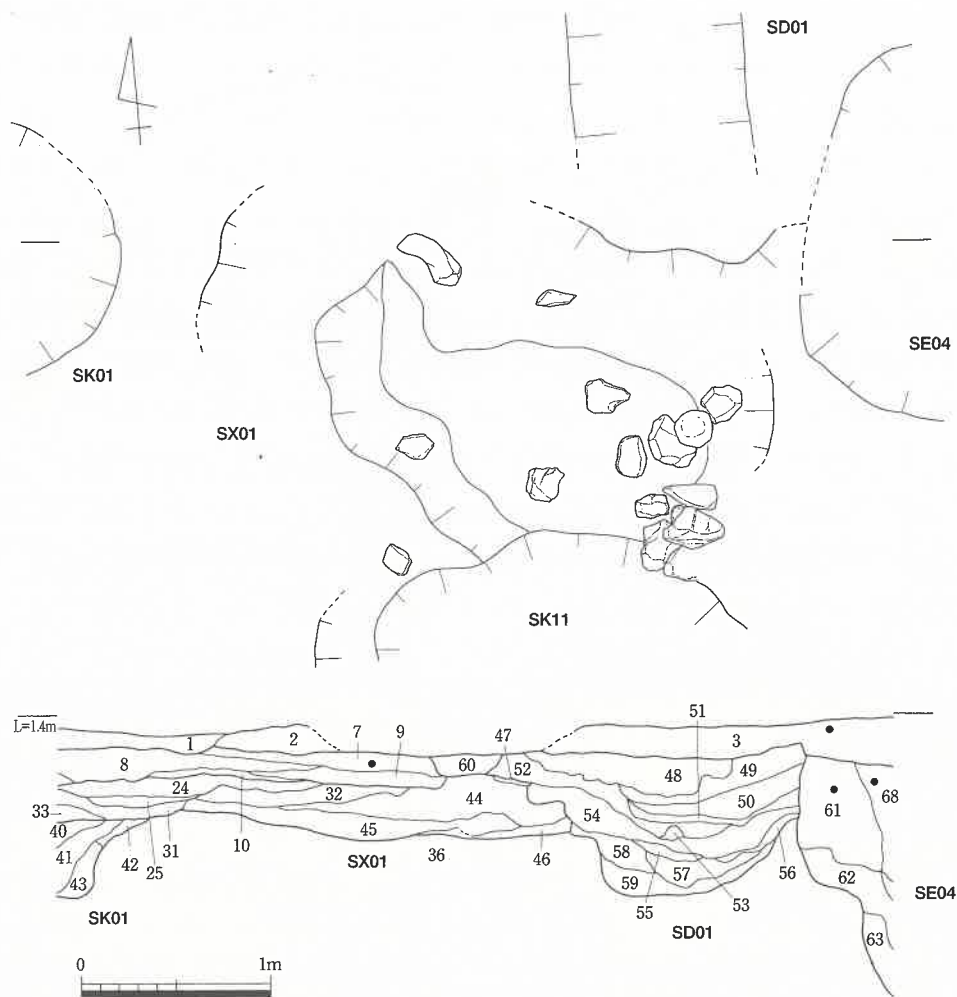


## 不明遺構

S X 01 A S～A T 53グリットで検出した不明遺構である。19世紀第2四半期に埋没したS K 11に先行する重複関係を示し、S D 01にも先行すると考える。平面形は不整形を呈し、東西検出長3.2m、南北検出長1.8mを測る不明遺構である。掘方断面形状は不明であるが、44～46層がS X 01埋土に対応する可能性が高い。灰色系シルト細砂を基調とし、いずれも基盤層ブロックを一定量含有する。平面形では、2段掘方を呈する可能性が高く、上位掘方は西側ないし北側で確認でき、2段目掘方の肩部を西～南部、東部で確認できる。内側掘方を中心に拳大の2倍前後の規模の石材を認めるが、その性格は不明である。

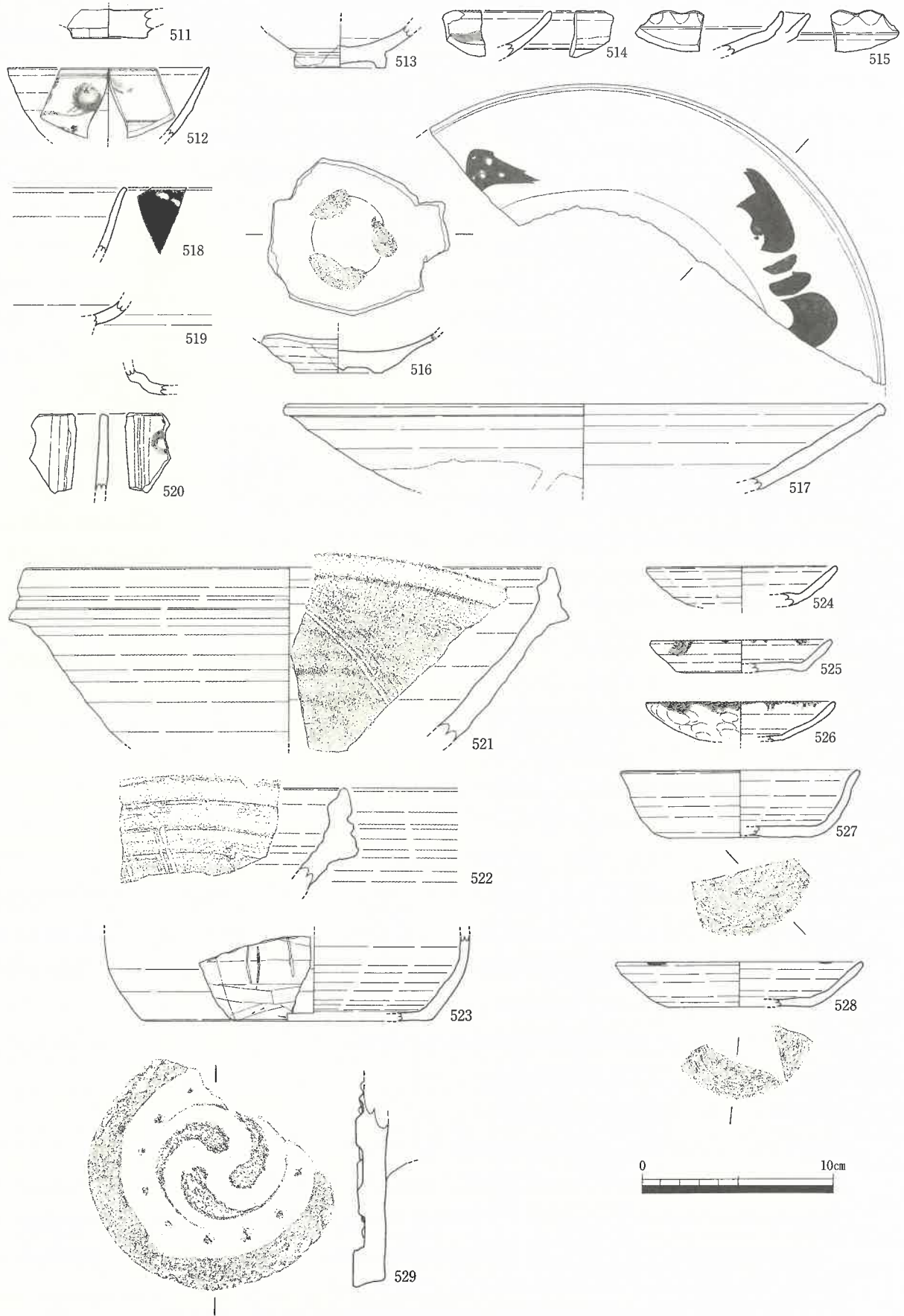
511～529はS X 01出土遺物である。511・512は輸入磁器である。511は青磁碗底部片である。高台は平高台となり、抉りを認めない。中世後半。512は漳州窯系青花碗である。口縁部は直線的に外傾し、端部は先細る。外面には花奔文を認める。513～517は肥前系陶器である。513は碗、514～517は皿となる。514は内面に鉄絵を描く絵唐津である。515は口縁部がひだ皿状に波状を呈する。516は砂目皿である。見込みに3箇所砂目を認める。517は口縁部が直線的に開き、端部は丸く肥厚する。口縁部内面には鉄絵による草花文を認め、見込み周縁にはかすかな段を有する。518～520は瀬戸・美濃系陶器である。518は碗である（天目碗か）。口縁部は小さく外反し、内外面に鉄釉を施釉する。外面には長石釉散らしを認める。519は志野丸皿である。内外面には長石釉を施釉する。520は志野向付である。側面屈曲部に該当し、側辺がなす隅角を屈曲させ、解消する。外面には鉄絵による下絵を認める。521～523は備前系陶器である。521・522は摺鉢である。521は口縁部内面に明瞭な段を有し、顎外下端は強く肥厚する。口縁部外面には2条凹線、口縁部内面には斜め方向に走るスリメを認める。乗岡編年近世1c期。522は顎下端の突出が弱く、口縁部は板状を留まることから、乗岡編年近世1b期まで上がるかもしれない。523は壺と考えた。底部外縁には入念なヘラナデ調整を施し、外面には火襷も認める。524～528は土師質土器小皿ないし坏である。524は厚みのある底部からにぶく屈曲し、口縁部は直線的に開く。中位が最も肥厚し、先端部は先細る。内面及び体部外面には煤の付着を認める。胎土は灰白色の色調を呈し、雲母の含有は確認できない。525はわずかに上げ底となる底部から屈曲し、口縁部はかすかに外反する。見込み周縁には強いナデ調整による窪みを認める。胎土中には雲母・赤色粒の含有を認め、にぶい橙色の色調を呈する。526は底径の小さな底部からにぶく屈曲し、口縁部は長く延びる。外面には入念な指押さえを認め、京都系土師器の可能性が高い。527は口径12.6cmを測り、口縁部は底部からにぶく屈曲し、端部のみ小さく外反する。底面には回転ヘラ切り痕を認め、中世段階の所産となる。混入。528は口径13cmを測り、口縁部は直線的に大きく開く。中位が最も肥厚し、端部は先細る。胎土中に雲母・赤色粒の含有はなく、灰白色の色調を呈する。底面には回転糸切り痕を認める。西の丸町地区では様相2に認める形態となる（1620～30年代）。529は軒丸瓦である。珠文径は極めて小さく、珠文数は12を数える。巴頭は円形を呈さず、尾は細長く延び、円形を指向する。

以上、S X 01出土遺物は肥前系磁器が未確認となり、磁器は輸入磁器のみで構成される。陶器では大橋編年I期が主体を占め、516のみ砂目皿となる。口縁部は遺存しないが、溝縁皿ではないと考えたい。備前摺鉢も乗岡編年近世1bないしc期の所産となり、1620～30年代までの所産となる。在地産土師質土器小皿では、西の丸町地区における様相2までに収まる。よって、肥前系陶器溝縁皿ないし肥前系磁器の出現・盛行以前の年代を想定することができ、西の丸町地区の成果から、1620～30年代の埋没を想定しておきたい。



- |   |   |
|---|---|
| <p>1 : 赤-ア'褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト</p> <p>2 : 灰色(10Y5/1)粘土質シルト</p> <p>3 : 灰色(N5/3)粘質粘土</p> <p>&lt;1~3層; 基本層序第7層=整地層0、近代以降&gt;</p> <p>7 : 青灰色(5B5/1)粘質シルト</p> <p>8 : 灰赤-ア'色(5Y6/2)粘質シルト</p> <p>9 : 褐灰色(10YR4/1)砂質シルト</p> <p>10 : 灰赤-ア'色(7.5Y5/3)粘質シルト</p> <p>&lt;7~10層; 基本層序第2層=整地層1、幕末前後&gt;</p> <p>24 : 灰褐色(10YR5/2)砂質シルト</p> <p>25 : 灰色(7.5Y5/1)シルト</p> <p>&lt;24・25層; 基本層序第5層=整地層IV、享保3(1718)年の高松大火関連&gt;</p> <p>31 : 褐灰色(10YR5/1)シルト</p> <p>32 : 灰色(5Y5/1)砂質シルト</p> <p>33 : 褐灰色(10YR5/1)シルト</p> <p>&lt;31~33層; 基本層序第6層=整地層V、17世紀中葉&gt;</p> <p>36 : 灰黄色(2.5Y6/2)砂質シルト</p> <p>&lt;36層; 基本層序第7層=基盤層、弥生時代~古代末&gt;</p> <p>40 : 灰色(5Y5/1)シルト</p> <p>41 : 灰色(10Y5/1)シルト</p> <p>42 : 灰色(10Y5/1)シルト</p> <p>43 : 暗灰色(N3/)粘質シルト</p> <p>&lt;40~43層; SK01埋土、16世紀末~17世紀中葉&gt;</p> <p>44 : 灰色(7.5Y5/1)砂質シルト 炭化物少量含む、粒径0.5~1.0cmの赤-ア'黄色(7.5Y6/3)シルトが珪石に多量に含む</p> <p>45 : 灰色(N4/)シルト 炭化物含む、一部帯状に含む、粒径0.5~1.0cmの赤-ア'黄色(7.5Y6/3)シルトが珪石に多量に含む</p> | <p>46 : 灰色(N4/)粘質細砂 粒径0.5~1.0cmの赤-ア'黄色(7.5Y6/3)シルトが珪石に多量に含む、粒径2.0cmの灰白色(10YR7/1)シルトが珪石若干含む</p> <p>47 : 灰色(10Y5/1)粘質シルト</p> <p>&lt;44~47層; SX01埋土、1620~30年代&gt;</p> <p>48 : 灰色(5Y5/1)粘質粘土 &lt;SD01最上層埋土、幕末以降&gt;</p> <p>49 : 黄灰色(2.5Y6/1)粘質粘土</p> <p>50 : 灰色(7.5Y5/1)粘質シルト</p> <p>51 : 灰色(7.5Y4/1)粘質シルト</p> <p>&lt;49~51層; SD01上層埋土、幕末以降&gt;</p> <p>52 : 灰色(10Y5/1)砂質シルト</p> <p>53 : 灰白色(7.5Y7/1)粘土</p> <p>&lt;52・53層; 基本層序第2層=整地層I、幕末前後&gt;</p> <p>54 : 灰色(10Y6/1)粘土</p> <p>55・56 : 赤-ア'黄色(5Y6/3)細砂</p> <p>&lt;54~56層; 基本層序第6層=整地層V、17世紀中葉&gt;</p> <p>57 : 灰色(N4/(YR))砂質シルト</p> <p>58 : 灰色(N4/)シルト</p> <p>59 : 黒色(N2/)シルト(炭化物層)</p> <p>&lt;57~59層; SD01下層埋土、17世紀中葉&gt;</p> <p>60 : 黄灰色(2.5Y6/1)粘土 &lt;SK14埋土、幕末前後&gt;</p> <p>61 : 黄灰色(2.5Y4/1)シルト</p> <p>62 : 灰色(5Y4/1)シルト</p> <p>63 : (67に同じ)ただし、含有の珪石は少量</p> <p>68 : 褐灰色(10YR4/1)シルト</p> <p>&lt;61~63・68層; SE04埋土、19世紀末&gt;</p> |
|---|---|

第78図 SX01平・断面図 (S=1/40)



第79图 SX01出土遺物 (S=1/3)



**S X 02** 調査区東端部を中心に検出した不明遺構である。平面形は不整形を呈し、その全容は明らかではなく、中位に土堤状の高まりを認め、複数の遺構が重複する可能性も否めない。第80図には第14図セクションを援用した。96～106層がS X 02埋土となり、その上層に堆積する90・94・95層は基本層序第3層（整地層Ⅱ）、107・108層はS K 03埋土となる。S X 02埋土は大きく3層に大別できる。底面に沿って堆積する105・106層を下層とした。基盤層ブロックを包含する。その上位に木片を多量に包含する104層を認め、これを含め102～104層を中層とした。104層の存在より下層堆積後、一定期間の埋積期間を認めることができる。上層は96～101層を一括した。灰色シルト質土を基調とした埋土となる。

530～556はS X 02出土遺物である。S X 02として提示するが、層序の理解から整地層出土遺物も含まれる。以下、層位別に報告する。530～532は第80図94層出土遺物である。層序理解では基本層序第3層（整地層Ⅱ）となる。いずれも肥前系磁器である。530は小広東碗となり、S K 10出土の343と接合関係を有する。1770～1810年代。531は丸碗である。S K 10出土遺物351と接合関係を認める。556は小杯である。以上、94層出土遺物は、S K 10と接合関係を認める個体を2点検出しており、埋没時の共時性を認める。よって、S K 10の埋没年代を援用し、18世紀第4四半期～19世紀初頭の年代を想定しておきたい。

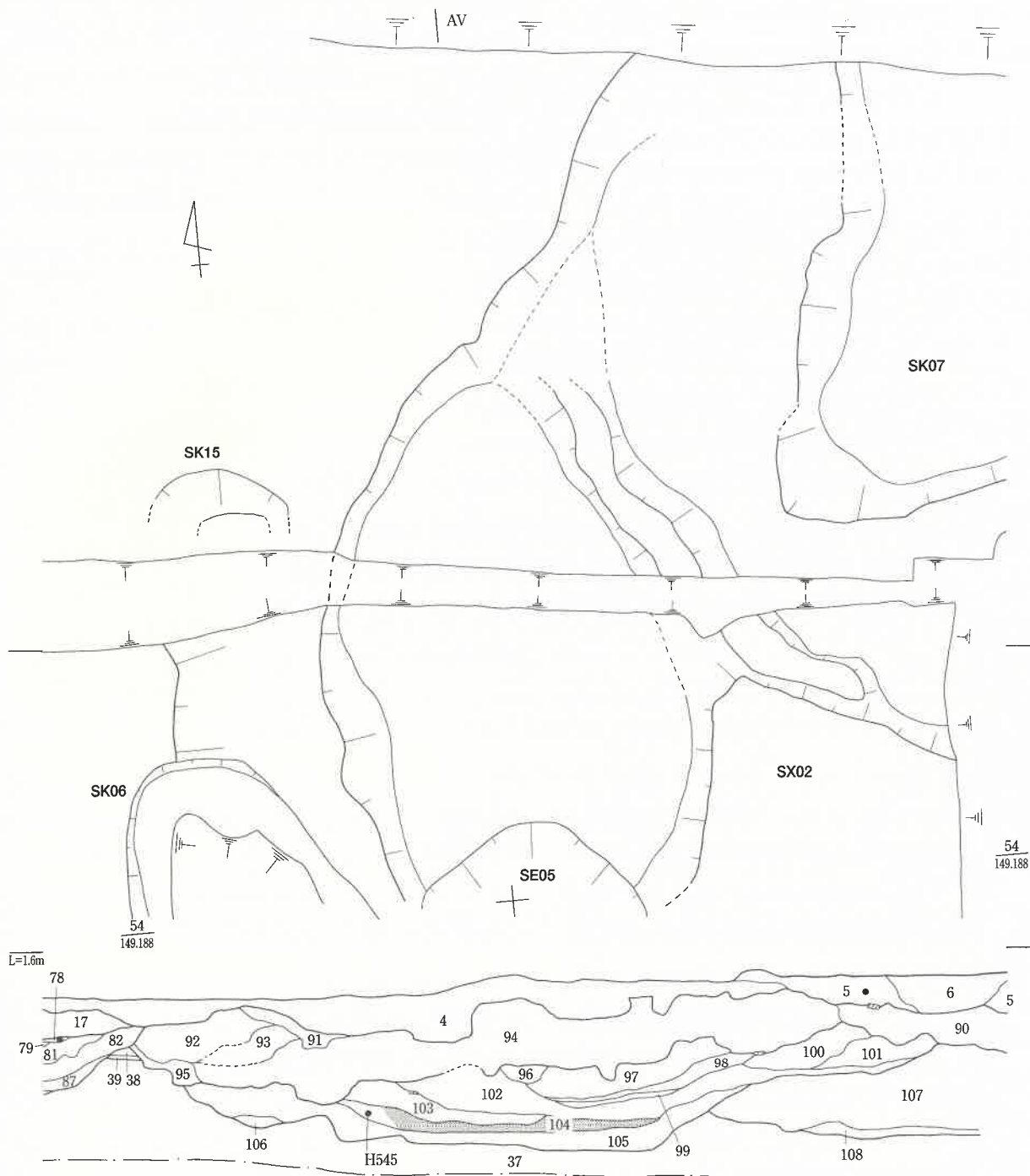
533～535は第80図94・97～105層出土遺物である。層序理解では基本層序第3層（整地層Ⅱ）とS X 02のすべての埋土からの出土遺物となる。いずれも肥前系陶器である。533は碗である。口縁部は中位でぶく屈曲し、上半は直線的に外傾する。534・535は皿である。いずれも底部から大きく開き、短く直立した後、口縁部は内湾気味に開く形態となる。口縁部内面には鉄絵により不明文様を描き（簡略化した草花文か）、535の見込みには胎土目を認める。

536～542は103～105層出土遺物である。層序理解ではS X 02中・下層埋土となる。536は肥前系磁器小杯である。口縁部は緩やかに外反し、外面に梅花文を認める。537・538は肥前系陶器碗である。539・540は瀬戸・美濃系陶器志野向付である。540は外面に鉄絵による不明文様を認める。541は土師質土器坏である。底部は小さく突出し、底径6.2cmを測る。見込みには釘彫りによる「井」の文様ないし文字を認める。542は銅銭である。寛永通宝。以上、103～105層出土遺物は、16世紀末～17世紀初頭の製作年代を示す製品が主体を占めるが（537～540）、肥前系磁器小杯と土師質土器坏は後出する。後者は西の丸町地区では、様相3を中心に認めるが（17世紀中葉前後）、前者は不明である。

543～546は104層出土遺物である（S X 02中層埋土＝木片集中層）。543～545は肥前系陶器である。543は鉢とした。口縁部は直立し、内外面には灰白色から青灰色に発色する灰釉を施す。544は瓶である。内面には当て具痕跡を認める。外面には濃い釉調の灰釉を施す。545は鉢である。口縁部は大きく開き、端部手前でぶく屈曲する。内面には鉄絵による草花文を認める。546は木製下駄である。歯の摩耗は激しいが、一体作りとなる。上面及び側面には黒漆の塗布を認める。以上、104層出土遺物は肥前系陶器の年代観より16世紀末～17世紀初頭の年代観を想定したいが、545はやや下るかもしれない。

547・548は105層出土遺物である。層序の理解では、S X 02下層埋土となる。いずれも土師質土器坏である。547は口径14.2cmを測り、底部からぶく屈曲し、口縁部は内湾気味に開く。底部と口縁部境が不明瞭である。西の丸町地区では様相3～4に確認できる（1640・50年代～17世紀後半）。548の底面には回転糸切り→板状圧痕を認める。西の丸町地区では様相3に確認できる。

549～556は層位不明遺物である。549は中国産（景德鎮窯系）青花碗である。内外面には芙蓉手の区画文を認め、外面には宝文、内面には花奔文を内部に描く。550は肥前系磁器皿である。見込みには草花文を認める。551は肥前系陶器二彩手鉢である。口縁部は内湾気味に外傾し、端部は「く」字形に屈

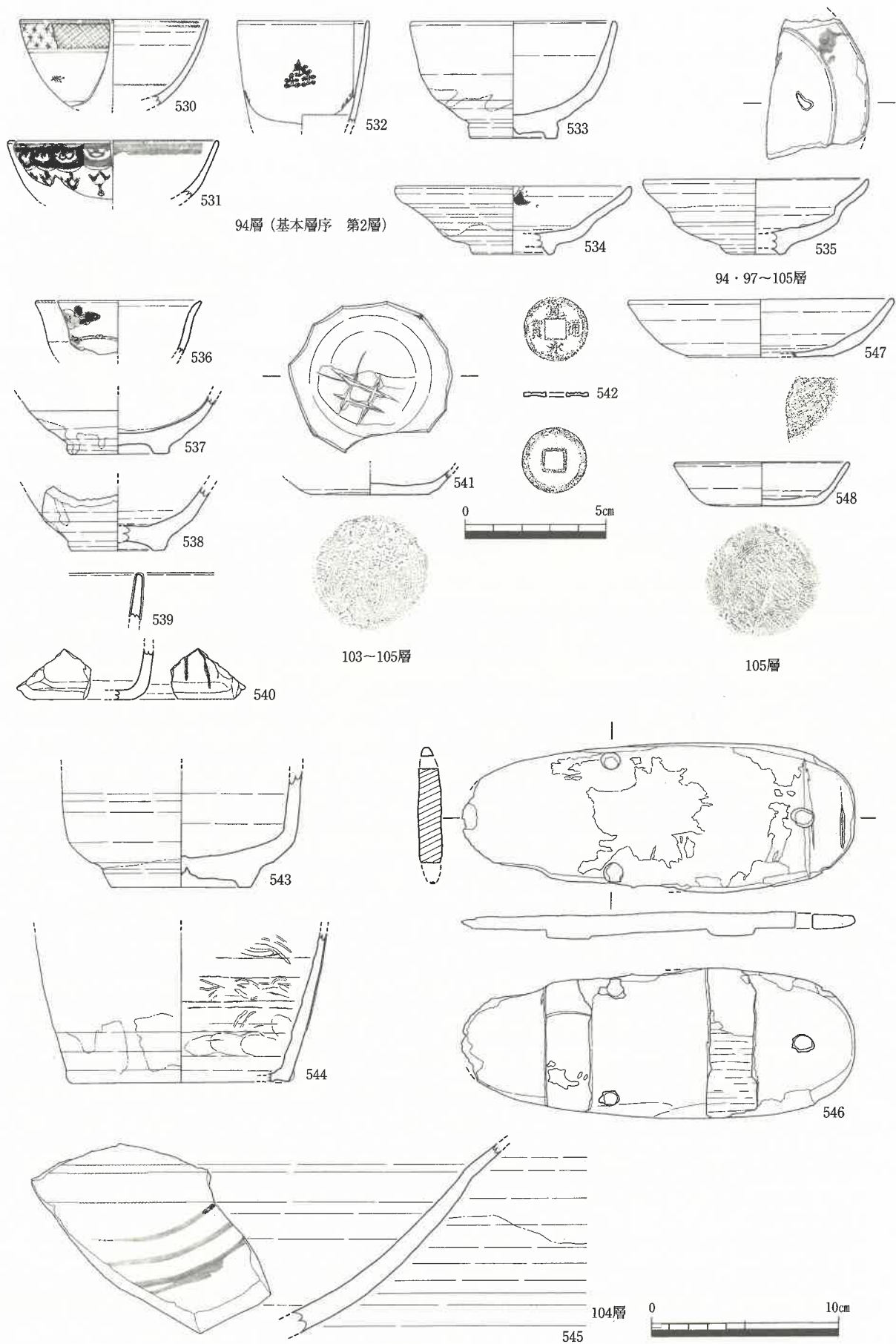


- 4 : 灰色(N4/)粘土質シルト
- 5 : 黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルト
- 6 : 黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト
- <4~6層; 基本層序第7層=整地層0、近代以降>
- 17 : 灰色(N4/Y)シルト質粘土
- <17層; 基本層序第2層=整地層1、幕末前後>
- 37 : 灰褐色(5Y6/2)粘質シルト
- 38 : 灰色(7.5Y5/1)粘質シルト
- 39 : 黄褐色(2.5Y5/4)粘質シルト
- <第37~39層; 基本層序第7層=基盤層、弥生時代~古代末>
- 78 : 灰色(N4/)粘質シルト
- 79 : 灰色(N4/(Y))シルト
- 81 : 灰色(N4/(Y))シルト質砂
- 82 : 84層に類似、ただし、粒径3.0~10.0cmの小礫を多量に含む
- <78~82層; S D02上層埋土、19世紀第1四半期以降幕末まで>
- 87 : 褐灰色(10Y4/1)シルト<S D02下層埋土、17世紀中葉>
- 90 : 灰色(N4/(Y))シルト<基本層序第3層=整地層II、18世紀第4四半期~19世紀第1四半期>
- 91 : 灰色(N4/(Y))粘土質シルト
- 92 : 灰色(N4/(YR))シルト
- 93 : 灰色(N4/(Y))シルト

- <91~93層; S K15埋土、19世紀第1四半期以降幕末まで>
- 94 : 灰色(10Y5/1)シルト 粒径0.5~2.0cmの灰褐色(7.5Y5/3)シルト質シルトに多量に含む。炭化物、粒径0.1~0.3cmの砂粒、粒径5.0~10.0cmの小礫若干含む
- 95 : 灰色(10Y4/1)シルト 粒径0.1~0.5cmの灰褐色(5Y6/2)シルト質シルト(基盤層)少量含む
- 96 : 基本的には102層、ただし、暗灰色(N3/)粘質シルト質シルトを帯状に含む
- 97 : 黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト additionally 暗黄褐色(2.5Y4/2)を呈する、粒径3.0~5.0cmの小礫少量
- 98 : 灰色(N5/)シルト 粒径0.5~1.0cmの灰褐色(5Y5/4)シルト質シルトをまだらに含む
- 99 : 灰色(N4/(Y))粘土質シルト 炭化物少量含む
- 100 : 灰色(N4/)シルト 粒径0.5~2.0cmの灰褐色(7.5Y5/3)シルト質シルトをまだらに多量に含む、粒径0.1~0.5cmの砂粒含む
- 101 : 灰色(10Y6/1)シルト質砂 粒径0.5~3.0cmの灰褐色(5Y5/1)シルト質シルトを多量に含む、粒径1.0~5.0cmの小礫若干含む
- <96~101層; S X02上層埋土、18世紀中葉から18世紀第4四半期>
- 102 : 灰色(5Y4/1)シルト 粒径1.0~5.0cmの黄褐色(2.5Y5/3)~に近い黄褐色(10R5/4)粘質粘土質シルトを含む、粒径0.1cmの砂粒含む、

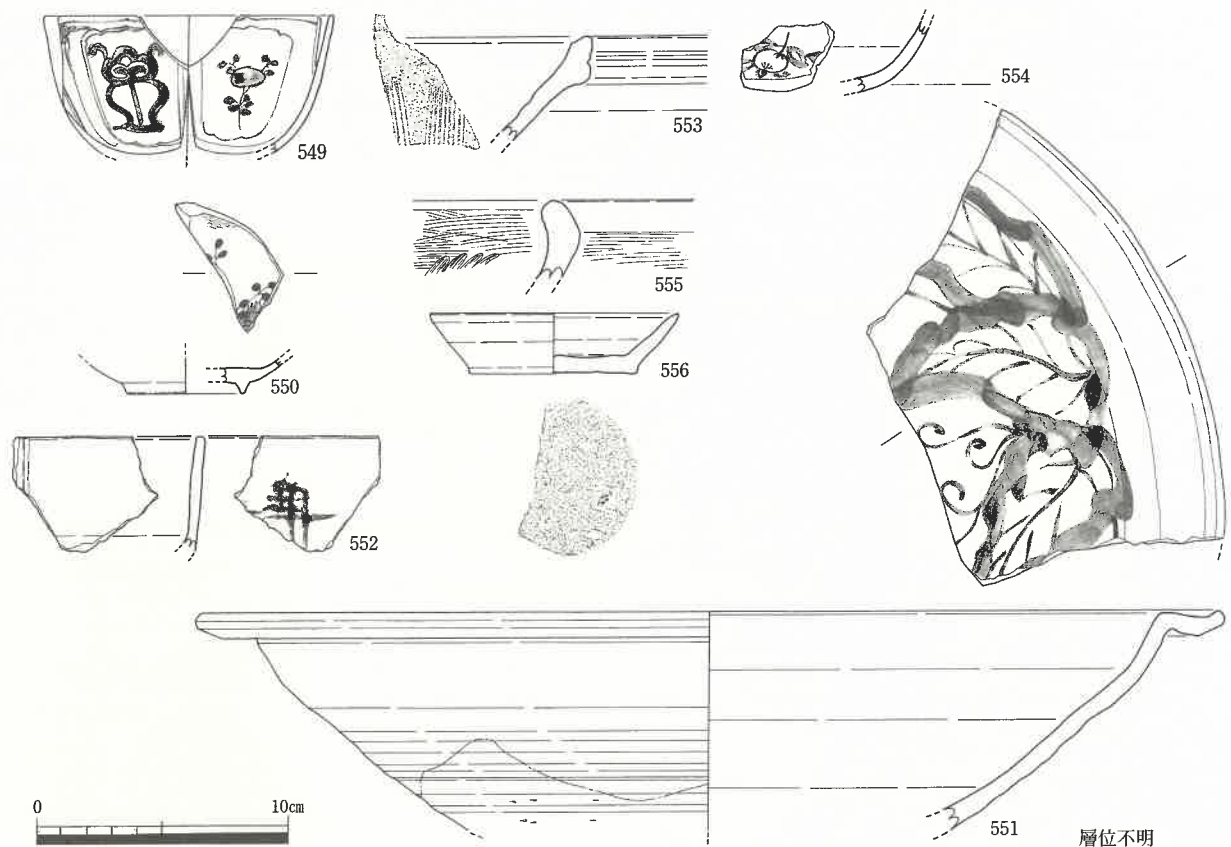
- 粒径3.0~5.0cmの小礫含む、炭化物若干含む
- 103 : 灰色(N4/)粘質シルト 粒径1.0~3.0cmの灰褐色(7.5Y5/3)シルト質シルトを含む、粒径0.1~0.5cmの砂粒含む、炭化物若干含む
- 104 : 灰色(N5/Y)粘質シルト 大部分を木質遺存層黒褐色(2.5Y3/1)が占める、粒径1.0cmの灰褐色(5Y5/4)シルト質シルト少量含む
- <102~104層; S X02中層埋土、基本層序第4層=整地層III、18世紀前半>
- 105 : 浅灰色(2.5Y7/4)粘質シルト 粒径1.0~5.0cmの灰色(N4/)シルト質シルトをまだらに含む
- 106 : 灰色(5Y5/1)砂
- <105・106層; S X02下層埋土、17世紀中葉>
- 107 : 灰色(5Y4/1)シルト
- 108 : 灰褐色(5Y3/1)粘質粘土
- <107・108層; S K03埋土、16世紀末~17世紀初頭>

第80図 SX02平・断面図 (S=1/40)



第81圖 SX02出土遺物1 (S=1/3、1/2)





第82図 SX02出土遺物2 (S=1/3)

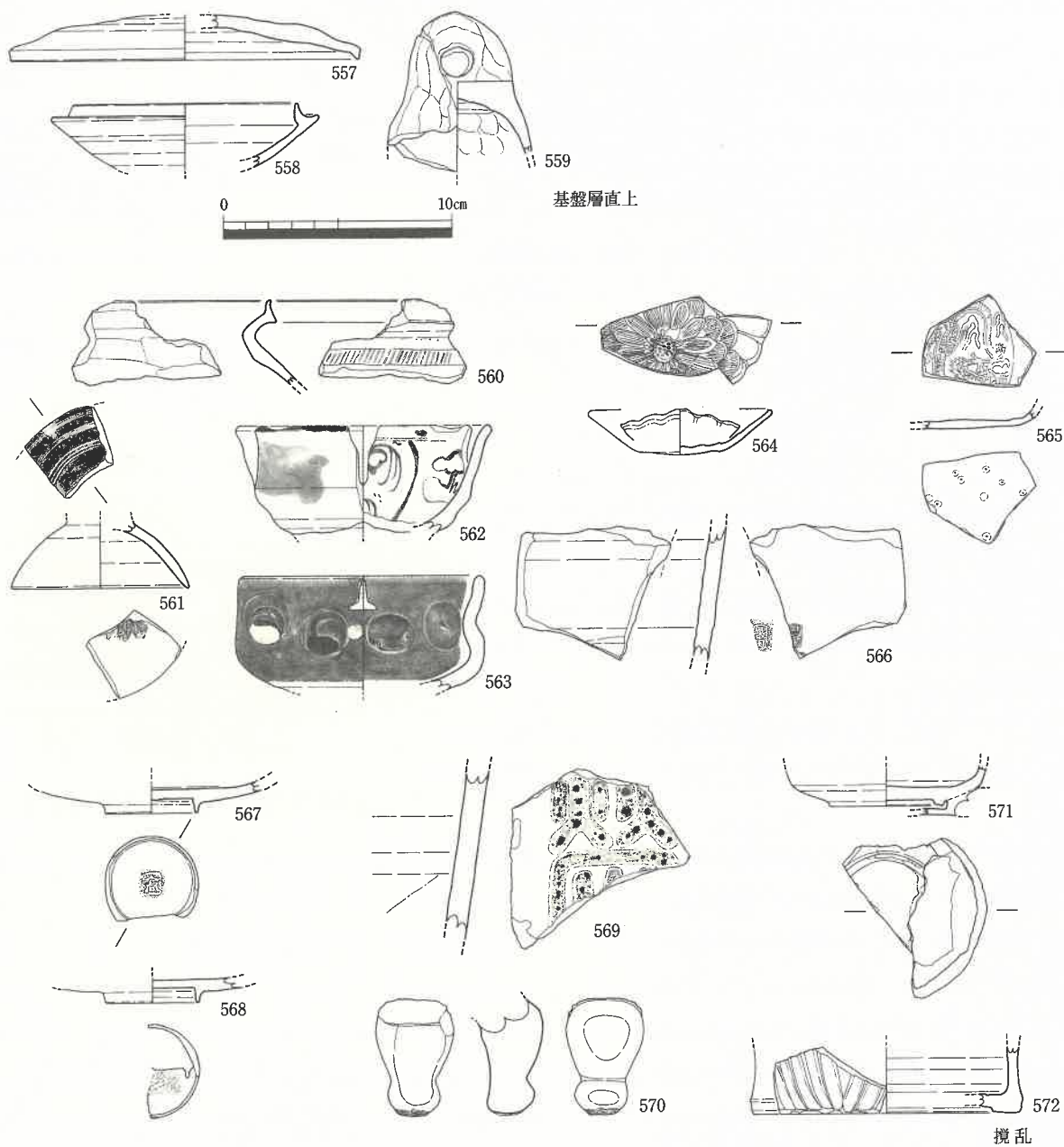
曲する。内面には白泥を塗布し、鉄絵により草花文を描き、灰黄褐色と暗緑灰色の色調を呈する釉を施す。552は瀬戸・美濃系陶器志野向付である。553は備前摺鉢である。口縁部は三角形に肥厚し、内面に施すスリメ上端部には1cmの間隔を認める。乗岡編年近世3期。554は京・信楽系陶器平碗である。内面には銹絵染付による草花文を認める。555は土師質土器摺鉢である。内面にはかろうじてスリメ上端部を認める。西の丸町地区では16世紀末～17世紀中葉に確認できる。556は土師質土器坏である。突出する底部形態を呈し、底面には静止糸切り痕を認める。口縁部は直線的に外傾し、端部は先細る。見込み周縁はかすかに凹む。西の丸町地区では様相2～3に確認できる(1620年代～17世紀中葉)。

以上、SX02出土遺物を層位別に報告したが、各層位の形成年代について言及したい。第80図94層は530～532の年代観により、18世紀第4四半期～19世紀第1四半期の年代を与えられる。SK10との埋没時の共時性を認める。SX02は層序では96～101層を上層埋土とし、102～104層を中層、105・106を下層と理解できる。上層埋土のみで構成する出土遺物はなく、533～535出土遺物から94層と102～105層を差し引いた年代を付与するしかない。しかし、17世紀初頭のまとまった内容を示す結果となる。中層埋土は543～546を最下層とし(104層)、536～542層は105層を差し引かなければならない。先に下層埋土について述べると、土師質土器坏(547・548)の年代観は、西の丸町地区の成果から様相3に併行した年代を想定することができ、17世紀中葉の形成年代となる。これを考慮すると、中層埋土(102～104層)に17世紀中葉に後出する時期の遺物は肥前系磁器小杯のみとなる(536)。正確な年代は不明であるが、おおむね18世紀前半の年代を想定しておきたい。上層はこれ以降、18世紀第4四半期～19世紀第1四半期までに形成されたと考えられる。やや恣意的な解釈となるが、こうした形成過程を想定しておきたい。

## 攪乱ほか出土遺物

557～559は遺構面直上出土遺物である。いずれも基盤層に包含する遺物の可能性が高い（基本層序第7層）。557は須恵器蓋である。口径15.4cmを測り、摘みは遺存しない。558は須恵器坏身である。口縁部は短く直立し、遺存する限りでは底部に回転ヘラ削り痕ないし回転ヘラ切り痕は確認できない。559は飯蛸壺である。釣り鐘状の形態を呈し、把手部上端には強いナデ調整を認める。

560～572は攪乱出土遺物である。560は弥生土器甕である。痕跡的な頸部から屈曲し、口縁端部を上方へ強く拡張する。肩部外面には連続する刻目を施す。胎土には角閃石を含有する。後期初頭。561は施釉陶器蓋とした。外面には印花→白泥により菊花文、丸文を表現し、内面には上絵により草花文を描く。絵葉には赤色と金色を用いる。肥前系陶器か。562は瀬戸・美濃系陶器碗であろう。口縁部はわずかに外反し、端部には鉄釉による口銹、外面には緑釉の点掛け、内面には鉄絵を認める。鉄絵は区画文を配し、草花文を描く。563は瀬戸・美濃系陶器拳骨碗である。腰部に張りを認め、口縁部中位を連続して窪ませる。内外面には鉄釉を施釉し、外面には長石釉散らしを施す。564は備前系陶器灯明皿である。型成形により内面には花文を陽刻表現し、平面形は円形をなさず、楕円形となる。端部は輪花となり、塗土を施す。19世紀代の所産か。565は珉平焼小判皿である。内面には龍を陰刻表現し、内外面に黄色釉を施釉する。底部内外面にはピン跡を認める。幕末～明治期。566は京・信楽系陶器涼炉とした。本焼き前の素焼き製品で、施釉は確認できない。外面には一重枠内に「粟田」の刻印を押印し、円窓の可能性が高い切り込みを認める。567・568は理兵衛焼平碗である。高台径は4cmを測り、高台内中央部に「破風高」の刻印を認める。内外面には濃い釉調の灰釉を施釉し、その範囲は高台畳付際まで及ぶ。露胎となる高台内は赤変が激しい。569は理兵衛焼鉢である。瀬戸・美濃系陶器に酷似した胎土が選択されるが、それより硬度が高い。内外面には灰白色ないし濁黄白色の灰釉を厚く施釉し、外面には下絵として、「榮」を描く。高松藩江戸上屋敷において同様の製品が確認されており（千代田区飯田町遺跡調査会ほか2001）、焼成前に穿孔が行われる植木鉢で、底部外面には「高」の刻印を認める。時期的には18世紀末～19世紀代の所産となる。570は京・信楽系陶器香炉脚部である。灰白色の緻密な胎土が選択され、灰白（乳）色の灰釉を厚く施釉する。接地面には胎土目を認める。さぬき市極楽寺所蔵の「葵文入香炉（天和2年銘）」に胎土・釉調・器形の共通性を認め、理兵衛焼と考えられるが、ここでは富田丸山の陶土を使用して製作された製品と理解しておきたい（松本2002c）。571は京・信楽系陶器火入れである。外面には理兵衛焼とした567・568に酷似する灰釉を畳付際まで施釉し、露胎となる高台内は顕著に赤化する。底部には焼き台への転用ないし製品同士の重ね積みを示す別個体の碁笥底の碗？の破片が溶着する。理兵衛焼の可能性が高いと考えるが、刻印は認められない。572は京・信楽系陶器火入れである。外面には連続する鎬を流線状に配し、鉄釉を施釉する。碁笥底。富田吉金窯産の可能性が高い。



第83図 攪乱ほか出土遺物 (S=1/3)



## 第4章 自然科学的調査の結果

### 第1節 高松城跡の花粉分析

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

高松城本丸の南に位置する高松城跡（丸の内地区）では弥生時代後期中葉の土器を多量に包含する層が認められ、上位には古代（9世紀代）以降の遺構面も検出されている。以下にはトレンチ断面より採取された土壌試料について弥生時代後期以降、古代以前の古植生を検討する目的で花粉分析を行い、その結果・考察を以下に示す。

#### 1. 試料

分析試料は丸の内地区下層確認トレンチ1より採取された4試料（A～D）である。これらの土相について簡単に記すと、試料A（1層）はにぶい黄色～黄灰色のシルト質細砂で、本層上面は古代（9世紀代）、中世（14世紀）、近世以降の遺構面である。試料B（2層）は黄灰色のシルト、試料C（3層）は灰色の砂質シルト質粘土である。試料D（4層）は暗灰色の粘土で、本層直下5層のさらに下位の12層や13層は弥生時代後期中葉の遺物包含層である。今回分析をする試料の時代については特定できないが、1層～4層は中世の基盤層であることから分析試料の時代は中世以前と考えられる。

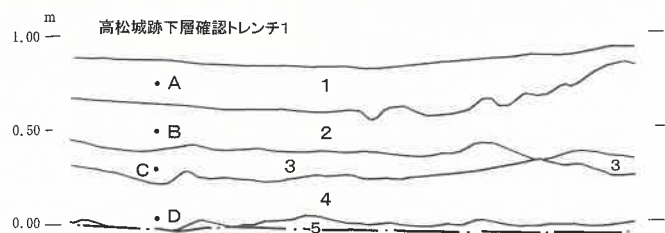
#### 2. 分析方法

上記した4試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約3～6g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂などを除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え30分間放置する。水洗後、重液分離（臭化亜鉛溶液：比重2.1を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。次に、酢酸処理、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフランインにて染色を施した。また、花粉化石の単体標本を適宜作成し、各々にPLC.SS番号を付し形態観察用および保存用とした。

#### 3. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉23、草本花粉10、形態分類を含むシダ植物胞子3の計36である。これら花粉・胞子の一覧を第2表に、また、主要な花粉・胞子の分布を第85図に示した。なお分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物は全花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また図および表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難



第84図 試料採取地点付近の土層断面と試料採取層準(●)

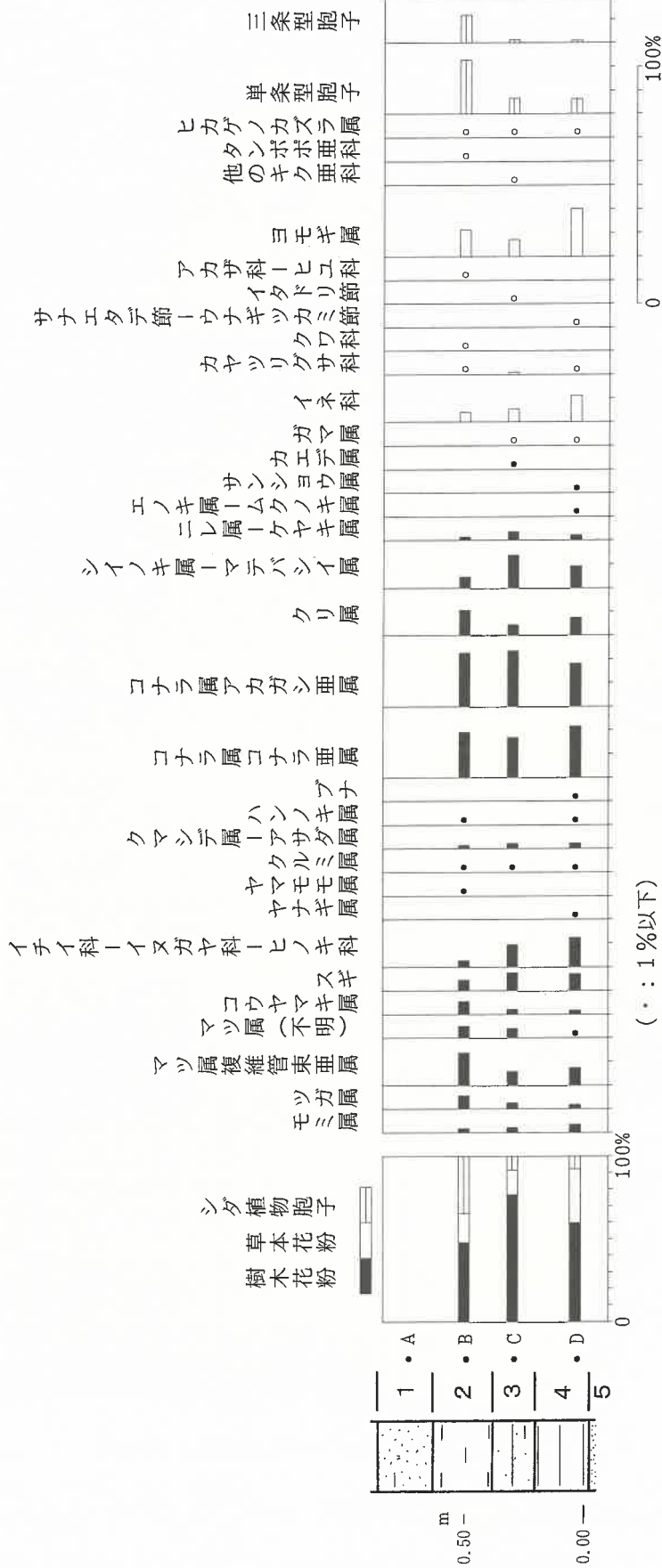
和名	学名	A	B	C	D
樹木					
モミ属	<i>Abies</i>	-	4	5	8
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	12	6	4
マツ属単維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyton</i>	-	-	1	-
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyton</i>	-	30	13	17
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	11	9	2
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	12	5	4
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	-	10	17	16
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	-	6	21	28
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	-	-	2
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	1	-	-
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	1	1	2
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	-	3	5	5
カバノキ属	<i>Betula</i>	-	-	1	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	1	-	1
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	-	-	-	1
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	-	42	38	49
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	-	49	53	41
クリ属	<i>Castanea</i>	1	23	10	17
シイノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis - Pasania</i>	-	10	31	21
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	-	3	8	5
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	-	-	1
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	-	-	1
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	1	-
-----					
草本					
ガマ属	<i>Typha</i>	-	-	1	1
イネ科	Gramineae	1	18	16	42
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	3	3	3
クワ科	Moraceae	-	1	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	-	-	1
イタドリ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	-	1	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	4	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	3	51	21	76
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	1	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	-	2	-	-
-----					
シダ植物					
ヒカゲノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	-	1	2	1
単条型孢子	Monolete spore	2	103	19	24
三条型孢子	Trilete spore	2	53	4	4
-----					
樹木花粉	Arboreal pollen	1	218	225	226
草本花粉	Nonarboreal pollen	5	79	43	123
シダ植物孢子	Spores	4	157	25	29
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	10	454	293	378
不明花粉	Unknown pollen	0	52	31	32

T.-C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

第2表 産出花粉化石一覧表

草本花粉・シダ植物孢子

樹木花粉



第85図 高松城跡の主要花粉化石分布図

(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉、孢子は花粉、孢子総数を基数として百分率で算出した)

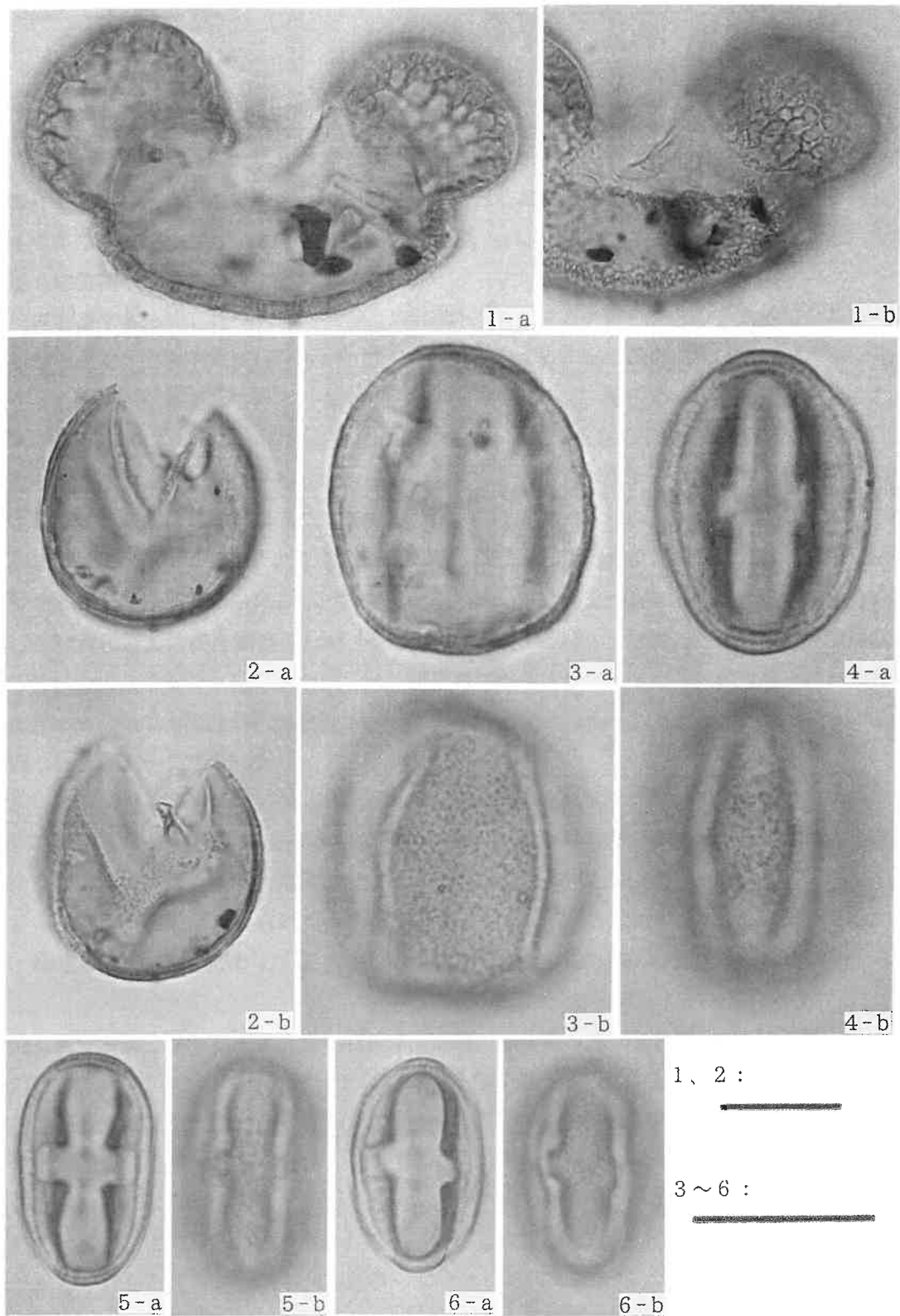


なものを示し、クワ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括していれてある。

検鏡の結果、試料Aにおいては花粉化石がほとんど得られず分布図として示すことができなかった。試料B～Dにおいてはコナラ亜属とアカガシ亜属が比較的高い出現率20%前後を示している。シイ類が試料Cで約14%を示すなど10%前後得られており、クリ属も10%前後の出現率を示している。その他の広葉樹類ではクマシデ属－アサダ属やニレ属－ケヤキ属が3試料とも1%を越えている。針葉樹類ではヒノキ類が上部に向かい減少する傾向が認められ、スギも試料Bでは出現率を下げている。反対にツガ属やコウヤマキ属は若干ではあるが上部に向かい出現率を上げる傾向にあり、ニヨウマツ類も試料Bでは下部2試料に比べ倍増して10%を越えている。また試料16では単条型や三条型のシダ植物胞子がやや多く検出されている。

#### 4. 高松城跡周辺の古植生

分析試料はいずれも中世以前と考えられており、この頃の遺跡周辺微高地上にはアカガシ亜属やシイ類を主体とした照葉樹林が成立していた。またコナラ亜属を中心にクリ属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹類も一部に林分を広げていたと推測される。一方モミ属、ツガ属、ニヨウマツ類、コウヤマキ属、スギ、ヒノキ類といった温帯性針葉樹類は主に周辺丘陵部に生育していたと推測され、そのうちスギやヒノキ類は生育地を狭める傾向にあった。反対にニヨウマツ類は増加傾向にあり、遺跡周辺の微高地上にも二次林として生育地を広げていったものと思われる。この頃の草本植生は貧しかったと推測され、イネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属などが上記森林の林縁部にわずかに生育していたにすぎなかったと思われる。また試料Aにおいてはほとんど花粉化石は得られていない。堆積層にはラミナ状に粗砂が堆積していることから河川の影響が予想され、多くの花粉化石は流されてしまっていることも考えられる。またその下位の試料Bにおいて胞子が多産しており、上記河川の影響など土地的に安定していなかったことによりシダ植物が増加したことが推測されよう。



第86図 高松城跡の花粉化石 (scale bar:20  $\mu$ m)

- |                               |                                  |
|-------------------------------|----------------------------------|
| 1 : マツ属複維管束亜属 PLC.SS 3306 試料D | 4 : コナラ属アカガシ亜属 PLC.SS 3305 試料D   |
| 2 : スギ PLC.SS 3302 試料C        | 5 : シイノキ属-マテバシイ属 PLC.SS 3307 試料D |
| 3 : コナラ属コナラ亜属 PLC.SS 3304 試料D | 6 : クリ属 PLC.SS 3303 試料D          |

## 第5章 まとめ

### 第1節 遺構の変遷

第87図に高松城跡（丸の内地区）における遺構変遷図を提示した。編年観に関しては、陶磁器は各生産地における編年に基づき、在地産土師質土器や消費地における状況は高松城様相把握に依拠した。時代背景を考慮して6期に大別し、必要に応じて細分を行った。

#### 1. 1期；13世紀中葉～後半

井戸状遺構を2基確認した（S E01・02、第16図）。掘方斜面ないし裏込めを埋置しながら石組を構築し、曲物を上下、上中下に重ね合わせた最下段構造を呈する。最下段の曲物下端は湧水層に達し、調査時にも多量の湧水を確認している。また、基盤層上面において、そのわずかな起伏に埋積した土器群を確認している（第17～19図）。明確な掘方は確認できないが、重層的な出土状況を呈し（図版3）、土器器表面の摩滅も確認できない。基盤層形成時に上流より運ばれた一群とは評価できず、基盤層の形成に後出する一群と考えられる。推測の域を出ないが、出土遺物が示す9～10世紀の遺構底面付近のみが遺存し、掘方は削平により失われたと考えておきたい。こうした内容は、高松城築城以前の生活痕跡であり、少なくとも当該地点における9～10世紀代に生活可能な地盤が存在したことを示す。西の丸町地区では12～13世紀前葉の湊を検出したが（佐藤2003、松本2003a）、生活に密接した内容ではなく、集落という性格を付与することはできない。当該地点では集落域を検出したことになり、こうした調査例の増加に伴い高松城築城以前の状況が明らかになるだろう。

#### 2. 2期；16世紀末～17世紀中葉

生駒氏による高松城築城以降（天正15（1588）年）、松平氏入城時までの時期設定を行いたい（寛永19（1642）年）、出土遺物が示す年代観は1640～50年代となる遺構を多く確認しており、その変遷は明瞭ではない。第87図では肥前系磁器出現以前（2a期）、肥前系磁器の普及以前（2b期）、高台内無釉の肥前系磁器碗や肥前系陶器溝縁皿の盛花期（2c期）、前記したすべての時期に属する遺物を一定量含み、細分した各時期を問わず2期を通じて機能していた可能性のある遺構（2期）に細分して提示した。

当該期に属する遺構として最も注意すべきは、2条の平行する溝（S D01・02）とそれに直交する溝である（S D03・04）。S D01南端部はS D03に連続し、西へ「L」字形に屈曲する。S D03は検出位置や埋土、掘方形状、出土遺物からS D04に連続する同一溝の可能性が高く、さらにS D01南端部埋土はS D03上層埋土に連続する（第33図）。加えて、S D03はS D01と合流する箇所から東へは延びないため、碁盤状の溝ではなく、方形ないし「L」・「コ」字形の平面プランを呈する溝であることが窺える。S D02はS D01に平行し、出土遺物が示す年代観もほぼ等しい。しかし、建物基礎によりS D01・03合流地点に平行した箇所における状況は明らかではなく（A U・55グリット接点付近）、S D01に平行する同時期の溝と評価するに留まる。しかし、約3m間隔で併走するS D01・02のほぼ中央にやはり平行する柵列が確認できる（S A03）。南北両端部は調査区外へ延長し、S D01・03屈曲部東にも柱穴が位置する（S P10）。こうした状況から、S A03はS D01と平行し、S D03との合流箇所を超過して南へ延伸する可能性を想定することができる。よって、S D02もS A03に平行して南に直線的に延びる可能性を考慮しておく必要があるだろう。また、S D03・04に平行する柵列もあり（S A01）、出土遺物か



らの所属時期決定は困難であるが、2期に位置付けられよう。前述したように、SD01～04は2期を通じて機能する。それに呼応して2a～c期の遺構は原則としてこれに重複する位置関係は示さず、逆にこの主軸方位にある程度規制された状況を看取することができる。

2a期は16世紀末～17世紀初頭に属し、SP50・SK01～04を確認した。土坑の性格は明らかではないが、SK01・02・04の検出位置は南北、東西にほぼ直交し、SD01・03・04がなす主軸方位に合致する。2b期に属する遺構はSX01のみに留まる。出土遺物には肥前系磁器は確認できないが、砂目積み  
の肥前系陶器を一定量認め、高松城様相把握を参考にすると、1620～30年に位置付けることができる。しかし、SD01に先行する重複関係を示すという問題を残す。2c期に属する遺構として、SP47・SE03・SK05がある。出土遺物より高松城様相把握の様相3に併行する時期を想定している(1640～50年代)。SE03とSK05は重複関係を有し、元来同一遺構であった可能性も否定できない。

ここで留意すべきは、その年代観である。高松城は天正15(1588)年に生駒氏が入部し、寛永17(1640)年の生駒騒動を経て、寛永19(1642)年に松平頼重が入城する。様相3はまさに松平氏入城直後の年代観を示し、SD01～04の最終埋没時期が様相3であることは極めて示唆である。後述するが、SD01～04は屋敷境の区画施設である可能性が高く、2期を通じて機能している点を考慮すると、生駒氏段階の屋敷割が松平氏入城後も継続している状況が看取できることになる。西の丸町地区における生駒期の鍵形街路が1650年代前半に描かれた『高松城下図屏風』(第7図)にも描かれる状況に呼応する。

### 3. 3期；17世紀後半

SK06の確認に留まり、整地層出土遺物を含めても当該期に属する土器・陶磁器は稀薄である。一方、整地層Vも高松大火に関連した整地層IVの下位に位置することから、17世紀中葉の設置を想定している。注意すべきはその堆積状況である(第12・14図)。SD01埋土との識別が困難であるが、第14図54～56層の検出最上位は標高1mを測り、整地層IVより下位に位置する。出土遺物や埋土から整地層Vと捉えた。SD01は2c期には機能を停止するが、その掘方形状に沿った堆積を示す整地層Vの存在は17世紀中葉段階において完全には埋没していない状況を示す。なお、幕末前後の年代観を想定した整地層Iも同様の堆積状況を呈する(第14図52・53層)。

### 4. 4期；18世紀前半～19世紀第3四半期

享保3(1718)年の高松大火以降、幕末までを4期とし、第12図で提示した整地層IVを高松大火関連層位と判断した。西の丸町地区ではこれを契機として地割や屋敷割に大きな変化が確認でき(佐藤2003)、当該地点における絵図の変遷においてもこうした状況は看取できる(第2章第2節)。なお、整地面の変遷は確認できないが、出土遺物が示す年代観から4期をa～c期に細分している。

4a期は高松大火直後の18世紀前半に位置付けられる土器・陶磁器を共伴する時期とした(様相5併行)。隣接する2基の土坑を抽出した(SK07・08)。SK07出土の237とSK08出土の255は接合関係を有し、埋没時の共時性を認める。また、整地層Ⅲも当該期に属する。その埋土はSD02・SX02で確認し、いずれも掘方底面に17世紀中葉埋没の埋土を認め、その上位に厚く堆積する。なかでもSD02はその掘方形状に沿った堆積状況を示し、再掘削ないし当該期まで完全に埋没していない状況が看取できる。平面では最下層埋土(第14図88層)の広がりに関り確認できたため、整地層Ⅲ段階のSD02平面形状は明らかではなく、整地層Ⅲを切り込む78～82層埋土も舟底状の断面形状を呈し、元来溝であった可能性も否定できない状況となる。

4b期は出土遺物から18世紀第3四半期～19世紀第1四半期までの時期幅を設定した。高松城様相把



第87図 遺構変遷図

握では様相6～7となる。SK09は18世紀第3四半期、SD05・SK10が18世紀第4四半期～19世紀第1四半期に属し、整地層Ⅱも当該期に属する。SK10からは一括性の高い多量の土器・陶磁器が出土しており、埋土に基盤層ブロックを多量に含有することから、比較的短期間に埋め戻された廃棄土坑と評価できる。さらに、SK10と整地層Ⅱ出土遺物は接合関係を有し(343-530、351-531)、埋没時の同時性を示す。両者は調査区の東西両端に位置し、廃棄土坑と整地層という性格上、何らかの要因に起因した屋敷地内の再整備と理解できる。その想定が正しければ、少なくともSK10～整地層Ⅱ地点までは同一屋敷地内という解釈も可能であろう。

4c期は出土遺物や整地層、遺構の重複関係から19世紀第2・3四半期の時間幅を設定したが、当該期に属する遺構はSK11・12に留まる。その遺構の重複関係は、2期に属するSD01に後出し、この段階でSD01による区画が完全に消滅した可能性が想定できる。SK12も2期に属する平行する2条の溝(SD01・02)の間隙を併走するSA03に後出する重複関係を有し、2期から続く当該地点における屋敷割の消滅時期の確たる下限として評価できる。

### 5. 5期；幕末～19世紀末

当該期に属する遺構は調査区東部を中心に確認し、主要遺構としてSE04・SK13～16を認める。いずれも幕末前後に設置された整地層Ⅰ上面において検出した。

### 6. 6期；19世紀末～20世紀初頭

SE05は土師質土器井筒を井戸枠とし、モルタルを用いて上位井筒との接合を行う。井筒の出現時期は明らかではないが、出土遺物より当該期へ位置付けた。

以上、高松城跡(丸の内地区)における遺構変遷を6期9細分して提示した。遺構の重複関係や出土遺物に基づき導き出した変遷観であり、出土遺物に関しては西の丸町地区における様相を援用したため、やや正確性を欠く可能性も残る。

## 第2節 絵図との比較

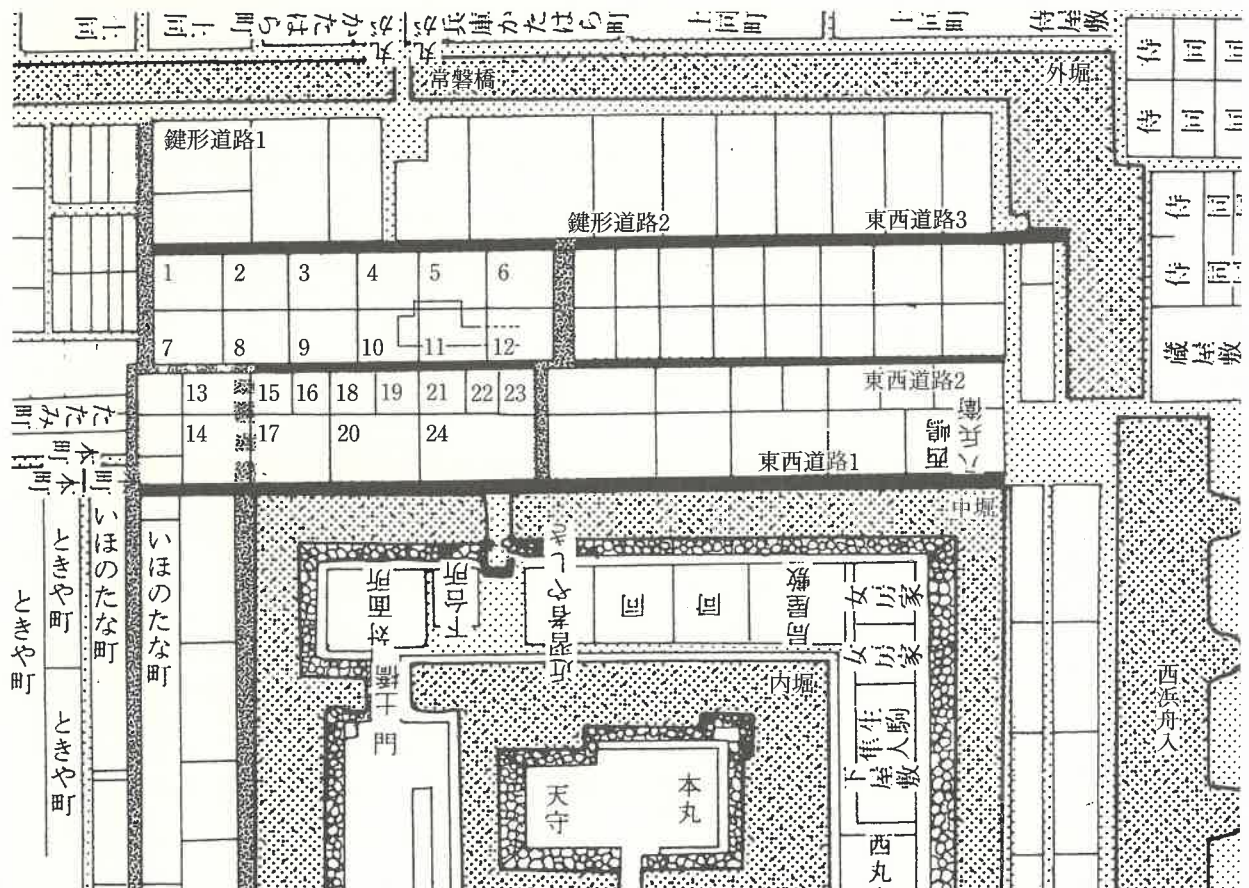
上記した変遷観に基づき絵図における調査地点の同定を検討したい。絵図や検出遺構の制約から今回は2期と4期の状況について確認したい。第2章第2節ないし第4図で示したように、調査地点は東西道路2・3間、鍵形道路1・2間の区画に位置し、常磐橋を北へ延伸した箇所より西にある。ここで示した各絵図にはこれら指標となる道路や常磐橋、堀をトーンで示した。なお、絵図は北が下となる。

2期の絵図として、『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』と『高松城下図屏風』を挙げた。第88図に前者のトレース図を転載し(森下1996)、香川県歴史博物館学芸員御厨義道氏に判読して頂き、屋敷地の拝領者名を加筆した。第89図は鳥瞰図的に描かれた『高松城下図屏風』の地割・屋敷割を平面で捉えたものである(佐藤2003)。前者は寛永15～16(1638～1639)年、後者は1650年代前半の製作年代となり、生駒氏末期と松平氏初期の城下の状況と理解できる。地割では鍵形道路1の屈曲部方向が逆転する以外顕著な差異は見出せず、松平氏入城に際しては生駒氏の骨格を踏襲した状況が看取できる。一方、屋敷割では前者の絵図では拝領者名の記載に重点が置かれたためか、各所に均等割りされた屋敷地が表現される。しかし、『高松城下図屏風』と比較すると、屋敷地の統合・整理がなされた状況を容易に読み取れ、随所に生駒氏時代の屋敷割が踏襲された箇所を垣間見ることができる。統合は進行するが、屋敷割の絶対的な位置関係に変化はなかったと理解したい。第92図に当調査区と隣接する高松市教育委員会調査地点の遺構配置図を掲載し、上段に16世紀末～17世紀中葉(2期)に属する遺構を黒塗りないしトー



ンで示した。併走するSD01・02は2期を通じて機能した溝であり（16世紀末～17世紀中葉）、屋敷境に開削された溝と評価できる。さらに、SD03・04、高松市調査SD204はほぼ同一線状に位置する東西主軸の溝である可能性が高く、両絵図に描かれた鍵形道路1・2、東西道路2・3間を南北に細分したラインに該当する。SD01・02は東西に細分された屋敷地の境を示し、『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』では10・11ないし11・12間と理解できるが、前記したように均等割りされた屋敷地であるため、正確な比定は困難である。ここでは、常磐橋との位置関係から10・11間、つまり「大塚八右衛門」と「大塚采女」の屋敷地を画する施設と評価しておきたい。なお、細長く延びる調査区西部は12地点まで連続するが、攪乱が激しく11・12間を区画する施設は確認できない。

一方、『高松城下図屏風』（第89図）と鍵形道路や東西道路、常磐橋、各堀を復元し、調査地点を明記した第4図と比較すると、第4図では鍵形道路1・2間：鍵形道路2から常磐橋間＝3：1であるのに対し、『高松城下図屏風』では2：1となり、問題を残す。検出遺構は併走する2条の溝（SD01・02）やそれに直交するSD03・04が生駒期から継続して機能しており、後者を鍵形道路1・2、東西道路2・3間の区画を南北に細分する施設、前者をさらに東西に細分された屋敷地を区画する施設と評価す

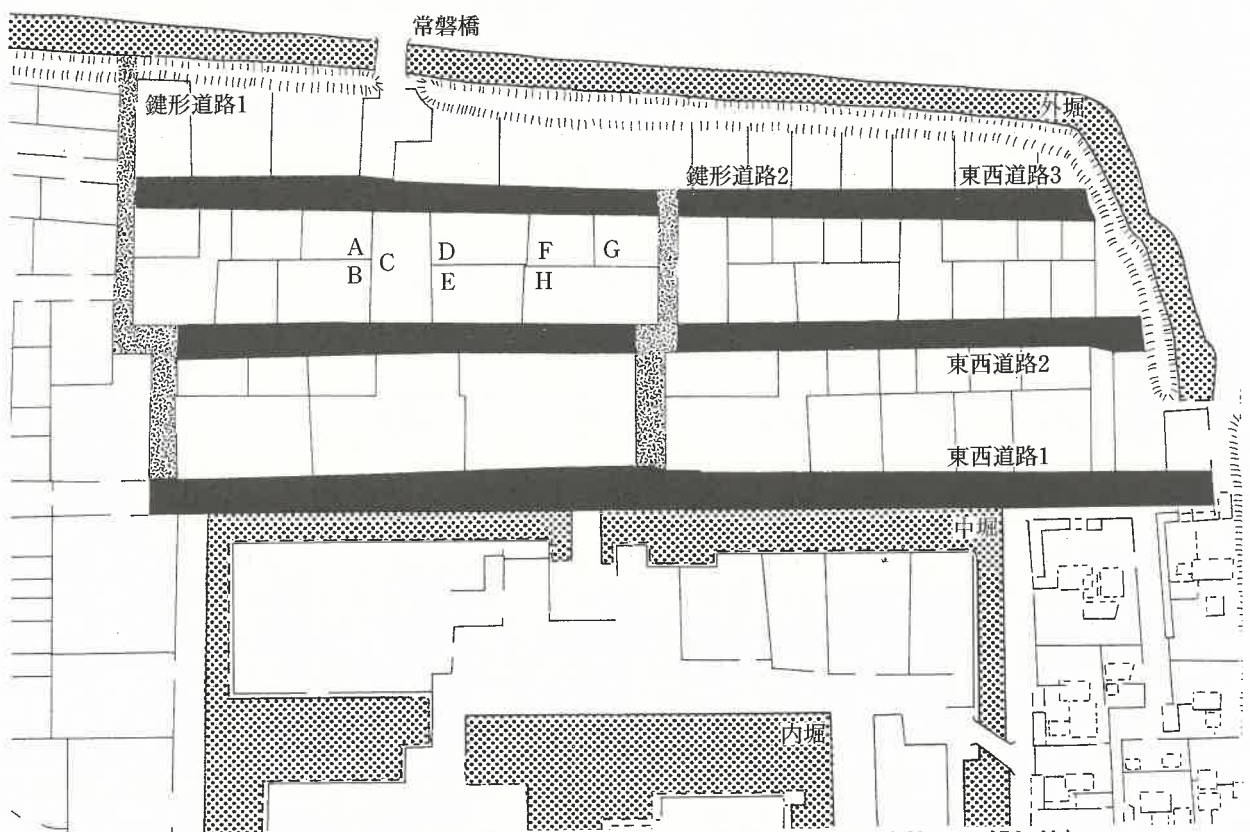


- |            |             |                |
|------------|-------------|----------------|
| 1：長井 市兵衛   | 2：石崎 八郎右衛門  | 3：牛野 清右衛門      |
| 4：柴山 忠右衛門  | 5：吉田 八助     | 6：尾崎 内蔵丞       |
| 7：引田 左馬助   | 8：遠山 小兵衛    | 9：長江 吉十郎       |
| 10：大塚 八右衛門 | 11：大塚 采女    | 12：(張り紙)       |
| 13：四宮 殿馬   | 14：入谷 助(道)? | 15：三野 □□       |
| 16：三野 忠左衛門 | 17：三野 四郎左衛門 | 18：木(ないし本)村 与助 |
| 19：吉岡 太郎兵衛 | 20：前野 次太夫   | 21：北村 与左衛門     |
| 22・23：記載無し | 24：生駒 河内    |                |

第88図 『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』トレース図（森下1996より抜粋、一部加筆）



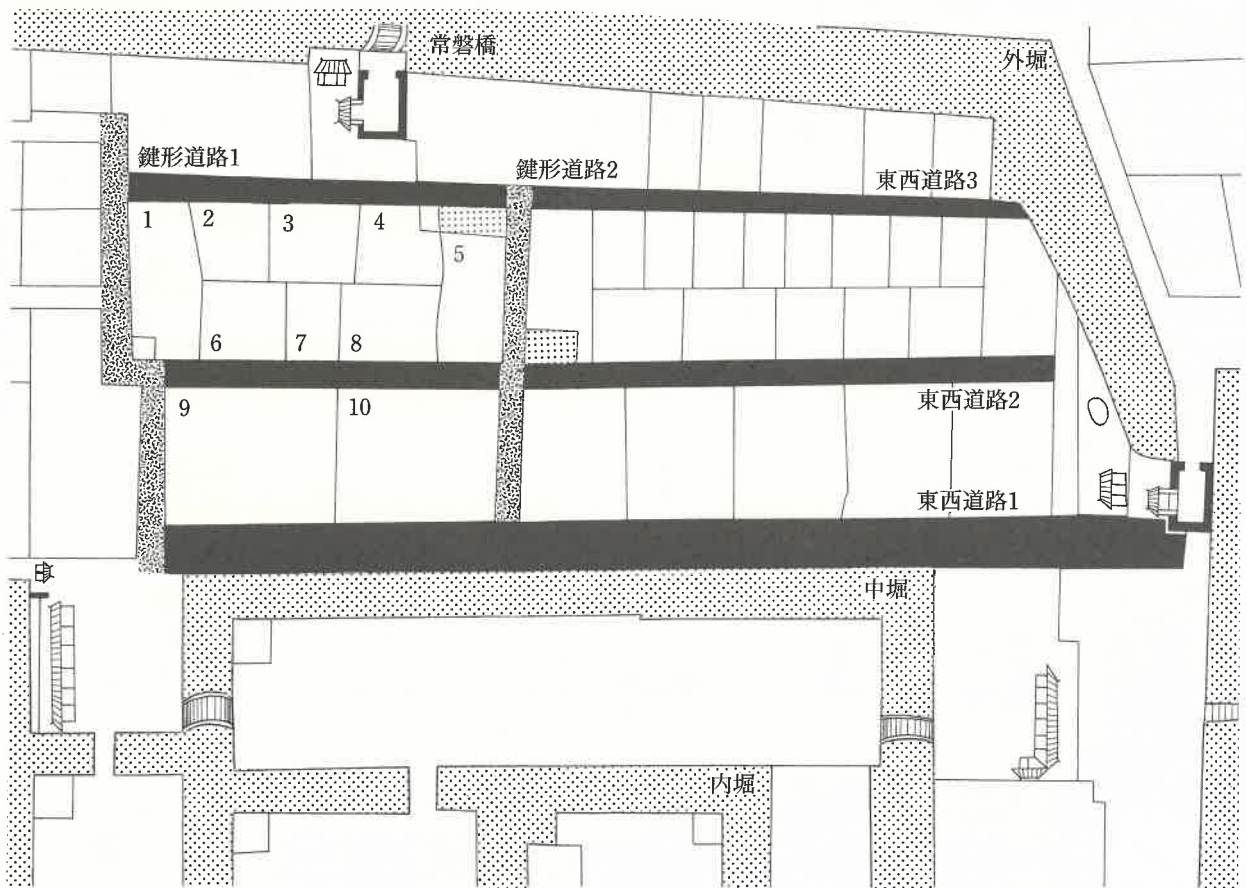
ることができる。常磐橋の位置より、SD01・02はCとD・E屋敷地ないしEとH屋敷地を画する施設と考えられる。ここで留意すべきはSA03の存在とSD01・03の平面プランである。第5章第1節で示したように、SD01とSD03は埋土を共有し、検出した限りでは「L」字形の平面プランとなり、「コないしロ」字形ないし「T」字形の平面プランに復元でき、決して「十」字形には交差しない。SD01に平行するSA03はSD01・03がなす屈折地点を超過して南に直線的に延長する。こうした状況を考慮すると、東西道路2・3間に細長く伸び、南北に細分されない屋敷地Cとその西に位置する南北に細分された屋敷地D・Eの位置関係は極めて示唆的である。SA03は屋敷地Cの西端を画する施設であり、SD02もその可能性が高い。SD01は屋敷地Eの東端部、SD03・04は屋敷地Eの南端部と理解することが最も整合性の高い解釈である（復元案1、第92図上段下）。しかし、隣接する高松市教育委員会調査地点における遺構の在り方が問題となる。その概要を述べると、当調査区のSD03・04を東に直線的に延伸した箇所にはほぼ同じ断面形状を呈する東西主軸の溝があり（SD204）、その南に取り付き、「T」字形の平面プランとなる南北主軸の溝を認める（SD203）。掲載遺物による限り、SD204は1620～30年代、SD203は16世紀末～17世紀中葉の土器・陶磁器が出土する。さらにSD203検出地点は主要地割線となり、ほぼ同地点で先行する柵列や後出する溝が確認されている（大嶋2002）。当調査地点における状況からはSD203を屋敷地Cの東端部を画する施設と評価したいが、SD204より北には延びないため、絵図との齟齬を認める。SD02の南は建物基礎により遺構は消滅しているため詳細は不明であるが、SD204はSD02に取り付き、SD01・03・04がなす「T」字形平面プランと対照的な関係である可能性も否定できない。つまり、屋敷地FとHと屋敷地DとEの交点付近となり、復元案1とは異なる解釈となる（復元案2）。ここでは屋敷地Cの東端部が南北に細分される箇所で小さく屈曲していた可能性を想定し、復元案1を提示しておきたい。



第89図 『高松城下図屏風』平面起こし図（佐藤2003より抜粋、一部加筆）

次に18世紀～幕末までの状況を『高松城全図』（享保年間（1716～1736））と『高松市街古図』（文化年間（1804～1818））を比較しつつ検討したい。調査地点からは居住者（屋敷の拝領者）を特定できる内容は確認できなかったが、隣接する高松市教育委員会調査地点からは注目すべき遺物が出土している（大嶋2002）。第92図下段に18世紀後半～19世紀第1四半期に属する遺構を示したが、市教委調査地点SK123より「中陰四つ葵」文の上絵付けを施した陶器碗（理兵衛焼）や道具瓦が出土している。第9図に掲載した『高松市街古図』には拝領者の家紋が記されており、「中陰四つ葵」文が松平大膳家の家紋であることが窺える。SK123は当調査地点におけるSK09と同一遺構であり、18世紀第4四半期初頭の埋没が想定できる。よって、当該地点が松平大膳家の屋敷地であったと推測することができる。

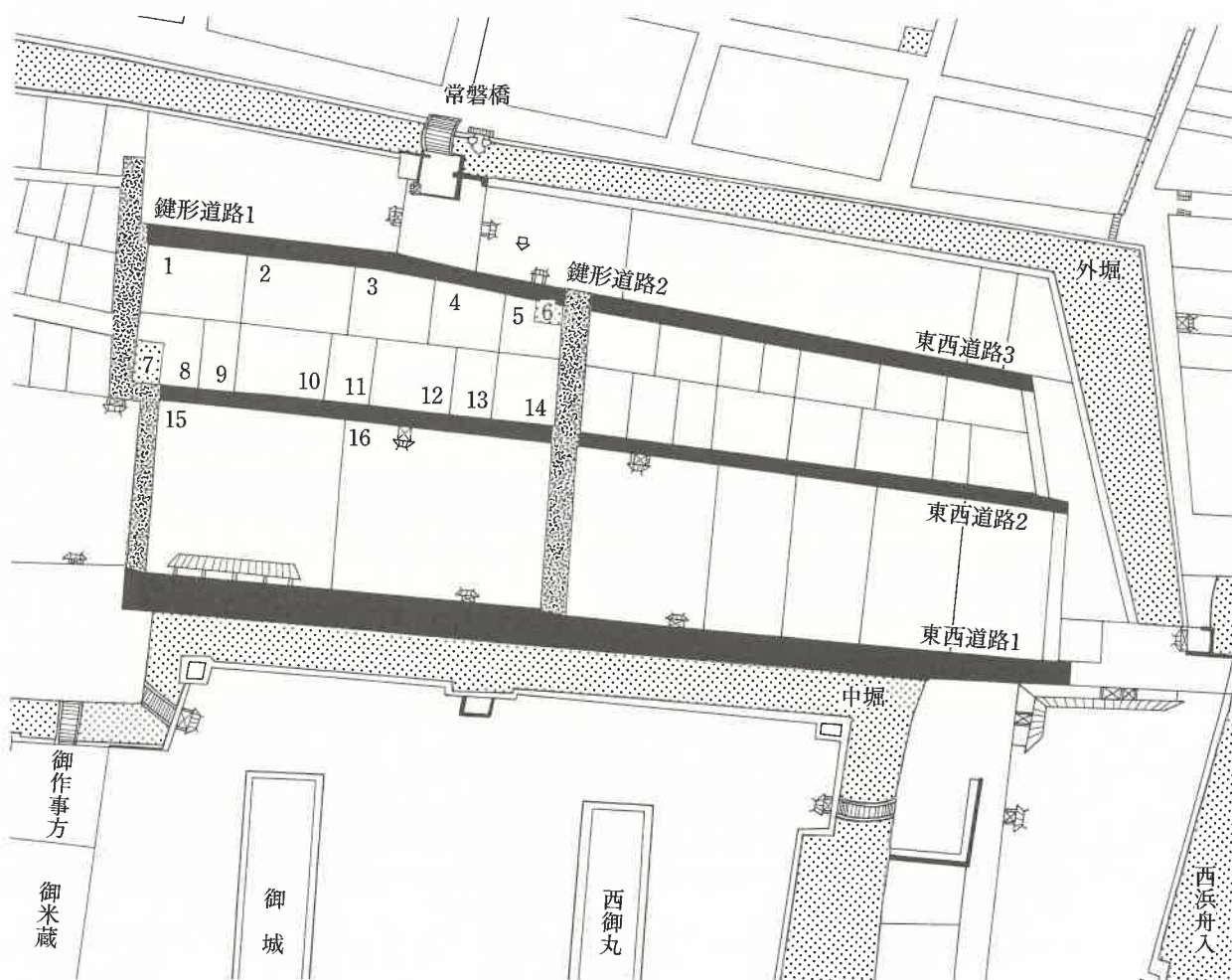
第90図に『高松城下図』をトレースし、明記された拝領者名を加筆した。前述した絵図と同様に、絵図には鍵形道路や東西道路、常磐橋、各堀を明記した。調査地点は鍵形道路1・2、東西道路2・3間に位置し、常磐橋を北へ延伸した箇所よりやや西に位置する。8とした箇所には「左近殿 中屋敷」と記載され、左近殿とはその北の10とした屋敷地に「松平左近殿」とあるように、松平大膳頼熙に該当する。よって、調査地点が8の区画に位置することは疑いない。当調査区では絵図が示す享保年間に位置付けられる遺構は稀薄であり（4a期）、当該期の状況は明らかではなく、調査区西部も攪乱が激しく区画5（「大須賀 小兵衛」）との屋敷地の境は確認できない。



- |           |           |            |
|-----------|-----------|------------|
| 1：御田尾（屋）敷 | 2：平山 左右衛門 | 3：久米 六郎右衛門 |
| 4：小夫 茂作   | 5：大須加 小兵衛 | 6：山本 半右衛門  |
| 7：記載無し    | 8：左近殿 中屋敷 | 9：御用屋敷     |
| 10：松平左近殿  |           |            |

第90図 『高松城下図』 トレース図

第91図には『高松市街古図』のトレース図及び屋敷の拝領者名を記した。調査地点は鍵形道路1・2、東西道路2・3間の区画にあり、常磐橋よりやや西に位置する。前述したように、高松市教育委員会調査地点SK123より松平大膳家の家紋入りの陶器碗や道具瓦が出土しており、当調査区SK09と同一遺構となる(第92図)。第91図の12とした区画には「松平大膳殿」とあり、さらに東西道路2を挟んだ北側の16区画にも「松平大膳殿」と記載され、前者が中屋敷、後者が上屋敷となる。出土遺物や絵図との対応関係から、調査地点は第91図の12区画である蓋然性は極めて高い。また、SK09に重複する位置関係を示すSX02の上位に設置される整地層Ⅱ出土遺物と調査区西端付近に位置するSK10出土遺物には接合関係を有する肥前系磁器を2点確認しており、整地層と廃棄土坑といった性格上、何らかの要因に起因した一連の動作と理解することができ、同一屋敷地内という解釈が可能である。SK123との位置関係から大膳家中屋敷であることは明白であり、少なくともSK123検出位置からSK10地点までは松平大膳家の屋敷地であった可能性が高い。しかし、SK10検出地点は高松市教育委員会により発掘調査が実施された松平大膳家上屋敷調査地点で確認された鍵形道路2から30m前後しか離れていない。ほぼ



- |            |             |                |
|------------|-------------|----------------|
| 1：沼田 甚太    | 2：平山 左衛門    | 3：久米 五兵衛       |
| 4：小夫 数太    | 5：阿賀        | 6・7：記載無し(貯水池か) |
| 8：中務所 御長屋  | 9：岸 良介      | 10：八木 弥五左衛門    |
| 11：記載無し    | 12：松平 大膳殿   | 13：記載無し        |
| 14：斎藤 園右衛門 | 15：中屋敷 江戸長屋 | 16：松平 大膳殿      |

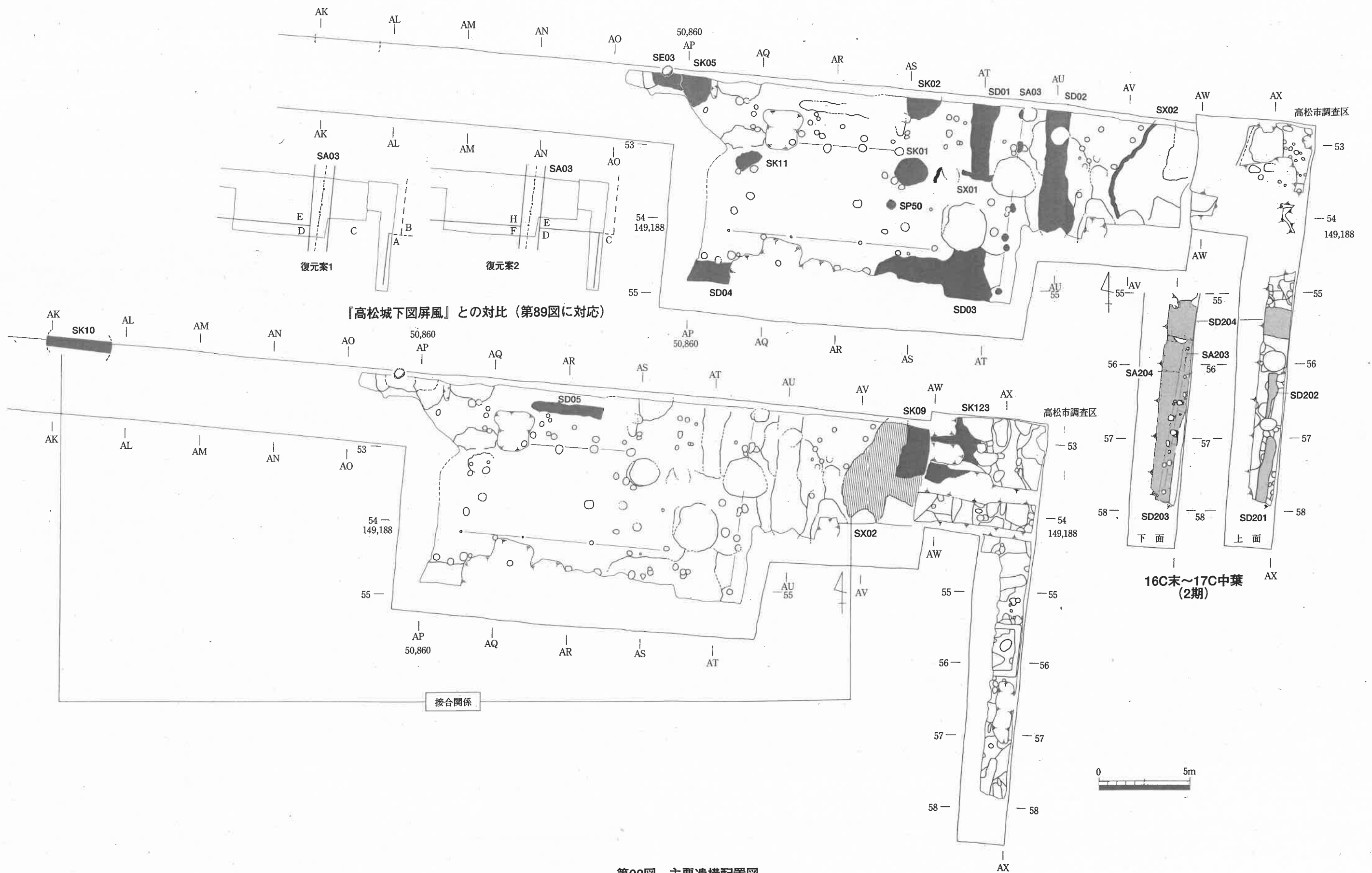
第91図 『高松市街古図』トレース図



同時期の『高松市街古図』には（第91図）、鍵形道路2から松平大膳家中屋敷までに「齊藤園右衛門」（14）と空閑地（13）の2区画の屋敷地が描かれる。大膳家中屋敷（12）をSK10検出地点まで拡張すると、13・14区画が極めて狭い屋敷地となり、絵図の精度とも関連するが、問題を残す。SK10と整地層Ⅱ出土遺物の接合関係を重視し、同一屋敷地内と評価するならば、13の空閑地は大膳家に関連した区画であったと推測することができる。また、SK10出土遺物は西の丸町地区におけるSXb06・SKb63に酷似した土器・陶磁器構成を示し（佐藤2003、松本2003a）、搬入される陶磁器の様相に差異を見出すことは困難である。大久保家は3000石の石高を有し、藩主の子息を家督として迎え入れるなど、藩主松平氏の公族となる高松藩筆頭家老に位置付けられる。一方、大膳家は藩主の一族であり、大膳家初代家督は松平家初代藩主頼重の子息にあたる人物である（頼芳）。つまり、大久保家も大膳家も高松藩では最上位の地位を占める筆頭家老となる。搬入された陶磁器に差異を見出せないといった状況は、間接的にはSK10を大膳家屋敷地内と評価することも可能となろう。

なお、厳密な時期比定は行えなかったが、調査区南端部付近に柱穴が東西に並ぶ箇所を認める（55グリットラインやや北側）。SD03・04に後出する重複関係を有し、17世紀後半以降の所産となる。SD03・04は16世紀末～17世紀中葉段階における鍵形道路1・2間、東西道路2・3間の区画を南北に細分する施設と考えられ、その上位に位置する柱穴列もそれ以降の同区画を南北に細分する施設の可能性も残る。『高松城下図』では区画4・8間（第90図）、『高松市街古図』では3ないし4と12区画間の区画施設にほぼ対応する（第91図）。

以上、絵図に記載された屋敷割と検出した遺構や出土遺物の内容を対比し、絵図における調査地点の同定を試みた。2条の平行する溝とその間を区切る柵列、それらに直交する溝といった遺構配置や調査地点の同定を可能とする家紋入りの陶器碗や道具瓦といった豊富な出土遺物を検出ないし確認したが、各絵図の精度や縦横の縮尺率の差異等に起因して、調査地点の厳密な比定を行うことはできなかった。今後周辺の調査が進展し、絵図に認める南北・東西を区画する施設の構造が明らかになることを期待しつつ、筆者に課せられた責務としたい。



『高松城下図屏風』との対比 (第89図に対応)

接合関係

16C末~17C中葉  
(2期)

第92図 主要遺構配置図

18C後半~19C第1 四半期

## 引用文献・主要参考文献

飯田町遺跡遺跡調査会1995『飯田町遺跡』

上田秀夫1991「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究会』Ⅰ

大嶋和則2002『香川県弁護士会館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（松平大膳家中屋敷跡）』高松市教育委員会ほか

大橋康二2000「九州陶磁概論」『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』九州陶磁学会

岡佳子2001「近世京焼の展開—18世紀を中心に—」『近世信楽焼をめぐって』関西陶磁史研究会

岡佳子2002「京焼と理兵衛焼」四国城下町研究会2002

小野正敏1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会

九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』

北山健一郎1999『香川県立博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センター  
ほか

日下正剛1998『新蔵町1丁目遺跡 企業局総合管理センター地点』徳島県埋蔵文化財センター

日下正剛2000 a 「徳島城下町」『江戸遺跡研究会第13回大会 江戸と国元』江戸遺跡研究会

日下正剛2000 b 「大谷焼・源内焼」『第2回徳島城下町研究会 四国・淡路の陶磁器—生産と流通Ⅰ—』

日下正剛2000 c 『新蔵町1丁目遺跡 企業局総合管理事務所地点Ⅱ』徳島県埋蔵文化財センター

日下正剛2002 a 『南前川町1丁目遺跡』徳島県埋蔵文化財センター

日下正剛2002 b 「徳島城下町出土の土製火鉢・焔炉類」『論集 徳島の考古学』

小森俊寛・上村憲章1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 研究紀要』第3号

佐賀県立九州陶磁文化館1984『国内出土の肥前陶磁』

佐賀県立九州陶磁文化館1996『土と炎—九州陶磁の歴史的展開—』

佐藤竜馬2000『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

佐藤竜馬2001 a 「高松城跡（西の丸町）の資料整理」『平成12年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告 浜ノ町遺跡・高松城跡（西の丸町）・西打遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

佐藤竜馬2001 b 「瀬戸内沿岸地域からみた讃岐の焙烙」『第3回四国徳島城下町研究会 四国と周辺の土器—焙烙の生産と流通—』

佐藤竜馬2002「香川県監獄署における窯業生産」四国城下町研究会2002

佐藤竜馬2003『サンポート高松総合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

四国城下町研究会2002『四国・淡路の陶磁器Ⅱ—理兵衛焼と京焼—』

白神典之1992「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第19号

千代田区飯田町遺跡調査会ほか2001『飯田町遺跡』

豊田 基1982「讃岐のやきもの」『日本やきもの集成10 四国』平凡社

千代田区飯田町遺跡調査会ほか2001『東京都千代田区 飯田町遺跡』

長佐古真也2002 a 「「お茶碗」考」『国立歴史民俗博物館研究報告 第94集』国立歴史民俗博物館

長佐古真也2002 b 「考古学の方法で見る「京焼」—その多面性—」四国城下町研究会2002



- 中野雄二1998『三股青磁窯跡』長崎県波佐見町教育委員会
- 中野雄二2000「波佐見」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 中野雄二2001『智恵治窯跡』長崎県波佐見町教育委員会
- 難波洋三1992「徳川大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究』第9
- 野上建紀2000「磁器の編年（色絵以外） 1. 碗・小坏・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 乗岡 実1999「近世備前焼の播鉢」『関西近世考古学研究 VII 特集 上方と江戸』関西近世考古学研究会
- 乗岡 実2000「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会
- 乗岡 実2001「備前焼大甕編年レクチャー資料」『関西近世考古学研究会』IX 関西近世考古学研究会
- 乗岡 実2002『岡山城三之曲輪跡一表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査一』岡山市教育委員会
- 乗松真也編2002『平成13年度高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告 高松城跡（丸の内地区）』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 藤澤良祐1987「本業焼の変遷（1）」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要 VI』瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐1989「本業焼の変遷（4）」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要 VIII』瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐1993『瀬戸市史 陶磁史篇』瀬戸市
- 藤澤良祐1998「近世瀬戸磁器編年の再検討ー磁器端反碗を中心にー」『榑崎彰一先生古希記念論文集』
- 藤好史郎・佐藤竜馬1997『高松港頭土地区画整理事業平成8年度埋蔵文化財発掘調査概要 高松城跡（西の丸町）』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 古野徳久ほか2000『平成11年度サンポート高松整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告 高松城跡（西の丸町）・浜ノ町遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 北條ゆうこ2000「珉平焼出土資料について」『第2回 徳島城下町研究会 四国・淡路の陶磁器ー生産と流通Iー』
- 堀内秀樹1997「東京大学本郷校内の遺跡における年代的考察」『東京大学校内遺跡調査研究年報I 1996年度』東京大学埋蔵文化財調査室
- 堀内秀樹2000「江戸遺跡出土陶磁器の段階設定とその画期」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』
- 松本和彦2002 a 「四国地方ー香川県ー」『第12回九州近世陶磁学会 国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる』九州近世陶磁学会
- 松本和彦2002 b 「高松城跡出土の京・信楽系陶器と理兵衛焼」四国城下町研究会2002
- 松本和彦2002 c 「第4回四国城下町研究会に参加して」『四国城下町通信』第10号
- 松本和彦2003 a 『サンポート高松総合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 高松城跡（西の丸町地区）III』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 松本和彦2003 b 「近世」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第7冊 空港跡地遺跡VI』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 松本和彦・佐藤竜馬2001「高松城出土土器・陶磁器の変遷 様相の把握」『第3回四国徳島城下町研究会 四国と周辺の土器ー炮烙の生産と流通ー 佐藤発表追加資料』
- 盛 峰雄2000「陶器の編年 1. 碗・皿」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 森下友子1996「高松城下の絵図と城下の変遷」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要』IV （財）香川県埋蔵文化財調査センター
- 森下友子2000「富田一吉金窯跡ー出土の様相」『第2回徳島城下町研究会四国・淡路の陶磁器ー生産と流通Iー』
- 森村健一1995「福建省漳州窯青花・五彩・瑠璃地の編年」『大阪府埋蔵文化財協会 研究紀要3』

# 觀 察 表

## 凡 例

1. 土器・陶磁器の名称は以下のようにそれぞれ略して記載した。

弥生土器：「弥生」	土師質土器：「土質」	瓦質土器：「瓦質」	須恵器：「須恵」
黒色土器：「黒色」	吉備系土師器：「吉備」	東播系須恵器：「東播」	瓦器：「瓦器」
中国産：「中国産」	朝鮮王朝：「朝鮮王朝」	肥前系：「肥」	備前：「備前」
京・信楽：「京信楽」	瀬戸・美濃：「瀬美」	軟質系施釉：「軟質施釉」	施釉陶器：「施釉陶」
堺・明石系：「堺・明石」			

2. 胎土は含有鉱物の種類を略号で表記した。「石」は石英・長石、「雲」は雲母、「角」は角閃石、「黒石」は黒色石粒、「赤」は赤色粒、「火」は火山ガラスを示す。また、全体の砂粒密度を「粗」・「やや粗」・「中」・「細」・「微」の5段階に分け、それぞれの含有鉱物における粒径を「大」(2mm以上)、「中」(1~1.9mm)、「小」(0.9mm以下)、その含有量を「多」・「普」・「少」に区分した。こうした分類に基づき、その組み合わせで胎土を観察した。「粗；石小少、雲中普、赤大多」とあれば、素地の砂粒密度は粗く、含有鉱物としては0.9mm以下の粒径の石英・長石が少量、1~1.9mmの雲母が普通、2mm以上の粒径の赤色粒が多く混じる胎土ということになる。

3. 焼成は全体を「硬」・「やや硬」・「良」・「やや軟」・「軟」の5段階に区分した。但し、磁器・施釉陶器に関しては、記載を避けた。

4. 色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1992年度版』を参照した。その記載方法としては、土師質土器・瓦器・瓦質土器等に関しては、断面色調・外面色調・内面色調、釉薬を認める陶磁器については、胎土の色調・釉薬の色調・呉須ないし上絵の色調をそれぞれ記載している。

5. 残存率は完形品に対する実物の割合を記載している。

6. 製作年代については、肥前系陶器・磁器に関しては、佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二氏にご教示を頂いた。その他の土器・陶磁器については、以下の編年に依拠する。

備前摺鉢：乗岡2000 瀬戸・美濃系陶器：藤澤1993 堺・明石系摺鉢：白神1992 土師質土器焙烙：佐藤2001

7. 瓦に関しては、各器種別に示した。法量や珠文数に関しては、残存しない箇所を推定したものについて、( ) 付きでその数値を復元した。



標本番号	標本(産地・種類)	重量(g)	形状	出土	土質	色調(胎土)	色調3(底面・内外面色)	内面図	外面図	製作年代	備考
1	下層埋没小片1 須賀器・高弁	底: 8.7	底片1/8	中: 石小片	灰白色N8/	内外: 灰白色N8/ 内: 灰白色N7/ 外: 灰白色6/					
2	下層埋没小片1 須賀器・高弁		小片	中: 石小片	灰白色5Y8/1						
3	下層埋没 須賀器・高弁		破片	中: 石小~中多、赤小 少、赤小	褐色色10R6/1	内外: にふい褐色5Y8/4 内: 褐色5Y8/4 外: 灰白色10R6/1				下川渡日曜土器 後製末	
4	下層埋没小片1 AT52 須賀器・高弁	底: 7.0	1/8	中: 石小~中多、赤小	灰白色10R6/1、褐色5Y8/2/1	内外: 灰白色5Y8/1 外: 灰白色N7/				西行瀬原黒土器入瀬原	
5	近世基層層出土遺物 須賀器・高弁		小片	中: 石小~中多、赤小	灰白色N7/、灰白色5Y8/1						
6	近世基層層出土遺物 土質・土鍋		破片	中: 石小~中多、赤小 少、赤小							
7	近世基層層出土遺物 土質・土鍋		小片	中: 石小~中多、赤小 少、赤小	にふい赤褐色5Y8R/3	内: 灰褐色10R6/2 外: 灰褐色5Y8R/2		口縁部: 灰行~一回転行 体部上半: 推押さえ一回 体部下半: 推押さえ一行			外面に磁鉄皮を認めらる
8	近世基層層出土遺物 土質・土鍋	口: 44.4	1/8	中: 石小多、赤小~中 多	にふい褐色5Y8R/4	内外: にふい褐色5Y8R/4					全面に2次焼成を認める
9	近世基層層出土遺物 土質・土鍋	口: 50.4	口縁部1/8	中: 石小~中多、赤小 少、赤小	淡黄褐色10R6/3	内: 淡黄褐色10R6/2 外: にふい黄褐色5Y8R/4、明赤褐色 2.5Y8/6		口縁部: 推押さえ一回転行 体部: 推押さえ一行			
10	近世基層層出土遺物 土質・土鍋	口: 50.0	1/8	中: 石小~中多、赤小 少、赤小	灰褐色5Y7/2	内外: 褐色5Y8/6		口縁部: 灰行~一回転行 体部: 灰行			
11	近世基層層出土遺物 土質・深鉢	口: 17.5	口縁部1/8	中: 石小多、赤小、赤小 ~中多	にふい赤褐色5Y8/5/4	内外: 褐色5Y8/6		体部上半: 推押さえ一行 体部下半: 推押さえ一行			黒?
12	近世基層層出土遺物 土質・深鉢	口: 24.0	口縁部1/8	中: 石小~中多、赤小 少、赤小	にふい褐色5Y8R/4	内: にふい赤褐色5Y8/4 外: にふい褐色5Y8R/4		推押さえ一行			外面に磁鉄皮を認めらる
13	近世基層層出土遺物 土質・把持付深鉢		1/8	中: 石小多、赤小、赤小 ~中多	にふい赤褐色5Y8/4	内外: 褐色5Y8/6		推押さえ一行			牛乳把手 目之同一器体
14	近世基層層出土遺物 赤土・壺	口: 14.6	1/8	中: 石小少、赤小、赤小 多、赤小	にふい黄褐色10R5/3			口縁部: 一回転行 体部上半: 推押さえ一行 体部下半: 5Y8/1			下川渡日曜土器 後製末(焼成を含まない)
15	SE01 埋土	口: 8.2、高: 0.9、底: 5.1	7/8	中: 石小~中多、赤小	にふい黄褐色10R7/2	内外: にふい黄褐色10R7/2		口縁部: 一回転行 底部: 一回転9分(R)			
16	SE01 埋土	口: 7.2、高: 1.0、底: 6.1	3/8	中: 石小~中多、赤小	灰白色10R6/2	灰白色10R6/2		口縁部: 一回転行 底部: 一回転9分(板状正置)			
17	SE01 埋土	口: 9.8、高: 2.4、底: 6.1	口縁部1/8	中: 石小少、赤小~中多	淡黄褐色7.5Y8R/3	内: 淡黄褐色7.5Y8R/3 外: 灰白色5Y8/2		口縁部: 一回転行 底部: 一回転9分			
18	SE01 埋土	口: 16.2	口縁部破片	中: 石小~中多、赤小	灰白色5Y7/1	内外: 灰白色5Y7/1		一回転行			器体腐蝕が深いか?
19	SE01 埋土	口: 16.2	口縁部破片	中: 石小~中多、赤小	にふい黄褐色10R7/2	外: 灰褐色10R6/2		口縁部: 一回転行 底部: 一回転9分			
20	SE01 埋土	口: 16.2	口縁部2/8	中: 石小~中多、赤小	灰白色5Y4/1	内: にふい黄褐色10R7/2、灰褐色 7.5Y8/2		口縁部: 灰行 体部: 灰行(脚)~一回 (他)			
22	SE02 埋土	口: 6.6、高: 1.05、底: 5.1	1/8	中: 石小少、赤小	にふい黄褐色10R7/2	内外: 淡黄褐色10R6/3		口縁部: 一回転行 底部: 一回転9分			
23	SE02 埋土	口: 15.2、高: 3.1、底: 7.8	3/8	中: 石小~中多	灰白色N6/	内: 灰白色N6/ 外: 褐色10R6/1		口縁部: 一回転行 底部: 一回転9分			全面に2次焼成を認め、内面は 口縁部、外面は下半以下に焼成 が深くなる
24	SE02 埋土	底: 5.9	底部3/8	中: 石小少、赤小	にふい褐色5Y8R/4	内外: にふい褐色5Y8R/4		口縁部: 一回転行 底部: 一回転9分			外面に磁鉄皮を認め、灯取具とし ての使用が認めらる
25	SE02 埋土	底: 4.35	2/8	中: 石小~中多、赤小	灰褐色5Y7/2	灰褐色5Y7/2		口縁部: 一回転行 底部: 一回転9分			器体腐蝕の可能性が強い
26	SE02 埋土	底: 5.3	底部1/8	中: 石小少、赤小	褐色色10R6/2	内外: 褐色色10R6/2		口縁部: 一回転行 底部: 推押さえ			
27	SE02 埋土	底: 5.9	口縁部破片	中: 石小少、赤小	灰白色5Y7/1	内外: 灰白色N6/		口縁部: 一回転行 底部: 推押さえ			
28	SE02 埋土	底: 4.35	口縁部破片	中: 石小~中多、赤小	灰白色10R7/1	内: にふい褐色7.5Y8/3 外: にふい赤褐色5Y8/4		推押さえ一行			
29	SE02 埋土	底: 4.35	口縁部破片	中: 石小~中多、赤小	にふい褐色7.5Y8R/4	内: にふい褐色7.5Y8R/4 外: にふい褐色5Y8R/3		推押さえ一行			口縁部内面に磁鉄皮を認めらる
30	SE02 埋土	底: 5.3	小片	中: 石小~中多	赤褐色10R5/4	外: 赤褐色10R5/4		推押さえ一行			2次焼成を認める
31	SE02 埋土	底: 5.3	小片	中: 石小少	黄褐色5Y6/1	外: 黄褐色5Y6/1 内: 灰白色N4/		推押さえ一行			10層埋没

順次番号	解題番号	名産地(種別)	寸法(cm)	陶器	土	胎成	色調(胎土)	色調(裏面・外面色調)	包帯(裏面・上面)	内面装飾	外面装飾	製作年代	備考
33	SP50	漢・陶・皿	口:122	口縁部2/8	片	-	灰白色2.5Y6/1	内外:黒石調(灰白色2.5Y6/2)					志野
34	SP47	肥・陶・皿	口:145	口縁部1/8	片	-	灰黄色2.5Y7/2	内外:灰黒(灰白+7色5Y6/2)	縁:灰白+7色5Y4/2				外蓮下卑以下無縁
35	SP47	肥・陶・皿	径:70	小片	片	-	にふい黄褐色10YR7/4	内外:灰黒(にふい黄褐色10YR6/3)					外蓮下卑以下無縁
36	SP47	土質・小皿	径:70	口縁部1/8 底部1/6	小片	やや軟	灰白色10YR6/1	灰白色10YR6/1					
37	SP13	肥・陶・鉢・付	口:121	小片	片	-	灰白色						類区別
38	SP13	肥・陶・鉢・付	径:22	底部1/8	片	-	灰白色						高台縁以下無縁 底付底付
39	SP13	漢・陶・鉢・付	径:33	底部1/8	片	-	灰白色						
40	SP13	漢・陶・鉢・付	口:9.2, 高:2.1, 底:4.4	1/8	片	-	灰白色2.5Y6/1	内外:灰黒(灰白色5Y7/1)	縁:灰白+7色5Y6/2				高台縁以下無縁 底付底付
41	SP19	土質・七厘		小片	片	やや軟・石中骨・角小少・赤小少	にふい黄褐色10YR6/3	内外:灰黒(灰白色10YR6/3)	縁:灰白+7色5Y6/2				高台縁以下無縁 底付底付
42	S001上層・土層 ①地底層以下付中 112/F5 46-49-50層	中国産・磁・青花碗	径:4.0	底部2/8	片	-	灰白色						高台縁以下無縁 底付底付
43	S001上層・土層 ①地底層以下付中 112/F5 48-49-50層	五耳・鉢	口:18.5	2/8	片	真	灰白色5Y7/1						高台縁以下無縁 底付底付
44	S001中層・土層 ①地底層以下付中 112/F5 52-53層	肥・陶・鉢	径:4.9	底部1/8	片	-	にふい黄褐色10YR6/4	内外:灰黒(灰白色10YR6/2)					高台縁以下無縁
45	S001中層・土層 ①地底層以下付中 112/F5 52-53層	肥・陶・皿	口:15.4	2/8	片	-	灰黄色2.5Y6/2	内外:灰黒(にふい黄褐色2.5Y6/3)					高台縁以下無縁
46	S001中層・土層 ①地底層以下付中 112/F5 52-53層	肥・陶・皿	口:10.6, 高:1.8, 底:5.0	8/8	片	-	灰白色2.5Y6/2	内外:灰黒(灰白+7色5Y6/2)					外蓮体以下以下無縁 高台内(大)形成化年層の上部 茶色調底付
47	S001中層・土層 ①地底層以下付中 112/F5 52-53層	漢・陶・鉢・付		破片	中	-	灰白色NS/	内外:灰黒(灰白色10YR6/1)					高台縁以下無縁
48	S001中層・土層 ①地底層以下付中 112/F5 52-53層	備前・漆鉢		口縁部破片	中・石中骨	硬	灰白色NS/	内:灰褐色5Y6/2 外:灰褐色5Y6/3 外底付:灰褐色10YR4/2					高台縁以下無縁
49	S001中層・土層 ①地底層以下付中 112/F5 52-53層	土質・小皿	口:9.3, 高:1.8, 底:5.0	7/8	中・石小骨・赤小少・赤小少	真	にふい黄褐色10YR6/4	内外:灰黒(にふい黄褐色10YR6/4)					高台縁以下無縁
50	S001中層・土層 ①地底層以下付中 112/F5 52-53層	土質・漆鉢		底部2/8	中・石小骨	中骨	にふい黄褐色10YR7/2	内外:にふい黄褐色10YR7/4					高台縁以下無縁
51	S001中層・土層 ①地底層以下付中 112/F5 52-53層	土質・土器		8/8	中・石小骨	中骨	淡黄褐色10YR6/3	内外:灰黒(にふい黄褐色10YR6/3)					高台縁以下無縁
52	S001下層 57-58層	中国産・磁・青花皿		破片	片	-	灰白色						高台縁以下無縁
53	S001下層 57-58層	中国産・磁・青花碗	口:11.8	口縁部1/8	片	-	灰白色						高台縁以下無縁
54	S001下層 57-58層	肥・陶・鉢・付	径:5.2	底部1/8	片	-	にふい黄褐色10YR7/3	内外:選明焼					高台縁以下無縁
55	S001下層 57-58層	肥・陶・皿	径:4.8	底部2/8	片	-	灰白色10YR6/2	内外:選明焼					高台縁以下無縁
56	S001下層 57-58層	肥・陶・皿	口:14.8	口縁部1/8	片	-	にふい黄褐色10YR6/4	内外:選明焼					高台縁以下無縁
57	S001下層 57-58層	肥・陶・皿(少し鉢)	径:10.0	底部2/8	片	-	灰白色2.5Y6/2	内外:灰黒(灰白色5Y7/2)					高台縁以下無縁
58	S001下層 57-58層	土質・小皿	口:11.4, 高:1.75, 底:7.6	2/8	片	真	灰白色10YR6/1	内外:灰黒(灰白色10YR6/1)					高台縁以下無縁
59	S001下層 57-58層	土質・小皿	口:9.8, 高:2.4, 底:5.0	2/8	中・石小骨・赤小骨	真	にふい黄褐色10YR7/4	内外:にふい黄褐色10YR7/4					高台縁以下無縁
61	S001	飯沼・陶・鉢・付		口縁部破片	片	-	灰白色2.5Y6/1	内外:選明焼(灰白色10Y6/2)					高台縁以下無縁
62	S001下層 112/F5 59層	肥・陶・皿		破片	片	-	にふい黄褐色10YR6/3	内外:灰黒(灰白+7色5Y6/2)					高台縁以下無縁
63	S001下層 112/F5 59層	肥・陶・皿	口:13.0	1/8	片	-	にふい黄褐色10YR6/4	内外:灰黒(灰白+7色5Y6/2)					高台縁以下無縁

解文字号	報告書番号	名称(産地・種類)	法量(mm)	形状	胎土	特殊	色目(胎土)	色目(胎土・内外面)	色目(胎土・内外面)	色目(胎土・内外面)	内面図	外面図	製作年代	備考
64	S001下層 A12/F5 59層	肥・海・皿	口:13.8、高:4.7、底:5.1	縁: 5/8	-	-	にぶい黄褐色10YR7/3	内外:反輪(灰褐色)2.5Y6/2	色目(胎土・内外面)	色目(胎土・内外面)	砂目(3ヶ所)	砂目(3ヶ所)	製作年代	外面胎土以下無胎土 裏面の胎土が薄い 内面胎土及び外面に線付塗
65	S001下層 A12/F5 59層	土・環	口:15.6、高:2.8、底:8.4	縁:石小	裏	裏	灰白色10YR8/2	内外:淡黄褐色10YR8/3	内外:淡黄褐色10YR8/3	内外:淡黄褐色10YR8/3	回廊付、打	回廊付、打		内面胎土以下無胎土 裏面の胎土が薄い
66	S001下層 A12/F5 59層	土・環	口:27.2	口縁部1/8	縁:石小	やが環	黄褐色10YR6/1	内外:打・7色5Y6/1	内外:打・7色5Y6/1	内外:打・7色5Y6/1	口縁部:回廊付 体部:打	口縁部:回廊付 体部:打		亀山系陶
68	S001と0の境	中国産・磁・碗		口縁部1/8	縁:	-	にぶい黄褐色10YR7/3	内外:透明釉	内外:透明釉	内外:透明釉				法隆寺系青花 口縁部内外面に二重線 裏面に黄褐色一砂付塗
69	S001	肥・海・白磁碗	底:5.2	底4/8	縁:	-	灰白色	内外:白磁釉	内外:白磁釉	内外:白磁釉				裏面に黄褐色一砂付塗
70	S001	肥・海・皿	底:4.8	底3/8	縁:	-	にぶい黄褐色10YR7/4	内外:透明釉	内外:透明釉	内外:透明釉				裏面に黄褐色一砂付塗
71	S002上層・中層 ①地点群1下付中 AUS 12/F5 82-85層	肥・海・白磁碗	口:10.1	1/8	縁:	-	灰白色5Y6/1	内外:透明釉	内外:透明釉	内外:透明釉				裏面に黄褐色一砂付塗
72	S002上層・中層 ①地点群1下付中 AUS 12/F5 82-85層	肥・海・白磁碗	口:10.0、高:5.6、底:4.1	1/8	縁:	-	灰白色5Y6/1	内外:透明釉	内外:透明釉	内外:透明釉				裏面に黄褐色一砂付塗
73	A12/F5 H-73	肥・海・碗	底:5.1	底4/8	縁:	-	灰白色5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2				裏面に黄褐色一砂付塗
74	S002中層 ①地点群1下付中 A154 A12/F5 85層	肥・海・赤土器	口:8.0、高:5.3、底:5.8	1/8	縁:	-	灰白色	内外:透明釉	内外:透明釉	内外:透明釉				裏面に黄褐色一砂付塗
75	S002上層・中層 AUS 12/F5 82-85層	肥・海・碗	底:5.4	底3/8	縁:	-	灰白色5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2				裏面に黄褐色一砂付塗
76	S002上層・中層 ①地点群1下付中 AUS 12/F5 82-85層	肥・海・碗	口:10.9	口縁部1/8	縁:	-	にぶい黄褐色10YR7/3	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2				裏面に黄褐色一砂付塗
77	S002上層・中層 ①地点群1下付中 AUS 12/F5 82-85層	肥・海・碗	口:8.7、高:5.8、底:4.8	3/8	縁:	-	淡黄褐色10YR8/3	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2				裏面に黄褐色一砂付塗
78	S002上層・中層 ①地点群1下付中 AUS 12/F5 82-85層	肥・海・碗	底:10.0	高台部2/8	縁:	-	にぶい黄褐色10YR7/4	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2				裏面に黄褐色一砂付塗
79	S002中層 ①地点群1下付中 A154-AUS4 12/F5 85層	胎・海・皿	底:13.0	底3/8	中:	-	灰白色10YR8/1	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2				裏面に黄褐色一砂付塗
80	S002上層・中層 ①地点群1下付中 AUS 12/F5 82-85層	瓦・湯	口:18.7	2/8	中:石小~中黄、赤中黄	裏	灰白色10YR7/1	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2				裏面に黄褐色一砂付塗
82	S002中層 ①地点群1下付中 A154-AUS4 12/F5 85-86層	中国産・磁・青花碗	口:13.9	口縁部1/8	縁:	-	灰白色	内外:透明釉	内外:透明釉	内外:透明釉				裏面に黄褐色一砂付塗
83	S002中層 ①地点群1下付中 A154-AUS4 12/F5 85-86層	肥・海・皿	底:5.2	底3/8	縁:	-	灰白色N6	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2				裏面に黄褐色一砂付塗
84	S002中層 ①地点群1下付中 A154-AUS4 12/F5 85-86層	肥・海・皿	口:11.4、高:3.0、底:4.8	口縁部3/8 底部3/8	縁:	-	灰白色N7	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2				裏面に黄褐色一砂付塗
85	S002下層 A12/F5 H-85	肥・海・皿	口:12.4、高:4.1、底:4.1	口縁部1/8	縁:	-	灰褐色10YR6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2				裏面に黄褐色一砂付塗
86	S002下層 ①地点群1下付中 A154-AUS4 12/F5 85-86層	胎・海・鉢	口:24.0、高:4.8、底:10.3	3/8	中:石小~中黄	裏	にぶい黄褐色10YR7/3	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2				裏面に黄褐色一砂付塗
87	S002下層 ①地点群1下付中 A154-AUS4 12/F5 85-86層	肥・海・皿	口:12.4、高:4.1、底:4.1	6/8	縁:	-	灰褐色10YR6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2				裏面に黄褐色一砂付塗
88	S002下層 ①地点群1下付中 A154-AUS4 12/F5 85-86層	肥・海・皿	口:12.4	1/8	縁:	-	灰褐色10YR6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2				裏面に黄褐色一砂付塗
89	S002下層 ①地点群1下付中 A154-AUS4 12/F5 85-86層	肥・海・皿	底:4.4	底3/8	縁:	-	灰褐色10YR6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2				裏面に黄褐色一砂付塗
90	S002下層 ①地点群1下付中 A154-AUS4 12/F5 85-86層	胎・海・内付		小片	中:	-	灰白色5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2	内外:反輪(淡黄褐色)2.5Y6/2				裏面に黄褐色一砂付塗

報文番号	報告書番号	名称(産地・種類)	経度(cm)	保存量	産土	焼成	色調(産土)	色調(焼成・内外面白部)	色調(焼成・上・下)	内面模様	外面模様	製作年代	備考
91	SD02下層 ①地点群/下付中 AT53-AU53 11275 84-89層	土質・陶・向付		中:	中:	-	灰白色2.5Y8/2	内外:反転灰白色2.5Y8/2	緑緑:緑灰色5YR7/1		緑緑:三文文		志野向付
92	SD02下層 ①地点群/下付中 AT54-AU54 11275 84-89層	土質・陶・鉢		破片	破:	-	灰色M6/	内外:反転にふい黄褐色10YR7/2					上・下層に分布する 底面に黄褐色を認める
93	SD02下層 ①地点群/下付中 AT54-AU54 11275 84-89層	土質・土	底:19.2	底群2/6	中:石中層	-	にふい黄褐色2.5YR5/3	内外:赤褐色10R4/4		反転付:			焼成のふい色の層状を認め、 本層外を示す
94	SD02下層 ①地点群/下付中 AT54-AU54 11275 84-89層	土質・土	口:10.4	1/8	中:石小層	焼	灰色M6/	内外:赤褐色10R4/4		反転付:			
95	SD02 下層(灰色小片層)	土質・小皿	底:5.9	底群2/6	中:石小片、赤小片	やや軟	灰白色2.5Y8/2	内外:反転にふい黄褐色10YR7/2 外:反転にふい黄褐色10YR5/2		反転付:			
96	SD02下層 ①地点群/下付中 AT53-AU53 11275 84-89層	土質・土	口:25.4	1/8	中:石小層、赤小片	-	赤褐色5YR7/2	内外:反転にふい黄褐色10YR7/2 外:反転にふい黄褐色10YR5/2		口縁部:反転付 底群:赤褐色			
97	SD02 ①地点群/下付中 AT53-AU53	肥・土		口縁部破片	破:	-	灰白色	内外:赤褐色10R4/4					
98	SD02上層・上層・中層 ①地点群/下付中 AT53-AU53 11275 14~20, 78~85層	肥・土	底:5.5	底群2/6	破:	-	灰白色2.5Y8/1	内外:青褐色灰白色5Y8/1					
99	SD02 ①地点群/下付中 AT53-AU53	肥・土	口:20.6	口縁部破片	破:	-	灰白色2.5Y7/1	内外:赤褐色10R4/4					
100	SD02上層・上層・中層 ①地点群/下付中 AT53-AU53 11275 14~20, 78~85層	肥・土	底:5.0	底群2/6	破:	-	にふい黄褐色10YR7/3	内外:反転にふい黄褐色10YR7/3					
101	SD02 ①地点群/下付中 AT53-AU53	肥・土		口縁部破片	破:	-	灰色5Y6/1	内外:反転にふい黄褐色10YR7/3					
102	SD02 ①地点群/下付中 AT53-AU53	肥・土		口縁部破片	破:	-	灰赤褐色2.5YR4/2	内外:反転にふい黄褐色10YR7/3					
103	SD02 ①地点群/下付中 AT53-AU53	土質・陶・瓶		1/8	中:	-	灰白色2.5Y8/2	内外:反転にふい黄褐色10YR7/3					
104	SD02 ①地点群/下付中 AT53-AU53	土質・小皿		1/8	中:石小片、赤小片	良	にふい黄褐色10YR7/4	内外:反転にふい黄褐色10YR7/4					
105	SD02 ①地点群/下付中 AT53-AU53	土質・小皿	底:6.2	底群2/6	破:石中片	やや軟	灰白色2.5Y8/1	内外:反転にふい黄褐色10YR7/4					
106	SD02上層・上層・中層 ①地点群/下付中 AT53-AU53 11275 14~20, 78~85層	土質・陶・筒	口:27.7	1/8	中:石小片	やや軟	灰白色2.5Y7/1	内外:反転にふい黄褐色10YR7/4					
107	SD03	中国産・磁・青花碗	口:11.6	口縁部1/8	破:	-	灰白色	内外:赤褐色10R4/4					
108	SD03	中国産・磁・青花皿		破片	破:	-	灰白色	内外:赤褐色10R4/4					
109	SD03	中国産・磁・青花皿		口縁部破片	破:	-	灰白色	内外:赤褐色10R4/4					
110	SD03	中国産・磁・青花小杯	口:6.0	1/8	破:	-	灰白色	内外:赤褐色10R4/4					
111	SD03 AR53-AU53	肥・陶・土	底:4.8	底群4/6	破:	-	灰白色	内外:赤褐色10R4/4					
112	SD03 AR53-AU53	肥・陶・土	底:4.6	4/6	破:	-	灰白色	内外:赤褐色10R4/4					
113	SD03	肥・陶・土	口:10.8	小破片	破:	-	灰白色	内外:赤褐色10R4/4					
114	SD03	肥・陶・土	口:10.2	口縁部1/8	破:	-	灰白色	内外:赤褐色10R4/4					
115	SD03	肥・陶・土	底:4.2	1/8	破:	-	灰白色	内外:赤褐色10R4/4					
116	SD03 AU54	肥・陶・土	底:4.2	底群2/6	破:	-	にふい黄褐色2.5YR5/3	内外:反転にふい黄褐色10YR7/2					
117	SD03	肥・陶・土	底:3.8	底群2/6	破:	-	赤褐色2.5YR5/6	内外:反転にふい黄褐色10YR7/3					
118	SD03	肥・陶・土	口:11.4、高:3.8、底:3.3	口縁部2/6	破:	-	灰白色2.5Y7/1	内外:反転にふい黄褐色10YR7/1					





種文番号	報告者氏名	名称(産地・種類)	法量(cm)	形状	厚さ	断面	構成	色類(産土)	色類(産土)	色類(産土)	内面状態	外面状態	製作年代	備考
159	SE04 井戸内産土	埴・明石・埴		口縁部破片	埴:石中少	埴	赤褐色25YR4/8	赤褐色25YR4/8	内外:にぶい黄褐色5YR5/4		凹底:1/1	凹底:1/1	白土層中Ⅱ式	
160	SE04 埴方	土質・七厘	口:18.1	口縁部1/8	中:石中少・量二少・小	-	にぶい黄褐色5YR6/3	内:にぶい黄褐色2.5YR6/4 外:にぶい黄褐色10YR7/2			埴方?	断面割に本底を露出		外面にはおぼろげな赤褐色を認め、 おぼろげに一体化した構造となり、波状 口縁の内方には突起を認める
161	SE04 井戸内産土	瓦質・埴	口:40.0	1/8	中:石中少・量二少・小	黄	灰褐色5YR5/2	内外:黄褐色7.5YR2/1			口縁部:凹底?1 体部:埴方?	口縁部:凹底?1 体部:埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
162	SE04	土質・不埴品		口縁部1/8	中:石中少・量二少・小	やや軟	にぶい黄褐色10YR6/3	内:にぶい黄褐色10YR6/3 外:黄褐色7.5YR4/3			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
163	SE04 井戸内産土	土質・埴		破片	中:石中少・量二少・小	やや硬	にぶい黄褐色5YR5/4	内外:にぶい黄褐色5YR5/4			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
164	SE04 1/2x1/5 埴方下付中	土質・埴	口:55.4	口縁部1/8	中:石中少・量二少・小	やや硬	黄褐色10YR6/1, にぶい黄褐色 10YR7/4	内外:にぶい黄褐色5YR6/4			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
165	SE05	埴・埴・埴	口:13.0, 高:2.7, 底:1.2	口縁部2/8	埴:	-	灰白色	内外:埴明			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
167	SE05	埴・埴・埴		小片	埴:	-	灰白色5Y7/1	外:灰褐色(灰白色)5Y7/1, 灰褐色(赤褐色) 7.5YR5/3			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
168	SE05 埴方 埴方A153, A154	埴・埴・埴	底:12.4	2/8	埴:	-	灰白色5Y7/1	内外:灰褐色(赤褐色)10YR6/1			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
169	SE05	土質・埴	口:26.0	口縁部1/8	中:石中少・量二少・小	やや硬	にぶい黄褐色10YR6/3	内外:にぶい黄褐色10YR6/3			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
170	SE05 (特)	土質・埴	口:72.0	口縁部1/8	やや硬・石中少	やや硬	にぶい黄褐色10YR6/3	内外:にぶい黄褐色10YR6/3			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
171	SK01 ①地底	中国産・埴・埴		破片	埴:	-	灰白色	内外:埴明			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
172	SK01	埴・埴・埴	口:11.4	破片	埴:石中少	-	灰褐色5Y8/1	内外:灰褐色(灰白色)5Y8/2			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
173	SK01	埴・埴・埴		小片	埴:	-	灰白色5Y7/1	内外:灰褐色(灰白色)5Y7/1			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
174	SK01	埴・埴・埴	口:10.8	口縁部2/8	埴:	-	灰白色5Y7/1	内外:灰褐色(灰白色)5Y7/1			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
175	SK01	埴・埴・埴	口:11.3, 高:2.8, 底:4.5	底部5/8	埴:石中少	-	灰褐色5Y8/2	内外:灰褐色(灰白色)5Y8/2			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
176	SK01 ①地底	埴・埴・埴		破片	埴:	-	黄褐色7.5YR6/6	内外:灰褐色(赤褐色)5Y7/3			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
177	SK01	埴・埴・埴	底:4.9	底部2/8	埴:	-	灰白色2.5Y8/2	内外:灰褐色(灰白色)5Y8/2			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
178	SK01	埴・埴・埴		破片	埴:	-	灰白色2.5Y8/2	内外:灰褐色(灰白色)5Y8/2			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
179	SK02	中国産・埴・埴		1/8	埴:	-	灰白色	内外:埴明			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
180	SK02	中国産・白褐色・埴		破片	埴:	-	灰白色	内外:白褐色			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
181	SK02	埴・埴・埴		体部破片	埴:	-	灰白色2.5Y8/2	内外:灰褐色(赤褐色)5Y8/2			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
182	SK02	埴・埴・埴	底:4.4	底部4/8	埴:	-	にぶい黄褐色10YR7/3	内外:灰褐色(赤褐色)5Y8/2			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
183	SK02	埴・埴・埴	口:12.4, 高:3.7, 底:4.3	6/8	埴:	-	にぶい黄褐色5YR5/4	内外:灰褐色(赤褐色)5Y8/2			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
184	SK02	埴・埴・埴	口:11.7, 高:2.7, 底:4.2	底部5/8	埴:	-	灰白色5Y7/1	内外:灰褐色(赤褐色)5Y8/2			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
185	SK02	埴・埴・埴		口縁部破片	中:石中少・量二少・小	硬	灰褐色7.5YR6/2	外口縁部:灰褐色(赤褐色)5Y8/2 外体部:にぶい黄褐色5YR6/3			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
186	SK02 ①地底 ①地底下付中	埴・埴・埴	口:12.3	口縁部2/8	埴:	-	灰白色5Y7/1	内外:灰褐色(赤褐色)5Y8/2			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
187	SK02 ①地底 ①地底下付中	埴・埴・埴	口:8.9	口縁部1/8	埴:	-	灰白色5Y6/1	外:灰褐色(赤褐色)5Y8/1			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
188	SK03 ①地底 ①地底下付中	埴・埴・埴		口縁部2/8	埴:	-	にぶい黄褐色5YR4/3	内外:黄褐色10YR6/3			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
189	SK03 ①地底 ①地底下付中	埴・埴・埴	口:11.4, 高:3.1, 底:5.0	口縁部1/8	埴:	-	黄褐色10YR6/3	内外:灰褐色(赤褐色)5Y7/2			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
190	SK04 下層	埴・埴・埴		体部破片	埴:	-	灰白色	内外:埴明			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?
191	SK04 下層	埴・埴・埴	口:11.4	1/8	中:	-	灰白色10YR6/2	内外:灰褐色(赤褐色)5Y7/2			埴方?	埴方?		埴方? 埴方? 埴方?

観音番号	観音堂通称名	名称(地・様)	法量(cm)	発祥年	土	彫刻	色調(土)	色調(漆・内外色)	内面装束	外面装束	製作年代	備考
192	SD04 下層	肥・胸・皿	□:11.2	2/6	■	-	に少し褐色2.5YR6/3	内外:反褐色2.5YR6/1				外面下半以下黒漆 埴目に黒漆付着
193	SD04 下層	肥・胸・皿	□:19.0, 高:4.5, 底:6.3	口縁部2/6 底部2/6	■	-	褐色2.5YR7/6	内外:反褐色2.5YR6/2				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
194	SD04	佛前・胸・皿	□:15.0	口縁部2/6	■	やや硬	褐色2.5YR6/1	内外:反褐色2.5YR6/1				
195	SD04(佛前・胸・皿の可能性あり)	土質・小皿	□:16.4, 高:1.2, 底:3.5	4/6	■	やや軟	に少し黄褐色10YR7/3	内外:に少し黄褐色10YR7/3				口縁部:同底付 底部:同底水切り
196	SD04 上層?	土質・杯	□:13.0, 高:1.2, 底:6.0	5/6	■	やや軟	に少し黄褐色10YR7/3	内外:に少し黄褐色10YR7/3 外:反褐色10YR5/1	同底付			高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
197	SK05	中国産・漆・玉形手輪	□:12.8	口縁部1/6	■	-	灰白色	内外:透明漆				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
198	SK05 H198	肥・胸・皿	□:14.4	口縁部1/6	■	-	灰白色	内外:透明漆				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
199	SK05 H199	肥・胸・皿	□:13.9, 高:1.05, 底:4.15	5/6	■	-	灰白色	内外:透明漆				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
200	SK05 H200	肥・胸・皿	□:15.8, 高:1.39, 底:2.4	4/6	■	-	灰白色	内外:透明漆				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
201	SK05 H201	肥・胸・皿	□:10.8	口縁部1/6	■	-	灰白色	内外:透明漆				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
202	SK05 H202	肥・胸・皿	□:15.1	口縁部2/6	■	-	灰白色	内外:透明漆				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
203	SK05 H203	肥・胸・皿	□:13.8, 高:1.65, 底:5.1	口縁部2/6 底部2/6	■	-	灰白色	内外:透明漆				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
204	SK05 H204	肥・胸・皿	底:4.3	口縁部1/6	■	-	灰白色	内外:透明漆				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
205	SK05 H205	肥・胸・皿	□:13.2	口縁部1/6	■	-	灰白色	内外:透明漆				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
206	SK05 H206	肥・胸・皿	底:2.9	口縁部2/6	■	-	灰白色	内外:透明漆				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
207	SK05 H207	肥・胸・皿	□:14.4, 高:1.9, 底:11.3	1/6	■	-	に少し赤褐色5YR5/4	内外:反褐色2.5YR6/1				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
208	SK05 H208	土質・小皿	□:16.7, 高:1.5, 底:4.6	底部2/6	■	やや軟	反褐色2.5Y7/2	反褐色2.5Y7/2	同底付、付			高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
209	SK05 H209	土質・小皿	□:17.1, 高:1.4, 底:4.2	8/6	■	やや軟	に少し黄褐色10YR7/2	内外:に少し黄褐色10YR7/2	同底付、付			高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
210	SK05 H210	土質・小皿	□:18.0, 高:1.4, 底:8.0	3/6	■	やや軟	に少し黄褐色10YR7/3	内外:に少し黄褐色10YR7/3	同底付、付			高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
211	SK05 H211	土質・小皿	□:19.8, 高:1.7, 底:6.2	1/6	■	やや軟	反褐色2.5Y7/2	反褐色2.5Y7/2	同底付、付			高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
212	SK05 H212	土質・小皿	□:19.2, 高:1.6, 底:7.3	1/6	■	やや軟	反褐色2.5Y7/2	反褐色2.5Y7/2	同底付、付			高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
213	SK05 H213	土質・小皿	□:19.4, 高:1.9, 底:8.0	4/6	■	長	に少し褐色2.5YR7/4	内外:に少し褐色2.5YR7/4	同底付、付			高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
214	SK05 H214	土質・小皿	□:19.2, 高:2.3, 底:9.0	2/6	■	やや軟	に少し黄褐色10YR7/2	内外:に少し黄褐色10YR7/2	同底付、付			高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
215	SK05 H215	土質・小皿	□:16.7, 高:1.55, 底:6.0	口縁部1/6 底部2/6	■	長	に少し褐色2.5YR6/4	内外:に少し褐色2.5YR6/4	同底付、付			高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
216	SK05 H216	土質・小皿	□:22.6	1/8	■	やや硬	反白色2.5Y7/1	内外:反白色2.5Y7/1 外:反褐色10YR6/1	同底付、付			高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
217	SK05 H217	土質・小皿	□:17.8, 高:1.62, 底:4.3	4/6	■	-	反白色	内外:白磁漆				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
218	SK06	肥・胸・皿	□:11.0	口縁部2/6	■	-	反白色	内外:白磁漆				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
219	SK06	肥・胸・皿	底:4.4	口縁部2/6	■	-	反白色	内外:白磁漆				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
220	SK06	肥・胸・皿	□:10.9, 高:1.6, 底:5.0	底部2/6	■	-	反白色	内外:白磁漆				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
221	SK06	肥・胸・皿	底:7.0	底部2/6	■	-	反白色	内外:白磁漆				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
222	SK06	肥・胸・皿	底:1.3	口縁部1/6	■	-	反白色	内外:白磁漆				高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
223	SK06	肥・胸・皿	□:13.2, 高:1.1, 底:7.4	2/6	■	やや軟	反白色2.5Y7/1	内外:反白色2.5Y7/1	同底付、付			高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
224	SK06	肥・胸・皿	底:6.2	口縁部2/6	■	やや軟	反白色2.5Y7/1	内外:反白色2.5Y7/1	同底付、付			高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
225	SK06	肥・胸・皿	□:14.6, 高:2.02, 底:20.2	7/6	■	やや硬	反白色2.5Y7/1	内外:反白色2.5Y7/1 内:に少し黄褐色10YR7/3、に少し赤褐色 5YR5/3 外:に少し黄褐色10YR7/4、に少し赤褐色 2.5YR5/4	同底付、付			高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
226	SK06	肥・胸・皿	□:35.8	口縁部1/6	■	やや硬	反褐色2.5YR6/2	内外:反褐色2.5YR6/2	同底付、付			高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
229-1	SK06	肥・胸・皿	□:35.8	口縁部1/6	■	やや硬	反褐色2.5YR6/2	内外:反褐色2.5YR6/2	同底付、付			高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆
229-2	SK06	肥・胸・皿	□:35.8	口縁部1/6	■	やや硬	反褐色2.5YR6/2	内外:反褐色2.5YR6/2	同底付、付			高台基以下黒漆 埴目に褐色黒角に黒漆、口縁部に 茶色の黒漆



標文番号	名称・用途	規格	寸法	重量	色調1(原土)	色調2(特殊・内外色)	色調3(特殊・上塗り)	内面履歴	外面履歴	製作年代	備考
234	SK07 一体化物系中層	肥・瀝・染付小磯	口:84,高:4.5,底:3.2	口:84,高:4.5,底:3.2	灰白色	内外:透明焼	灰:淡緑色	灰付:薄黄文(印跡,三カ)	灰付:薄黄文(印跡,三カ)	製作無効-砂付着	
235	SK07 H235	肥・瀝・染付小磯	口:79,高:4.45,底:3.4	口:79,高:4.45,底:3.4	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効-砂付着	
236	SK07 下層	肥・瀝・染付磯	口:80,高:4.7,底:4.1	口:80,高:4.7,底:4.1	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
237	SK07	肥・瀝・染付磯	底:4.7	底:4.7	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
238	SK07 H238	肥・瀝・染付小磯	口:82,高:4.1,底:3.0	口:82,高:4.1,底:3.0	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
239	SK07	肥・瀝・染付小磯	口:80,高:4.2,底:3.8	口:80,高:4.2,底:3.8	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
240	SK07 H240	肥・瀝・染付血	口:14.2,高:4.3,底:3.8	口:14.2,高:4.3,底:3.8	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
241	SK07 H241	肥・瀝・染付血	口:7.9,高:4.3,底:3.8	口:7.9,高:4.3,底:3.8	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
242	SK07 H242	肥・瀝・染付血	底:6.1	底:6.1	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
243	SK07 H243	肥・瀝・染付血	口:3.8,高:2.87,底:1.9	口:3.8,高:2.87,底:1.9	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
244	SK07 H244	肥・瀝・染付血	口:8.8	口:8.8	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
245	SK07 灰化物系中層の下層	土質・小磯	口:8.0	口:8.0	淡黄褐色10YR8/3	内外:淡黄褐色10YR8/3	灰:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	製作無効	
246	SK07	土質・小磯	口:13.0	口:13.0	淡黄褐色10YR8/3	内外:淡黄褐色10YR8/3	灰:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	製作無効	
247	SK07	瓦葺・治癒	口:31.4	口:31.4	灰白色	内外:淡黄褐色10YR8/3	灰:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	製作無効	
248	SK07 下層	瓦葺・治癒	口:39.0	口:39.0	灰白色	内外:淡黄褐色10YR8/3	灰:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	製作無効	
249	SK07 H249	土質・小磯	口:22.0,高:3.2,底:2.02	口:22.0,高:3.2,底:2.02	灰白色	内外:淡黄褐色10YR8/3	灰:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	製作無効	
254	SK08 清浄中	肥・瀝・染付小磯	口:4.5	口:4.5	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
255	SK08 清浄中	肥・瀝・染付小磯	底:4.5	底:4.5	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
256	SK08 清浄中	肥・瀝・染付小磯	口:13.0	口:13.0	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
257	SK09 石片除去中	瓦葺・治癒	口:26.5	口:26.5	灰白色	内外:淡黄褐色10YR8/3	灰:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	製作無効	
258	SK09 石片除去中	瓦葺・治癒	口:14.2,高:4.6,底:3.8	口:14.2,高:4.6,底:3.8	灰白色	内外:淡黄褐色10YR8/3	灰:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	製作無効	
259	SK09 清浄中	瓦葺・治癒	口:10.4	口:10.4	灰白色	内外:淡黄褐色10YR8/3	灰:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	製作無効	
260	SK09	土質・小磯	口:5.6,高:1.21,底:3.8	口:5.6,高:1.21,底:3.8	灰白色	内外:淡黄褐色10YR8/3	灰:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	灰付:淡黄褐色10YR8/3	製作無効	
261	SK09(検出中)	肥・瀝・染付小磯	口:4.8,高:1.4,底:1.4	口:4.8,高:1.4,底:1.4	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
262	SK09	肥・瀝・染付小磯	口:8.2,高:2.4,底:2.9	口:8.2,高:2.4,底:2.9	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
263	SK09	肥・瀝・染付小磯	口:6.0,高:2.2,底:3.0	口:6.0,高:2.2,底:3.0	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
264	SK09(検出中)	肥・瀝・染付小磯	口:7.8	口:7.8	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
265	SK09(検出中)	肥・瀝・染付小磯	口:7.7,高:1.55,底:4.0	口:7.7,高:1.55,底:4.0	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
266	SK09	肥・瀝・染付小磯	口:7.0,高:1.55,底:4.7	口:7.0,高:1.55,底:4.7	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
267	SK09	肥・瀝・染付小磯	口:7.1,高:4.1,底:3.3	口:7.1,高:4.1,底:3.3	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
268	SK09	肥・瀝・染付小磯	口:10.0,高:4.6,底:3.8	口:10.0,高:4.6,底:3.8	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
269	SK09	肥・瀝・染付小磯	口:10.4,高:4.8,底:4.2	口:10.4,高:4.8,底:4.2	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
270	SK09(検出中)	肥・瀝・染付小磯	口:10.4	口:10.4	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
271	SK09	肥・瀝・染付小磯	口:8.8	口:8.8	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
272	SK09	肥・瀝・染付小磯	底:4.8	底:4.8	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
273	SK09	肥・瀝・染付小磯	口:24.8,高:4.6,底:1.53	口:24.8,高:4.6,底:1.53	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
274	SK09	肥・瀝・染付小磯	口:14.0,高:5.1,底:4.4	口:14.0,高:5.1,底:4.4	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
275	SK09	瓦葺・治癒	口:10.0	口:10.0	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	
276	SK09	瓦葺・治癒	口:10.0	口:10.0	灰白色	内外:透明焼	灰:淡青色	灰付:薄黄文(印跡)	灰付:薄黄文(印跡)	製作無効	





順文番号	報告事項	名称(場所・種類)	寸法(mm)	残存率	出土	焼成	色群(出土)	色群(複製・内付色別)	内面図	外面図	製作年代	備考
310	SK09	土質工製品	現存高:6.1, 最大幅:3.5, 最大厚:1.9	8/8	輪:石小<少, 赤小少	-	灰色5Y6/1					複製に付いたの裏面を認める 前縁部合わせ 五筋入
311	SK09	土質工製品	現存高:1.8, 最大幅:4.3, 最大厚:2.6	7/8	中:石小<少, 赤小<少, 赤小<少, 赤小<少, 赤小<少	灰色5Y7/2	内付:灰色5Y7/2					前縁部合わせ 子連れ立直縁
312	SK09	土質工製品	現存高:5.8, 最大幅:5.8, 最大厚:2.5	7/8	輪:	-	淡黄褐色7.5YR6/4	内付:淡黄褐色7.5YR6/4				前縁部合わせ 複製面に付いたの裏面を認める 傍り属
313	SK09	軟質陶土製品	輪:3.1, 幅:3.1, 厚:3.3	7/8	輪:	-	淡黄褐色10YR6/3	内付:透明焼				半割ね流形 底縁の一部折れを認める
314	SK09	軟質陶土製品	高:1.2, 厚:0.1	8/8	輪:	-	灰白色5Y6/2	内付:透明焼				底縁の一部折れを認める
327	SK09	輪	輪:2.3, 幅:2.3, 厚:0.1	8/8	輪:	-						複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
328	SK09	輪	輪:2.5, 幅:2.5, 厚:0.15	8/8	輪:	-						複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
329	SK09	輪	輪:2.5, 幅:2.5, 厚:0.15	8/8	輪:	-						複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
330	SK09	輪	現存高:5.5, 最大幅:0.9, 最大厚:0.65	7/8	輪:	-						複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
331	SK10	肥土製品	口:5.7, 高:2.8, 厚:2.6	8/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
334	SK10	肥土製品	口:5.0, 高:2.25, 厚:1.55	4/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
335	SK10	肥土製品	口:4.5, 高:1.4, 厚:1.7	口縁部8/8	輪:	-	灰白色5Y6/1	内:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
338	SK10	肥土製品	高:2.1, 厚:3.2	底縁8/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
337	SK10	肥土製品	口:7.7, 高:3.6, 厚:3.1	6/8	輪:	-	灰白色7.5Y6/1	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
338	SK10	肥土製品	口:7.1, 高:3.95, 厚:2.5	口縁部8/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
339	SK10	肥土製品	小片	小片	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
340	SK10	肥土製品	厚:3.5	底縁8/8	輪:	-	灰白色	内付:青磁焼(明焼灰色5Y6/7)				複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
341	SK10	肥土製品	口:3.8, 高:5.7, 厚:3.5	3/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
342	SK10	肥土製品	口:10.2, 高:3.5, 厚:3.9	口縁部8/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
343	SK10	肥土製品	口:3.9, 高:5.5, 厚:3.8	口縁部8/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
344	SK10	肥土製品	口:10.6, 高:5.4, 厚:3.7	2/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
345	SK10	肥土製品	口:9.0, 高:4.4, 厚:2.8	8/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
346	SK10	肥土製品	高:3.8	4/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
347	SK10	肥土製品	口:8.4, 高:4.1, 厚:3.0	4/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
348	SK10	肥土製品	口:10.15, 高:5.45, 厚:4.1	8/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
349	SK10	肥土製品	口:9.8, 高:5.4, 厚:3.8	5/8	輪:	-	灰白色5Y7/1	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
350	SK10	肥土製品	口:9.6, 高:4.9, 厚:3.8	4/8	輪:	-	灰白色5Y6/1	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
351	SK10	肥土製品	口:11.0, 高:5.0, 厚:4.1	口縁部8/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
352	SK10	肥土製品	口:12.0	口縁部8/8	輪:	-	灰白色5Y7/1	内:透明焼 外:青磁焼(明焼-7灰色5Y6/7)				複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
353	SK10	肥土製品	高:12.2	2/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
354	SK10	肥土製品	高:4.4	底縁1/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
355	SK10	肥土製品	口:11.0, 高:5.0, 厚:4.5	4/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
356	SK10	肥土製品	高:4.4	底縁8/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
357	SK10	肥土製品	口:11.2, 高:4.25, 厚:4.3	4/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
358	SK10	肥土製品	高:6.1	底縁4/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
359	SK10	肥土製品	高:6.6	底縁4/8	輪:	-	灰白色	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める
360	SK10	肥土製品	高:5.9	底縁4/8	輪:	-	灰白色5Y6/1	内付:透明焼	黒土:黒褐色	灰付:黒褐色		複製に付いた三流形 底縁の一部折れを認める

轉文番号	報告書通稱名	名刺(住所・埋蔵)	重量(g)	材質	出土	形状	色調(出土)	色調(複製・内外面色調)	内面複製	外面複製	製作年代	備考
381	SK10	埋蔵・陶・破	口:8.9, 高:5.5, 底:4.4	底形:4/8	土	-	灰白色5Y6/1	内外:灰白色(複製色2.5Y7/1) 外体形:複製色(2.5Y)複製色(10YR6/4)		複製	複製	複製
382	SK10	埋蔵・陶・破	口:11.8	口:埋蔵1/8 中・中形	土	-	灰白色2.5Y7/1	内外:灰白色(複製色2.5Y7/1)	埋蔵1/8	複製	複製	複製
383	SK10覆刃	埋蔵・陶・破	底:4.7	底形:6/8 中・中形	土	-	灰白色2.5Y6/2	内外:灰白色(複製色2.5Y7/2)長舌複製色(複製色8/8)				複製
384	SK10	埋蔵・陶・破	口:12.9	口:埋蔵2/8	土	-	灰白色2.5Y7/4	内外:灰白色(複製色2.5Y6/2)	埋蔵1/8	複製	複製	複製
385	SK10	埋蔵・陶・破	口:11.5, 高:4.0, 底:3.7	3/8	土	-	黄灰色2.5Y6/1	内外:灰白色(複製色2.5Y6/1)				複製
386	SK10覆刃	埋蔵・陶・破	底:3.8	4/8 中・中形	土	-	灰白色2.5Y6/2	内外:灰白色(複製色2.5Y6/2)				複製
387	SK10覆刃	埋蔵・陶・破	口:9.0, 高:5.5, 底:3.0	6/8	土	-	灰白色5Y7/1	内外:灰白色(複製色2.5Y7/1)				複製
388	SK10覆刃	埋蔵・陶・破	口:8.6	口:埋蔵1/8	土	-	灰白色5Y7/1	内外:灰白色(複製色2.5Y7/1)				複製
389	SK10覆刃	埋蔵・陶・破	口:9.9	口:埋蔵1/8	土	-	灰白色5Y7/1	内外:灰白色(複製色2.5Y7/1)				複製
370	SK10	埋蔵・陶・破	口:9.7	口:埋蔵1/8	土	-	灰白色5Y7/1	内外:灰白色(複製色2.5Y7/1)				複製
371	SK10	埋蔵・陶・破	口:8.9	口:埋蔵1/8	土	-	灰白色2.5Y7/1	内外:灰白色(複製色2.5Y7/1)				複製
372	SK10覆刃	埋蔵・陶・破	高:9.8	6/8	土	-	灰白色5Y7/1	内外:灰白色(複製色2.5Y7/2)				複製
373	SK10	埋蔵・陶・破	口:8.5, 高:4.9, 底:2.8	口:埋蔵2/8 底形:6/8	土	-	灰白色5Y7/1	内外:灰白色(複製色2.5Y7/2)				複製
374	SK10	埋蔵・陶・破	口:9.5, 高:5.5, 底:3.8	3/8	土	-	灰白色5Y7/1	内外:灰白色(複製色2.5Y7/2)				複製
375	SK10覆刃(埋下)	埋蔵・陶・破	口:9.0	2/8	土	-	灰白色5Y7/1	内外:灰白色(複製色2.5Y7/2)				複製
376	SK10	埋蔵・陶・破	口:9.0, 高:5.5, 底:3.7	2/8	土	-	灰白色5Y6/1	内外:灰白色(複製色2.5Y6/2)				複製
377	SK10覆刃	埋蔵・陶・破	底:4.0	底形:6/8	土	-	灰白色5Y7/1	内外:灰白色(複製色2.5Y7/2)				複製
378	SK10覆刃	埋蔵・陶・破	口:10.4, 高:6.3, 底:4.0	口:埋蔵1/8 底形:4/8	土	-	灰白色5Y6/1	内外:灰白色(複製色2.5Y6/2)				複製
379	SK10覆刃	埋蔵・陶・破	底:4.2	底形:6/8	土	-	黄灰色2.5Y6/1	内外:透明				複製
380	SK10	埋蔵・陶・破	口:9.4	口:埋蔵2/8	土	-	灰白色	内外:透明				複製
381	SK10	埋蔵・陶・破	底:8.0	底形:1/8	土	-	灰白色	内外:透明				複製
382	SK10	埋蔵・陶・破	口:12.4	口:埋蔵1/8	土	-	灰白色	内外:透明				複製
383	SK10覆刃	埋蔵・陶・破	口:9.6	口:埋蔵1/8	土	-	灰白色10YR6/2	内外:透明				複製
384	SK10	埋蔵・陶・破	口:10.7, 高:4.4, 底:2.8, 底:10.7	7/8	土	-	灰白色	内外:透明				複製
385	SK10覆刃	埋蔵・陶・破	口:10.7, 高:4.4, 底:2.8, 底:10.7	7/8	土	-	灰白色	内外:透明				複製
386	SK10	埋蔵・陶・破	口:9.8, 高:2.6, 底:4.0	7/8	土	-	灰白色	内外:透明				複製
387	SK10	埋蔵・陶・破	口:9.8, 高:2.6, 底:4.0	7/8	土	-	灰白色	内外:透明				複製
388	SK10覆刃	埋蔵・陶・破	口:8.4	口:埋蔵2/8	土	-	灰白色5Y6/1	内外:透明				複製
389	SK10覆刃	埋蔵・陶・破	口:13.4, 高:4.3, 底:7.8	4/8	土	-	灰白色5Y7/1	内外:透明				複製
390	SK10	埋蔵・陶・破	口:16.4, 高:4.7, 底:4.8	口:埋蔵2/8 底形:1/8	土	-	灰白色2.5Y7/1	内外:透明				複製
391	SK10	埋蔵・陶・破	口:10.2, 高:2.6, 底:8.1	口:埋蔵1/8 底形:6/8	土	-	灰白色	内外:透明				複製
392	SK10	埋蔵・陶・破	口:23.6, 高:9.6, 底:13.9	1/8	土	-	灰白色	内外:透明				複製
393	SK10	埋蔵・陶・破	口:21.4, 高:9.2, 底:11.2	4/8	土	-	灰白色	内外:透明				複製
394	SK10	埋蔵・陶・破	口:12.4	口:埋蔵2/8 中	土	-	灰白色5Y6/2	内外:灰白色(複製色2.5Y7/2)				複製
395	SK10	埋蔵・陶・破	口:11.9	口:埋蔵1/8 中・中形	土	-	灰白色2.5Y6/1	内外:灰白色(複製色2.5Y7/2)				複製
396	SK10	埋蔵・陶・破	口:17.0	口:埋蔵1/8 中	土	-	灰白色5Y6/2	内外:灰白色(複製色2.5Y7/2)				複製
397	SK10覆刃(埋下)	埋蔵・陶・破	小片	小片	土	-	灰白色2.5Y6/2	内外:灰白色(複製色2.5Y6/2)				複製







観音番号	観音像通称名	名称(産地、種類)	法量(cm)	素材	土	状態	色調(顔・衣)	色調(顔・衣)	内面装束	外面装束	制作年代	備考
433	SK10	互賀・有願鉢鉢	口:23.8、高:13.4	4/8	やや肥・赤中少	やや肥	灰白色10VR7/1	内:顔(灰)5VR6/1 外:灰(白)5V/-4/-	口縁部:指輪さし一回転打 底部:指輪さし一行	口縁部:花巻打2つと別段文 底部:打	三脚 外面に顔面をのこした突起を認 める 外面に打つた葉巻を認め、花巻打 つを有する点から互賀作との関連 が疑える	
434	SK10(鹿辺)	土・互賀	口:32.0、高:29.0、底:25.0	鹿辺4/8	やや肥・石小~中多、赤中普	やや肥	にぶい褐色7.5VR6/3	内:にぶい青褐色10VR6/3 外:にぶい褐色7.5VR6/3	指輪さし一回転打	底打一行段状文	内面に付葉巻(写物)有り	
435	SK10	土・互賀	口:21.2	1/8	やや肥・石中多、量小~少、赤小少	やや肥	灰白色5VR6/2	内外:褐色5VR6/6	指輪さし一回転打 文	口縁部:一回転打 底部:打		
436	SK10	土・互賀	破片	破片	肥・石小~中多、量小普、赤小少	やや肥	褐色7.5VR6/6	内外:褐色7.5VR6/6	口縁部:一回転打 底部:打	口縁部:一回転打 底部:打	口縁部:一回転打 底部:打	口縁部:一回転打 底部:打
437	SK10	土・互賀・火鉢	口:26.6、高:27.7、底:27.1	3/8	やや肥・石小普、量小~中普、赤小~中多	良	にぶい褐色7.5VR6/4	内外:にぶい褐色7.5VR6/4	口縁部:指輪さし一行打 底部:指輪さし一行打	口縁部:指輪さし一行打 底部:指輪さし一行打	日下分煙火鉢、煙管頸口が深 出た形跡がある	口縁部:指輪さし一行打、一對の煙 出た形跡がある
438	SK10(鹿辺)	土・互賀・火鉢	破片	破片	やや肥・石小~中普、量小普、赤小~少	-	褐色5VR6/6	内外:褐色5VR6/6	指輪さし一行打	注	二重蓋をなし、内面は蓋を内折 をなし、射撃口及びを認める。内折 蓋上面に突起を認め、外面には、 射撃口による突起を認める 内面蓋上面の突起は、蓋縁が 行なう	
448	SK11	肥・互賀・小鉢	底:2.8	底部2/8	肥	-	灰白色	内外:透明釉		灰付:高花文	高花文内装	高花文内装
449	SK11	下層 青灰色砂土互賀	口:17.0	口縁部1/8	肥	-	灰白色	内外:透明釉		灰付:高花文	高花文内装	高花文内装
450	SK11	肥・互賀・土	底:4.4	底部2/8	肥	-	灰白色5VR6/1	内外:透明釉		灰付:高花文	高花文内装	高花文内装
451	SK11	肥・互賀・土	口:13.0	口縁部1/8	肥	-	灰白色	内外:透明釉		灰付:高花文	高花文内装	高花文内装
452	SK11 AS54	肥・互賀・土	底:4.6	底部2/8	肥	-	灰白色	内外:白磁釉		灰付:高花文	高花文内装	高花文内装
453	SK11 AS54	肥・互賀・土	底:7.8	底部2/8	肥	-	灰白色N7/-	内外:透明釉		灰付:高花文	高花文内装	高花文内装
454	SK11	肥・互賀・土	底:5.7	底部2/8	肥	-	灰白色10VR6/2	内外:反転(濃)褐色2.5VR7/2		灰付:高花文	高花文内装	高花文内装
455	SK11 AS54 AS53	肥・互賀・土	底:6.2	底部2/8	肥	-	にぶい青褐色10VR7/2	内外:反転(灰)白色10VR7/1		灰付:高花文	高花文内装	高花文内装
456	SK11 AS54	肥・互賀・土	口:8.0	口縁部1/8	肥	-	灰白色2.5VR6/2	内外:反転(灰)白色2.5VR7/1		灰付:高花文	高花文内装	高花文内装
457	SK11	肥・互賀・土	底:13.4	底部1/8	中・石小~中普	肥	にぶい褐色	内外:反転(濃)褐色2.5VR6/1		灰付:高花文	高花文内装	高花文内装
458	SK11	土・互賀・小皿	口:8.8、高:1.8、底:5.2	底部2/8	中・石小普、量小~中少、赤小少	やや肥	にぶい青褐色10VR7/2	内外:にぶい青褐色10VR7/2	1/1	一回転打	景徳鎮年近28~33期	
459	SK11	互賀・土	小片	小片	中・石小~中普、赤小~中少	やや肥	反褐色2.5VR7/2	内外:黄灰色2.5VR6/1	口縁部:一回転打 底部:反転(灰)白色	口縁部:一回転打 底部:反転(灰)白色		9期に属する等形を認め、その を有する
460	SK11 AS54	土・互賀・有願鉢鉢	底:8.2	底部1/8	肥・石小~中多、量小~中多	やや肥	灰白色10VR6/2	内外:反白色10VR6/2	口縁部:指輪さし一回転打 底部:指輪さし一行	口縁部:指輪さし一回転打 底部:指輪さし一行		脚を有し、脚に属する可能性が高い
462	SK12	肥・互賀・土	底:8.2	底部1/8	肥	-	灰白色N7/-	内外:透明釉		灰付:不明	灰の目取(高花文)	
463	SK12	肥・互賀・土	底:5.45	3/8	肥	-	灰白色	内外:透明釉		灰付:高花文	高花文内装	
464	SK12	肥・互賀・土	底:12.4	底部1/8	中・石小~中普、赤小~中少	やや肥	灰白色	内外:透明釉		灰付:高花文	高花文内装	
465	SK12	肥・互賀・土	口:12.4	小破片	中・石小~中普、赤小~中少	やや肥	灰白色	内外:透明釉		灰付:高花文	高花文内装	
466	SK12	肥・互賀・土	底:3.8	底部1/8	肥	-	灰白色	内外:透明釉		灰付:不明	灰の目取(高花文)	
467	SK12	肥・互賀・土	口:7.5、高:4.1、底:6.4	つぎ形破片	中・石小~中普、赤小~中少	やや肥	灰白色	内外:透明釉		灰付:高花文	高花文内装	
468	SK12 H488	肥・互賀・土	口:8.9、高:4.1、底:6.4	3/8	肥	-	灰白色	内外:透明釉		灰付:高花文	高花文内装	
469	SK12	肥・互賀・土	口:4.3、高:1.6、底:4.9	破片	肥	-	灰白色	内外:白磁釉		灰付:不明	灰の目取(高花文)	
470	SK12 H470	肥・互賀・土	口:29.4、高:33.3、底:12.4	5/8	肥	-	灰白色	内外:透明釉		灰付:高花文	高花文内装	
471	SK12 H471	肥・互賀・土	口:10.0	破片	肥	-	灰白色	内外:透明釉		灰付:高花文	高花文内装	
472	SK12	肥・互賀・土	口:10.0	破片	肥	-	灰白色	内外:透明釉		灰付:高花文	高花文内装	
473	SK12	肥・互賀・土	口:14.8	口縁部破片	肥	-	灰白色2.5VR6/1	内外:反転(濃)褐色2.5VR6/2		灰付:高花文	高花文内装	
474	SK12	肥・互賀・土	底:3.2	小破片	肥	-	灰白色5VR7/1	内:透明釉、縁部(明)赤褐色5VR6/6		灰付:高花文	高花文内装	
475	SK12 H475	肥・互賀・土	底:3.2	破片	肥	-	灰白色5VR6/1	内:反転(灰)白色2.5VR6/2		灰付:高花文	高花文内装	
476	SK12	肥・互賀・土	底:3.2	小破片	肥	-	灰白色5VR6/1	内:反転(灰)白色5VR7/1		灰付:高花文	高花文内装	



標本番号	標本通称名	名称(産地・種別)	法量(cm)	発見率	土質	組成	色調(産土)	色調2(産土、内外染色調)	色調3(産土、土物)	内面調査	外面調査	製作年代	備考
515	SX01 ①地高掘り下付中 AS53 1/2/15 7-10, 24.32,44,45層	肥・陶・皿	縦:4.6	小片	土質-灰	-	灰白色S57/2	内外:灰褐色S57/2					なぶり口縁
516	SX01 ①地高掘り下付中 AS53 1/2/15 7-10, 24.32,44,45層	肥・陶・皿	縦:31.3	底割れ片	土質-灰	-	に少し褐色10R6/4	内外:灰褐色S57/2		砂目(少)			外面下半以下腐蝕
517	SX01 ①地高掘り下付中 AS53 1/2/15 8-10, 24.32,44,45層	肥・陶・皿	縦:15.4	口縁部片	土質-灰	-	灰白色S57/2	内外:灰褐色S57/2	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			外面下半以下腐蝕
518	SX01 ①地高掘り下付中 AS53 1/2/15 8-10, 24.32,44,45層	肥・陶・皿	縦:15.4	口縁部片	土質-灰	-	灰白色S57/2	内外:灰褐色S57/2	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			天目線
519	SX01 ①地高掘り下付中 AS53 1/2/15 8-10, 24.32,44,45層	肥・陶・皿	縦:15.4	口縁部片	土質-灰	-	灰白色S57/2	内外:灰褐色S57/2	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
520	SX01 ①地高掘り下付中 AS53 1/2/15 8-10, 24.32,44,45層	肥・陶・皿	縦:15.4	口縁部片	土質-灰	-	灰白色S57/2	内外:灰褐色S57/2	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
521	SX01 ①地高掘り下付中 AS53 1/2/15 8-10, 24.32,44,45層	肥・陶・皿	縦:15.4	口縁部片	土質-灰	-	灰白色S57/2	内外:灰褐色S57/2	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
522	SX01 ①地高掘り下付中 AS53 1/2/15 8-10, 24.32,44,45層	肥・陶・皿	縦:15.4	口縁部片	土質-灰	-	灰白色S57/2	内外:灰褐色S57/2	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
523	SX01 ①地高掘り下付中 AS53 1/2/15 8-10, 24.32,44,45層	肥・陶・皿	縦:15.4	口縁部片	土質-灰	-	灰白色S57/2	内外:灰褐色S57/2	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
524	SX01 ①地高掘り下付中 AS53 1/2/15 8-10, 24.32,44,45層	肥・陶・皿	縦:15.4	口縁部片	土質-灰	-	灰白色S57/2	内外:灰褐色S57/2	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
525	SX01 ①地高掘り下付中 AS53 1/2/15 8-10, 24.32,44,45層	肥・陶・皿	縦:15.4	口縁部片	土質-灰	-	灰白色S57/2	内外:灰褐色S57/2	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
526	SX01 ①地高掘り下付中 AS53 1/2/15 8-10, 24.32,44,45層	肥・陶・皿	縦:15.4	口縁部片	土質-灰	-	灰白色S57/2	内外:灰褐色S57/2	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
527	SX01 ①地高掘り下付中 AS53 1/2/15 8-10, 24.32,44,45層	肥・陶・皿	縦:15.4	口縁部片	土質-灰	-	灰白色S57/2	内外:灰褐色S57/2	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
528	SX01 ①地高掘り下付中 AS53 1/2/15 8-10, 24.32,44,45層	肥・陶・皿	縦:15.4	口縁部片	土質-灰	-	灰白色S57/2	内外:灰褐色S57/2	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
529	SX01 ①地高掘り下付中 AS53 1/2/15 8-10, 24.32,44,45層	肥・陶・皿	縦:15.4	口縁部片	土質-灰	-	灰白色S57/2	内外:灰褐色S57/2	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
530	SX01 ①地高掘り下付中 AS53 1/2/15 8-10, 24.32,44,45層	肥・陶・皿	縦:15.4	口縁部片	土質-灰	-	灰白色S57/2	内外:灰褐色S57/2	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
531	SX02 ①地高掘り下付中 AV53 1/2/15 中層	肥・陶・鉢	縦:11.2	口縁部2/8	土質-灰	-	灰白色	内外:透明釉	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
532	SX02 ①地高掘り下付中 AV53 1/2/15 中層	肥・陶・鉢	縦:11.2	口縁部2/8	土質-灰	-	灰白色	内外:透明釉	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
533	SX02 ①地高掘り下付中 AV53 1/2/15 中層	肥・陶・鉢	縦:11.2	口縁部2/8	土質-灰	-	灰白色	内外:透明釉	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
534	SX02 ①地高掘り下付中 AV53 1/2/15 中層	肥・陶・鉢	縦:11.2	口縁部2/8	土質-灰	-	灰白色	内外:透明釉	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
535	SX02 ①地高掘り下付中 AV53 1/2/15 中層	肥・陶・鉢	縦:11.2	口縁部2/8	土質-灰	-	灰白色	内外:透明釉	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
536	SX02 ①地高掘り下付中 AV53 1/2/15 中層	肥・陶・鉢	縦:11.2	口縁部2/8	土質-灰	-	灰白色	内外:透明釉	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
537	SX02 ①地高掘り下付中 AV53 1/2/15 中層	肥・陶・鉢	縦:11.2	口縁部2/8	土質-灰	-	灰白色	内外:透明釉	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
538	SX02 ①地高掘り下付中 AV53 1/2/15 中層	肥・陶・鉢	縦:11.2	口縁部2/8	土質-灰	-	灰白色	内外:透明釉	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
539	SX02 ①地高掘り下付中 AV53 1/2/15 中層	肥・陶・鉢	縦:11.2	口縁部2/8	土質-灰	-	灰白色	内外:透明釉	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
540	SX02 ①地高掘り下付中 AV53 1/2/15 中層	肥・陶・鉢	縦:11.2	口縁部2/8	土質-灰	-	灰白色	内外:透明釉	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
541	SX02 ①地高掘り下付中 AV53 1/2/15 中層	肥・陶・鉢	縦:11.2	口縁部2/8	土質-灰	-	灰白色	内外:透明釉	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
542	SX02 ①地高掘り下付中 AV53 1/2/15 中層	肥・陶・鉢	縦:11.2	口縁部2/8	土質-灰	-	灰白色	内外:透明釉	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿
543	SX02 ①地高掘り下付中 AV53 1/2/15 中層	肥・陶・鉢	縦:11.2	口縁部2/8	土質-灰	-	灰白色	内外:透明釉	鉄線:褐色10R6/1	鉄線:褐色文?			赤野丸皿



報告番号	報告書題名	名称(地・種別)	流量(cm)	採行率	土質	構成	色類(土)	色類(灰須・内外面色類)	内面装束	外面装束	製作年代	備考
544	SK02 ①地底部分大片集中層	肥・陶・灰	厚:11.4	厚部1/8	灰	-	灰褐色7.5YR5/2	外:反転付7.5YR5/2 内:反転付7.5YR5/2	当て真直+打	反転付7.5YR5/2	外面下半以下層部	
545	SK02 ②土質	肥・陶・灰		厚部1/8	灰	-	灰色10YR6/2	内外:反転付(灰色)5YR6/1	鉄線,草花文		外面下半以下層部	
547	SK02 ③土質	土質・灰	口:14.2, 高:3.1, 厚:7.7	厚部2/8	中,石小~中量,塵小量	灰	灰色10YR6/2	内外:反転付(灰色)5YR6/1	反転付			
548	SK02 ④土質	土質・灰	口:9.4, 高:3.5, 厚:2.3	厚部2/8	中,石小	やや軟	灰白色2.5Y8/1	内外:反転付(灰色)5YR6/1	反転付			
549	SK02(SK09と切り取り部分)	中国産・磁・青花碗	口:11.4	厚部1/8	灰	-	灰白色	内外:反転付(灰色)5YR6/2	青花(漢文(篆書))			全法財団に属する磁器類を記せる 重要磁器系青花
550	SK02 A152AV52	肥・陶・灰	厚:4.7	厚部3/8	灰	-	灰白色	内外:反転付	草花(漢文(篆書))			墨付黒陶
551	SK02 A152AV52	肥・陶・灰	口:40.4	厚部1/8	中,石小<少	-	に少し赤褐色5YR6/4	内外:反転付(褐色)5YR6/2	白磁器(一鉄線草花文)			外面下半以下層部
552	SK02(SK09と切り取り部分)	東洋・陶・灰	口:9.4, 高:2.4, 厚:1.6	厚部2/8	中,石小~中量	-	灰白色5Y8/1	内外:反転付(灰色)5Y7/1	鉄線(に少し赤褐色)			志野向付
553	SK02 A152AV52	肥・陶・灰	厚部1/8	厚部1/8	中,石小~中量	-	褐色7.5YR6/6	内外:反転付(褐色)5YR6/4	鉄線(に少し赤褐色)			黒陶(黒色)5YR6/4
554	SK02 A152AV52	肥・陶・灰	厚部1/8	厚部1/8	中,石小~中量	-	灰白色2.5Y8/2	内外:反転付(灰色)5Y7/1	下層:草花文			平焼
555	SK02 AV54	土質・灰	厚部1/8	厚部1/8	中,石小~中量	やや硬	灰白色10YR6/2	内外:反転付	板子+打			
556	SK02 AV52AV53	土質・灰	口:9.8, 高:2.4, 厚:1.6	厚部1/8	やや硬,石小~中量,赤中量	軟	に少し褐色5YR6/4	内外:反転付(褐色)5YR6/4	反転付			
557	①地点 AR53 東洋陶直上	東洋・陶・灰	口:15.4	厚部1/8	中,石小~中量	硬	灰色NE/1,に少し赤褐色2.5YR4/4	内外:反転付				黒陶(黒色)5YR6/4
558	東洋陶直上	東洋・陶・灰	口:11.7	厚部1/8	中,石小~中量	やや硬	灰色NE/1,に少し赤褐色2.5YR4/4	内外:反転付				黒陶(黒色)5YR6/4
559	①地点 AR53 東洋陶直上	土質・灰	口:6.3, 高:7.0	厚部1/8	中,石小~中量,赤中量	硬	褐色5YR6/6	内外:反転付				黒陶(黒色)5YR6/4
560	櫻孔AS53	土質・灰	厚部1/8	厚部1/8	中,石小~中量	硬	に少し褐色5YR6/3	内外:反転付				黒陶(黒色)5YR6/4
561	北洋陶直上(東洋陶直上)	東洋・陶・灰	口:7.8	厚部1/8	中,石小~中量	-	に少し褐色5YR6/2	内外:反転付				黒陶(黒色)5YR6/4
562	櫻孔 AV54	土質・灰	口:11.2	厚部1/8	中,石小~中量	-	灰色2.5Y8/2	内外:反転付				黒陶(黒色)5YR6/4
563	SK14 ①地点遺構出土(SD01とその直下の遺構) SA53 打付 L=1.15mm	土質・灰	口:10.7	厚部2/8	中,石小~中量	-	灰白色2.5Y8/1	内外:反転付				黒陶(黒色)5YR6/4
564	櫻孔 打付中トリスのすぐ北部分	土質・灰	口:10.0, 厚:3.4	厚部2/8	中,石小~中量	やや硬	赤色10R4/6	内外:赤色10R4/6	型産物による草花文			黒陶(黒色)5YR6/4
565	櫻孔 遺構区南直上	土質・灰	厚部1/8	厚部1/8	中,石小~中量	-	赤色10R4/6	内外:赤色10R4/6	型産物による草花文			黒陶(黒色)5YR6/4
566	櫻孔 打付中トリスの直上部分	土質・灰	厚部1/8	厚部1/8	中,石小~中量	-	赤色10R4/6	内外:赤色10R4/6	型産物による草花文			黒陶(黒色)5YR6/4
567	櫻孔 遺構区南直上	土質・灰	厚部1/8	厚部1/8	中,石小~中量	-	赤色10R4/6	内外:赤色10R4/6	型産物による草花文			黒陶(黒色)5YR6/4
568	遺構区南直上 AV52	土質・灰	厚部1/8	厚部1/8	中,石小~中量	-	赤色10R4/6	内外:赤色10R4/6	型産物による草花文			黒陶(黒色)5YR6/4
569	櫻孔 AV54	土質・灰	厚部1/8	厚部1/8	中,石小~中量	-	赤色10R4/6	内外:赤色10R4/6	型産物による草花文			黒陶(黒色)5YR6/4
570	櫻孔 AV54	土質・灰	厚部1/8	厚部1/8	中,石小~中量	-	赤色10R4/6	内外:赤色10R4/6	型産物による草花文			黒陶(黒色)5YR6/4



石製品観察表

報文番号	報告書遺構名	名称	長さ(cm)	残存長(cm)	幅(cm)	最大幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	材質	備考
60	SD01 57,58層	棒状砥石	-	8.5	-	2.6	1.2~1.0		-	方柱状を呈し、小口部を除く各面に擦痕及び研磨痕を認める
332	SK09	硯	-	4.5	-	4.3	0.8		-	上面縁部に削り込みを認め、ほぼ全面に墨が付着する
447	SK10周辺	硯	-	6.6	7.3	-	1.7		-	「海」 内面に墨の付着を認める
483	SK12	砥石	-	13.5	5.6	5.6	2.2~1.5		粘板岩	各面に線状の擦痕及び研磨痕を認める
482	SK12	火打ち石	-	2.9	-	2.7	0.7		チャート	不定方向に剥離を不規則に認める

木製品観察表

報文番号	報告書遺構名	名称	長さ(cm)	残存長(cm)	幅(cm)	最大幅(cm)	厚み(cm)	残存率	備考	
21	SE01	曲物						8/8	法量 最大径:59cm、最大高:12cm 内面調整:縦方向の切り込み 対方向に桜の樹皮による織じ合わせを認める。 下半には帯を巡らし、木ビスの目穴を認める。	
32	SE02	曲物						8/8	法量 最大径:48cm、最大高:27.5cm 内面調整:縦方向の切り込み 織じ合わせは桜の樹皮による。 一ヶ所のみ木ビスの目穴を認める。	
67	SD01 トリチ5・59層	漆器・椀							外面には黒漆、内面には黒漆→赤漆を認める 平高台	
139	SD03	漆器・椀							外面には黒漆、内面には黒漆→赤漆を認め、高台 内には「△」の釘彫を認める	
232	SK06	漆器・椀							内面は赤漆、外面は黒漆→赤漆?による巴文	
233	SK06	漆器・椀					0.3	1/8	赤漆を内外面に塗布	
319	SK09	漆器・椀・蓋							内面は赤漆、外面は黒漆を認める	
320	SK09	漆器・椀							内面は赤漆、外面は黒漆→赤漆による 草花文	
321	SK09	漆器・椀							内面は赤漆、外面は黒漆→赤漆による草花文	
322	SK09	椀		6.3		4.3	0.8	4/8	上端部を斜めに切断	
323	SK09	楊枝		7.5	2.3		0.2	3/8	上下端は欠損	
324	SK09	荷札ないし楊枝		5.8	3.4		0.2	2/8	先端部は先細る	
325	SK09	楊枝		9.1		1.7	0.2~0.4	2/8	先端部付近に左右から切り込みを入れ中央に穿孔を認める	
326	SK09	荷札ないし楊枝		22.6	4.8		0.5	5/8		
546	SX02 ①地点部分木片集中層	下駄		20.9		7.5	0.8	7/8		連菌 側面及び上面に漆を塗布



鉄製品観察表

報文番号	報告書遺構名	名称	長さ(cm)	残存長(cm)	幅(cm)	最大幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	残存率	備考
140	SD03	鉄釘	7.9	7.9			1.0		8/8	釘頭は肥厚し、先端部は「く」の字形に屈曲する
327	SK09	銅銭	2.3		2.3		0.1		8/8	寛永通宝
328	SK09	銅銭	2.3		2.3		0.1		8/8	寛永通宝
329	SK09	銅銭	2.6		2.6		0.1		8/8	寛永通宝 裏面に「文」の陽刻を認める
330	SK09	銅銭	2.5		2.5		0.1		8/8	寛●永●通●宝(●部穿孔) 裏面に「文」の陽刻を認める
331	SK09	銅製煙管		5.2			0.05		6/8	雁首 表面には金箔を施す
542	SX02 ①地点AV53トレン75・103～105層	銅銭	2.3		2.3		0.1		8/8	寛永通宝

鬼瓦観察表

報文番号	報告書遺構名	残存部最大長	残存部最大幅	厚み	縁部厚み	色調				調整		キラコ	備考
						外面色調	断面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整		
141	SD03	28.4	28.6	2.0	2.0	暗灰色N3 / 暗灰色N3 /	灰白色N7 /	細:石小く少	やや軟	板ナリ	指押さえ、ナリ	無	中心飾りを配し、裏面には、吊り手を認める。宝珠の肩縁には、火焔を軸描き文で表す

軒丸瓦観察表

報文番号	報告書遺構名	中心飾り	平部	丸部	軒丸部法量(cm)				色調				胎土	焼成	キラコ	備考
					文様区径	文様区厚	文様区径	文様区厚	外面色調	断面色調	内面色調	断面色調				
318	SK09	①	二	一	2.9	1.8	6.2	3.7	0.8	0.8	暗灰色N3 / 暗灰色N3 /	灰白色N4 / 灰白色N4 /	中:石小く少	炭	×	丸部が右につく
502	SK14	①	一	一	—	—	5.5	4.0	0.9	0.9	灰白色N7 / 灰白色N7 /	灰白色N4 / 灰白色N4 /	中:石小少、赤中普	やや硬	×	軒丸部が右

軒丸瓦観察表

報文番号	報告書遺構名	瓦面文様	法量(cm)				色調				胎土	焼成	キラコ	備考		
			外径	文様区径	文様区厚	瓦当縦幅	外径	文様区径	文様区厚	断面色調						
165	SE04	SE04	12.9	9.7	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	灰白色N7 / 灰白色N7 /	灰白色N6 / 灰白色N6 /	細:石小少	硬	○	釘孔を認める
230	SK06	BA文	12	9.7	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	灰白色N7 / 灰白色N7 /	灰白色N5 / 灰白色N5 /	細:石小少	やや軟	×	釘孔を認める
250	SK07	H223	12	9.0	1.3	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	灰白色N4 / 灰白色N4 /	灰白色N6 / 灰白色N6 /	中:石小少、赤小く少	やや軟	×	釘孔を2孔認める
251	SK07	H226	12	9.0	1.3	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	灰白色N4 / 灰白色N4 /	灰白色N6 / 灰白色N6 /	細:石小く少	やや軟	×	
252	SK07	H225	16	9.5	1.5	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	灰白色N4 / 灰白色N4 /	灰白色N7 / 灰白色N7 /	細:石小少、赤小少	やや軟	×	
439	SK10	H225	12	8.9	1.5	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	灰白色N4 / 灰白色N4 /	灰白色N5 / 灰白色N5 /	細:石小少	やや軟	×	特徴的な范傷あり
440	SK10	H225	12	8.9	1.5	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	灰白色N4 / 灰白色N4 /	灰白色N5 / 灰白色N5 /	細:石小少	やや軟	×	
441	SK10	H225	12	8.9	1.5	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	灰白色N4 / 灰白色N4 /	灰白色N5 / 灰白色N5 /	細:石小少	やや軟	×	
442	SK10	H225	12	8.9	1.5	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	灰白色N4 / 灰白色N4 /	灰白色N5 / 灰白色N5 /	細:石小少	やや軟	×	
443	SK10	H225	12	8.9	1.5	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	灰白色N4 / 灰白色N4 /	灰白色N5 / 灰白色N5 /	細:石小少	やや軟	×	
461	SK11	AS53上層	12	10.0	1.8	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	灰白色N7 / 灰白色N7 /	灰白色N7 / 灰白色N7 /	中:石小少、赤中普	軟	○	
501	SK14	BA文	12	10.0	1.7	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	灰白色N4 / 灰白色N4 /	灰白色N7 / 灰白色N7 /	細:石小少	布目→鉄線切り	×	
529	SX01 ①地点部り下げ中 AS53 H27F5・7～10,24,32,44,45層	BA文	13	10.0	1.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	灰白色N5 / 灰白色N5 /	灰白色N7 / 灰白色N7 /	中:石小少、火	やや軟	×	

軒平瓦観察表

報文番号	報告書遺構名	主文様		法量 (cm)							色調			調整		キラコ	備考	
		中心飾り	唐草	上弦幅	瓦当縦幅	文様区幅	文様区長さ	額高さ	額下端幅	外面色調	内面色調	断面色調	胎土	焼成	内面調整			外面調整
81	SD02中層①地点掘り 下げ中AT54外少5・85 層、攪乱		(二転)	(22.8)	(3.6)	2.4	(13.8)	2.1	(1.5)	灰白色2.5Y8/1 7.5YR7/2、灰色N4	明褐色 暗褐色	灰白色2.5Y8/1、灰 白色N7/	細:石ごく小少、赤小少	やや軟	板ナテ	板ナテ	×	瓦当面に横方向に延び る范構を認める
231	SK06	宝珠文	二転以上		3.5	1.9		2.3	1.4	灰白色N5/	暗灰色N3/	灰白色5Y8/1	中:石小普、赤小ごく少	やや軟	板ナテ	板ナテ	×	文様区が瓦当面の中央 に位置せず、やや下方 にずれる
253	SK07	巴文	二転		(3.2)	(1.9)	(12.0)	(1.7)	(1.3)	灰黄褐色 10YR6/2	灰黄褐色 10YR6/2	灰黄褐色 10YR6/2、褐灰色 10YR5/1	細:石小少、赤小普	やや軟	板ナテ	板ナテ	×	
315	SK09検出中	半截花菱文	二転		3.3	2.2	(12.8)	1.5	1.4	灰色N4/	灰色N4/	灰白色5Y8/1	中:石小普	やや硬	板ナテ	板ナテ	○	窪凹は無く、瓦当面は 長方形を呈する
316	SK09	三葉文(上向き)	二転	(24.0)	(3.5)	(2.4)	(15.0)		(1.6)	灰色N4/	灰色N4/	灰白色N7/、灰白 色N6/	細:石小少	やや軟	板ナテ	板ナテ	×	
317	SK09検出中	半截花菱文	二転		(3.4)	(2.2)		(2.2)	(1.2)	暗灰色N4/	暗灰色N4/	灰白色N8/、灰白 色N6/	細:石小少、赤小ごく少	硬	板ナテ	板ナテ	○	凹面にもキラコの蓋布を 認める
444	SK10周辺	半截花菱文	二転	(26.0)	(4.5)	3.0	(14.0)	(3.0)	1.3	灰色N4/、灰色 N5/	灰色N4/	灰白色N8/、灰白 色N6/	細:石小少	やや硬	板ナテ	板ナテ	○	
445	SK10周辺	宝珠文	二転	(22.0)	3.6	2.4	(12.0)	(2.3)	(1.6)	灰色N5/	灰色N5/	灰白色N8/	細:石小少	硬	板ナテ	板ナテ	○	
446	SK10周辺	宝珠文	二転	(22.7)	(3.6)	2.5	(11.8)	1.9	1.3	暗灰色N3/、灰 白色5Y8/1	暗灰色N3/、灰白 色5Y8/1	灰白色2.5Y7/1	中:石小少、赤中普	良	板ナテ	板ナテ	○	縁が足りない為、胎土 はマーブル状を呈する

# 写 真 图 版



調査区遠景（西より）



S K 07出土遺物





S K09出土遺物



S K10出土遺物



全 景 (西より)



全 景 (東より)





トレンチ 5 S D 02・整地層Ⅲ土層 (北より)



トレンチ 5 S D 01土層 (北より)



トレンチ 5 S D 02上層土層 (北より)



トレンチ 5 S D 05と整地層Ⅱ土層 (北より)



近世基盤層出土P 4 検出状況（北西より）



近世基盤層出土P 4 検出状況（西より）





SE01井戸枠 (曲物) 半載状況 (西より)



SE01井戸枠 (曲物) 細部 (西より)



SE01土層 (東より)



SE01井戸枠検出状況 (東より)



S E02検出状況（東より）



S E02半裁状況（南より）



S E 02半載状況 (南より)



S E 02井戸枠 (曲物) 細部 (南より)



S E 02石組構築状況 (東より)



S E 02井戸枠 (曲物) 検出状況 (南より)





S E 04井戸粹検出状況（北より）



S E 03土層堆積状況（西より）



S E 03井戸枠（結物）細部（西より）



S A 03完掘状況（南より、左が天）



S D01・02完掘状況（北東より、手前がS D02）



S D01・02完掘状況（北西より、手前がS D01）





S D 02売掘状況 (南西より)



S D 01・02、S A 01売掘状況 (北より)



S D 02売掘状況 (北東より)



S D 01・02、S A 03売掘状況 (南東より)



S A 01・杭01半裁状況（南より）



S A 02・S P 02半裁状況（北より）



S A 01・杭02半裁状況（南より）



S P 49半裁状況（北より）



S A 03・S P 06半裁状況（南より）



S P 65（礎石）検出状況（南より）



S A 03・S P 10半裁状況（東より）



S P 65（礎石）半裁状況（東より）



S D 03完掘状況 (東より)



S D 04完掘状況 (東より)



S D 05完掘状況 (北東より)



S D 04土層堆積状況 (西より)



S D 05土層堆積状況 (西より)

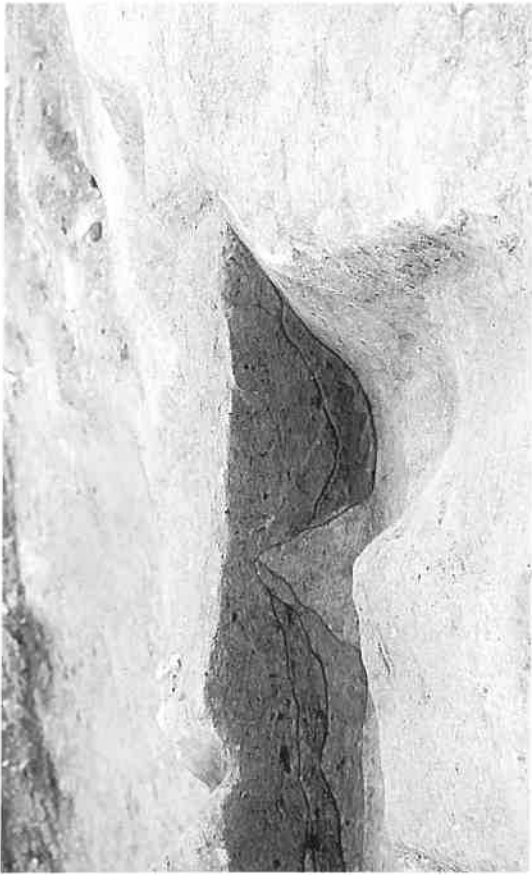




S K01完掘状況 (北東より)



S K01土層堆積状況 (西より)



S D06土層堆積状況 (南より)



S K02完掘状況 (北東より)



S K 09土層堆積状況 (西より)



S K 07遺物出土状況 (北西より)



S K 05遺物出土状況 (南東より)



S K 07遺物出土状況 (南東より)



S K11完掘状況（北西より）



S K11土層堆積状況（北より）



S K11土層堆積状況（北より）



S K16完掘状況（北東より）

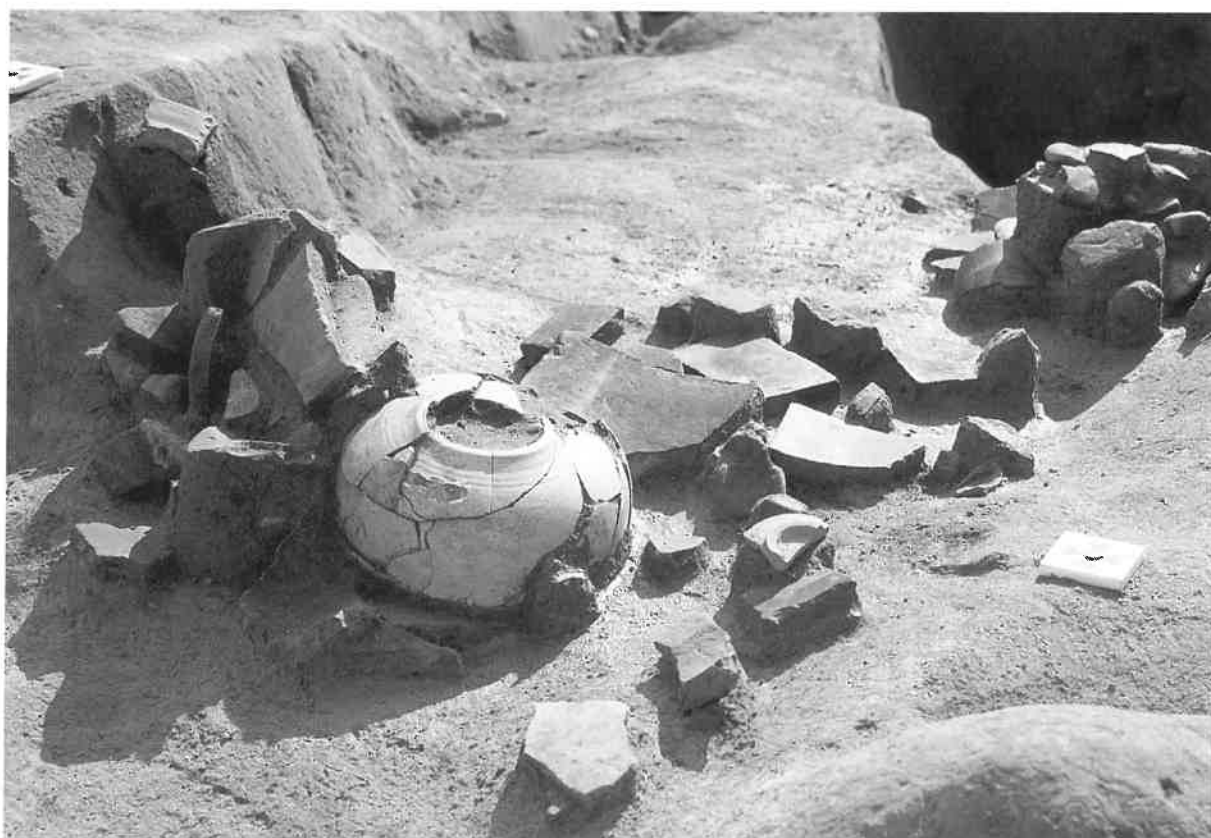


S X02・S K07完掘状況（北東より）

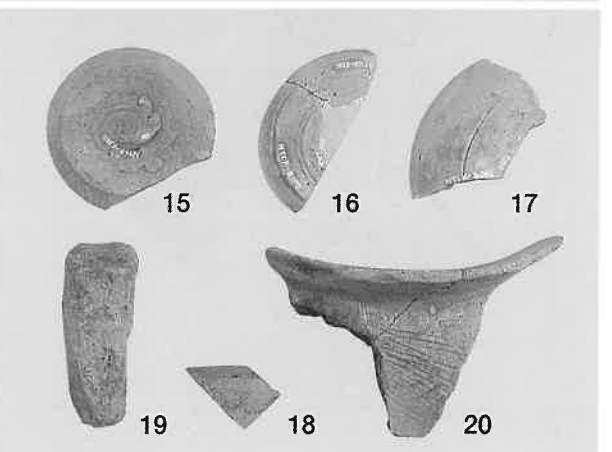
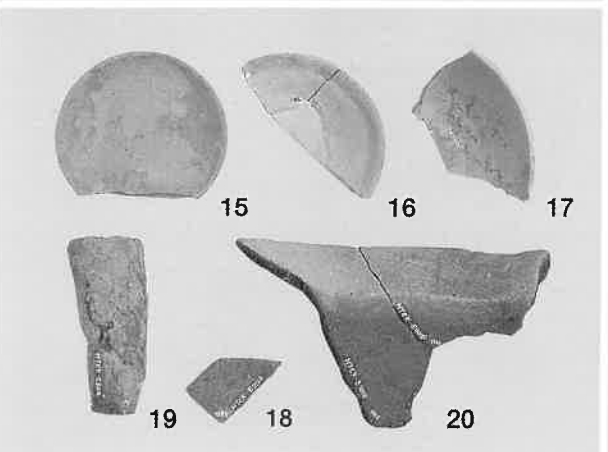
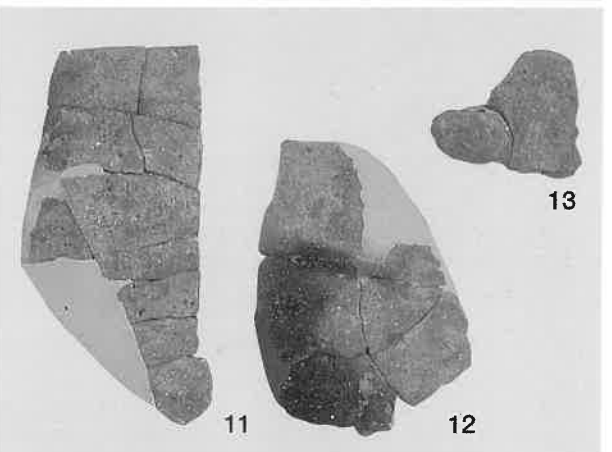
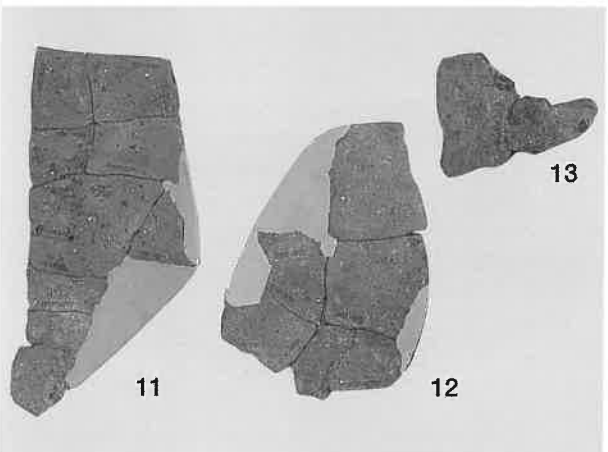
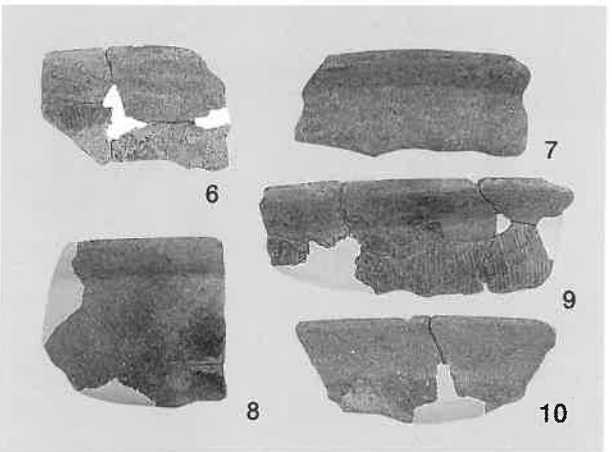
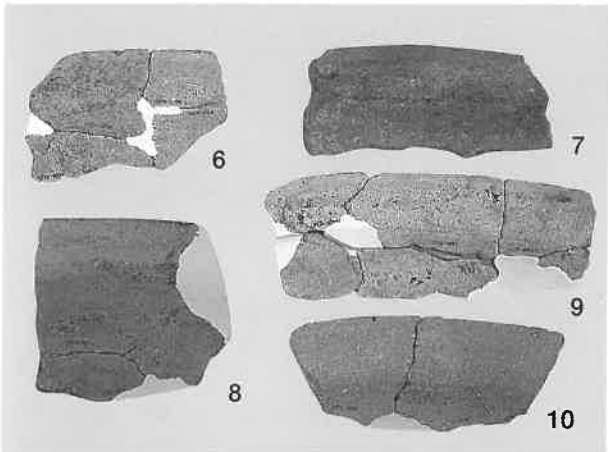
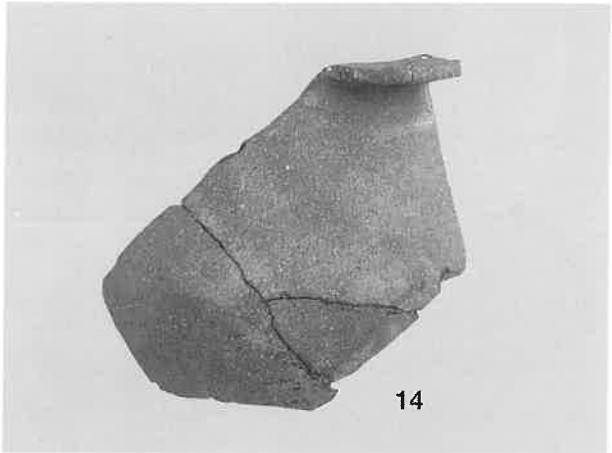


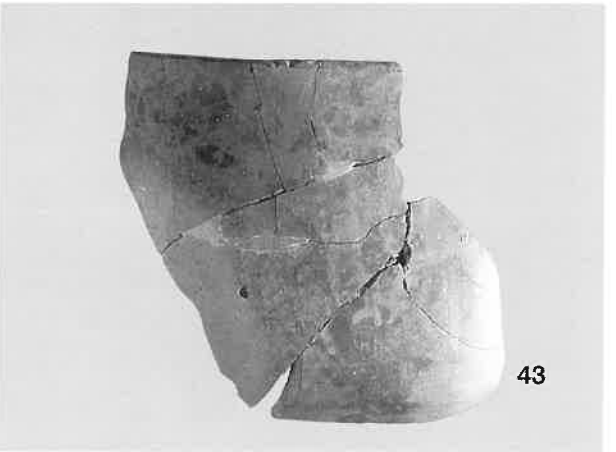
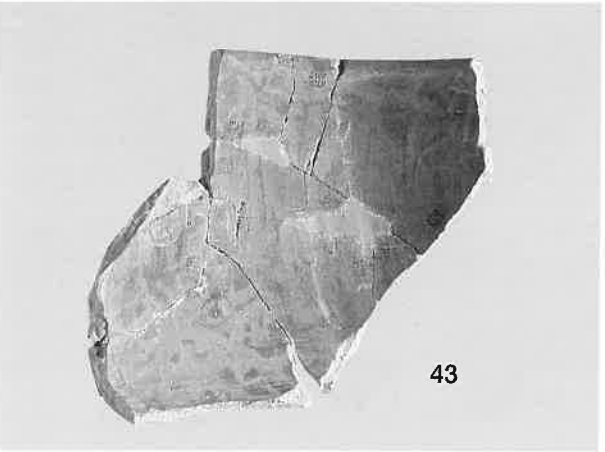
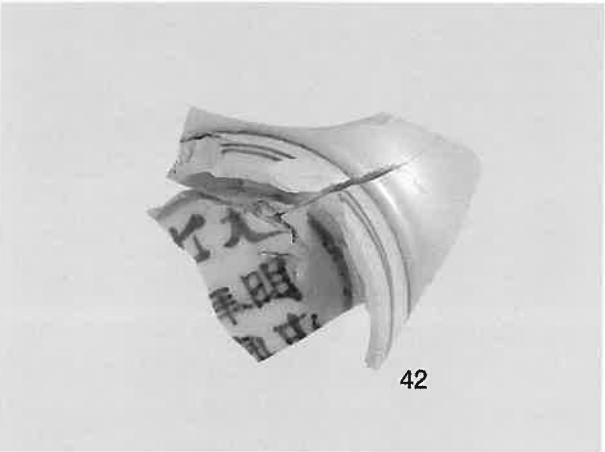
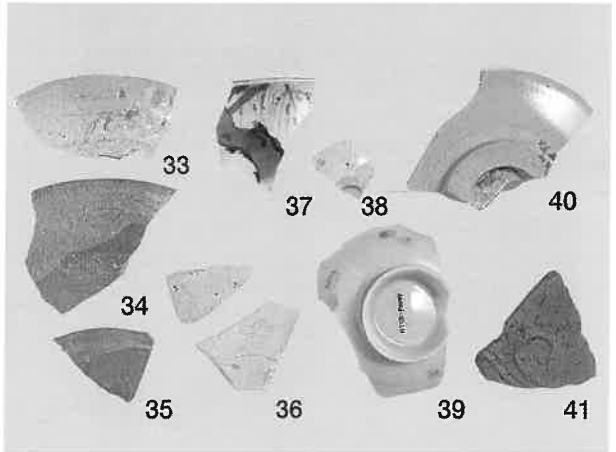
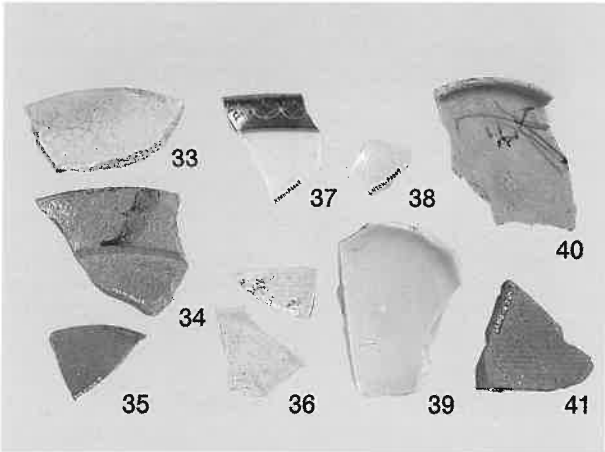
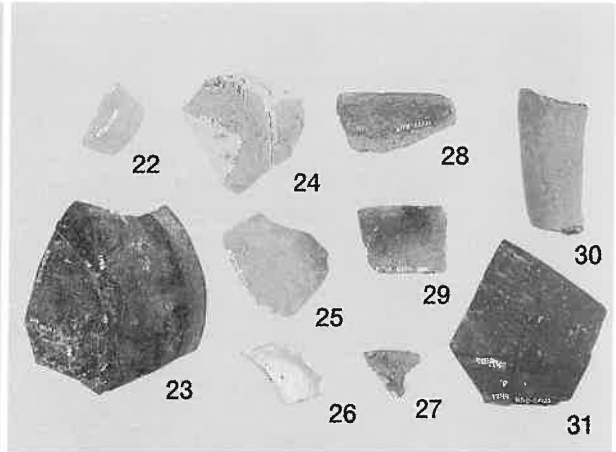
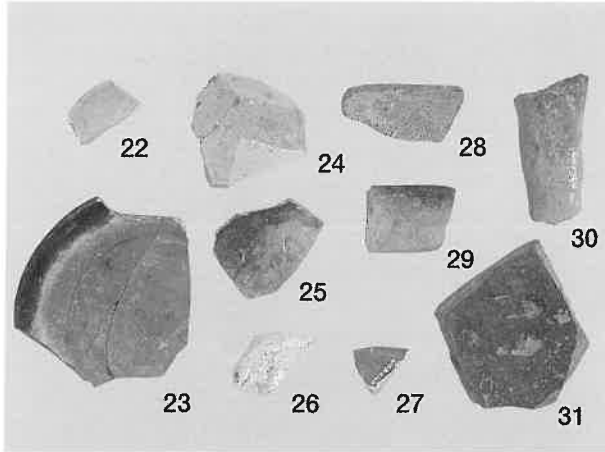


S K 12遺物出土状況 (南より)

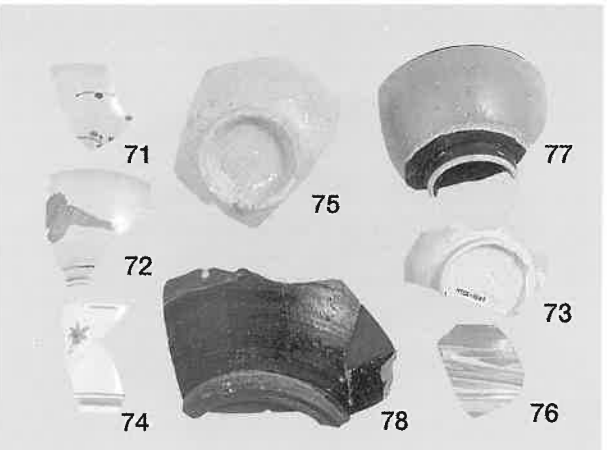
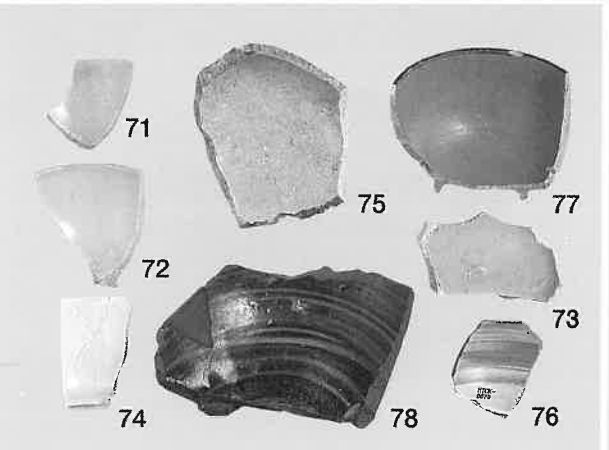
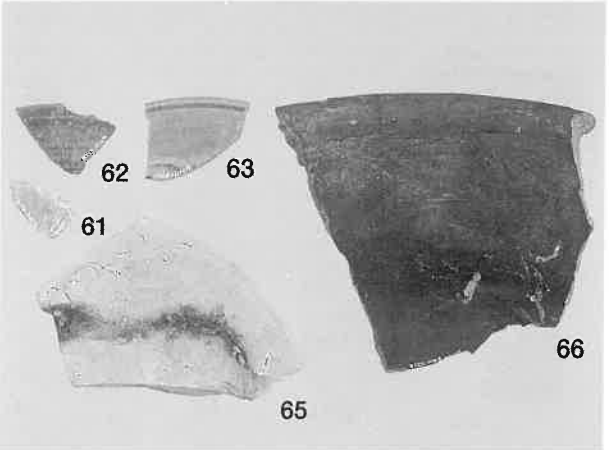
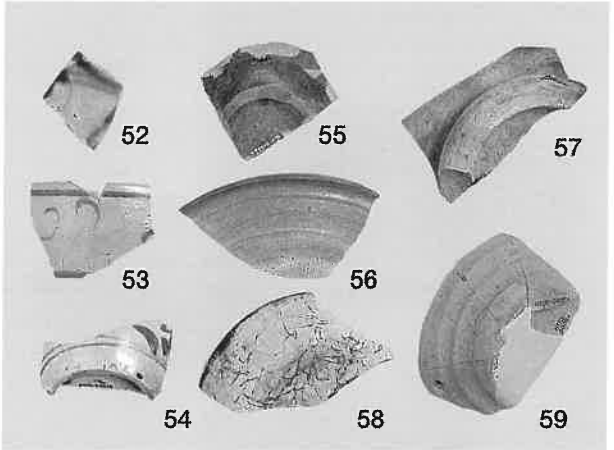
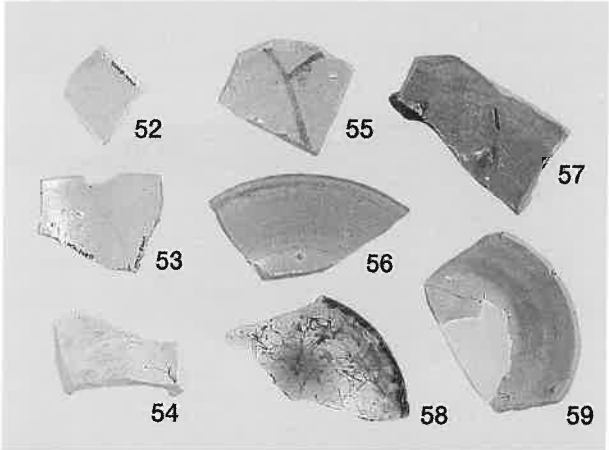
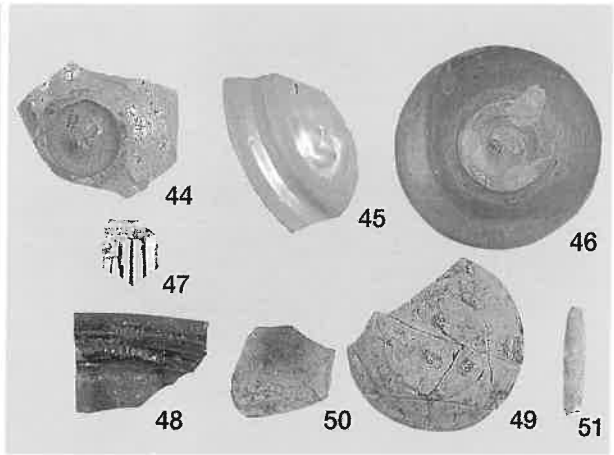
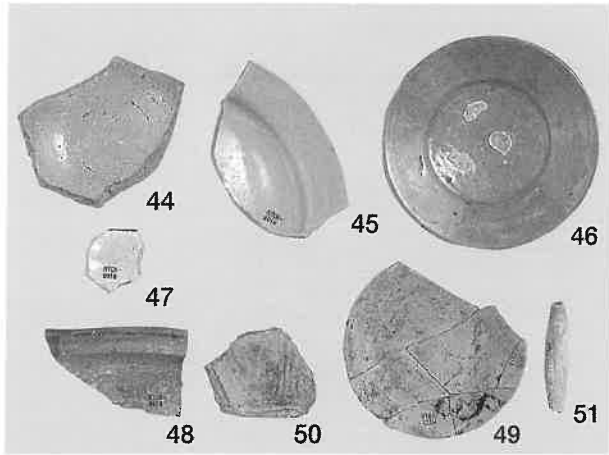


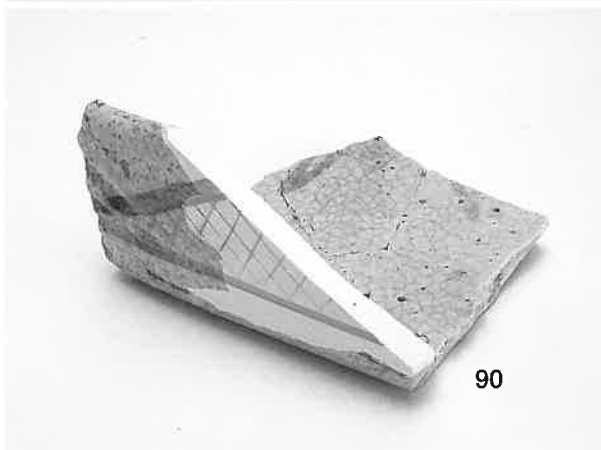
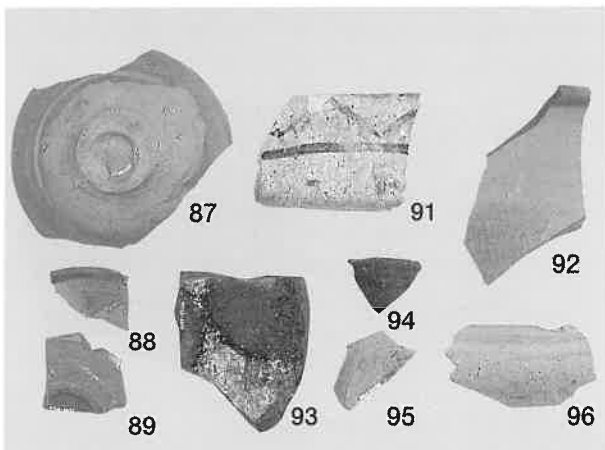
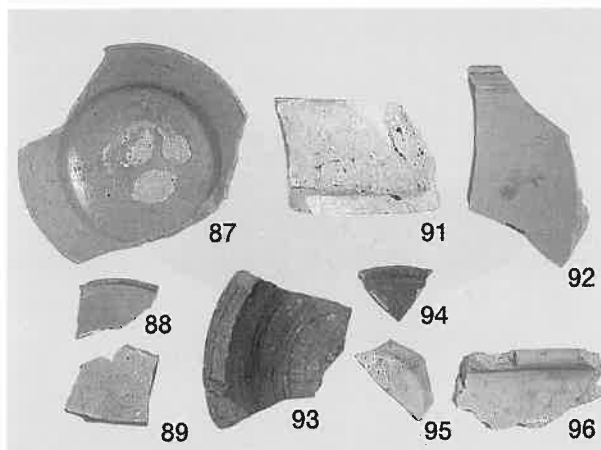
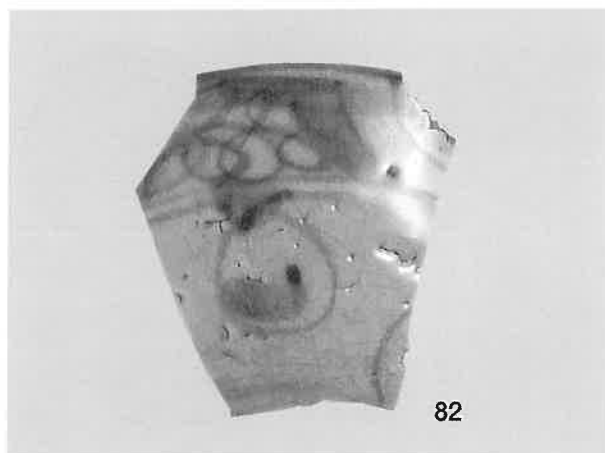
S K 13遺物出土状況 (北東より)

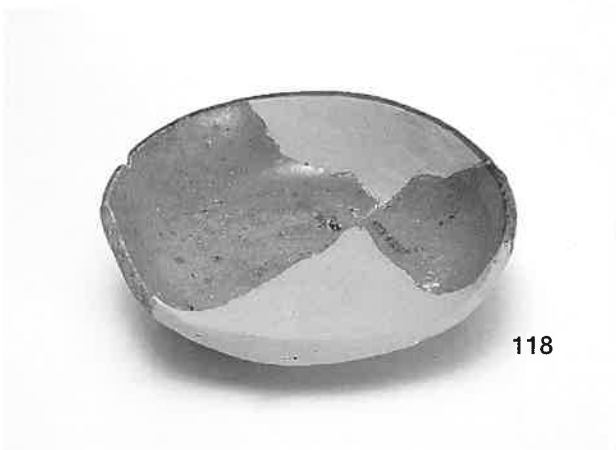
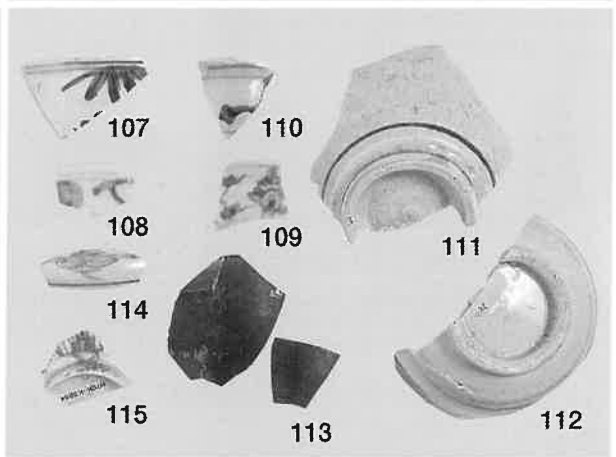
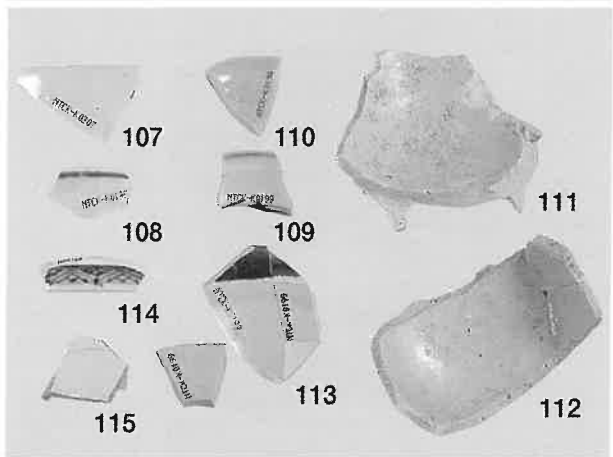
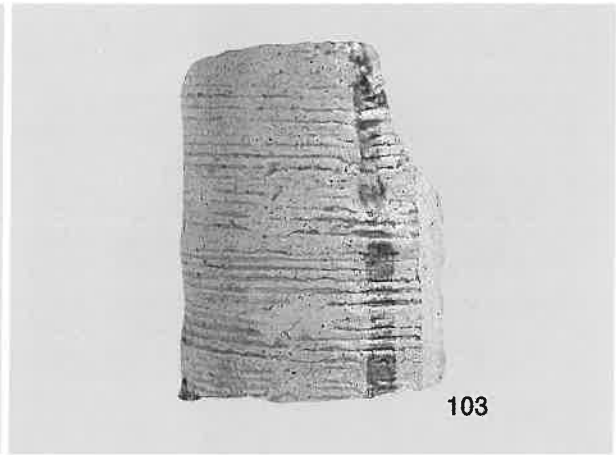
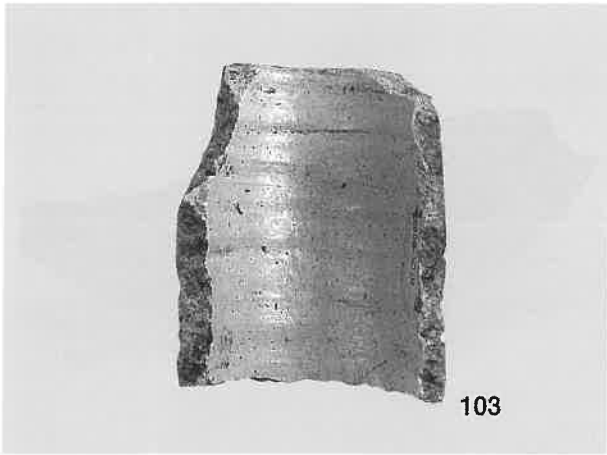


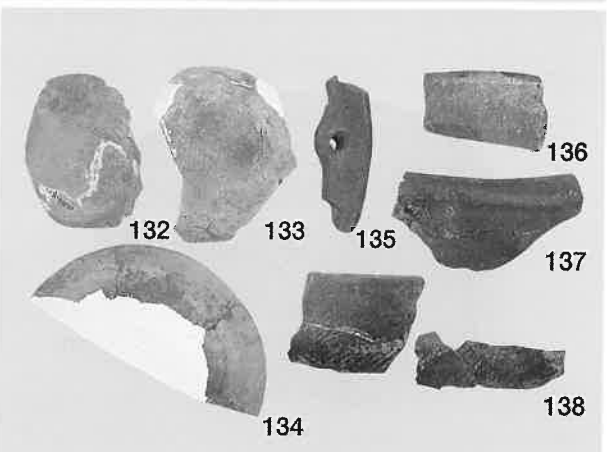
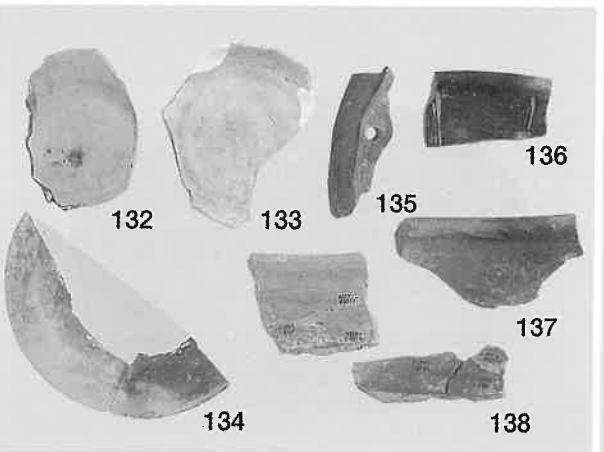
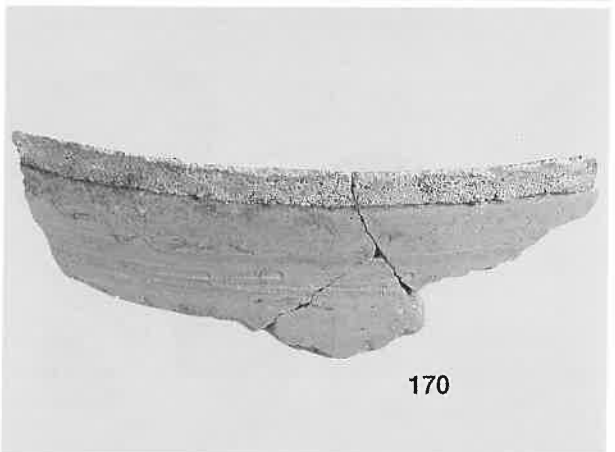
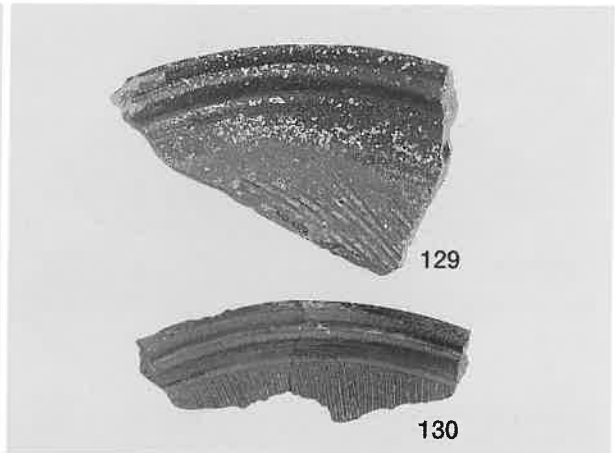
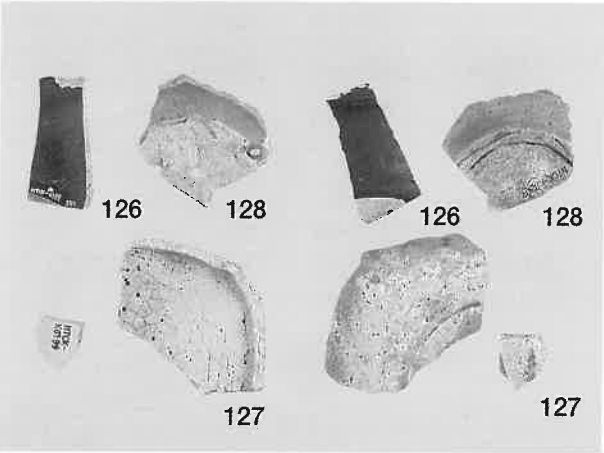
















139



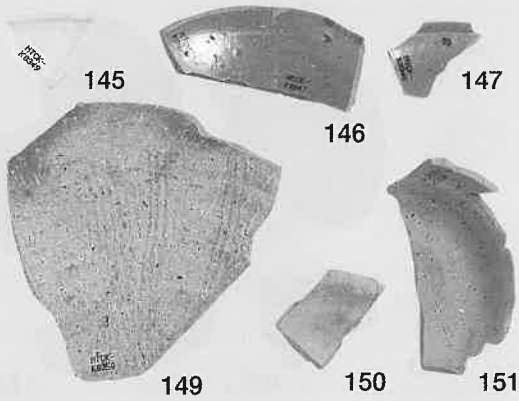
163



139



164



145

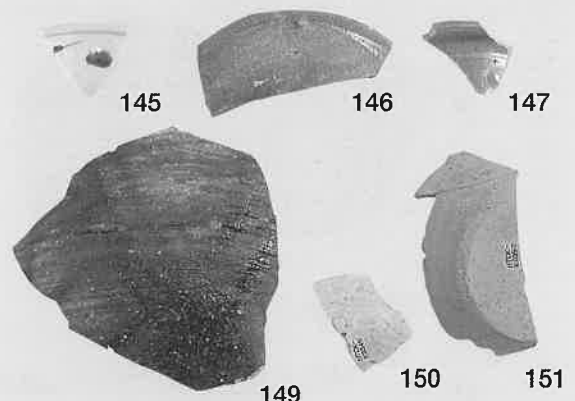
147

146

149

150

151



145

146

147

149

150

151



152

158

157

153

156

160

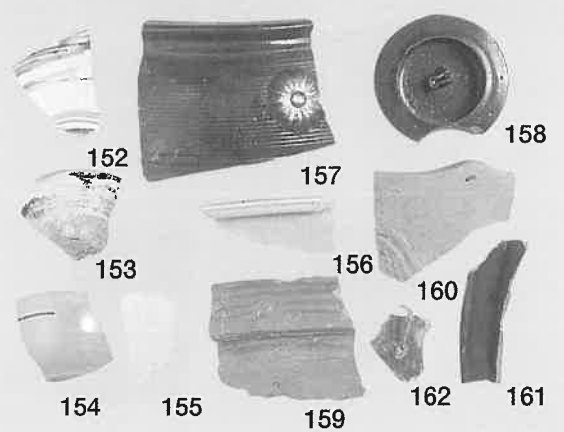
154

155

159

161

162



152

158

157

153

156

160

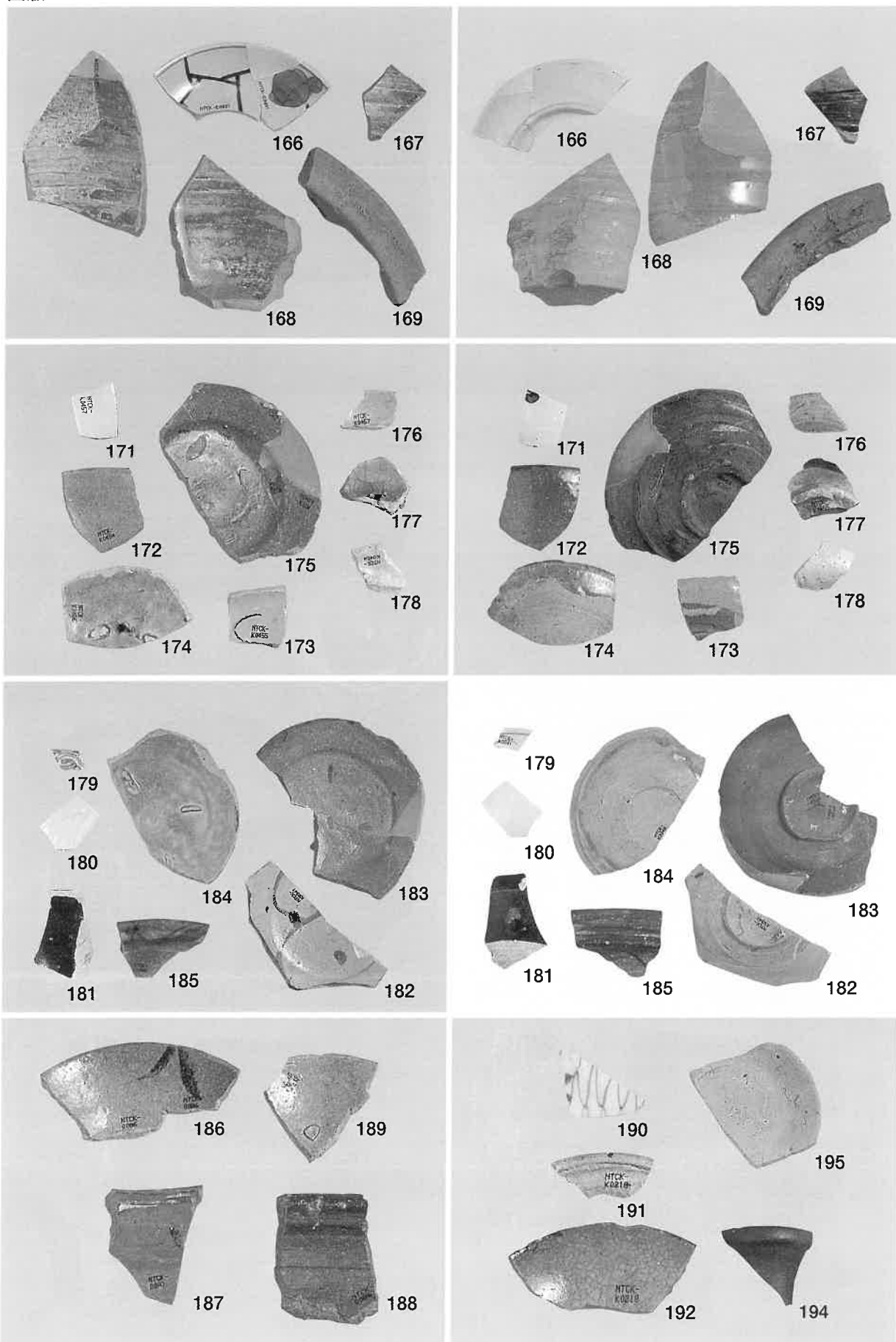
154

155

159

162

161





193



196



199



196



200



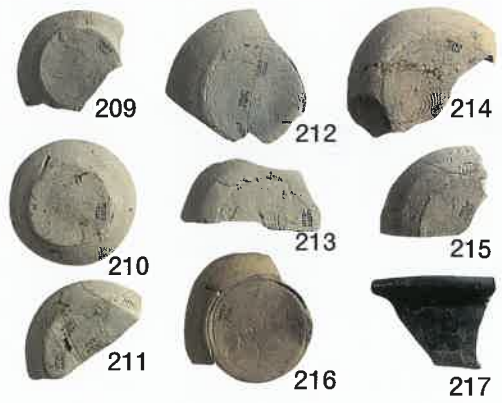
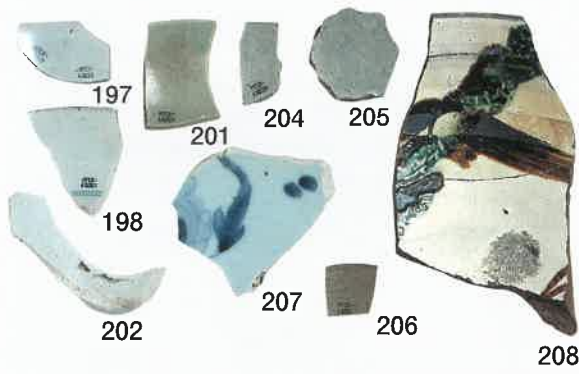
203



232



203







234



236



238



239



240



241



242



243





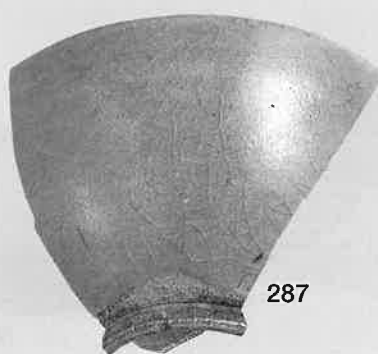
274



281



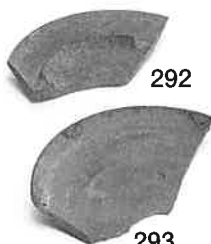
284



287



294



292

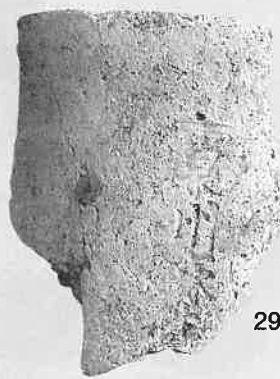
293



296

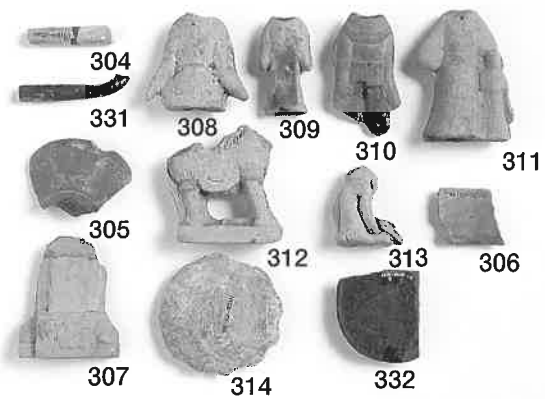
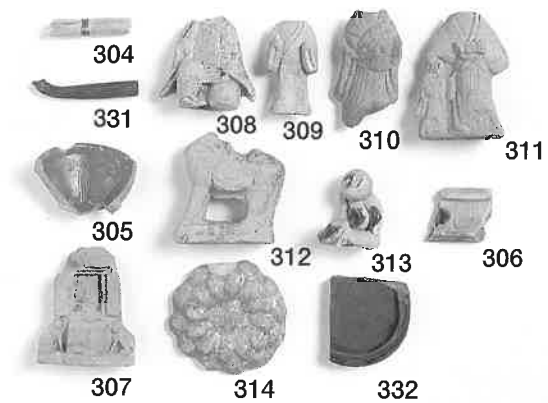
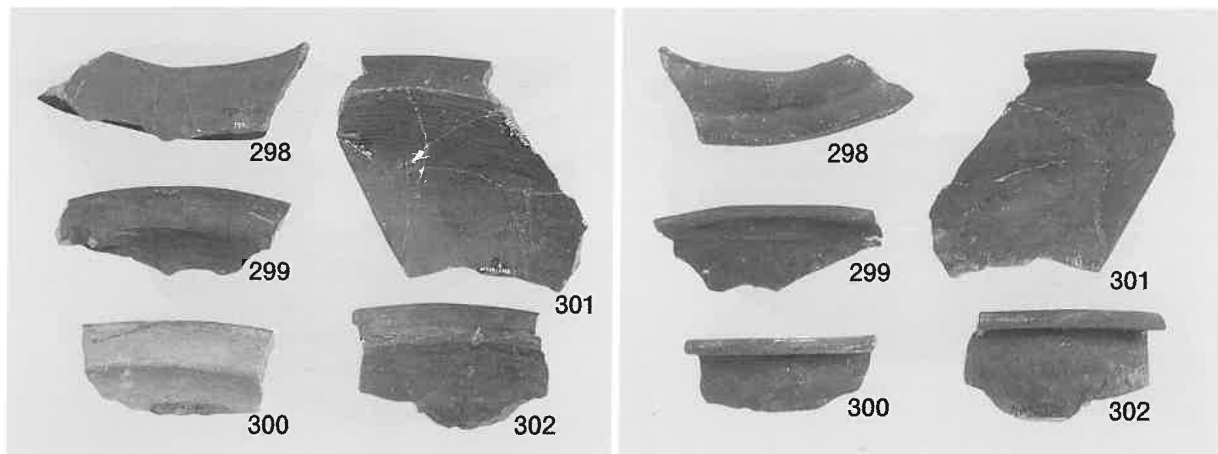


297



297

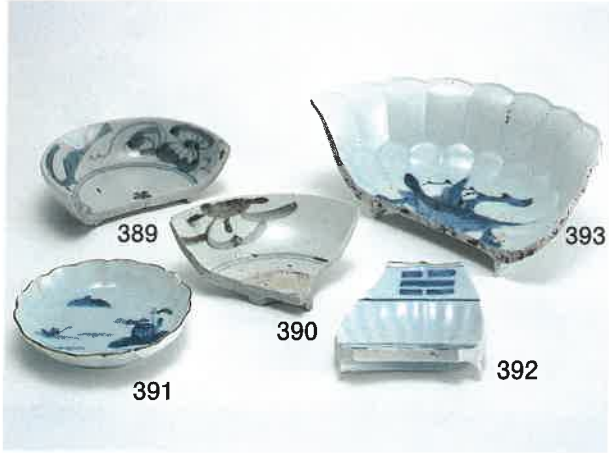
图版30

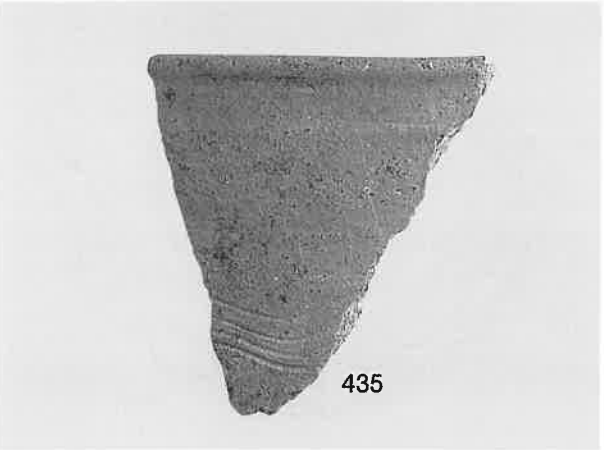
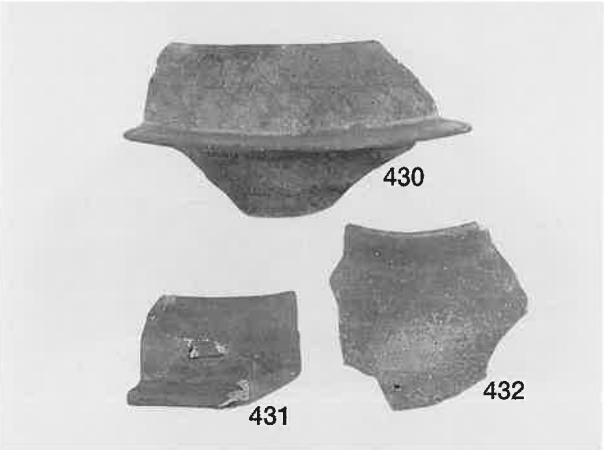
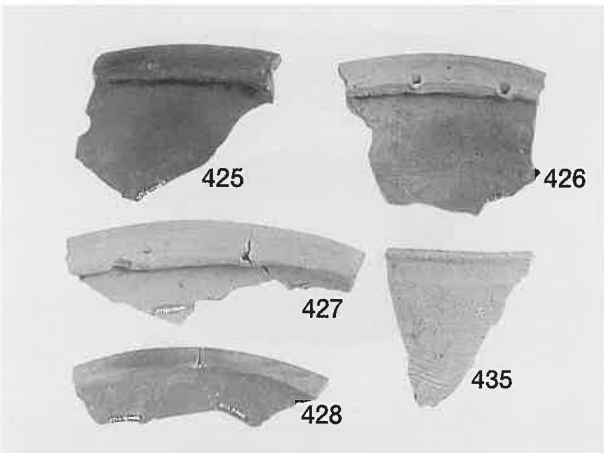
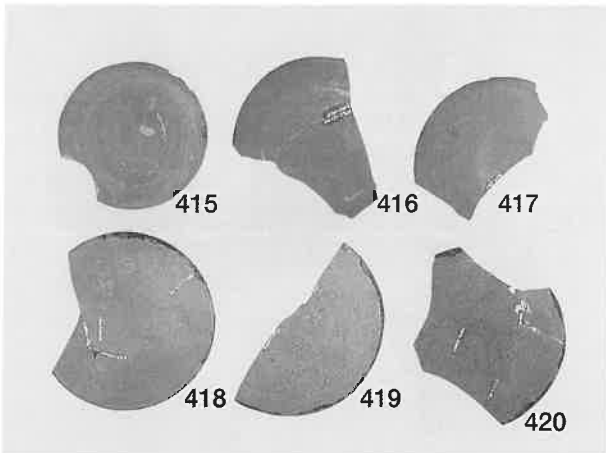
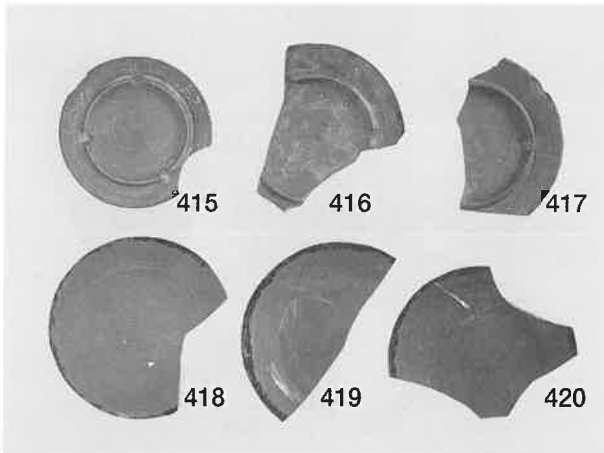




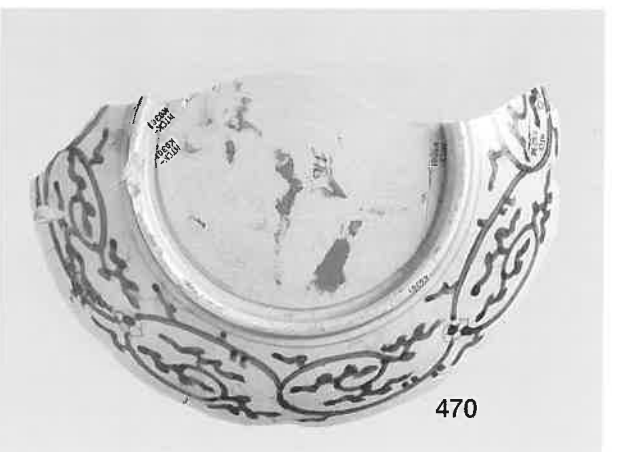
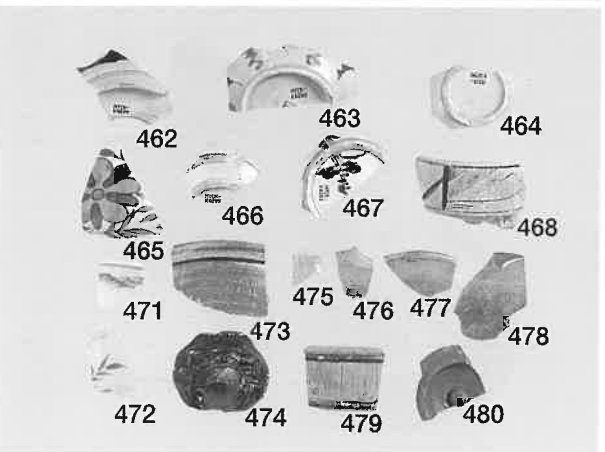
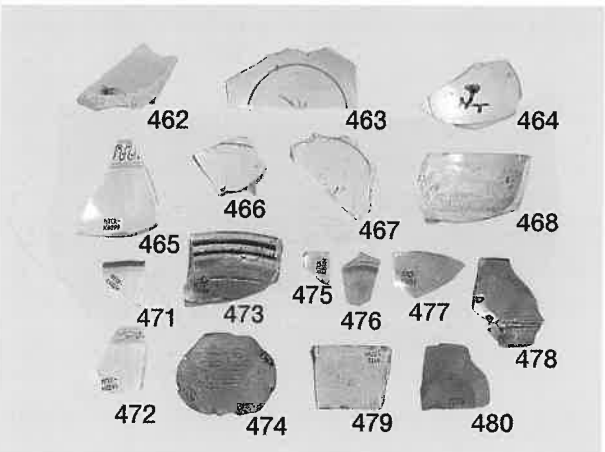
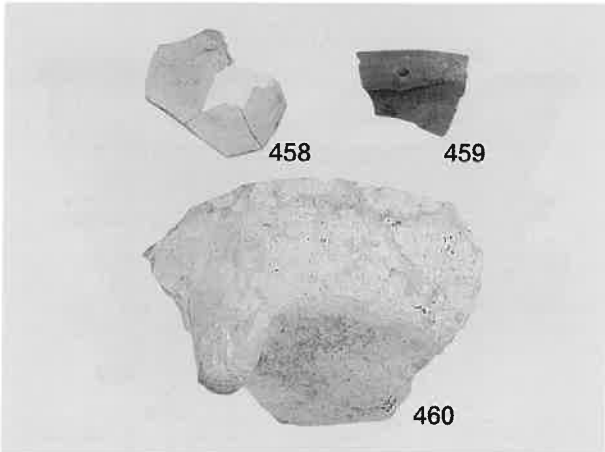
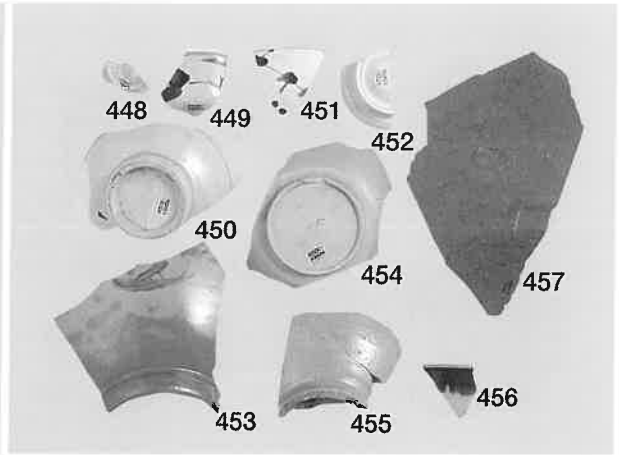
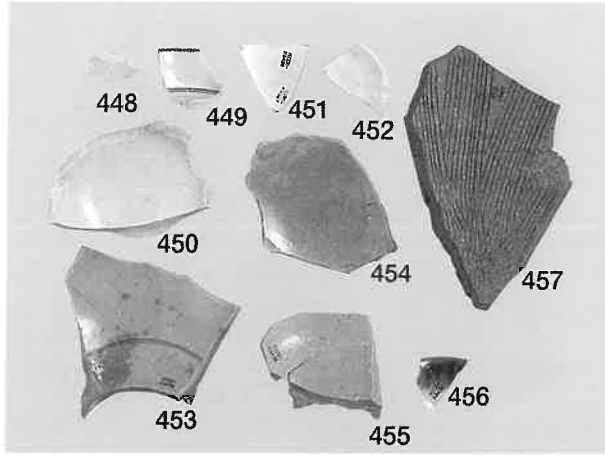


图版32





图版34







484



487



488



490



491



510



493

494

495

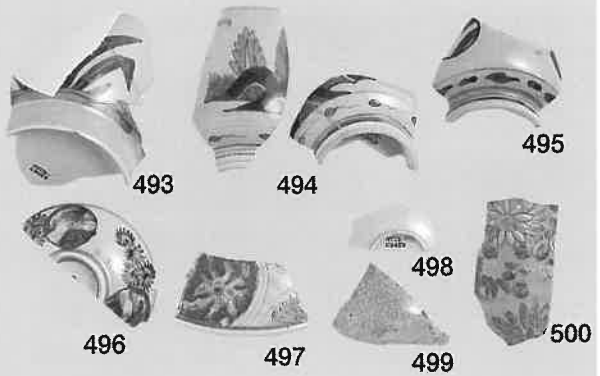
496

497

498

499

500



493

494

495

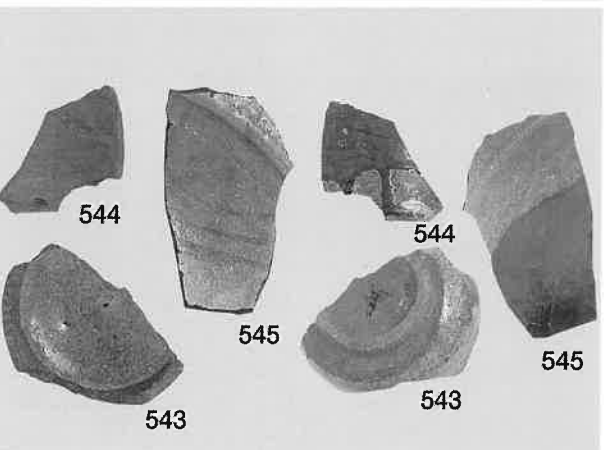
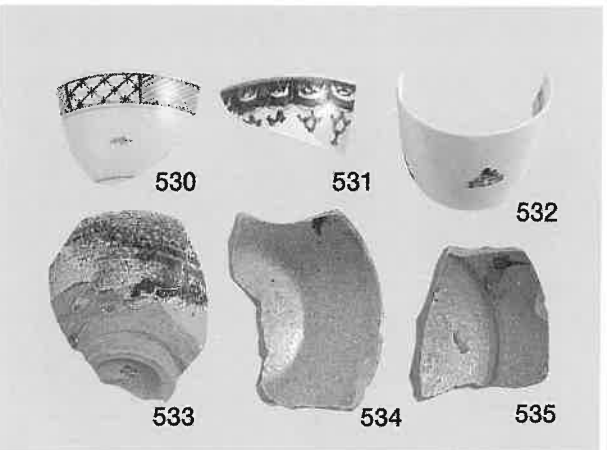
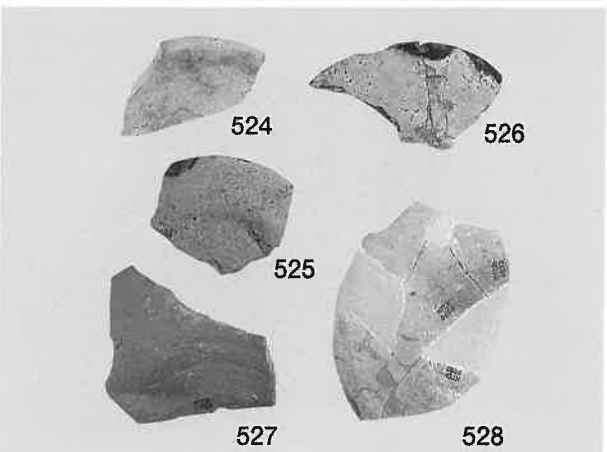
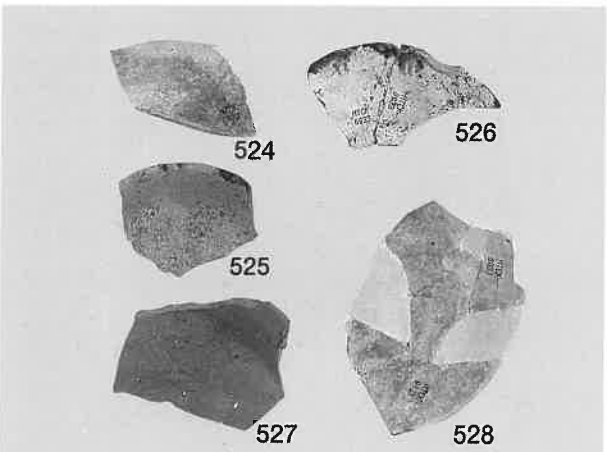
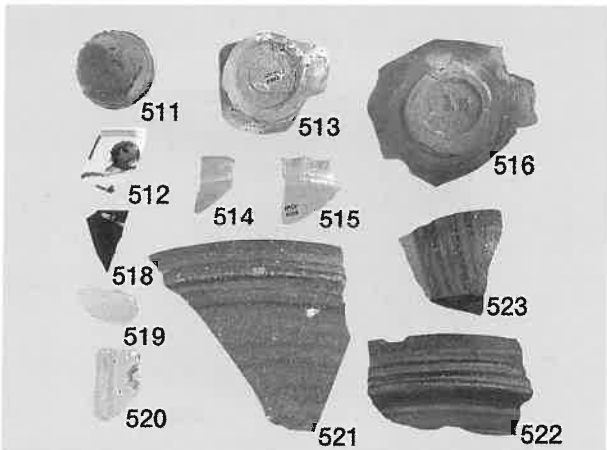
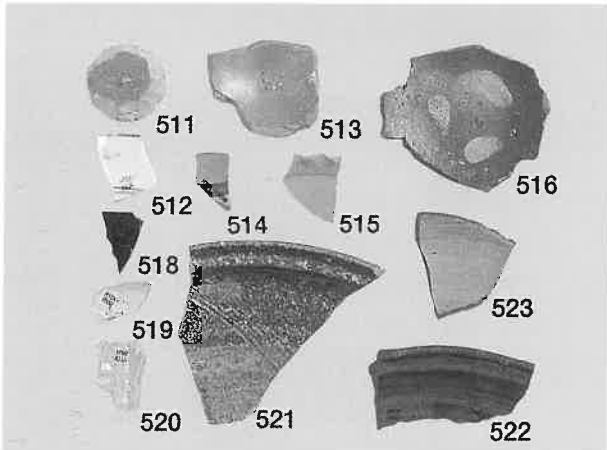
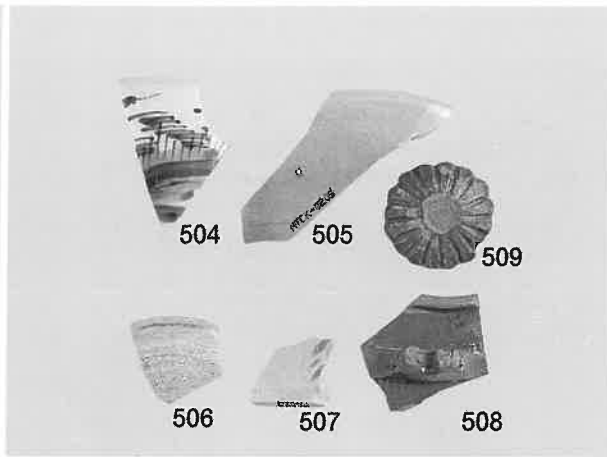
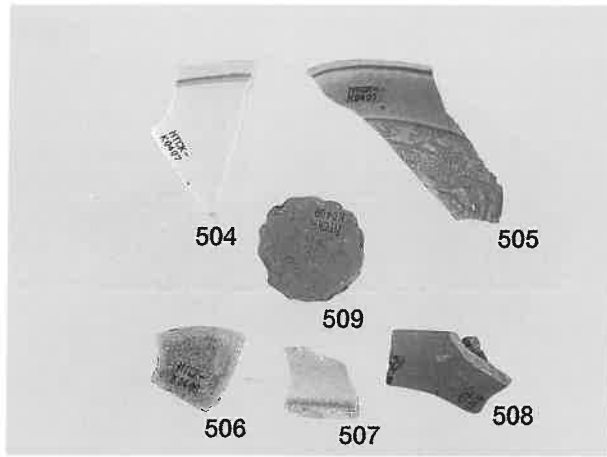
496

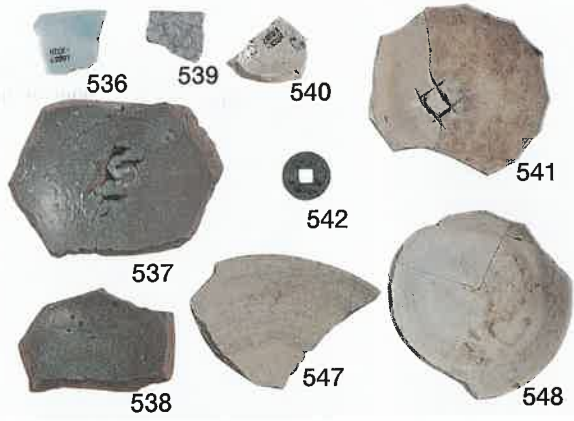
497

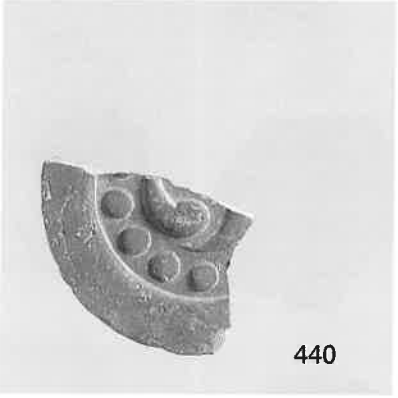
498

499

500











報 告 書 抄 録

ふりがな	たかまつかていさいばんしょいてんにともなうまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこく たかまつじょうあと(まるのうちちく)							
書 名	高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡 (丸の内地区)							
副 書 名								
卷 次								
編 著 者 名	松本 和彦							
編 集 機 関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター Tel (代) 0877-48-2191							
所 在 地	〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4							
発 行 機 関	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
発 行 年 月 日	2003年 3 月 31 日							
総 頁 数	目 次 等	本 文	観 察 表	図 版	挿 図 枚 数	写 真 枚 数	付 図 枚 数	
189P	10P	118P	20P	41P	92枚	260枚	1 枚	
ふりがな 所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調 査 期 間	調 査 面 積 ㎡	調 査 原 因
		市 町	遺 跡 番 号					
たかまつじょうあと 高松城跡 まるのうちちく (丸の内地区)	香川県高松市 丸の内	37201		34° 20' 39"	134° 03' 11"	20010401 ~ 20010930	488㎡	高松家庭裁判所移転
所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
高 松 城 跡 (丸の内地区)	集 落	鎌倉時代	井戸		土師質土器坏・須恵器坏			
	武家屋敷	江戸時代	溝・土坑・柱穴・柱穴列		土器・陶器・磁器・瓦・木製品			

高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

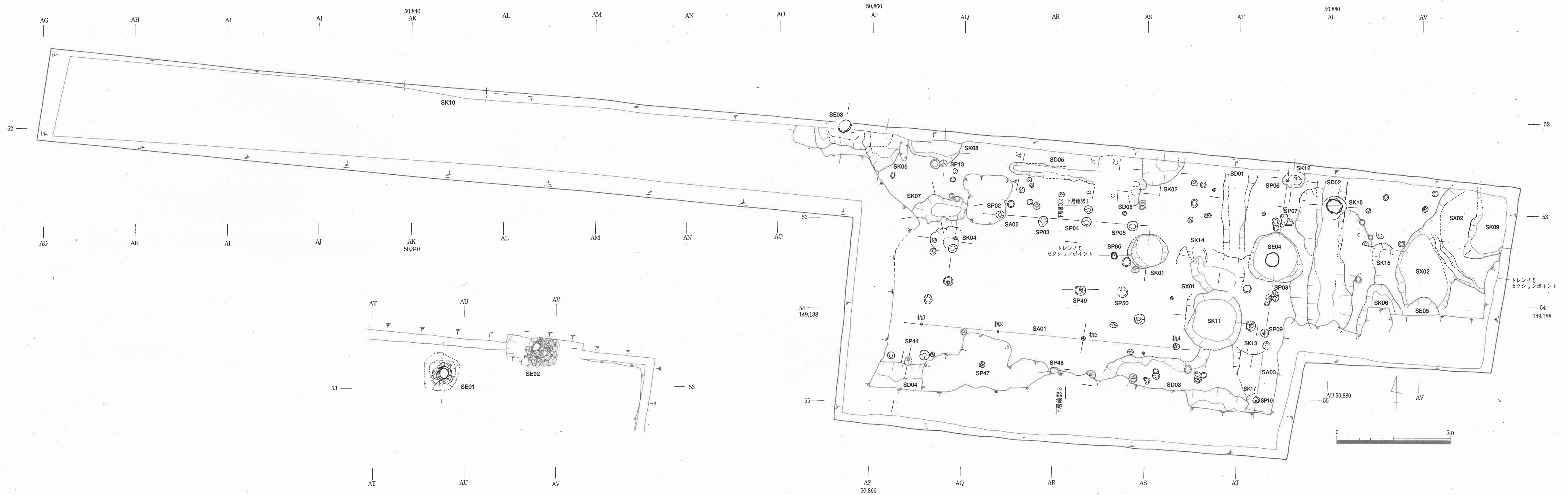
高 松 城 跡 (丸の内地区)

平成15年3月31日 発行

編集 財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター  
〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4  
電話 (0877) 48-2191

発行 香 川 県 教 育 委 員 会  
財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター

印刷 株式会社 多 田 印 刷 所



高松城跡（丸の内地区）遺構完掘平面図（S=1/100）